

# 主要地方道千葉鴨川線 埋蔵文化財調査報告書5

——袖ヶ浦市東上泉遺跡・神野台遺跡——

平成19年10月

千葉県県土整備部  
財団法人 千葉県教育振興財団

# 主要地方道千葉鴨川線 埋蔵文化財調査報告書 5

そでがうら ひがしかみいずみ かみのだい  
—袖ヶ浦市 東上泉 遺跡・神野台遺跡—



## 序 文

財団法人千葉県教育振興財団(文化財センター)は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第584集として、千葉県県土整備部の主要地方道千葉鴨川線改良工事に伴って実施した袖ヶ浦市東上泉遺跡と神野台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

東上泉遺跡では弥生時代後期から古墳時代初めにかけての集落が調査され、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成19年10月

財団法人 千葉県教育振興財団  
理事長 福島 義弘

## 凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による主要地方道千葉鴨川線改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は下記の遺跡である。  
東上泉遺跡 千葉県袖ヶ浦市大字野里字東並塚1405ほか 遺跡コード 229-026  
神野台遺跡 千葉県袖ヶ浦市大字下泉字三百澤1195-7ほか 遺跡コード 229-031
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、首席研究員 倉内郁子が東上泉遺跡の執筆を、首席研究員兼副所長 相京邦彦が神野台遺跡の執筆を担当し、神野台遺跡の執筆の一部及び全体の編集を首席研究員 土屋治雄が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部君津地域整備センター、袖ヶ浦市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。  
第1図：国土地理院発行1/25,000地形図「袖ヶ浦」  
第3図：袖ヶ浦市作成都市計画図
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成15年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。測量値は日本測地系である。
- 10 挿図に使用したスクリーンパターン及び記号の用例は次のとおりである。

遺構 炉	: 	焼土	: 
住居跡床面硬化部分	: 	炭化材	: 
土器	: ●	鉄製品	: ▲
遺物 土器・土師器 (断面)	: 	須恵器 (断面)	: 
赤彩範囲	: 		
- 11 本書で使用した以降の略号は次の通りである。  
SI：竪穴住居跡 SK：炉穴、陥穴、土坑 SM：古墳周溝 SD：溝

# 本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
第2節 遺跡の位置と環境	1
第2章 東上泉遺跡	5
第1節 調査の概要	5
1 発掘調査の方法	5
2 調査の経過	5
3 成果の概要	7
4 基本層序	7
第2節 旧石器時代	11
1 出土遺物	11
第3節 縄文時代	12
1 遺構と出土遺物	12
2 遺構外出土遺物	15
第4節 弥生時代以降	18
1 竪穴住居跡	18
2 古墳	85
3 溝・欄列	90
4 塚	98
5 土坑	100
6 遺構外出土遺物	103
第5節 まとめ	110
第3章 神野台遺跡	121
第1節 調査の概要	121
1 発掘調査の方法	121
2 調査の経過	121
3 成果の概要	124
第2節 遺構と遺物	124
1 遺構	124
2 遺構外出土遺物	127
第3節 まとめ	127
報告書抄録	巻末

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置図	2	第34図	SI-023	41
第2図	周辺の遺跡分布図	3	第35図	SI-024・焼土・炭化材出土状況	42
東上泉遺跡			第36図	SI-024出土遺物(1)	43
第3図	遺跡周辺地形図	6	第37図	SI-024出土遺物(2)	44
第4図	確認トレンチ・グリッド配置図	8	第38図	SI-025	46
第5図	標準土層図	9	第39図	SI-026	47
第6図	遺構位置図	10	第40図	SI-027	49
第7図	旧石器実測図	11	第41図	SI-028	49
第8図	炉穴・陥穴	13	第42図	SI-029	50
第9図	遺構内出土縄文土器拓影図	14	第43図	SI-030	51
第10図	遺構外出土縄文土器拓影図	16	第44図	SI-031	51
第11図	縄文時代石器・土偶	17	第45図	SI-032	53
第12図	SI-001	19	第46図	SI-034	53
第13図	SI-002	20	第47図	SI-033	54
第14図	SI-003・004	21	第48図	SI-035	55
第15図	SI-003出土遺物	23	第49図	SI-036	56
第16図	SI-005	24	第50図	SI-037・041・042	57
第17図	SI-006	25	第51図	SI-038	58
第18図	SI-007	27	第52図	SI-039	60
第19図	SI-008	27	第53図	SI-040	61
第20図	SI-009	28	第54図	SI-043	62
第21図	SI-010	28	第55図	SI-044	64
第22図	SI-015	28	第56図	SI-045	65
第23図	SI-011	30	第57図	SI-046	65
第24図	SI-012	31	第58図	SI-047	66
第25図	SI-013	33	第59図	SI-048	67
第26図	SI-014	34	第60図	SI-049	69
第27図	SI-016	35	第61図	SI-050	70
第28図	SI-017	35	第62図	SI-051	70
第29図	SI-018	37	第63図	SI-052	71
第30図	SI-019	38	第64図	SI-053	71
第31図	SI-020	39	第65図	SI-054	72
第32図	SI-021	39	第66図	SI-055	73
第33図	SI-022	41	第67図	SI-056	75

第68図	SI-057	76	第86図	SD-017・018・019・020	95
第69図	SI-058	78	第87図	SD-005・SK-015・017	96
第70図	SI-059	78	第88図	櫛列	97
第71図	SI-060	78	第89図	塚測量図	98
第72図	SI-061	79	第90図	塚断面図、出土遺物	99
第73図	SI-062	79	第91図	土坑(1)	101
第74図	SI-063	81	第92図	土坑(2)	104
第75図	SI-064	82	第93図	遺構外出土遺物(1)	105
第76図	SI-065	82	第94図	遺構外出土遺物(2)	106
第77図	SI-067	84	第95図	遺構外出土遺物(3)	108
第78図	SI-069	84	第96図	遺構外出土遺物(4)	109
第79図	SM-001	86		神野台遺跡	
第80図	SM-001出土遺物	87	第97図	遺跡周辺地形図	122
第81図	SM-002	88	第98図	遺構位置図・標準土層図	123
第82図	SM-003	89	第99図	SK-006	125
第83図	SD-001・002・003・004	91	第100図	出土遺物	125
第84図	SD-006・007・010・012	92	第101図	SD-001	126
第85図	SD-011・013・014・016	94	第102図	SK-001・SD-002	126

## 表 目 次

第1表	遺構一覧表	114	第4表	石器・石製品一覧表	119
第2表	掲載土器観察表	116	第5表	掲載土製品一覧表	119
第3表	金属製品一覧表	118	第6表	銭貨計測表	119

## 図 版 目 次

図版1	遺跡周辺航空写真		図版4	SI-002 (南より)	
	東上泉遺跡			SI-003・004 遺物出土状況 (南より)	
図版2	北側調査区全景			SI-003・004 (南より)	
	南側調査区全景		図版5	SI-005 (北より)	
図版3	北側調査前全景			SI-006 (南より)	
	南側調査前全景			SI-007 (北東より)	
	SI-001 (北より)		図版6	SI-008 (南東より)	
				SI-005・009・010・013・015・026・027・029	

	SI-009 (北より)	図版19	SI-047 (西より)
図版7	SI-010, SK-006 (南東より)		SI-048 (南東より)
	SI-011 (南より)		SI-049 (南西より)
	SI-012 (南東より)	図版20	SI-050 (南西より)
図版8	SI-013 (南より)		SI-051 (東より)
	SI-014 (南東より)		SI-052 (東より)
	SI-014 遺物出土状況	図版21	SI-053 (東より)
図版9	SI-015 (南東より)		SI-054 (東より)
	SI-017・SD-004 (南より)		SI-055 (東より)
	SI-018 (南東より)	図版22	SI-056 (南より)
図版10	SI-019 (南東より)		SI-057 (北西より)
	SI-020 (南東より)		SI-058 (南東より)
	SI-021 (南東より)	図版23	SI-059 (東より)
図版11	SI-022 (南東より)		SI-060 (北西より)
	SI-023 (南東より)		SI-061 (南東より)
	SI-024 (北より)	図版24	SI-062 (南西より)
図版12	SI-025 (南東より)		SI-063 (南東より)
	SI-026 (南東より)		SI-064 (南東より)
	SI-027 (南東より)	図版25	SI-065 (北西より)
図版13	SI-018-023-028-032-034-038		SI-067 (南西より)
	SI-028 (北より)		SM-001
	SI-029 (南東より)	図版26	SM-001 遺物出土状況 (西より)
図版14	SI-030 (南東より)		SM-002
	SI-031 (南より)		SM-003 (北より)
	SI-032 (南東より)	図版27	右 SD-001 (北西より)
図版15	SI-033 (南東より)		左 SD-002
	SI-034 (南東より)		SD-002 (北西より)
	SI-035 (南西より)		SD-005, SK-013-014-015-017 (西より)
図版16	SI-036 (北より)	図版28	SD-009-010 (南より)
	SI-037-041-042 (南東より)		SD-011 (東より)
	SI-038 (南東より)		SD-011-013
図版17	SI-039 (北西より)	図版29	SD-014 (南西より)
	SI-040 (北より)		SD-018 (南より)
	SI-043 (南東より)		SD-019 (南より)
図版18	SI-044 (南東より)	図版30	SK-001・SK-002・SK-019
	SI-045 (北西より)		SK-020B・SK-023・SK-026
	SI-046 (北西より)		SK-028

図版31 塚 (SM-004) 全景 (南より)

土層断面①・土層断面②

土層断面③・土層断面④

図版32 旧石器・縄文時代石器

図版33 遺構外出土遺物(3)

遺構外出土遺物(4)

図版34 遺構内出土縄文土器

図版35 遺構外出土縄文土器 (表)

図版36 遺構外出土縄文土器 (裏)

図版37 住居跡出土土器(1)

図版38 住居跡出土土器(2)

図版39 住居跡出土土器(3)

図版40 住居跡出土土器(4)

図版41 住居跡出土土器(5)

図版42 住居跡出土土器(6)

古墳出土土器

図版43 古墳・塚出土遺物

溝・土坑出土土器

図版44 金属製品

図版45 ガラス玉・土製品

SI-003 出土土器

神野台遺跡

図版46 調査区全景 (南側)

SD-001 全景

SD-002・SK-001 全景

図版 47 SK-006 全景

SK-006 土層断面

下層土層断面

出土縄文土器

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査に至る経緯

近年、東関東自動車道（千葉・富津線）およびアクアラインの完成により、千葉県南部に位置する本地域は、これら道路に接続する道路網の整備が急務となってきた。特に、姉崎袖ヶ浦インターチェンジの設置により、主要地方道千葉鴨川線は、交通量の増大が見込まれ道路整備の必要性が急務とされてきている。このような状況の中で、千葉県県土整備部は県単道路改良（幹線道路網整備）千葉鴨川線の道路整備を計画し千葉県教育委員会に照会した。事業予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて千葉県教育委員会文化財課との間で協議の結果、発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなり、調査は財団法人千葉県教育振興財団に委託され、道路改良工事に先行して「東上泉遺跡」及び「神野台遺跡」の発掘調査が実施された。

発掘調査と整理作業の年度別内容は各章に記載した。

## 第2節 遺跡の位置と環境

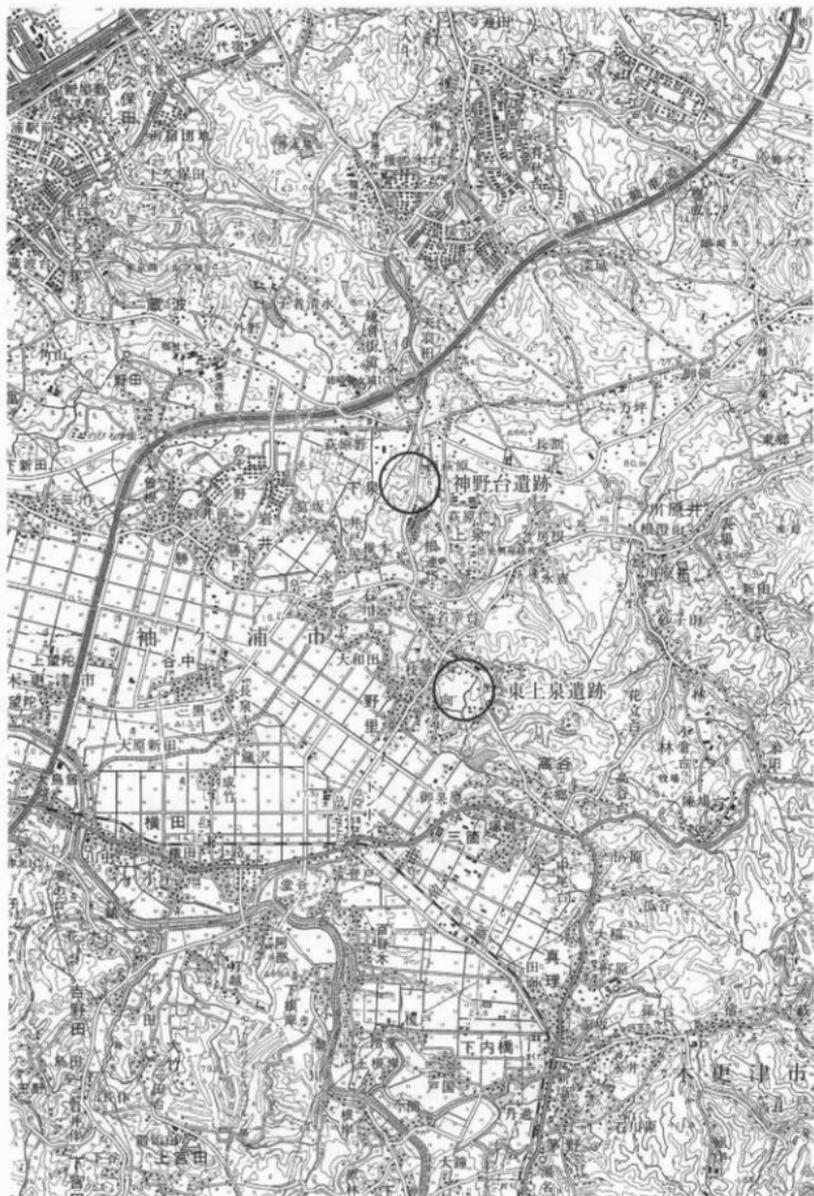
### 1 東上泉遺跡、神野台遺跡の位置（第1図、図版1）

本遺跡の所在する袖ヶ浦市は、房総半島のほぼ中央に位置し、北部から東部は市原市、東部から南部は木更津市に接する。袖ヶ浦市の地形は、北部から南東部の台地と中央部から南部の沖積地とに大きく分けられる。台地部分は下総台地の南縁部に当たり、標高30m～50mである。北を養老川に、南を小櫃川によって分断された袖ヶ浦市の台地は袖ヶ浦台地と呼ばれている。この平坦な台地上には大規模な遺跡が多数確認されている。小櫃川は、君津市南端部の清澄山系を水源とし房総丘陵を複雑に開析しながら北流し木更津市域を経て西に流れを变えながら袖ヶ浦市を流れ下流域に広大な沖積地を形成し、河口部で再び木更津市に入り、東京湾に注ぐ県内有数の河川である。流路延長88kmである。小櫃川低地内では、蛇行する小櫃川に伴って発達した自然堤防などの微高地上に遺跡が確認されている。

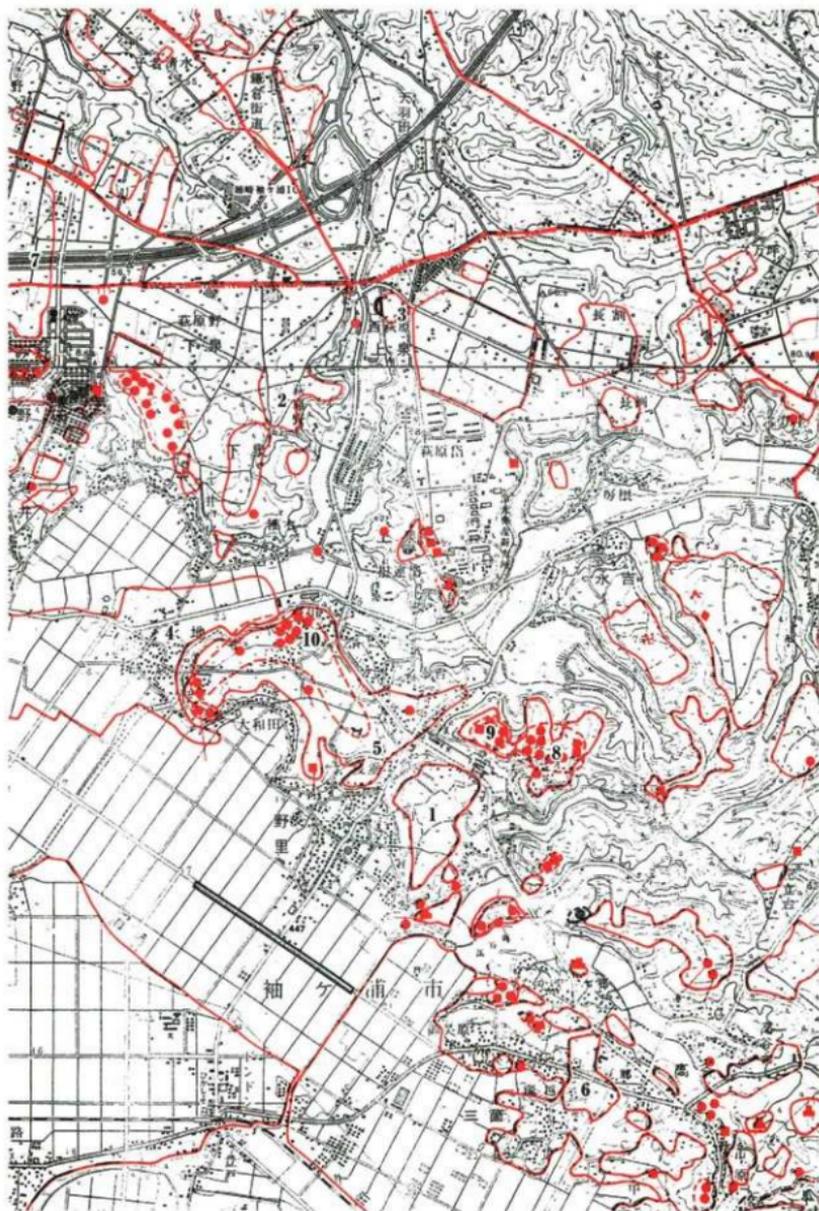
東上泉遺跡は、この袖ヶ浦台地の縁辺部から直線距離で約0.4kmほど、神野台遺跡は約1kmほど入り込んだ標高約40mの台地上に位置する。

### 2 東上泉遺跡、神野台遺跡周辺の遺跡（第2図）

東上泉遺跡(1)神野台遺跡(2)の周辺は遺跡の密集する地域として、早くから注目されてきた地域である。東関東自動車道の建設に伴い調査された山谷遺跡<sup>1)</sup>、台山遺跡<sup>2)</sup>(7)などは既に報告書も刊行されている。また、小銅鐸の出土した文臨遺跡<sup>3)</sup>(5)は本遺跡と同じ台地に立地している。このように、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて多くの遺跡が所在している。ここでは、両遺跡の周辺に所在する遺跡のうち、発掘調査によって内容が明らかになっており、同時期の遺構・遺物が検出された遺跡について概観する。



第1図 遺跡の位置図 (1:50,000)



第2図 周辺の遺跡分布図 (1 : 25,000)

縄文時代の炉穴が調査されている遺跡には、堂庭山B遺跡<sup>4)</sup>、西萩原遺跡<sup>3)</sup>がある。堂庭山B遺跡では28基の炉穴が検出されている。陥穴は西原遺跡<sup>4)</sup>、文臨遺跡、荒久<sup>2)</sup>遺跡<sup>5)</sup>(6)、関畑遺跡<sup>6)</sup>、山谷遺跡で検出されている。

弥生時代から古墳時代前期にかけての集落が調査されている遺跡には、上大城遺跡<sup>7)</sup>、美生遺跡<sup>8)</sup>、山王辺田遺跡群、文臨遺跡などがある。

上大城遺跡で弥生時代から古墳時代前期の竪穴住居跡67軒、弥生時代の墓である方形周溝墓6基、美生遺跡群でも弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡が400軒前後、古墳時代後期の竪穴住居跡が20軒以上検出された。

山王辺田遺跡群は弥生時代後期～古墳時代前期の大集落である。文臨遺跡も同時期の集落が密集して検出され、方形周溝墓も検出されている。

荒久<sup>1)</sup>遺跡<sup>9)</sup>では方形周溝墓12基が検出されており、土坑墓から銅鋼やガラス小玉が出土している。

古墳時代前期の集落遺跡は台山遺跡、西原遺跡があり、台山遺跡では前期の竪穴住居跡112軒、方形周溝墓6基が、西原遺跡でも前期の竪穴住居跡が検出されている。

今回の調査で3基の円墳が検出された。周辺には寒沢古墳群<sup>8)</sup>、愛宕古墳群<sup>9)</sup>、上泉古墳群<sup>10)</sup>、大塚古墳群が所在する。上泉古墳群には円墳15基、愛宕古墳群には円墳8基、方墳2基、寒沢古墳群には円墳12基、方墳4基、大塚古墳群には前方後円墳1基、円墳12基が現存している。

奈良・平安時代の住居跡は上大城遺跡、荒久遺跡、関畑遺跡、文臨遺跡で検出されているがいずれも軒数は少ない。

塚は打越岱に2基、日ノ台、市ヶ原に3基のほか関尻塚、馬坂台塚、西萩原塚、下山台塚、椎木塚などが所在している。

- 注1 柳千葉県文化財センター 2001 『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書9  
—袖ヶ浦市山谷遺跡—』
- 2 柳千葉県文化財センター 2002 『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書10  
—袖ヶ浦市台山遺跡—』
- 3 柳千葉県文化財センター 1995 『袖ヶ浦市文臨遺跡』
- 4 柳千葉県文化財センター 1995 『袖ヶ浦市堂庭山B遺跡』
- 5 柳千葉県文化財センター 1998 『袖ヶ浦市荒久<sup>2)</sup>遺跡』
- 6 柳千葉県文化財センター 2003 『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書13』
- 7 柳君津郡市文化財センター 1994 『千葉県袖ヶ浦市上大城遺跡発掘調査報告書』
- 8 柳君津郡市文化財センター 1998 『千葉県袖ヶ浦市美生遺跡群Ⅳ 第2地点』
- 9 柳千葉県文化財センター 1999 『袖ヶ浦市荒久<sup>1)</sup>遺跡・三箇遺跡』

## 第2章 東上泉遺跡

### 第1節 調査の概要

#### 1 発掘調査の方法（第4図）

調査区は、北西から南東方向に細長い幅約30m、長さ約300mの範囲であった。調査に先立ち国土地理院の国家座標を基準に、調査対象範囲を包含するようにグリッド設定を行った。設定に当たっては20m×20mの方眼を大グリッドとして、隣接する文臨遺跡とあわせて北から南へ1, 2, 3…と付け、西から東へA, B, C…と付した。このため、本遺跡の今回の発掘調査のかかる範囲は概ね12Lから23Vとなった。更に大グリッド内を2m×2mの小グリッドに分割し北から南へ十の位で00, 10, 20～90, 西から東へ1の位で00, 01, 02～09の数字で表した。これにより、小グリッドの呼称は12L-25, 23V-72等となる。

調査は、調査対象面積（7,800㎡）に対し上層10%、下層2%の面積を目途に確認調査を実施した。確認調査は、上層（縄文時代から中世）から実施した。調査区全域に、概ね2m幅のトレンチをほぼ均等に37本設定し、バックホーにより表土除去を行い遺構、遺物の分布状況を調査した。その結果、住居跡、古墳周溝などが検出された。遺構が確認されなかった南半部を除く5,200㎡が本調査範囲と決定され、本調査を実施した。その結果、住居跡、古墳周溝、炉穴、陥穴など多くの遺構が検出された。

各遺構の調査は、埋没状況の把握のため土層観察ベルトを残して発掘を行い、土層セクション図を作成後完掘し、のち平板測量により平面図を作成した。また必要に応じて遺物出土状況図の作成も行った。作図終了前後には遺物出土状況写真や遺構完掘状況写真の撮影を行った。また調査区全域写真撮影のためラジコンヘリによる空中写真撮影も行った。

上層本調査終了後、旧石器時代の遺構、遺物の分布状況を把握するため2m×2mのグリッドを設定し下層確認調査を実施した。下層については遺構、遺物が検出されなかったため確認調査のみで終了した。

#### 2 調査の経過

東上泉遺跡の発掘調査は、平成13年度に行われ、整理作業は平成14年度、平成15年度、平成19年度に、神野台遺跡の整理作業と併せて実施し、平成19年度に報告書を刊行した。

各年度の作業期間、担当職員、及び作業内容は以下のとおりである。

##### (1) 発掘調査

平成13年度

調査期間 平成13年7月2日～平成14年3月22日

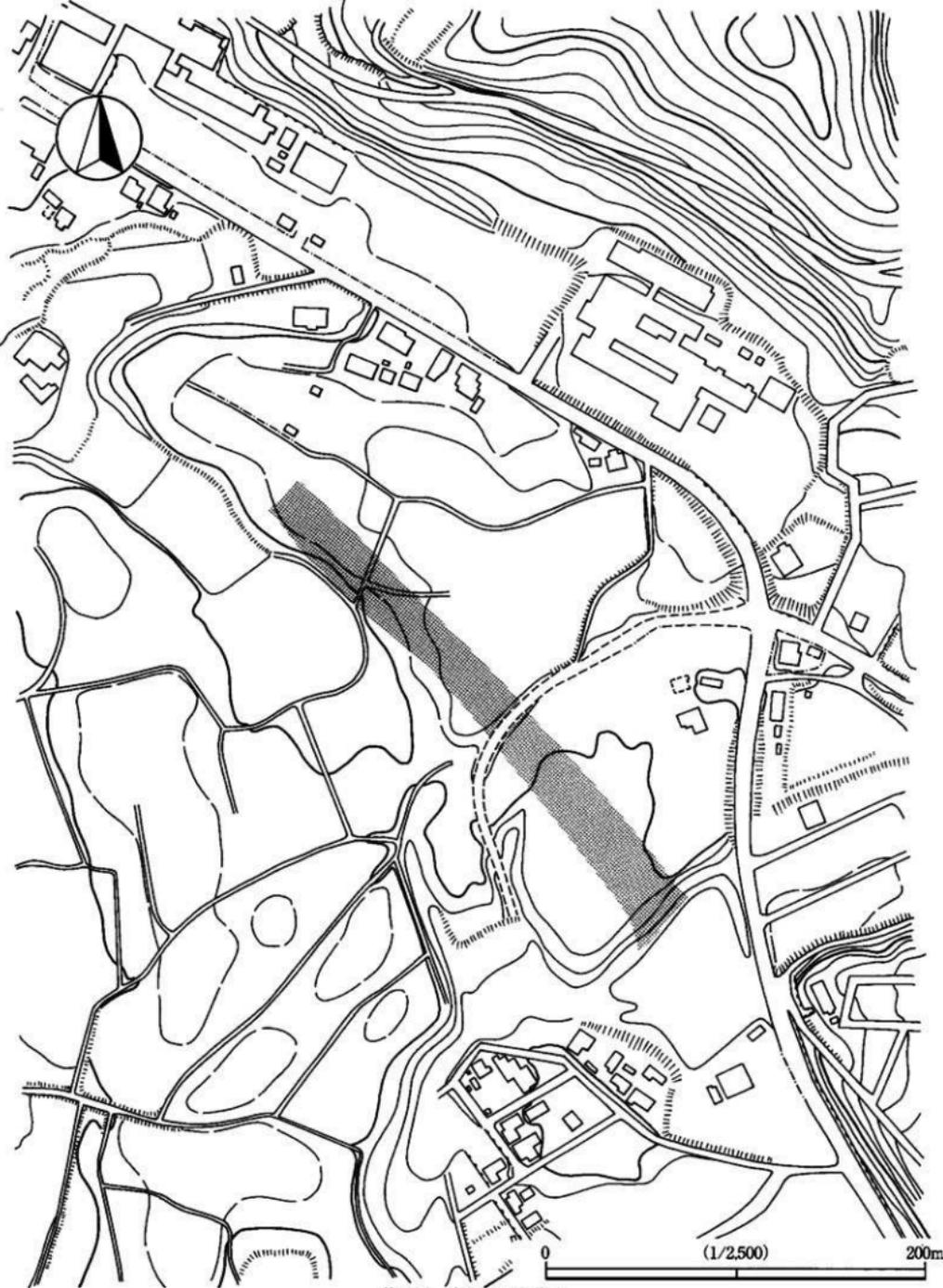
組織 調査部長 佐久間 豊

南部調査事務所長 高田 博 調査担当者 上席研究員 稲生一夫

内容 対象面積 7,800㎡

確認調査 上層 780㎡ 下層 104㎡

本調査 上層 5,200㎡ 下層 0㎡



第3図 遺跡周辺地形図

## (2) 整理作業

平成 14 年度

期間 平成 14 年 5 月 1 日～平成 15 年 3 月 31 日

組織 調査部長 齋木 勝

南部調査事務所長 鈴木定明 整理担当者 上席研究員 倉内郁子

内容 記録整理から挿図・図版作成の一部、原稿執筆の一部まで

平成 15 年度

期間 平成 15 年 6 月 1 日～平成 15 年 7 月 31 日

組織 調査部長 齋木 勝

南部調査事務所長 鈴木定明 整理担当者 主席研究員 相京邦彦

内容 挿図・図版作成から原稿執筆の一部まで

平成 19 年度

調査期間 平成 19 年 5 月 1 日～平成 19 年 7 月 31 日

組織 調査研究部長 矢戸三男

南部調査事務所長 西川博孝 整理担当者 主席研究員 土屋治雄

内容 原稿執筆・編集の一部から報告書印刷・刊行まで

## 3 成果の概要（第 6 図）

旧石器時代は確認調査では遺構、遺物は検出されなかったが上層遺構の覆土中から旧石器時代の遺物が検出された。実測遺物は 4 点である。

縄文時代は早期の屋外調理施設である炉穴 3 基と同じく早期の動物捕獲用の陥穴 5 基が検出された。

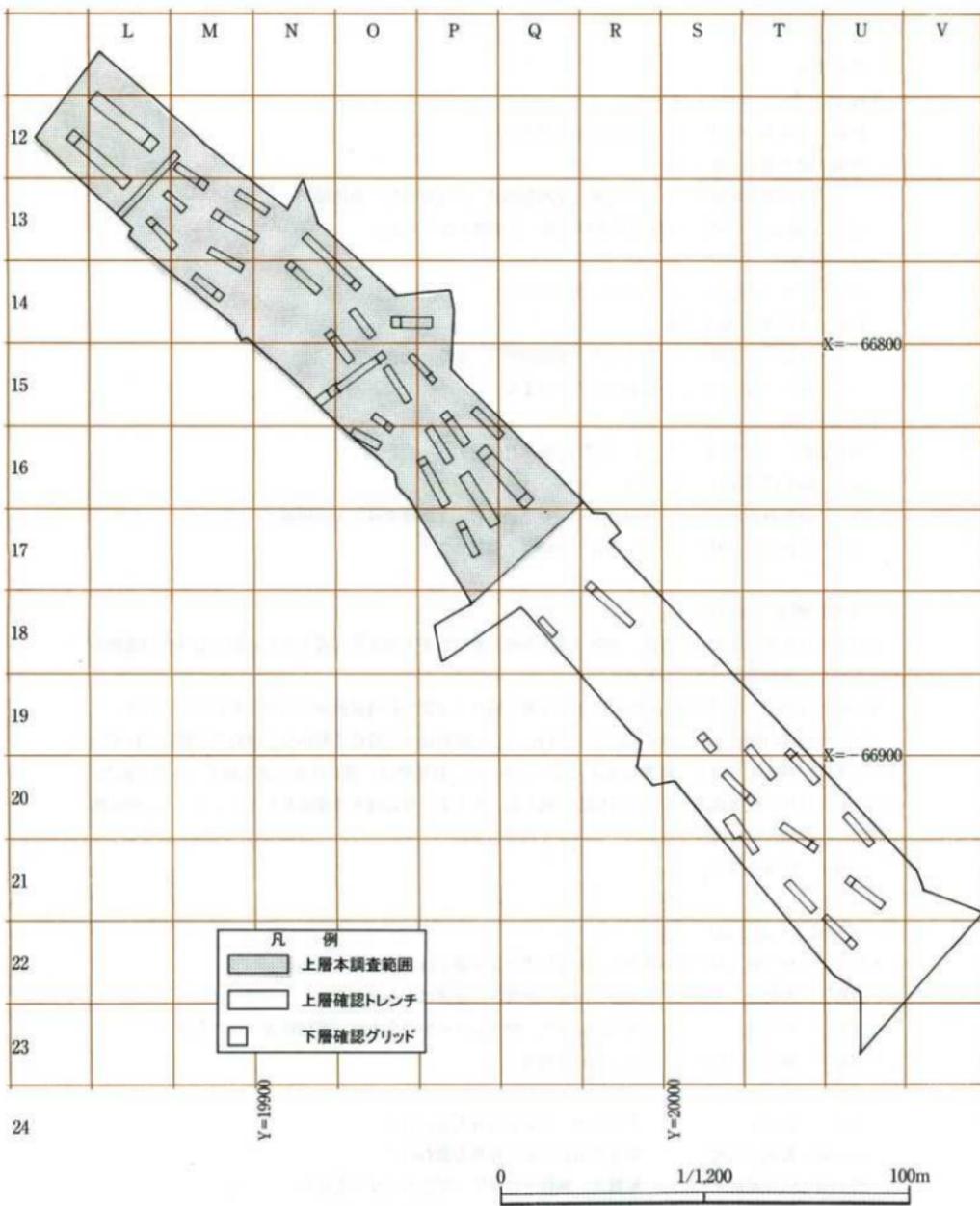
弥生時代以降の堅穴住居跡は 67 軒検出された。うち 66 軒は弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものであり、残り 1 軒は平安時代に属するものであった。住居跡は、調査区北半部全域から検出された。北西に行くに従い密集状況が濃くなる傾向が見られるとともに住居同士の重複も多くなっている。住居跡のほかには後期古墳の周溝 3 基、溝、土坑が多数検出された。

中・近世では塚が調査された。

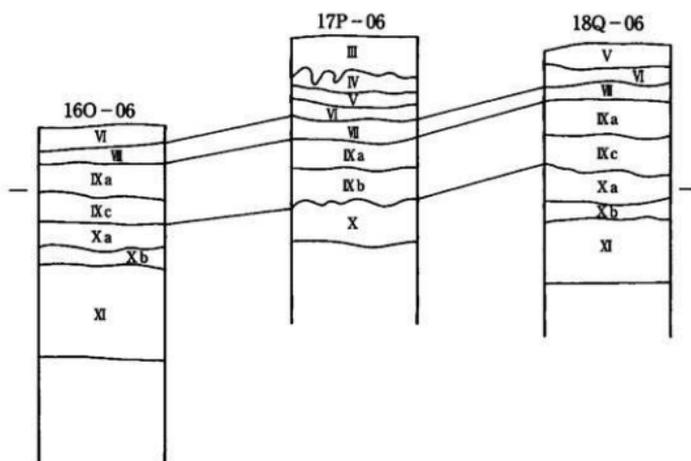
## 4 基本層序（第 5 図）

上層及び下層の確認調査から判明した調査区内の基本層序は以下の通りである。

Ⅲ層	明褐色土	赤色スコリアを含み、全体に赤みがかかる
Ⅳ層	褐色土	赤色スコリア、黒色スコリアが含まれ、暗緑色スコリアを含む
V層	褐色～黄褐色	第Ⅰ黒色帯相当
Ⅵ層	明黄褐色土	AT層が入り赤色・黒色スコリアがわずかに含まれる
Ⅶ層	褐色土	やや粘性、第Ⅱ黒色帯と思われる
Ⅸ a 層	褐色～暗褐色土	第Ⅱ黒色帯下部に相当と思われる
Ⅸ c 層	灰黄褐色土	粘質土、赤色スコリア・黒色スコリアを含む
X層	灰褐色土	粘質土、粘質は弱まる、暗褐色土を若干含む



第4図 確認トレンチ・グリッド配置図



第5圖 標準土層圖



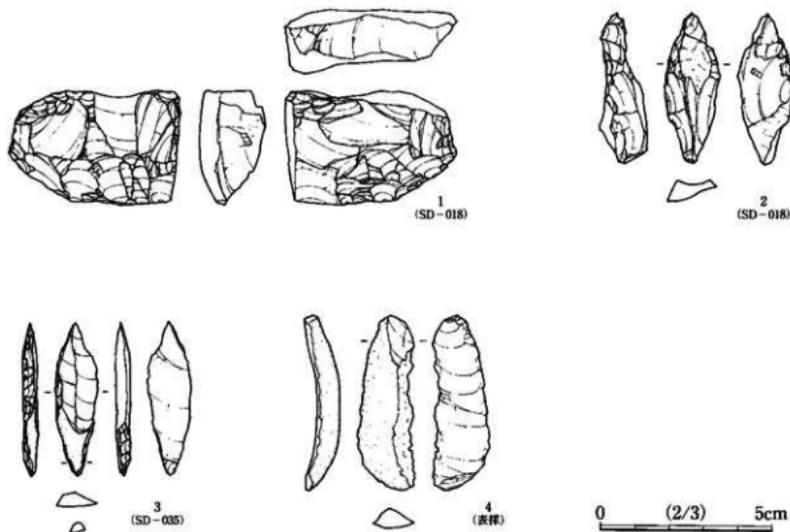
## 第2節 旧石器時代

### 概要

下層の確認調査からは旧石器時代に属する遺物の出土はなかったが、表採および遺構内から当該期の遺物が出土している。実測できた遺物は4点であった。

#### 1 出土遺物（第7図、図版32）

1は珪質頁岩製の細石刃石核原型である。SD-018から出土した。2は珪質頁岩製の二次加工のある剥片である。SD-018から出土した。3は頁岩製のナイフ形石器である。基部に自然面を残す。SI-035から出土した。4は表採遺物である。メノウ製の剥片である。



第7図 旧石器実測図

### 第3節 縄文時代

#### 概要

東上泉遺跡で検出された縄文時代の遺構は、いずれも調査区南端に位置している。この部分は低地に向かって南西に張り出した台地の縁辺部に当たり、この部分が当該期の中心であったと思われる。

検出された遺構は、炉穴3基、陥穴5基の計8基で、いずれも早期後半の条痕文系土器期の所産である。陥穴は17P区及び18P区から3基が調査された。ほぼ南北方向に主軸をもっている。

遺構外から早期前葉の条痕文系土器から前期以降までの資料が出土しているが、その主体は田戸下層式土器と、条痕文系土器であり、当該期が東上泉遺跡の縄文時代の主体をなすといえる。

#### 1 遺構と出土遺物

##### 炉穴

SK-023 (第8・9図, 図版30・34)

16P-23から検出された炉穴である。SI-062の下層から検出された。遺存部で計測する限りでは長径1.73m、短径0.98mの北東方向に長い長楕円形を呈し、北東端に火床面をもつ。焼土は比較的厚く堆積する。掘込みは20cmである。

遺物は少量の土器片を出土した。1～5は同一個体の胴部破片と思われるが、接合できるものはなかった。外面は条痕文のみである。内側は火熱により激しく損傷しており、ほとんど原形を残していないが、条痕文を施すものもある。胎土は繊維を多く含む。

SK-024A (第8・9図, 図版34)

17Q-42から検出された炉穴である。SD-017の縁で検出された。遺存部で計測する限りでは長径2.0m、短径は推定で0.8m程度の北西方向に長い長楕円形を呈し、南東端に火床面をもつ。掘込みは15cmである。遺物は小片を1点検出した。6は横位の太沈線で区画し、斜位の太沈線を配す。内面は丁寧に磨かれている。胎土には白色の細砂粒を含み、緻密である。田戸下層式である。

SK-029 (第8図)

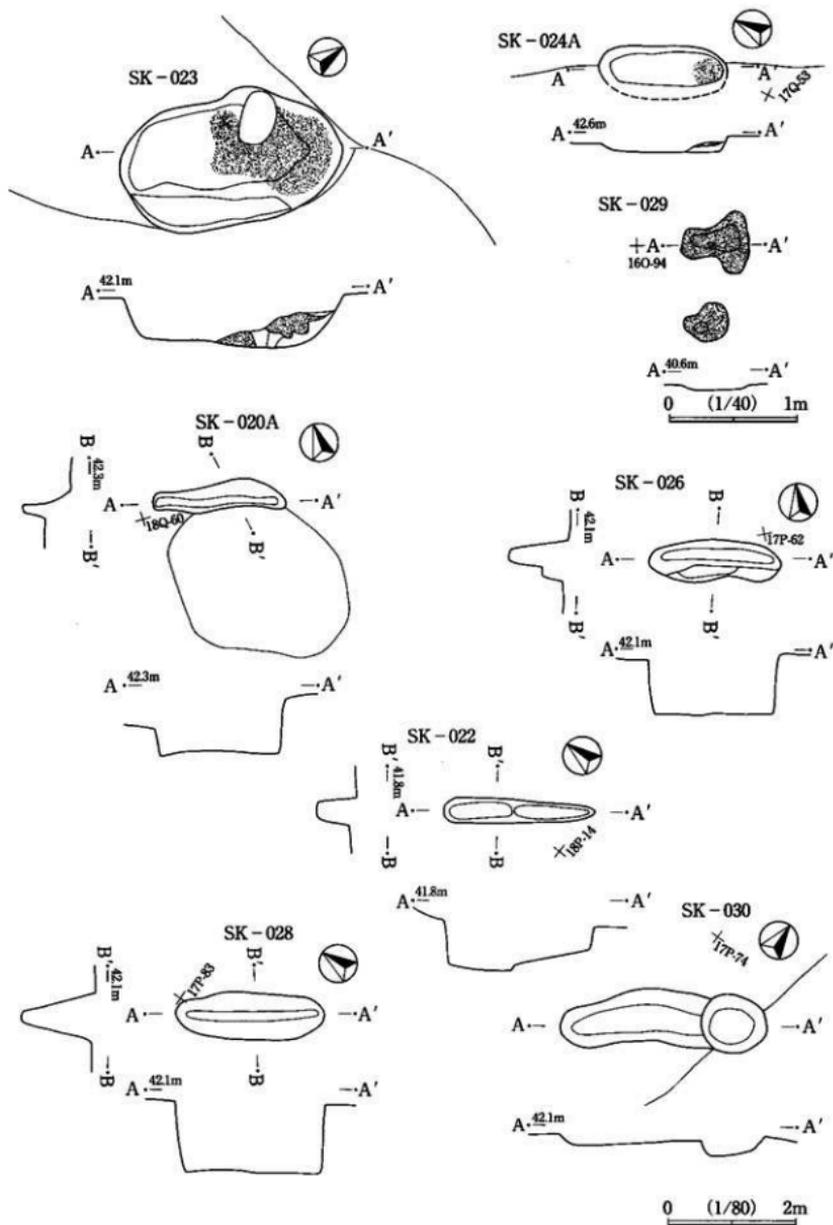
16O-94から検出された炉穴である。下層の確認調査中に発見されたが、火床部2カ所が確認されたのみで、遺構の構造は不明である。遺構に伴う遺物は検出されなかった。

##### 陥穴

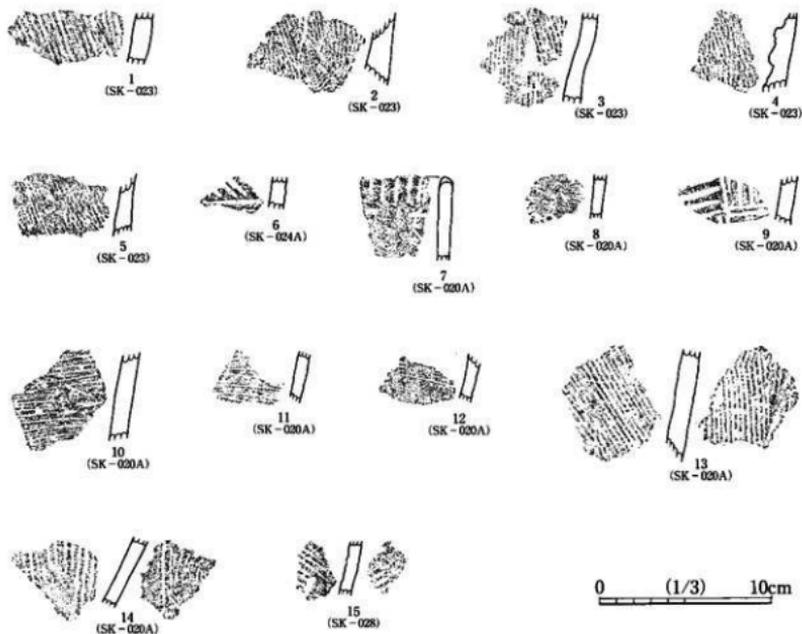
SK-020A (第8・9図, 図版34)

18Q-60から検出された陥穴である。SK-020Bと重複する。長径2.05m、短径0.4mの長楕円形で、深さはもっとも深い部分で90cmである。

遺物は縄文土器の小片が数点出土しており、いずれも縄文時代早期に属する。7はごく低い左右非対称の波状口縁である。口唇部から縦位の太沈線を施し、以下は細条線を斜格子状に配す。内側にケズリを施す。8は表面に浅い爪形文を連続して施すものである。内面はよく磨かれ、胎土は緻密である。9は横位



第8圖 炉穴・陥穴



第9図 遺構内出土縄文土器拓影図

と縦位の太沈線を組み合わせている。10, 11は外面には横位の間隔が不規則な条線を施す。内面の上下方向にケズリ痕が残る。12は細い沈線と貝殻腹縁文を横位に施す。6・8～12は田戸下層, 7は三戸式と考えられる。13, 14は表裏に条痕文が施されるもので、繊維を多く含む。条痕文系土器である。

#### SK-022 (第8図)

SD-018の底部から検出された陥穴である。18P-04に位置する。長径2.75m, 短径0.4mの長楕円形で、底部は二つに分かれ中央で段をなす。段の部分に向かって傾斜し、深さはもっとも深い部分で63cmである。遺構に伴う遺物は検出されなかった。

#### SK-026 (第8図, 図版30)

陥穴である。17P-61から検出された。長径2.08m, 短径0.66mの長楕円形である。南側に段を持ち、最深部は93cmを測る。遺構に伴う遺物は検出されなかった。

#### SK-028 (第8・9図, 図版30・34)

陥穴である。17P-82から検出された。長径2.35m, 短径0.75mの長楕円形で、最深部は1.18mを測る。

遺物は縄文土器の薄片を1点検出したのみである。15は外面に条線、内面に条痕を施す。繊維は少なく、胎土は緻密である。条痕文系土器である。

## SK-030 (第8図)

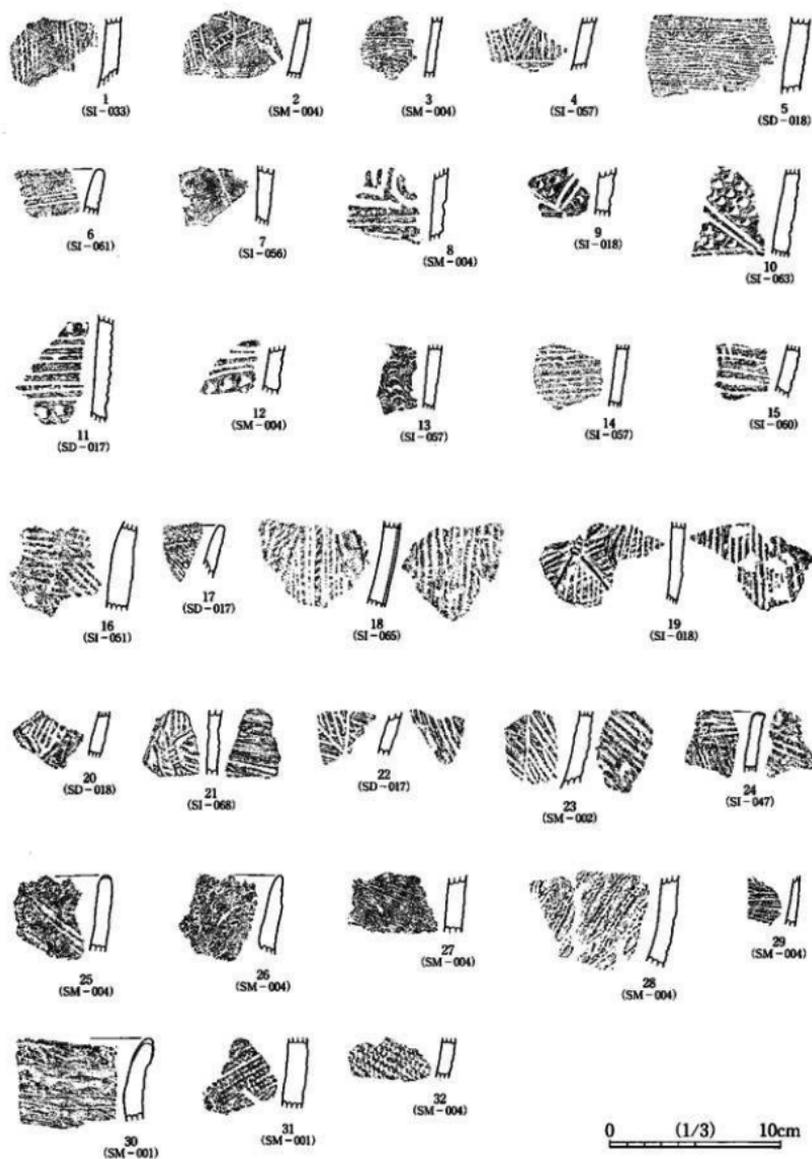
17P-74から検出された陥穴である。長径324m、短径0.8mの長楕円形である。北東端が径0.94m、深さ45cmのビット状を呈する。最深部は23cmを測る。遺構に伴う遺物は検出されなかった。

## 2 遺構外出土遺物

本遺跡は後世の耕作により包含層は残存していない。縄文期の遺構・遺物も少ないが、他時期の遺構覆土中から検出された縄文土器のうち、比較的大きな破片を抽出した。

また、1,949個、総計107.4Kgの礫が出土している。いずれも弥生時代以降の遺構覆土中からの検出であり、生活史としてのデータは失われていると考えられるため、個別のデータの掲載はしないこととした。縄文土器(第10図、図版35・36)

1は燃糸文系土器である。器表面はやや摩耗しているが、条の間隔の空くRの燃糸文が縦位に施文されている。施文後にナデが加えられ、破片中央部分の燃糸文はほぼ完全に磨り消されている。稲荷台式と思われる。2～15は田戸下層式土器である。2は爪形文を伴う条線で縦位に区切り、さらに同じく爪形文を伴う条線で斜位区画をし、内部を斜沈線を充填する。縦位区切りの下部は横沈線で区画されている。3は斜位の沈線下部をやや太めの横沈線で区切る。やや離れてもう一条の横沈線がありその間に貝殻腹縁文を配す。4は縦長の鋸歯状条線を施し、下端を横位の条線で区画する。5は外面の上部に斜位の条線、下部に横位の条線を施す。6は口縁である。口唇部が円頭で、やや外反する。間隔のあいた横沈線が施される。7は横位条線と斜行沈線が施される。8は縦横の太沈線と、弧状あるいは円形の太沈線を組み合わせている。太沈線の間に爪形の刺突文を横に並べている。9、10は同一個体と思われる。二本一組の斜位と横位の沈線で区画し、内部を爪形の刺突文で充填している。11は横位の太条線の上下に、半載竹管の先端による角形の刺突文列を施す。12は横位の太条線の下部に、爪形の刺突文列を施す。13は表面には爪形文列を縦位に施す。14は浅い条線を横位に施す。15は上部の細沈線に縦位及び斜位の沈線が加えられている。その下位に太沈線を横位に施す。16～32は条痕文系土器である。16は横位とやや右下がりの条痕がみられる。内面は剥落が激しい。17は口縁である。口唇部角に縄文を施文し、口縁の少し下に縄文原体の押捺を伴う微隆起線文、下に斜位の条痕文を持つ。18～22は隆起線区画内に条線文を充填するものである。18は太い隆起線の上に刻みを持つ。19は地文に浅い条痕文がみられる。22は条痕文の地文を沈線で区画し、区画内に異方向の斜行条痕文を施す。23は条痕文を沈線で区画する。17～23は野島式である。24は口縁である。口唇部に刻みを施す。口縁直下に横位の条痕文、その下に浅い条痕文を斜めに施す。口唇部の刻み目内に赤色の痕跡が残る。25、26は同一個体の可能性もある。25は口縁であるが、口唇部はごく僅かしか残っていない。外面は条痕文が間隔をあけて施される。26は無文の口縁部破片である。内外面ともに擦痕が施されている。27は無文の破片である。器面には内外面ともに粗い擦痕が施されている。25～27は子母口式である。28は黒浜式である。外面は2条単位のLの燃糸文と思われる。29は半載竹管による平行沈線を施文する。器壁は薄く内面はよく磨かれており、細かい白色礫泥じりの胎土を持つ。浮島式である。30～32は縄文時代前期以降のものであろう。30は口縁で小波状をなす。浅く施さ



第10圖 遺構外出土繩文土器拓影圖

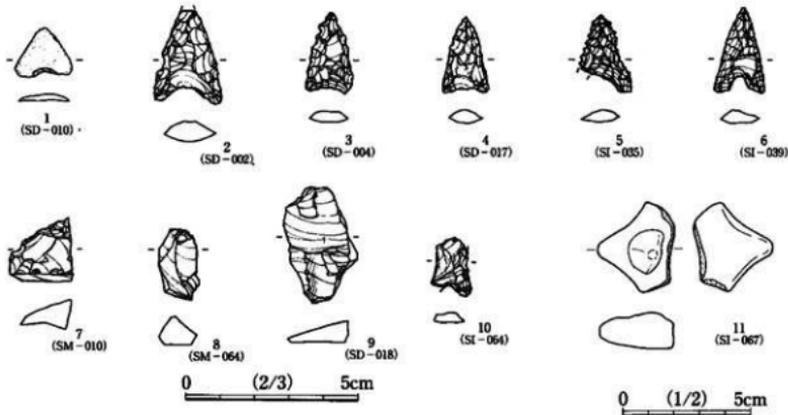
れたRの無節縄文の上に細沈線を2条引く。31はLRの単節縄文、32はRLの単節縄文を施す。

石器 (第11図, 第4表, 図版32)

1～6は石鏃である。3・4・6は完形である。1は粗雑なチャート原石の表皮を利用したもので基部及び右側縁上方にわずかな調整痕が認められる。2は先端部を、5は両脚部を欠損している。7は二次加工のある剥片、8・9は楔形石器、10は石鏃の未製品である。

土製品 (第11図, 図版45)

土偶片1点を検出した。凸形で、胸部の片方が摘み出されて表現されているところから、分銅形の胸部から肩部と思われる。頭部も一部が残る。三角形に収まるタイプであろう。胴部下半および胸部の半分が欠損している。表面は摩耗しているが、全体に褐色を呈する。また、部分的に赤彩様の痕跡がみられる。



第11図 縄文時代石器・土偶

## 第4節 弥生時代以降

### 概要

竪穴住居跡が67軒検出された。内訳は弥生時代後期～古墳時代前期にかけての住居跡が66軒、平安時代の住居跡1軒である。住居跡は調査区北半部からのみ検出され、重複する住居が多い。住居跡のほかは古墳周溝3基、溝、欄列、土坑多数、塚1基を調査した。

### 1 竪穴住居跡

#### SI-001 (第12図, 図版3・37)

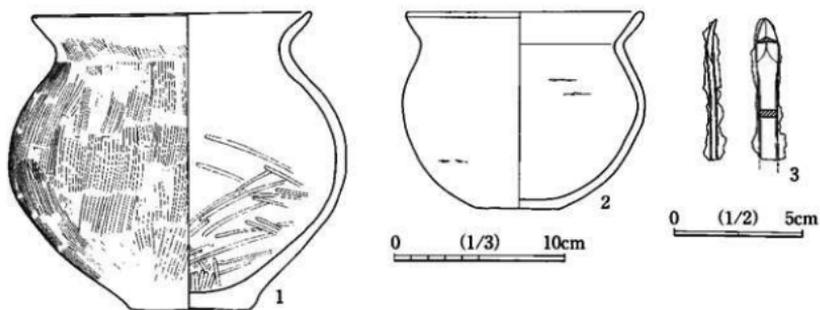
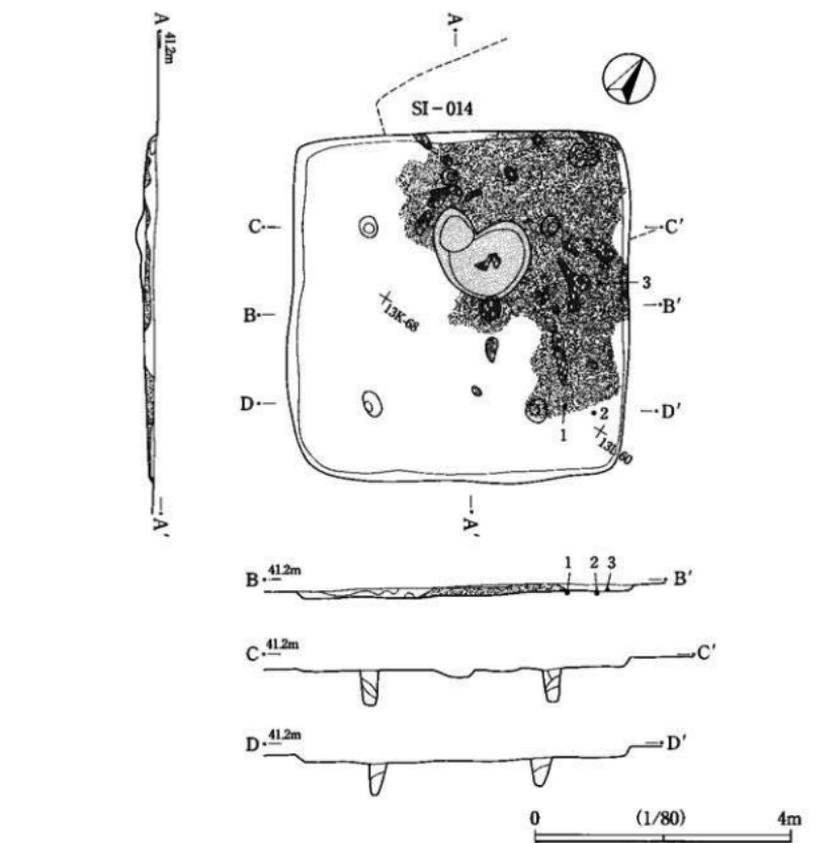
調査区北端に位置する。SI-014の埋没後に作られる。主軸を北東にとり、長辺5.6m、短辺5.3mの方形を呈する。主柱穴4カ所は対角線上に位置し、炉は北西側の柱穴の間に位置する。炉の北側に深さ32cmのピットを、北東隅に深さ7cmと17cmのピットをそれぞれ検出した。住居北半分の床面には焼土が堆積する。炭化材も混じり火災住居と考えられる。褐色土がこれを覆うように堆積しているが、壁高が10cm前後と浅いため、人為的な埋め戻しかどうかは判断できなかった。遺物は主に遺構の北東側に検出されている。

1はほぼ完形の甕である。胴部中央に最大径がある。外面に縦方向のハケメ調整を施し、内部はヘラ状工具で磨いてある。2は小型の甕である。ほぼ完形で出土した。口縁部がやや肥厚する。外面全体に煤が付着する。内外面ともヘラナデであるが、口縁内側は特によく磨かれている。3はヤリガンナの刃部である。北東壁際から検出された。長さは56mm、幅は刃部で7.5mm、柄は欠損する。

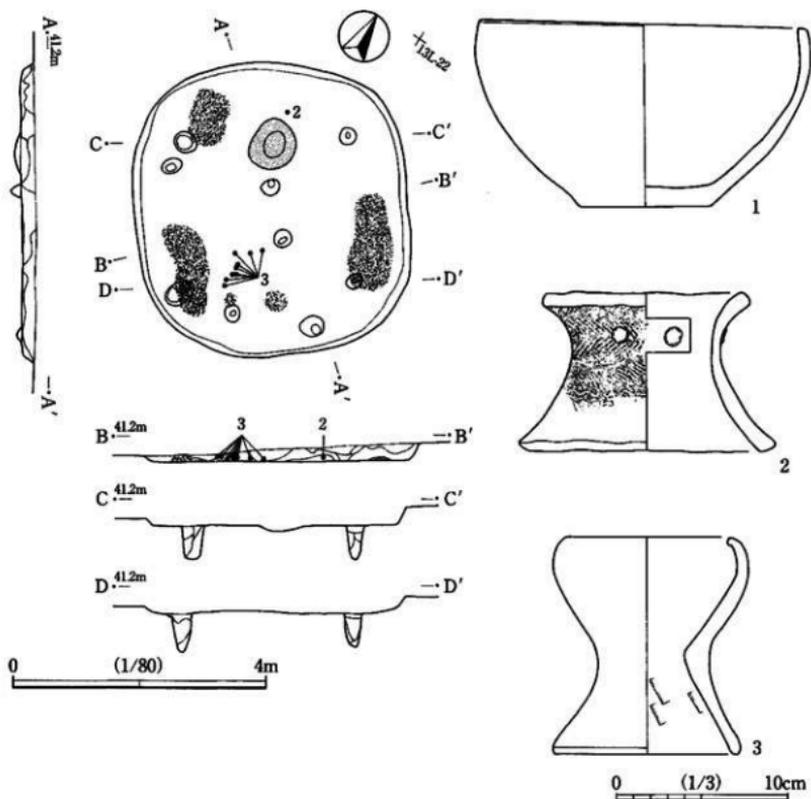
#### SI-002 (第13図, 図版4・37)

SI-001の東に位置する。主軸を南北からやや西に振る。平面形は長径4.7m、短径4.4mの楕円形を呈する。主柱穴はほぼ対角線上に4カ所あり、炉は北側の柱穴の間に位置する。このほか、炉の南に深さ26cm、遺構中央部に深さ49cmのピットが、北西側の柱穴の脇に深さ14cm、南西柱穴脇に深さ22cm、南辺中央やや東寄りに深さ22cmのピットがそれぞれ所在する。主柱穴の付近には主軸と同じ方向に帯状に焼土の堆積がみられる。壁高は遺存のよい北側で25cm前後である。覆土は暗褐色土や明褐色土がブロック状に堆積しており、人為的な埋没と考えられる。遺物は少量であったが、図示したものはいずれも床面近くで検出されている。

1は鉢で約3/4が遺存する。口縁がやや内湾し、無文である。2は弥生土器の壺頸部を上下逆転し転用した器台である。口縁部と肩部以下を水平に打ち欠き、断面を粗く研磨する。上部(壺の状態)を2条のS字結節文で区画し、以下は羽状縄文が施される。くびれ部に2個一単位の円形浮文を付す。相対する部分が欠損するため、2対であるかは不明。外部は上下に、内部は横方向に丁寧な磨きを施す。3は器台である。ほぼ完形で出土した。中央やや下にくびれを持ち、口縁は内湾する。いわゆる炉器台へ移行する途中のものである。



第12圖 SI-001



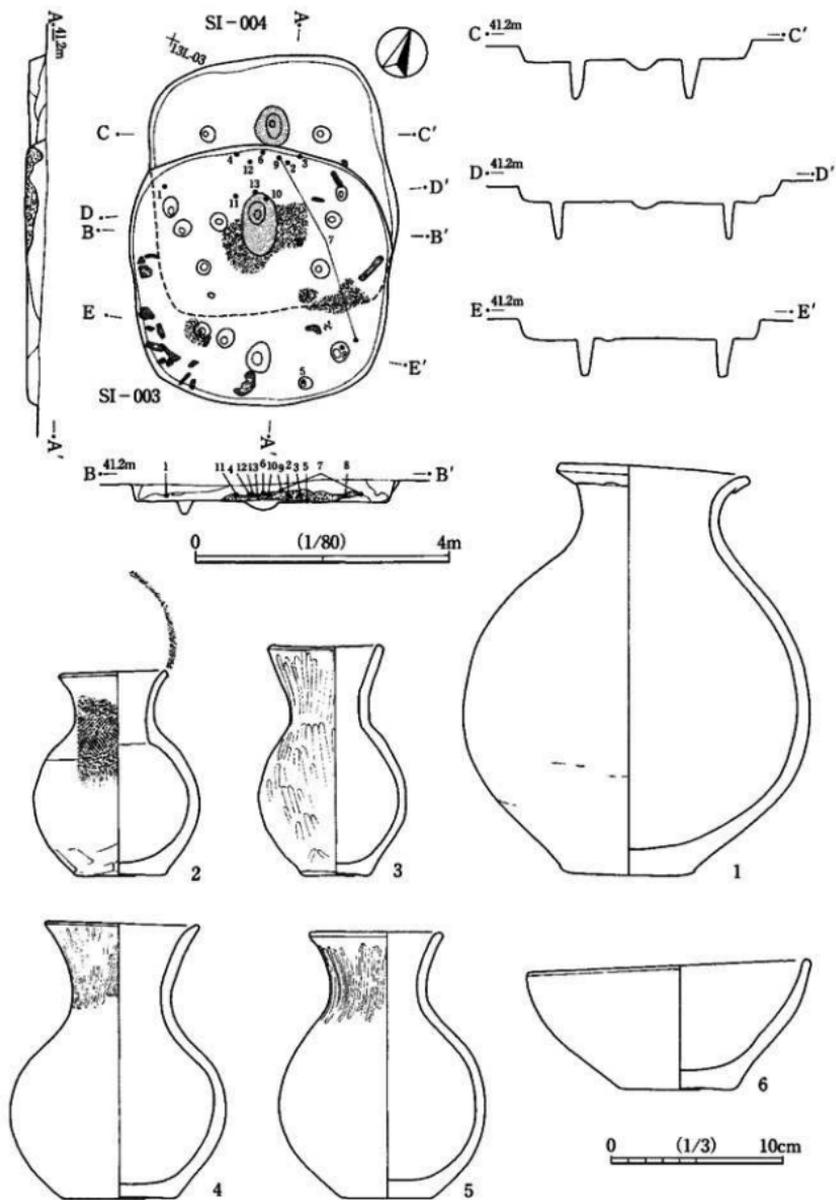
第13図 SI-002

SI-003, SI-004 (第14・15図, 図版4・37・38・45)

SI-002の東に位置する。ともに主軸を南北からやや西に振る。SI-003はSI-004の埋没後に造られる。

SI-004は一辺4.0mの隅丸方形で、ほぼ対角線上に主柱穴4カ所を設け、北側柱穴の中間に炉を持つ。壁高は北東隅で30cmを測る。覆土は明褐色土と褐色土がブロック状に堆積しており、人為的埋没が考えられる。図示すべき遺物は検出されなかった。

SI-003は径4.2mの楕円形を呈する。ほぼ対角線上を中心に計10カ所のピットを持つ。炉は北辺よりの中央に位置する。炉の周辺と、住居周縁部に焼土と炭化材の出土がみられるため、火災住居と思われる。壁高は30cm～34cmを測るが、焼土層の上の覆土は暗褐色土ないしは明褐色土が厚い層となっており、比較的短時間に人為的な埋め戻しが行われた可能性もある。図示した遺物は10を除きほぼ完形のまま焼土に埋まるように出土している。出土地点は、1は北西隅、2, 3, 4, 6, 9～13が住居北側の壁際と炉



第14圖 SI-003・004

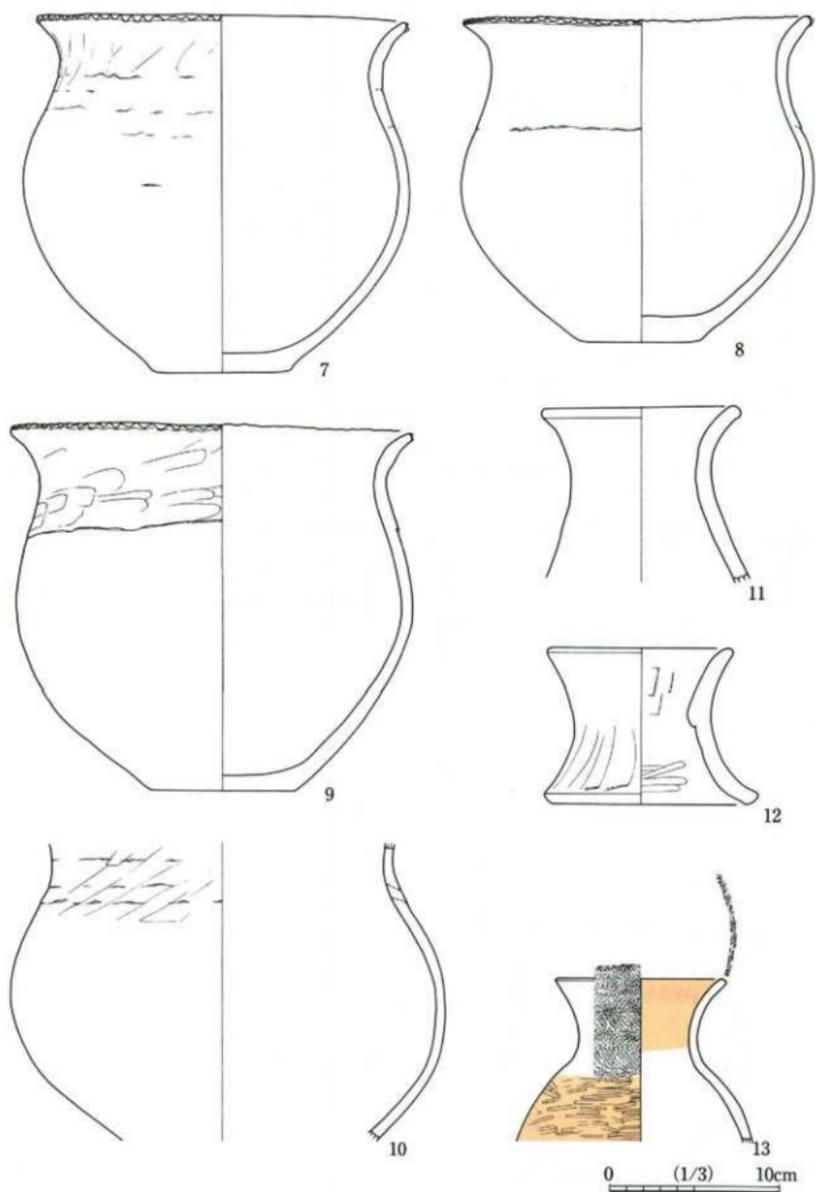
の北側の間に、並んだ状態で検出された。また5は南辺際のピット付近から、7,8は南東の柱穴脇から検出されている。いずれも被熱し、口縁内部に煤が付着しているものもあることから、焼失前に、意図的に正位で置かれたものと思われる。10は胴部破片をすべて確認できたが、各破片がゆがんでおり、原形には復元できなかった。熱で変形したものと思われる。

1は中型の壺である。有段口縁で胴部中央に焼成時の黒斑が見られる。上半部は縦方向、下半部は斜め方向のヘラミガキが施される。2～5は小型の壺である。いずれも外面は上下に丹念な磨きが施される。2は胴部が球形を呈し、頸部が短く口縁が外反する。口唇部は斜縄文、頸部には上下を2条の二重結びのS字結節文で区画された羽状縄文が施される。3は無文である。口縁が直線的に開く。4は無文で、胴部は球形を呈する。口縁は外反して大きく開く。5も無文で胴部最大径が中央にあり、口縁部がやや外反する。6は鉢である。口縁がやや肥厚して、わずかに内湾する。7～10は甕である。頸部の輪積み痕の処理にやや差はあるものの、大きさ・形状ともにきわめて似通っている。口縁はいずれも結節文の押捺により造る。7は斜め方向のヘラケズリで輪積み痕を不完全に消している。8は胴上部の輪積み痕のみ残し、頸部は横方向にナデ消している。9は頸部の輪積み痕を横方向のヘラケズリで不完全に消しており、ヘラケズリ痕が明瞭に残る。7～9には外面の広範囲に黒色の付着物がある。火災時に付着したものであろう。10も口縁部と底部を欠くが、同様に波状であろう。また、内外面とも器面が赤色あるいは赤褐色を呈する。不確定なため挿図上には示さなかったが、赤彩を含め何らかの塗布・彩色がされていた可能性もある。11,12は器台である。11は口径が底径よりやや狭く、くびれ部も口縁部よりにある。12は口径と底径がほぼ同じで、くびれ部を中央に持ち、内側には接合痕が残る。ともに外面はヘラナデの後、磨きを施す。内面上半には甕と同様の付着物が観察できる。13は壺胴上部から口縁までを器台に転用したものである。下端は丁寧に打ち欠き、均一に整えている。壺自体は素口縁で外反し、口唇部に付加条第2種の付加条縄文を施す。口縁から頸部にかけては、各段毎にS字結節文で区画した付加条縄文を交互に5段配し、下端はS字結節文2条で区画する。外面無文部と口縁内側に赤彩する。

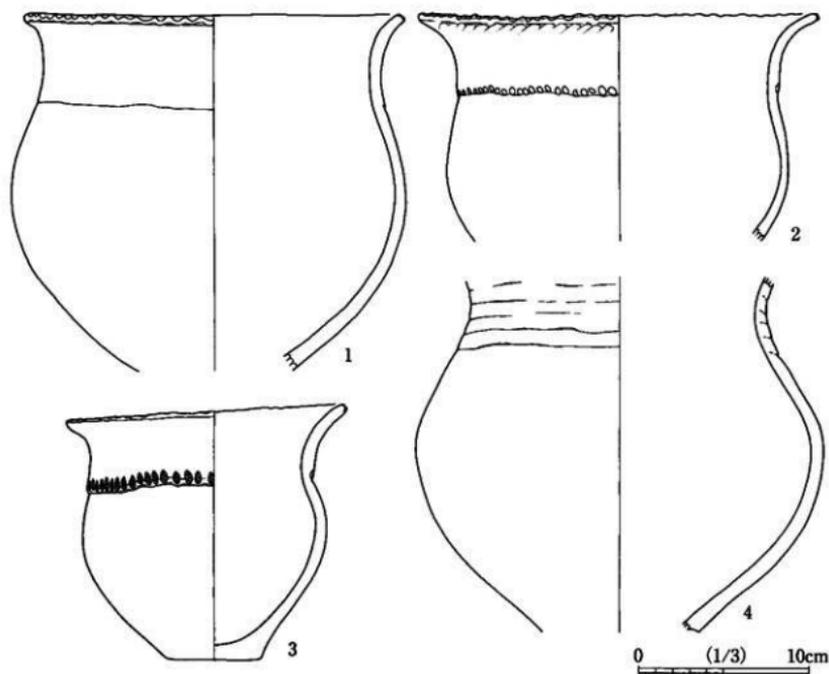
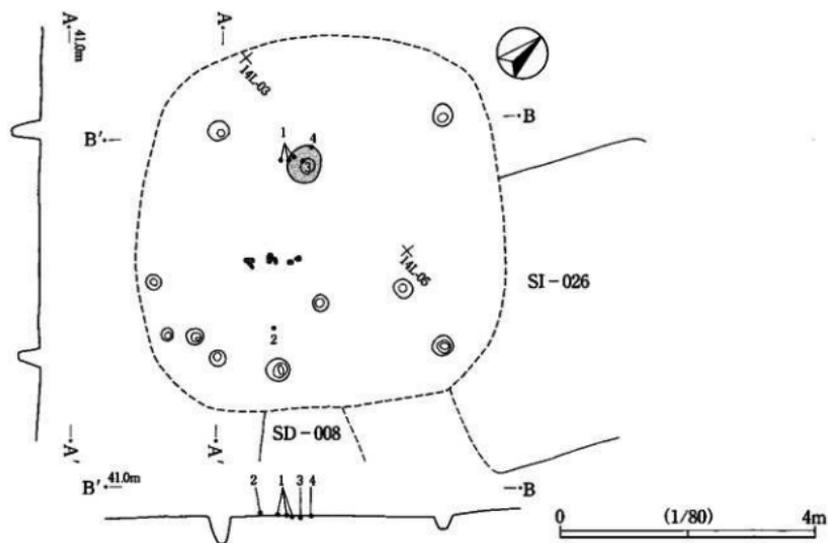
#### SI-005 (第16図, 図版5・6・38)

SI-002の南10mに位置する。東側をSI-026により損なう。壁は遺存せず、炉と柱穴の位置から輪郭を推定した。主軸を北西にとり、炉は北東側の柱穴の間、やや西寄りにある。径5.8m程度と思われる。このほか、主軸寄りに2カ所、南隅に4カ所ピットを有するが、本遺構のものであるかは不明である。遺構の中央部に炭化材を出土した。遺物はいずれも炉の付近で検出された。

図示したのはいずれも甕である。1は底部のみを欠く。最大径が胴中央部にあり、口径より大きい。口縁は押捺により波状に造り、胴上部に輪積み痕を残す。2は口縁の約1/3が残る。胎土に白色砂粒を多く含む。胴上部の輪積み痕を残し、結節文による刻み目を施す。上部の輪積み痕はヘラによりナデ消している。口縁は押捺により波状につくる。3は小型でほぼ完形である。胴部の最大径が胴上部にあるが、口径より小さい。口縁は、不明瞭だが結節文の押捺により波状につくり、胴上部の輪積み痕上にも結節文による刻み目を施す。4は底部と口縁を欠く。頸部に5段以上の輪積み痕をもつ。



第15図 SI-003 出土遺物

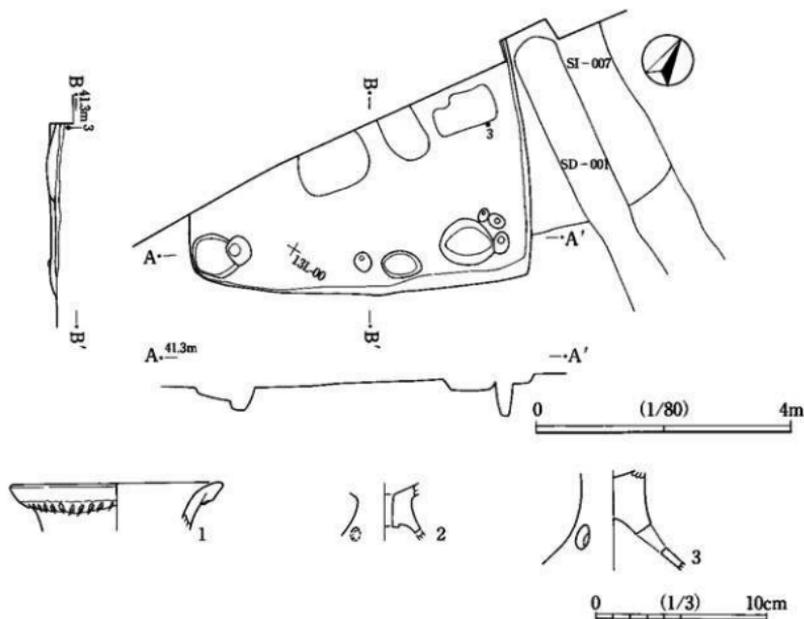


第16圖 SI-005

SI-006 (第17図, 図版5・38)

調査区最北端に位置する。遺構の約1/2が調査区外になり未調査である。遺構は東側でSI-007に、また、攪乱によっても損なわれる。主軸を南北からやや西に振る。平面形は一辺5.3m程度の方形を呈すると思われる。壁高は遺存の比較的よい南東部で11cm程度である。柱穴と思われるのは南西隅の径60cm、深さ10cmのもの、南東隅の径80cm、深さ14cmのピットであろう。南辺中央部の径40cm、深さ10cmのピットは入口施設と思われる。このほかに南西隅に深さ34cm、中央部に深さ11cm、南東隅に深さ7cm、14cm、54cmのピットが検出されたが、性格は不明である。本遺構のものと思われる覆土は床面直上で確認された明褐色土である。遺物はいずれも小片で覆土中からの出土である。

1は小型壺の口縁部約1/4が残る。折り返しの下端に結節の押捺による刻みを施す。2は器台の接合部である。受け部がハの字に開くもので、接合部が長めで中央に貫通孔がある。脚部にも穿孔を有する。3は高坏の脚部である。坏部が接合部できれいに剥離している。脚部上部が柱状化しており、穿孔も不均等だが3カ所ある。



第17図 SI-006

SI-007 (第18図, 図版5)

調査区最北端に位置する。遺構の約 1/2 が調査区外になり未調査である。遺構は西側で SI-006 と重複し, SD-001, 002 によって東側が損なわれる。また, 攪乱によっても損なわれる。平面形は径 5.3m 程度の楕円形で, 主軸を北西にとると思われる。柱穴は 6 カ所検出された。深さは東側から 41cm, 32cm, 43cm, 46cm, 26cm, 56cm である。26cm のもの以外は柱穴であろうか。本遺構のものと思われる覆土は床面直上の暗褐色土層のみである。

図示できる遺物は出土しなかった。

SI-008 (第19図, 図版6・44)

13 Mグリッドに位置する。SI-012 に隣接する。SD-002 が遺構北東端を走る。平面形は長径 4.5m の楕円形で主軸を北西にとる。対角線上に 4 カ所の主柱穴を配し, 炉は北東側柱穴の中間, やや西寄りにある。壁高が 10cm 以下であるのに加え, SD-002 の重複や現代の耕作の影響などで遺存はきわめて悪い。遺物も土器は小片のみで図示しえなかったが, 南西側柱穴の近くで鉄製品を検出した。

1 は板状の鉄製品で, 長さ 51mm, 幅 19mm, 厚さ 1mm である。両端は破損している。刃はなく, 用途は不明である。2～5 は接合しないものの, 同一個体あるいは同種であると思われる。幅 3mm, 厚さは 0.8mm～1mm で, 断面が薄いかまぼこ型を呈する。帯状の飾り金具の断片であろうか。

SI-009, SI-010, SI-015 (第20・21・22図, 図版6・7・9)

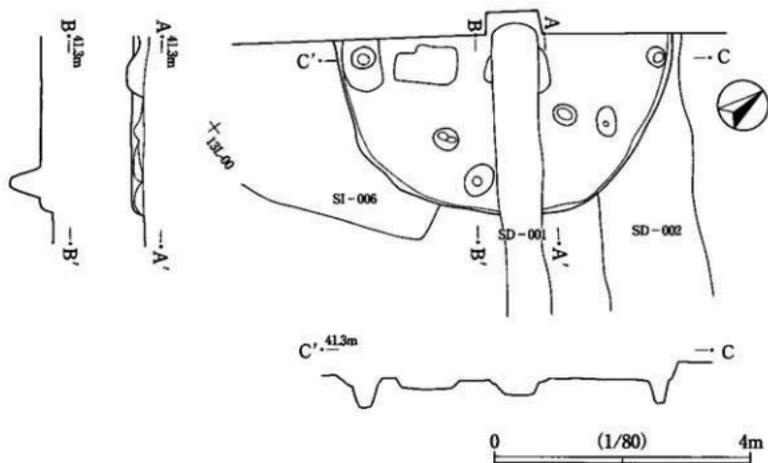
SI-005 の東, 13 L～14 L にまたがって位置する。SI-013, 026, 027 の埋没後に造られる。SI-009, 010, 015 のいずれも主軸を北東にとる長方形の平面形を呈すが, 相互の新旧関係は明確ではない。ピットについても調査時の所見から属する遺構を判断したが, 構造上の役割が不明なものも多い。

SI-009 は長辺 3.9m, 短辺 2.9m, 対角線上の柱穴のほか, 北西側寄りにピット 3 カ所を有する。副柱穴であろう。壁高は西隅で 6cm が遺存する。炉は検出されなかった。

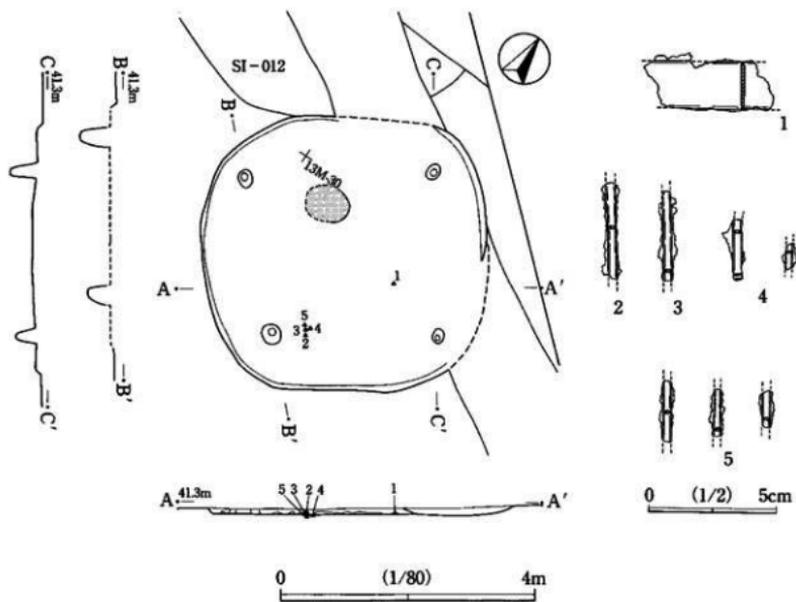
SI-010 は長辺 4.4m, 短辺 4.1m, 四隅に柱穴をもうけるほか, 北東辺際に 4 カ所のピットを有するが, 本遺構のものかは不明である。壁高は南隅で 5cm が遺存する。炉は検出されなかった。

SI-015 は長辺 3.6m, 短辺 3.0m, 全部で 9 カ所のピットを有するが, 所属や性格は不明である。壁高は南隅で 7cm が遺存する。炉は検出されなかった。

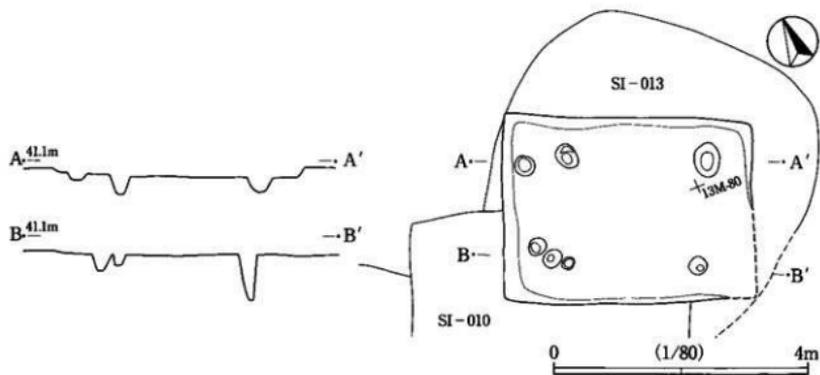
いずれの遺構にも, 図示できるような遺物は検出されていない。



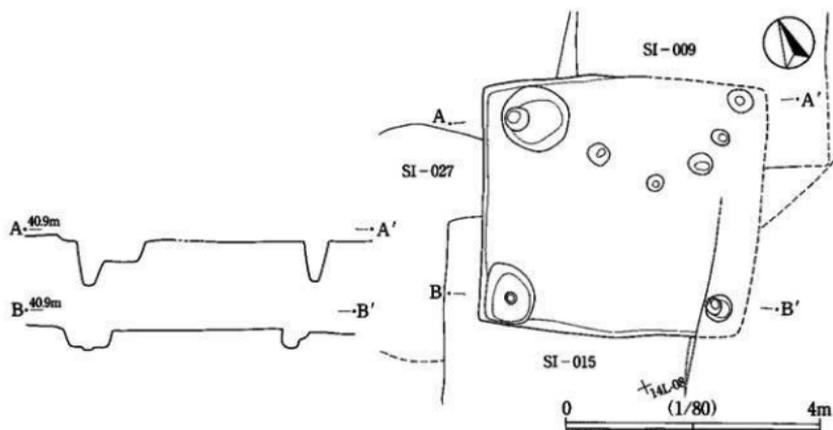
第18图 SI-007



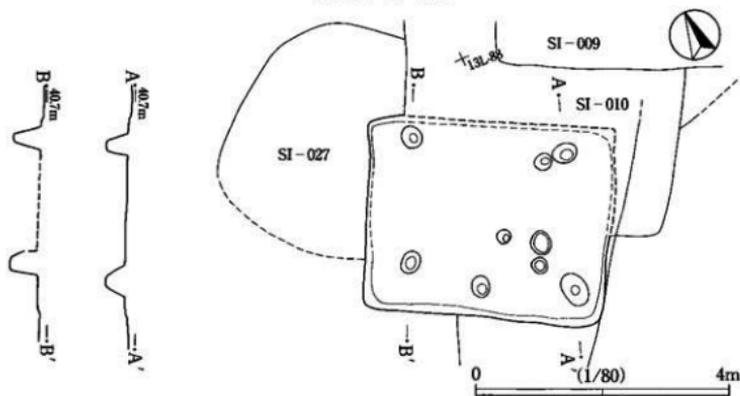
第19图 SI-008



第20图 SI-009



第21图 SI-010



第22图 SI-015

SI-011 (第23図, 図版7・38)

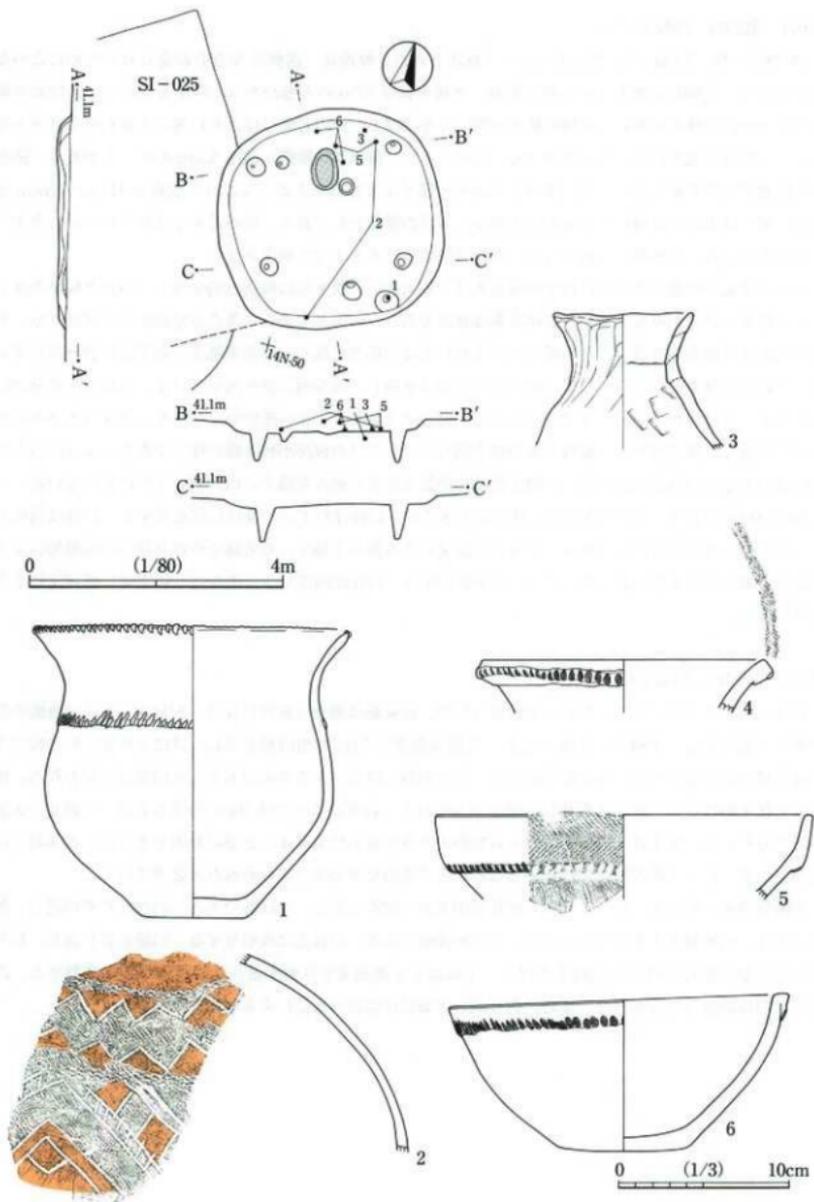
SM-001の南, 14 M~14 Nにまたがって検出された。埋没後, 西側にSI-030が造られたためにこの部分を損なう。主軸は南北からやや西に振れ, 平面形は径3.7mの方形がかった円形を呈する。ほぼ対角線上の4カ所に主柱穴を配し, 北側の柱穴の間に炉を設ける。炉の対面には入り口施設と思われるピットがある。このほか北西の柱穴脇に深さ10cmのピットが, 南東隅の壁際に深さ55cmのピットがある。後者からは甕が完形で出土している。壁は上部がやや開くように立ち上がっており, 壁高は11cm~18cmを測る。覆土は上から暗褐色土と明褐色土がレンズ状の堆積をしており, 壁の近くではややロームの含まれる量が多くなる。自然堆積と思われる。遺物は炉周辺でまとまって検出された。

1はほぼ完形の甕である。口径が胴部最大径より大きい。胴上部に輪積み痕を残し, 口縁と輪積み痕上に, 結節文による刻目を施す。2は壺胴部破片である。上下と中央を2条のS字結節文で区画する。上段の区画は付加条第2種の付加条縄文上に沈線による山形文を施し, 付加条縄文を鋸歯状に磨り消している。下段は付加条縄文上にやはり沈線で複合山形文を施し, 部分的に磨り消している。文様部を部分的に赤彩する。3は器台である。下部先端を欠く。体部の上から1/3の部分でくびれる。外面は上下のヘラケズリを施し, 脚部内側に, 輪積み痕や横方向のヘラケズリの痕跡が残る粗い作りである。4は広口壺の口縁部である。口唇部に斜縄文, 口縁先端部に結節文による刻みを施す。内外面を丁寧に磨いている。5は鉢の口縁部で約1/3が遺存する。体部が大きく開き口縁はわずかに受け口状を呈する。口唇は面取りし, 折り返し部は2段の羽状縄文, 下端は結節文による刻みを施す。6も鉢でやはり体部が直線的に大きく開き口縁がわずかに内湾する。約1/2が遺存する。口唇は面取りし, 折り返し部下端に結節文による刻みを施す。

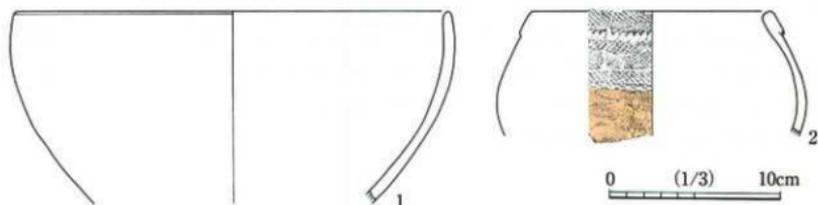
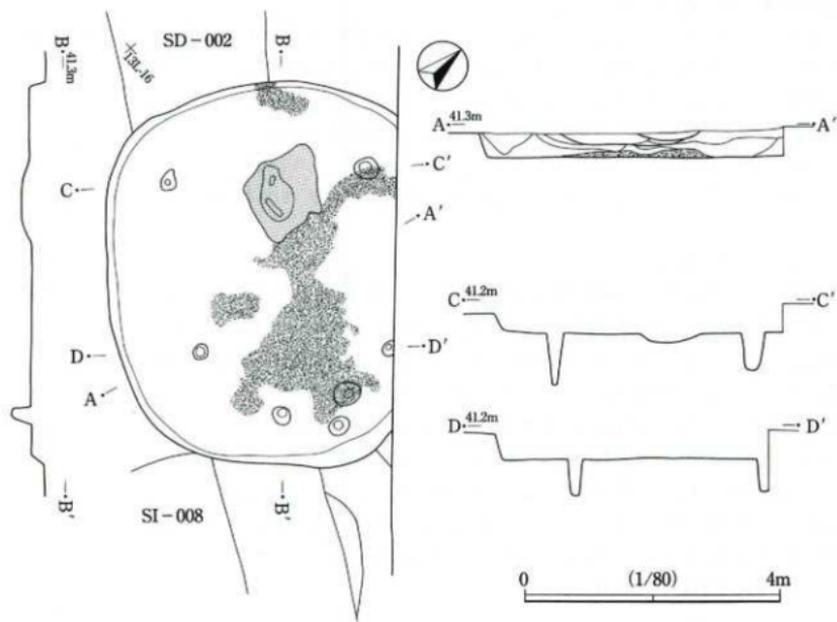
SI-012 (第24図, 図版7)

13 L~13 Mグリッドにまたがって検出された。北東端は調査区域外になり, SD-002, 003が遺構中央の覆土上部を走る。平面形は長軸が6.2m, 短軸は推定で5.4mの楕円形を呈し, ほぼ対角線上に主柱穴4カ所を設ける。北西柱穴の間に炉を設ける。炉の対面にはピット3カ所があり入り口施設と思われる。住居中央部主軸に沿って焼土と炭化材の堆積がみられる。場所によっては10cmの厚さを持っており, 火災住居と思われる。覆土は, 含まれるローム粒の大きさの違いにより4~5層に分層できるが, 基本的には暗褐色土で, レンズ状の堆積ではないところから人為的な埋め戻しが行われたと推測される。

遺物は少量・小片で, 図示したものが比較的大きな破片である。1は鉢である。口縁はやや内湾し, 無文である。内外面を丁寧に磨いている。2は無頸壺である。口唇部は面取りする。口縁を折り返し, 折り返し部と胴上部にかけて羽状縄文を付し, 下端はS字結節文で区画する。この区画以下に赤彩する。内部の赤彩は観察できなかった。また, 折り返し下部には結節の押捺による刻みを施す。



第23图 SI-011



第24图 SI-012

SI-013 (第25図, 図版6・8)

13 L~13 Mグリッドにまたがって検出された。埋没後に覆土上に SI-009, 010 が造られる。主軸は北西にとり、平面形は径 5.0m ほどの楕円形を呈する。主柱穴は 4 カ所に対角線上に位置する。このほか南側柱穴脇に 3 カ所のピットを有するが性格は不明である。壁高は北西側で 29cm, 南側ではほとんど残存しない。覆土の堆積状況は重複のため判然としないが、暗褐色土が観察された。

遺物はほとんど出土せず、炉から出土した 1 点のみを図示した。1 は甕の頸部約 1/4 である。口径より胴部最大径が大きい。6 段の輪積み痕の凸部をヘラで削っている。口唇部は押捺によって波状に造る。

SI-014 (第26図, 図版8・38・39)

調査区北端に位置する。SI-001 により、南側約半分を損なう。主軸を北東にとり、短辺 3.8m, 復元長辺 5.1m を測る。遺存が悪く、比較的遺存している北東辺で壁高は 5cm 前後、南側の壁は検出できなかった。主軸に沿って 2 列、各 3 カ所のピットが検出された。北西側の列は北側からそれぞれ深さ 52cm, 24cm, 残存の深さで 30cm。南東側の列は北側から深さ 30cm, 残存の深さで 28cm と 31cm を測る。柱穴であろう。また北西側のピットは長径 110cm, 短径 70cm の方形をした掘り込みの中に造られる。貯蔵穴と思われる。炉は検出されなかった。遺物は貯蔵穴と列中央の柱穴の間からまともに出て出土している。

1 は甕である。6 段の輪積み痕の凸部をヘラで削っている。口唇部は押捺による刻みを施す。2 は甕の頸部から下の部分である。外面はヘラケズリ、内面はミガキを施す。輪積み痕をほとんどナゲ消している。内外面とも赤褐色を呈する。3 は甕の口縁部である。口縁を折り返し、折り返し部に斜縄文を、折り返し下端はヘラ状工具による刻み目を施す。

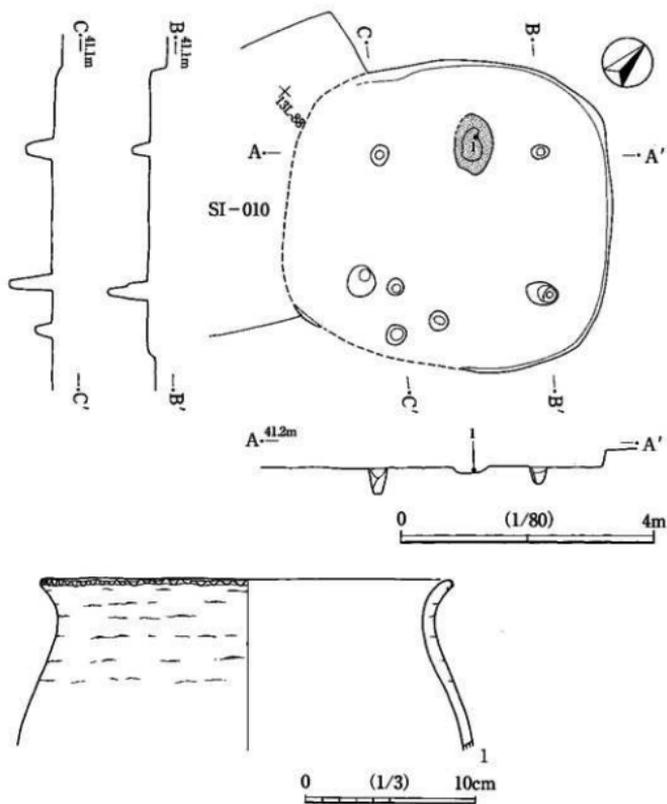
SI-016 (第27図)

SM-001 の周溝北端部に位置する。SD-003, SM-001, SK-003 によって大半を失い、また、遺構の 1/3 程度は調査区域外に位置する。平面形は一辺 5.4 m 程度の楕円形と思われる。壁高は重複のない北西隅で 8cm が遺存する。ピットは 3 カ所確認でき、北西隅のものが深さ 37cm, 南西辺中央のものは 10cm が遺存、南西隅のものは深さ 29cm, 南東寄りのものは深さ 27cm であった。

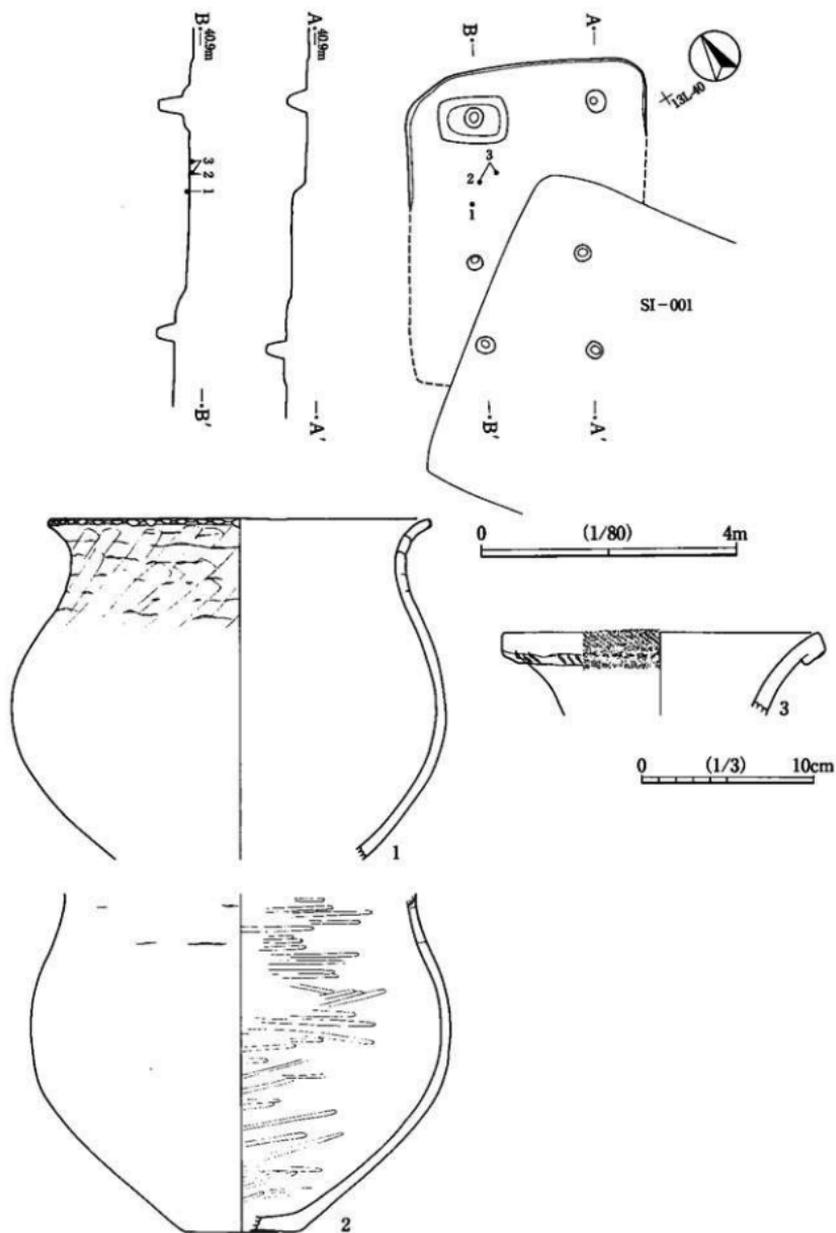
遺構に伴うと考えられる遺物は確認できなかった。

SI-017 (第28図, 図版9)

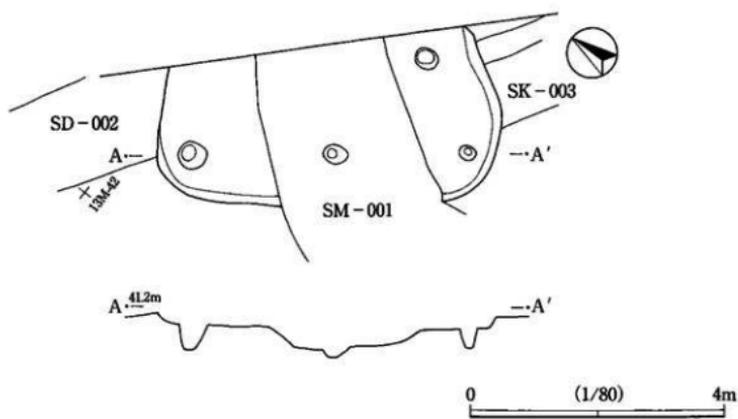
調査区北端に位置する。SD-004 の底部から柱穴状のピットが確認されたため住居として扱った。ピットの深さは SD-004 の底部からで、北西から 73cm, 11cm, 33cm である。遺構の 3/4 程度は調査区域外になり未調査である。SD-003 の外側に遺構が確認されないうえ、一辺 3.8 m 程度と推定されるが平面形は不明である。遺物は確認されなかった。



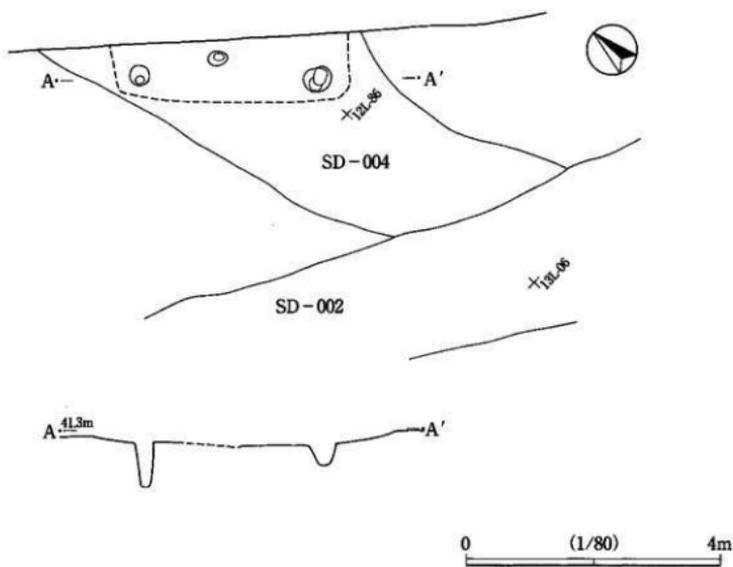
第25圖 SI-013



第26图 SI-014



第27図 SI-016



第28図 SI-017

SI-018 (第29図, 図版9・13・39)

14 Mグリッドのほぼ中央に位置する。SI-023, 031の埋没後に造られる。北東辺をSM-001により損なう。主軸は北西にとり、対角線上に主柱穴を4カ所設け、西側の柱穴は1カ所、北側の柱穴は2カ所、脇にビットを持つ。炉は北西側の柱穴の間に位置する。壁高は重複のない北西辺で23cm、南西隅で7cmを測る。遺物は少量であった。

1は小型の碗で口縁部が短く外反し、内側に稜を持つ。器壁は薄く丹念にヘラケズリ調整される。2は完形の碗であるが、やや小振りで全体をヘラケズリで粗く整形し、口縁も均一ではない。3は高坏の脚部で、端部が大きく広がり透かし穴3カ所を持つ。外面と坏内側はよく磨かれる。脚部内側は刷毛目調整される。

SI-019 (第30図, 図版10・39)

14 L~14 Mグリッドにまたがって位置する。SI-020と重複する。緩斜面のため、南側はほとんど検出できなかった。一辺5.5m程度と思われる。炉は遺構のほぼ中央に設ける。主柱穴は4カ所で、対角線上に位置する。このほか北東辺と北西辺にそれぞれ1カ所ビットをもつ。壁高は北側で25cm、覆土はこの部分で褐色土が観察できた。遺物は遺存度のよい北側部分で検出された。

1は完形の小型甕である。外面上部と口縁内側はハケメ調整、口唇部はさらにヨコナデ。外面下半はヘラケズリの後、磨かれる。胴部は球形で口縁が直線的に開く。2は平底増である。口縁は直線的に開く。調整終了後に底部を削って作り出しているが、中心から外れて不安定な作りになっている。頸部外面に接合の痕跡が残る。内外面赤彩されている。3は高坏である。口縁から脚部まで全体で約1/4が遺存する。坏部は大きく開くが稜はない。穿孔は3カ所と思われる内、2カ所が確認できた。4は小型の高坏の坏部1/4の破片である。浅い碗型に開く。5は小型器台の受部1/4の破片である。口縁に稜を持ち、内側にヘラによる調整痕が放射状に残る。6は素口縁の甕である。胴部の一部を欠く。胴部は球形に近く、口縁は直線的に開き無文である。

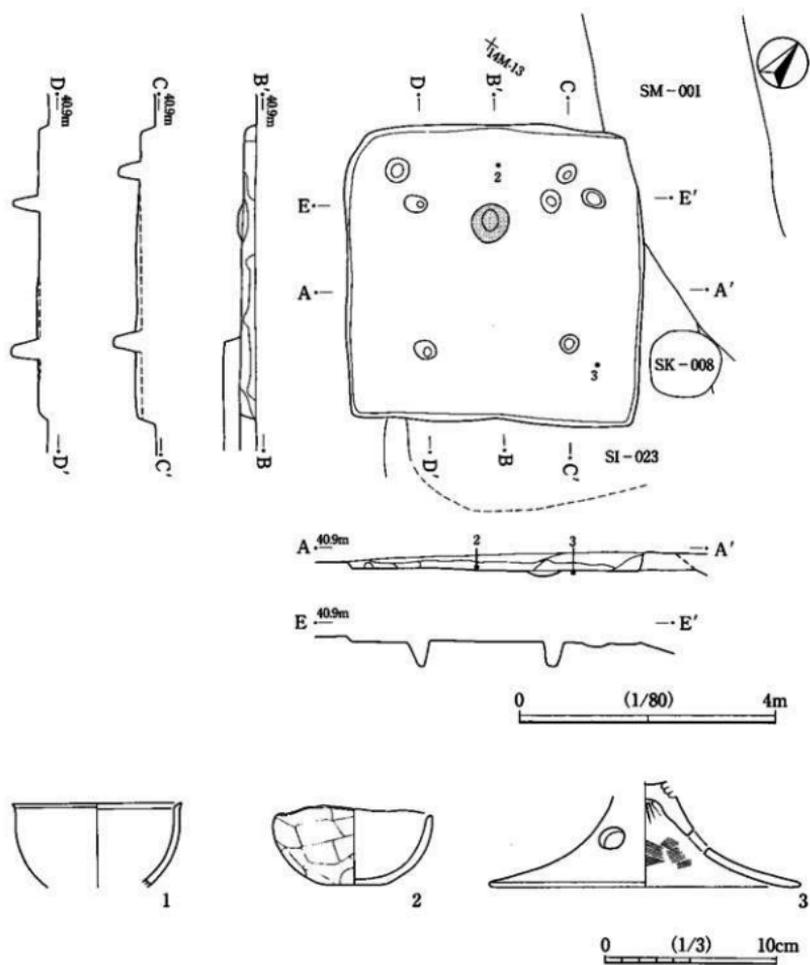
SI-020 (第31図, 図版10・39)

SI-019と重複する。緩斜面のため、南側はほとんど検出できなかった。平面形は一辺5.4mの方形を呈すると思われる。北西片中央よりやや北寄りに炉を設ける。主柱穴は4カ所で対角線上に位置する。このほか北東隅に2カ所のビットをもつ。壁高は北側で11cm、覆土はこの部分で暗褐色土が観察できた。遺物はごく少なく2点を図示し得たのみである。

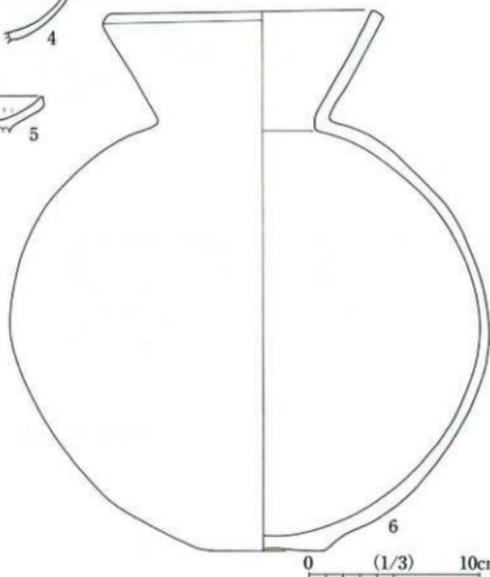
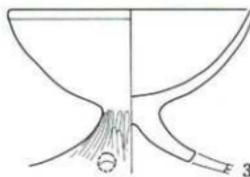
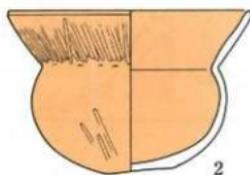
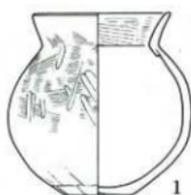
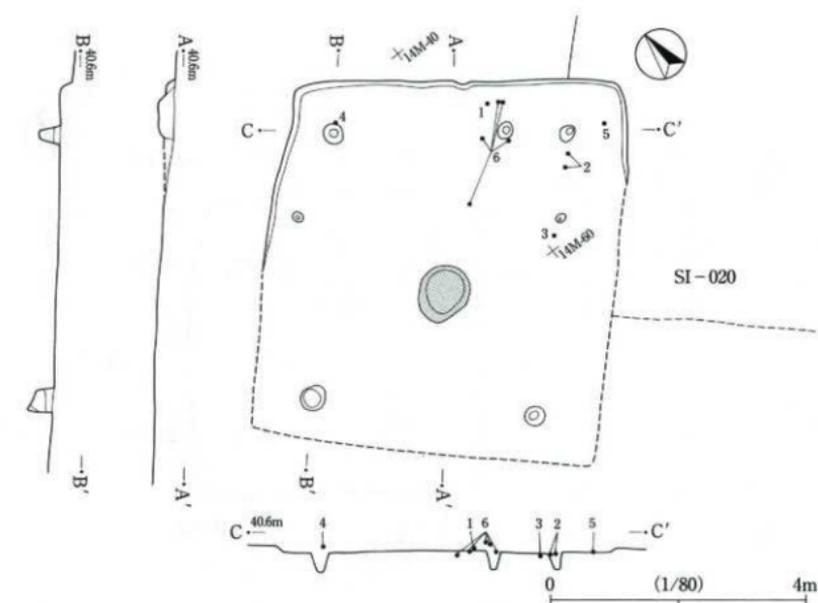
1は小型の高坏の坏部で脚部を欠く。碗型に開いている。2は器台の脚部であろう。約1/3が遺存する。ハの字形に開く。

SI-021 (第32図, 図版10)

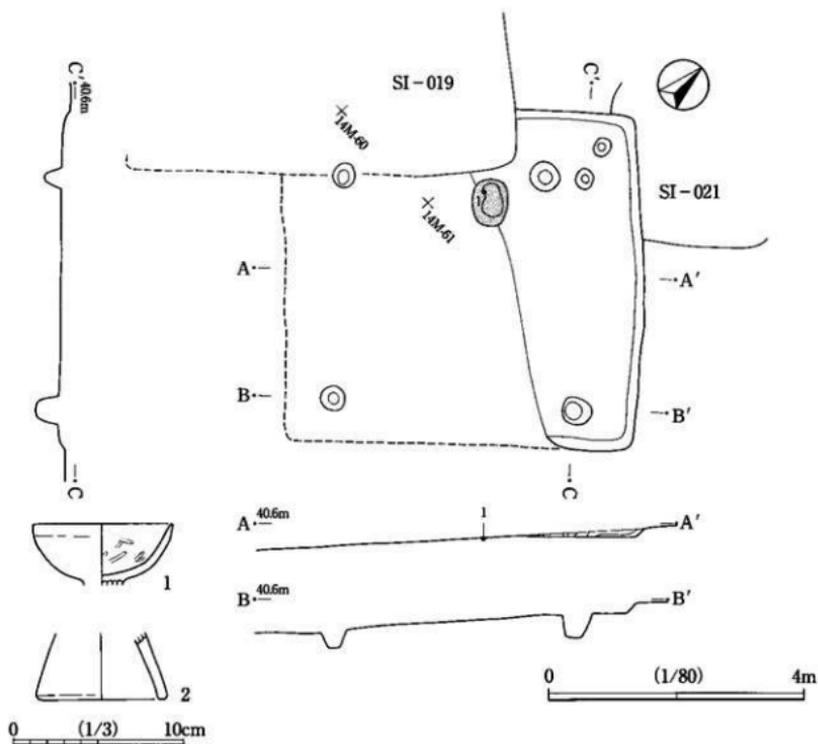
SI-020に切られている。主軸を北西にとり、長径2.9m、短径2.8mの小型の楕円形の住居である。柱穴は計9カ所検出したが主柱穴は確定できなかった。炉は北西辺側のほぼ中央にある。覆土は暗褐色土で、分層はできない。遺物は小片のみで、図示できるものはなかった。



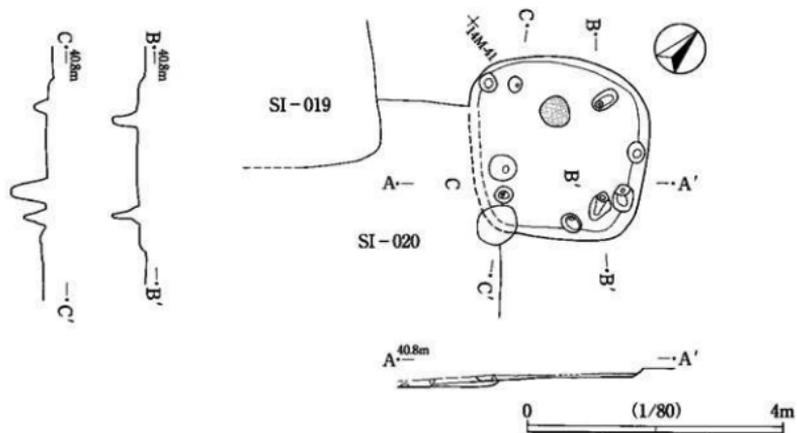
第29图 SI-018



第30圖 SI-019



第31図 SI-020



第32図 SI-021

SI-022 (第33図, 図版11・39)

14 Nグリッド, SM-001の南端部に隣接して位置する。北東側約1/3が調査区域外で未調査である。また, SD-006が遺構南端にかかる。主軸は北西にとり, 径4.5mを測る。平面形は楕円形である。壁高は15cm~20cmが遺存する。覆土は2層に分層でき, 上から褐色土, 明褐色土が堆積する。自然堆積と思われる。炉は北西にあり, 主柱穴4カ所がほぼ対角線上に配置すると思われるが, 調査範囲からは2カ所のみ検出された。炉の対面のピットは入り口施設と思われる。このほか4カ所のピットが検出されたが性格は不明である。

1は甕である。底部を除きほぼ復元できた。7段の輪積み痕を持ち, 最上段は内側にも段を残す。輪積み痕を指頭状のもので, 上から下へ間隔をあけて装飾的にケズリ消している。口唇部は結節の押捺による刻みを施す。内外とも赤褐色を呈する。2は壺の底部である。内外面とも磨きが施される。

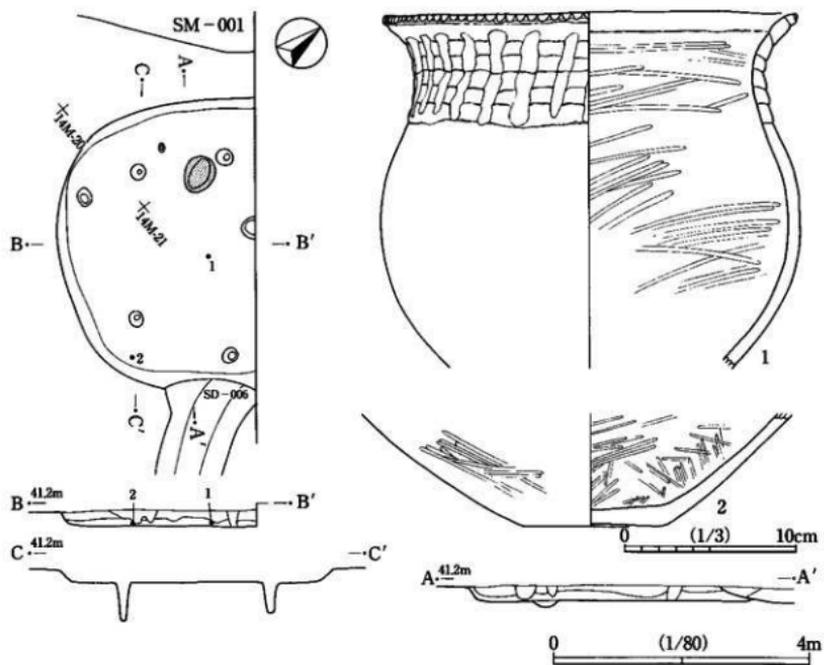
SI-023 (第34図, 図版11・13)

14 Mグリッドのほぼ中央に位置する。SI-018, 031の埋没後に造られている。明確に検出できたのは東辺の一部のみで, 炉と柱穴から範囲を想定した。主軸は北西に振れ, 平面形は径4.7m程度の楕円形と思われる。覆土は暗褐色土で, 分層はできなかった。図示すべき遺物は検出されなかった。

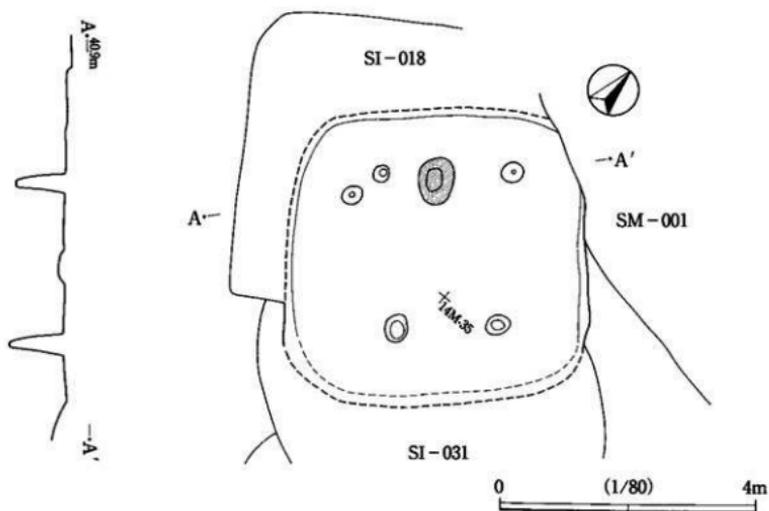
SI-024 (第35・36・37図, 図版11・39・40)

14N-80, 90グリッドに位置する。主軸は北西に振れ, 平面形は長径6.4m, 短径6.0mの楕円形を呈する。南東側の2カ所の柱穴の, 中央寄りには補助的な柱穴と思われるピットを有する。炉は北西側の柱穴の中間にある。また, 炉の対面に入り口施設と思われるピットを有する。入り口施設付近を除いて壁溝が全周する。壁高は北側で4.2cm, 南側で4cmである。柱穴部分を中心に焼土や炭化材が堆積し, 床の硬化部分も焼土化している。火災住居と思われる。覆土は基本的には焼土粒を多く含んだ暗褐色土であるが, 含有の割合などにより数ブロックに分層できる。焼失後, 比較的短時間の間に人為的な埋め戻しが行われたと思われる。遺物は焼土部分を中心に検出されているが, 炉の周辺に特に集中しているようである。

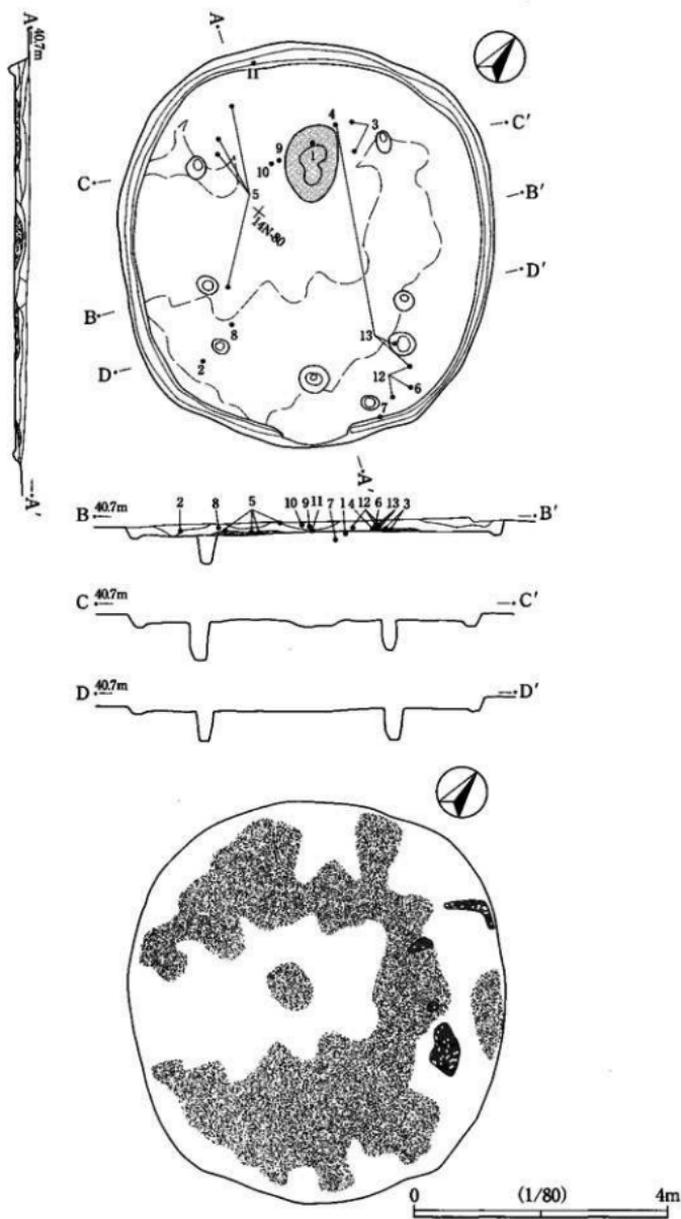
1, 2は甕で, 1は底部を欠く。2は口縁から胴部にかけて約1/4が遺存する。どちらも6段の凸部を横位のヘラケズリし, 所々輪積み痕が消えている。口縁は押捺により波状を呈する。3は胴部2/3が遺存する。胴上部のみに輪積み痕を残し, 内外ともヘラミガキされている。1, 3とも全体に明赤褐色を呈する。4はほぼ完形の甕である。口縁は折り返し, 下端と頸部の輪積み痕上に, 結節の押捺による刻み目を施す。また, 口縁部直下の相対する位置に各1個の穿孔を持つ。5はやや小型の壺の胴部から下で, ヘラナデ後磨かれている。7は小型の無頸壺型鉢である。内外面ともよく磨かれている。ほぼ完形である。8は体部が直線的に開く小型の鉢で, 1/2が遺存する。9は鉢型のミニチュア土器である。手捏ねの後, ヘラケズリで調整する。口縁部が水平に近く外反し, 口唇部端にヘラ状工具により刻み目を施す。10は器台である。台形で上面に穿孔を持つ。上面を指頭状のもので強くなでているため, 穿孔の周囲と肩部がやや突出する。胴部内側には輪積み痕が残る。外面は赤褐色を呈する。11は壺口縁部約1/4の破片である。口縁は直線的に開き, 折り返し口縁の口唇部に斜縄文を, 下端にヘラ状工具により刻み目を施す。内外面ともよく磨かれ, 赤彩が施される。折り返しの厚さや刻み目の大きさが不揃いで粗雑な



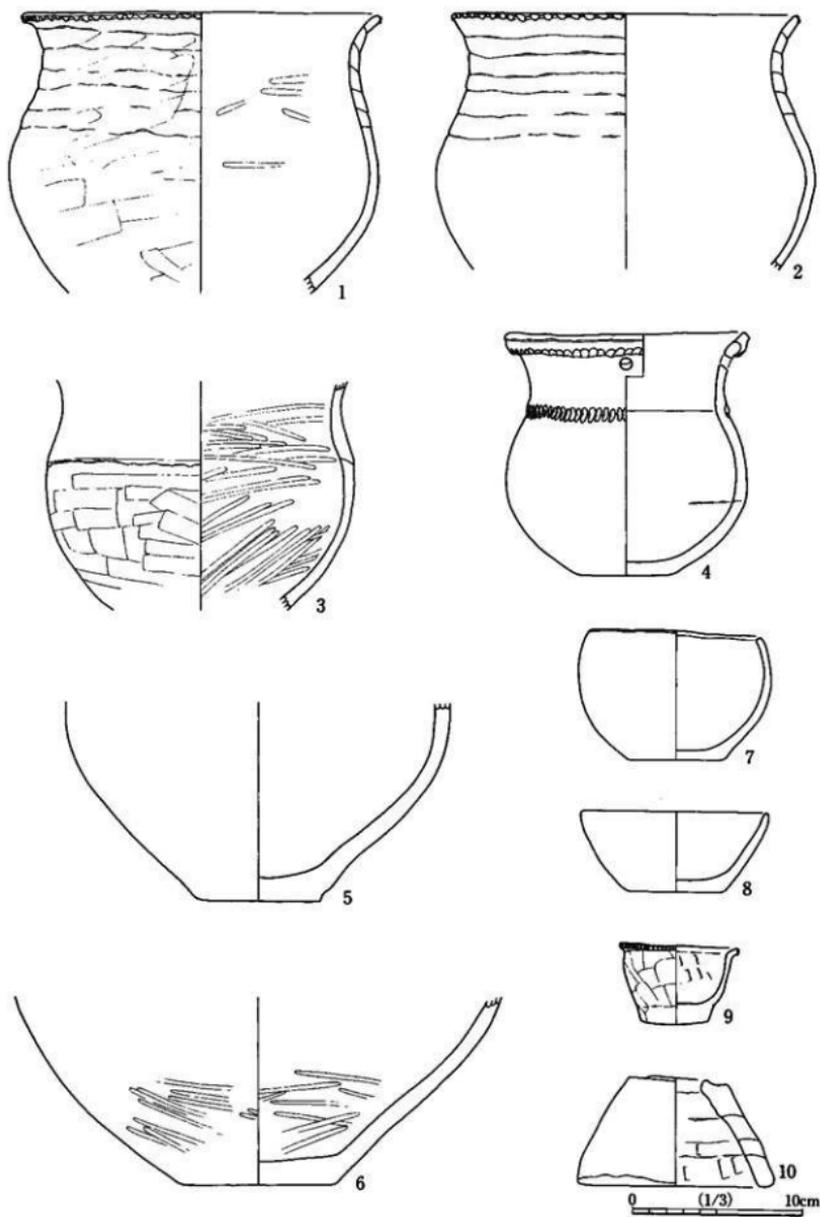
第33图 SI-022



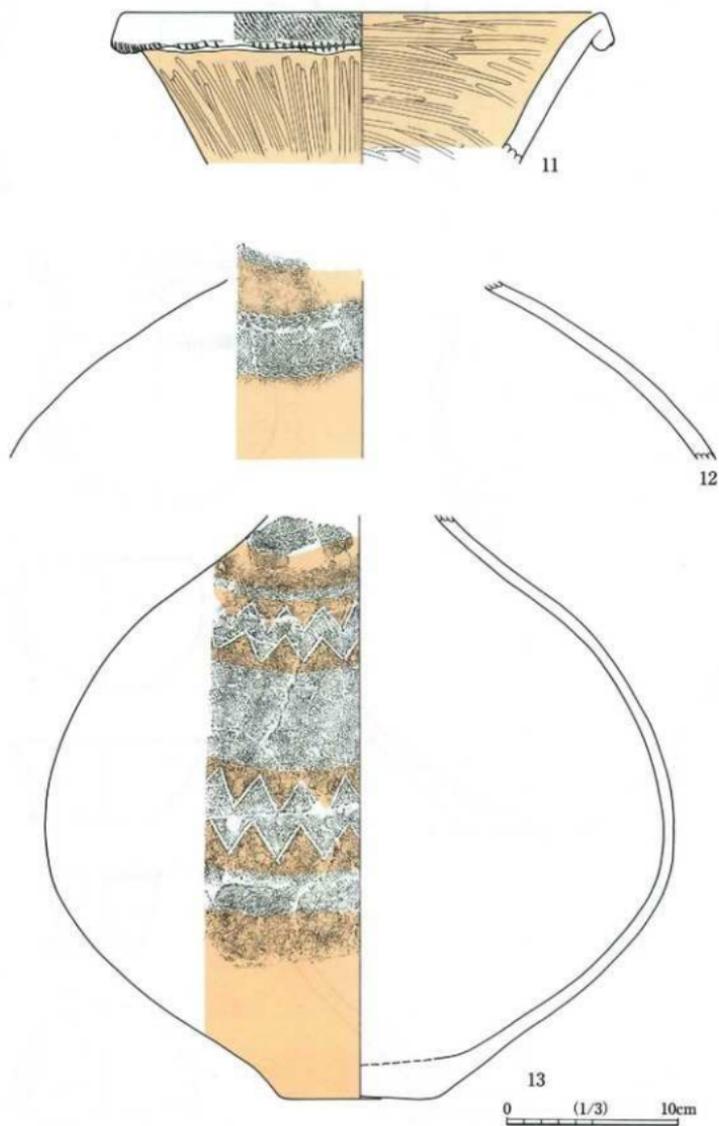
第34图 SI-023



第35图 SI-024・焼土・炭化材出土状況



第36图 SI-024 出土遺物(1)



第37圖 SI-024 出土遺物(2)

印象だが磨きは丁寧に施されている。12は甕の胴上部破片約1/2である。頸部に2条以上のS字結節文。その下方に無文帯をはさんで、S字結節文各3条で上下を区画された付加条第2種の付加条縄文を羽状に施す。接合しないが、胴下半部の同一個体破片があり、外面が赤彩されている。13は壺胴部をほぼ復元できた。頸部から胴最大部まで文様が施される。文様はS字結節文、羽状の付加条第2種の付加条縄文、付加条縄文上に、沈線による山形文が繰り返され、山形文で区画された部分は鋸歯状に磨り消されている。胴部全面が赤彩されるほか、文様部分も部分的に赤彩される。

#### SI-025 (第38図、図版12・40)

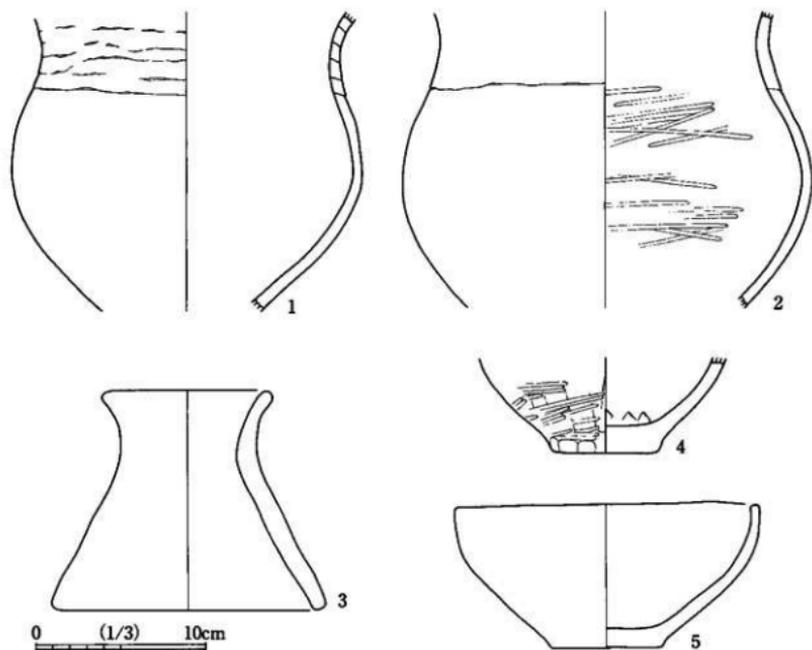
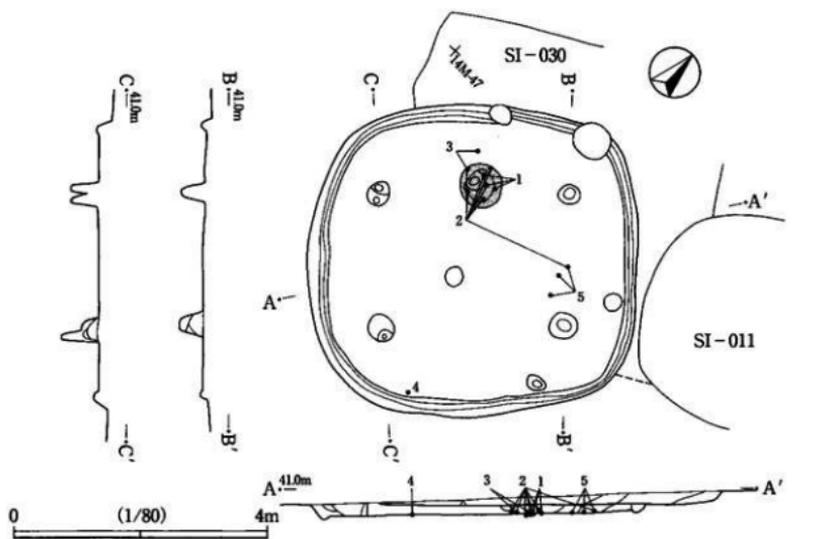
SI-024の北西に隣接して位置する。SI-030により遺構上部を損なう。主軸は北西に振れ、平面形は長径5.2m、短径5.0mの楕円形を呈する。壁溝が全周する。主柱穴4カ所はほぼ対角線上に位置し、炬は北西側の柱穴の中間にある。また、炬の対面に入り口施設と思われるピットを有する。壁高は重複のない南西側で19cmを測る。覆土は褐色土で壁際はローム粒の含まれる量が増す。自然堆積と思われる。遺物は炬周辺と南東柱穴付近でまとまって検出された。

1は頸部に5段以上の輪積み痕をもつ甕である。口縁と底部を欠く。輪積み痕は最下段を残して他は不完全にナゲ消している。2は胴上部のみに輪積み痕を残す。内側はヘラナデのあと散漫に磨かれる。1、2とも全体に赤褐色を呈する。3は器台である。約1/4が遺存する。くびれ部が上から1/4の位置にあり、受部が下部に比べ小さい。上下端の摩耗が激しい。4は小形の甕の底部と思われる。上から下へヘラケズリのあと、横位に磨かれている。5は鉢である。無文で体部が大きく開く。口縁がやや内湾し、口唇部を平らに造る。内外面ともよく磨かれている。

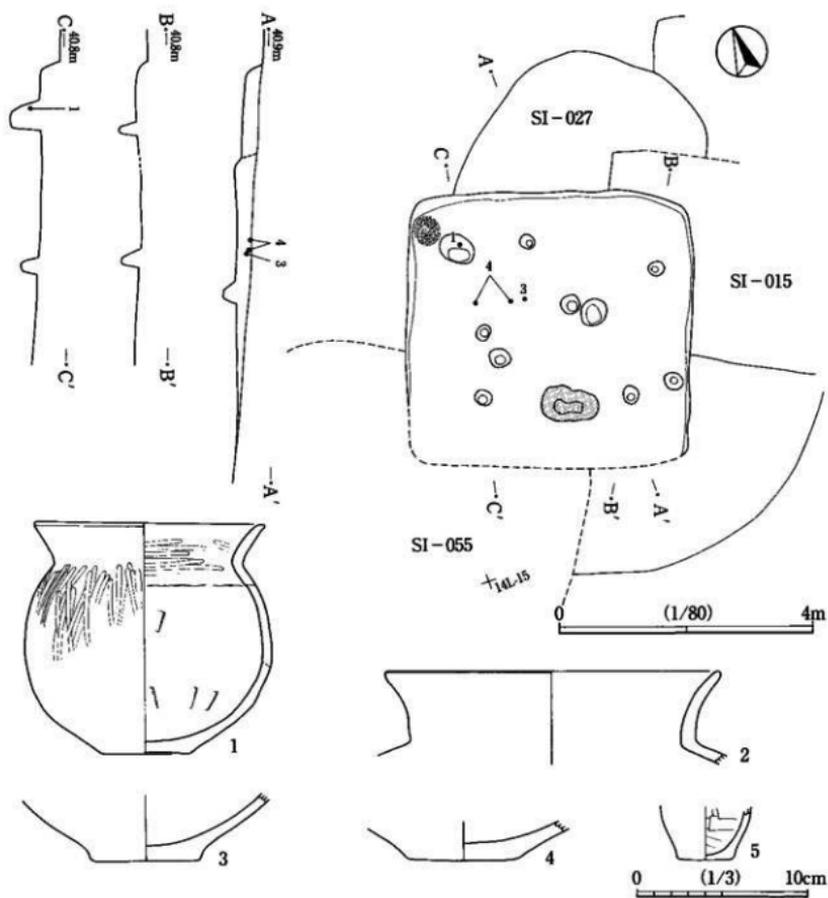
#### SI-026 (第39図、図版6・12・40)

13L～14Lグリッドにまたがって位置する。SI-005、027の埋没後に造られる。SI-015によって東隅上部を損なう。主軸は南北からやや東へ振れる。平面形は一辺4.5mの隅丸方形を呈する。炬は南辺寄りの中央にある。計10カ所のピットを有するが、炬両側のピット2カ所以外に明瞭に主柱穴と推定できるものはない。深さはいずれも23cm～30cmである。覆土は暗褐色土で、SI-027の覆土と分離しがたい。遺物は床面よりやや上で検出されているが、1のみ北西隅のピット中から完形で出土した。このピットと壁の間に粘土塊がみられた。

1は小型の甕である。胴部が球状で、頸部がくの字に屈曲する。外面と内面の口縁部内側が磨かれる。頸部内側に接合痕が残る。2は甕の頸部である。未接合の同一個体片を含めると口縁部の約1/2が遺存する。頸部は屈曲してやや柱状に立ち上がり、口縁は外反する。3、4は甕の底部である。3は底部がやや突出する。4は底部端からすぐに横へ広がる。どちらもヘラケズリ調整である。5はミニチュア土器の胴部から底部の一部である。甕形で内部にヘラによるヨコナデが残る。



第38图 SI-025



第39圖 SI-026

SI-027 (第40図, 図版6・12)

13 L~14 Lグリッドにまたがって位置する。SI-009, 015, 026によって遺構上部を損なう。主軸は北西に振れ、平面形は径約3.7mの楕円形を呈する。支柱穴4カ所はほぼ対角線上にあるが、北側ではやや東へ寄り、2つのピットからなる。炉は北西側の柱穴の中間にある。壁高は東側で28cmを測る。覆土は暗褐色土で床面直上では焼土を含む。

数点の遺物を検出したが、本遺構のものとして図示できるものはなかった。

SI-028 (第41図, 図版13)

14 Mグリッドのほぼ中央部に位置する。SI-031によって北側約2分の1を損なう。直径3.4mの楕円形を呈する竪穴と、周囲のピットからなる。壁は比較的垂直に掘り込まれ、壁高は東側で30cm、西側で20cmを測る。竪穴内部には炉、柱穴等は確認できなかった。ピットは遺存する範囲で8カ所がほぼ等間隔で竪穴を取り囲む。復元すると12カ所のピットが均等に並ぶものと思われる。深さはいずれも40cm前後で、上端より下端が外側にある。その下端の中央はいずれも外周から30cmの距離をとる。周囲から桁上の材を遺構中央に向かって斜めに建て、竪穴の中央上部で一束にしたものであろう。

図示できた遺物は1点のみである。1は壺の底部である。小さめの底部がわずかに突出し、胴部が横に大きく広がるタイプであろう。このほかに、図示しなかったが大形壺の胴部の無文の破片が出土している。

SI-029 (第42図, 図版6・13)

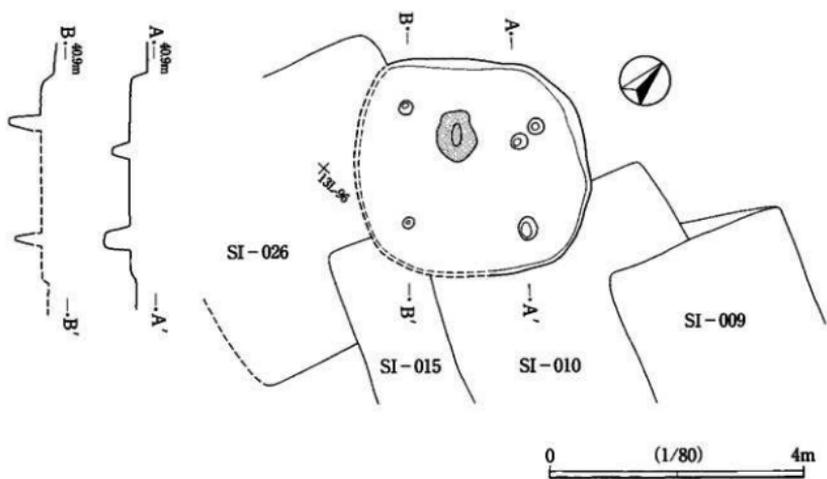
14 Lグリッドのほぼ中央部に位置する。SD-008によって北東部分を削平される。主軸は北西に振れ、平面形は長径6.0m、短径5.2mの楕円形を呈すると思われる。壁高は遺存度のよい北西側で44cm、南東側では23cmを測る。覆土は褐色土で壁際はローム粒の含まれる量が増す。自然堆積と思われる。対角線上に支柱穴4カ所を配し、炉は北西側の柱穴の中間にある。炉の対面に入り口施設と思われるピットを有する。遺物は主に炉の周辺から出土した。いずれも小片である。

1は高坏の坏部口縁の1/4弱である。薄手で大きく碗型に開く。2は壺の口縁片である。受け口状の折り返し口縁で、折り返し部に斜縄文を施し、1単位7条の縦沈線を付す。下端は結節の押捺により刻み目をつけている。内面が赤彩されている。3は小型壺の底部である。

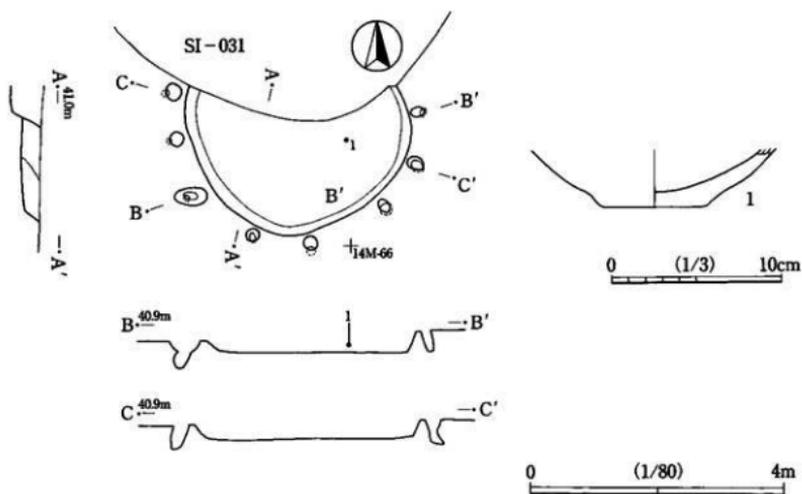
SI-030 (第43図, 図版14・40)

SM-001の南に接して位置する。SI-025, 011の埋没後に造られる。主軸は北西にとり、推定で一辺5.0mほどのほぼ方形の平面形を呈する。炉は北西の柱穴間のやや東寄りに位置する。対角線上に支柱穴4カ所を配し、炉は北西側柱穴の間、やや東よりにある。壁高は遺存度のよい北側で20cm程度である。覆土は暗褐色土で、壁際はややロームの混入が割合多い。自然埋没と思われる。遺物はごく僅かである。

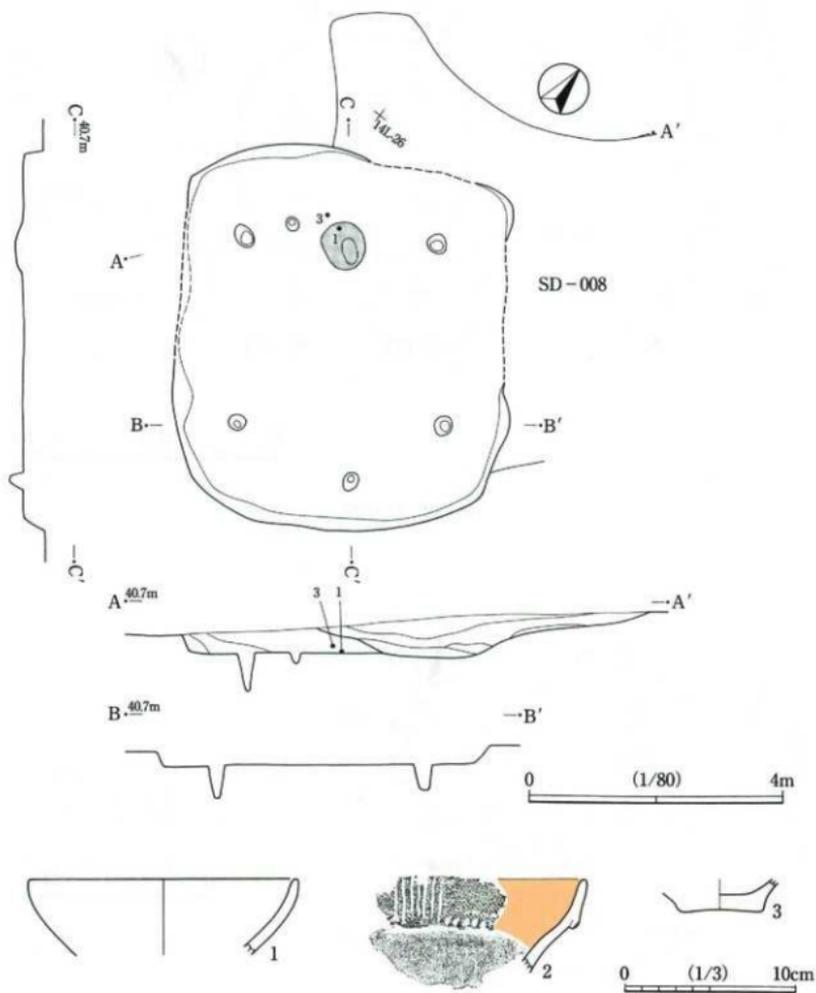
1は器台の脚部約1/2である。台形に開き外面はヘラケズリで整形の後、縦位に磨かれる。内面は横位のヘラケズリの痕跡が残る。



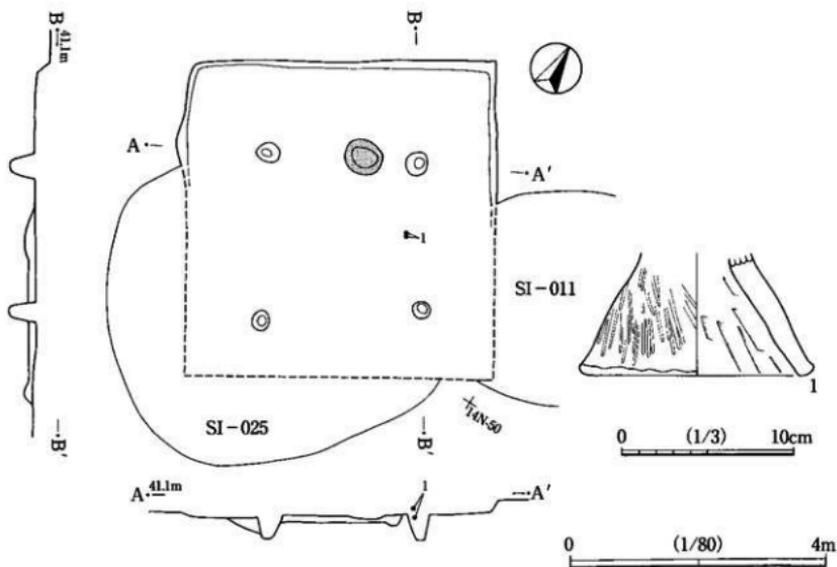
第40图 SI-027



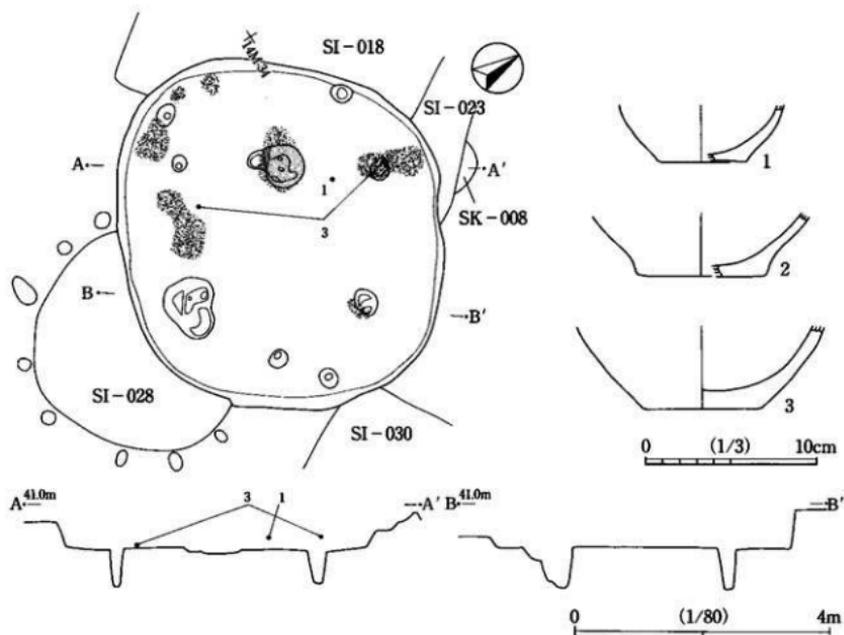
第41图 SI-028



第42図 SI-029



第43图 SI-030



第44图 SI-031

SI-031 (第44図, 図版14)

SI-030の北西に隣接して位置する。SI-028の埋没後に造られる。また、北西部をSI-018によって損なう。主軸は北西にとり、長軸は5.6m、短軸は5.0mだが、北西辺がやや長い楕円形の平面形を呈する。ほぼ対角線上に主柱穴4カ所を配し、炉は北西側柱穴の間にある。このほか北西辺の両隅に近く2カ所ずつと、南東辺に2カ所、小ピットを有す。南東辺のものは入り口施設であろう。壁高は北東側で63cm、南西側で38cmを測る。覆土は暗褐色土で、ロームブロックの混入割合などによって2～3層に分層できる。レンズ状の堆積で自然埋没と思われる。炉と両側の柱穴周辺を中心に焼土の堆積がみられるが、火災住居とするほど多くはない。遺物は少量で、図示したものは炉を中心とした付近から出土している。

1, 2, 3はいずれも小型の寛の底部である。1, 2は内側底部がヘラ状の工具で掘り込むように整形され、底部の厚みが薄くなっている。1はその後、底部縁まで丁寧に整形され磨かれている。3は赤褐色を呈する。

SI-032, SI-034 (第45・46図, 図版13・14・15)

14M・15Mグリッドにまたがって位置する。SI-032はSI-034を1m～1.4m外側に拡張した形で造られ、SI-032の方がわずかに浅い。炉の方向は90度異なるものの、平面形も相似であるところから、SI-034を拡張したものと思われる。

SI-034は主軸を北西にとり長軸3.9m、短軸3.7mの方形の平面形を呈する。ほぼ対角線上に主柱穴4カ所を持つ。炉は北西側の柱穴の間やや西寄りに位置し、対面に入り口施設と思われるピットを有する。また、炉の北側に接して、深さ26cmの小ピットを有す。遺物の内、出土状況から明確にSI-034から出土したものは1点のみであり、拡張以後に埋没した可能性も捨てきれない。時期的にもほとんど違いがない。

1は炉中から検出された。高坏の脚部接合部付近である。接合部はあまり厚くなく坏部は大きく広がる。外面は縦位の磨きを施している。透かし穴は3カ所である。

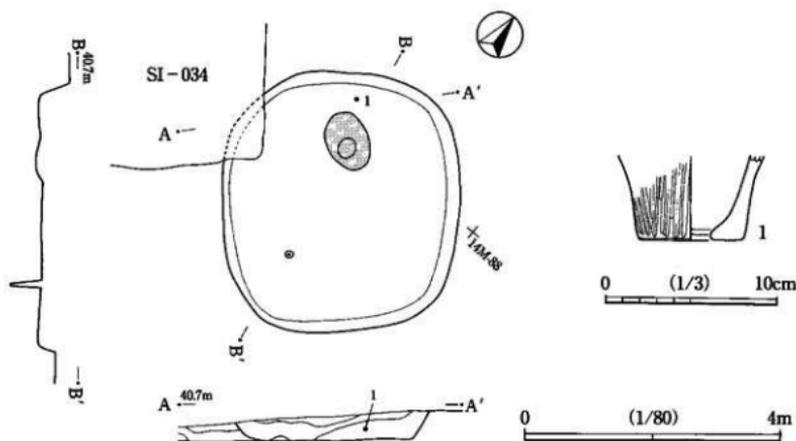
SI-032は主軸を南西にとり長軸6.5m、短軸6.0mの方形の平面形を呈する。主柱穴は対角線上のSI-034の隅の外側の位置にあり、炉は南西辺中央に位置する。壁溝が全周する。東隅から北西辺にかけて主柱穴以外に6カ所のピットが散在するが性格は不明である。炉の部分を中心に、焼土や炭化材片が出土している。分布の状態から住居構造が燃えたものと思われる。覆土は褐色土である。ローム粒の量により数ブロックに分層することが可能で、焼失後比較的短時間の間に埋め戻されたと考えられる。

1は高坏の坏部片である。薄手で、大きく碗型に開く。2は小型の鉢の小片である。底部は小さく、口縁が短く外反する。下端部外面はヘラ削りされる。内面はよく磨かれている。



SI-033 (第47図, 図版15)

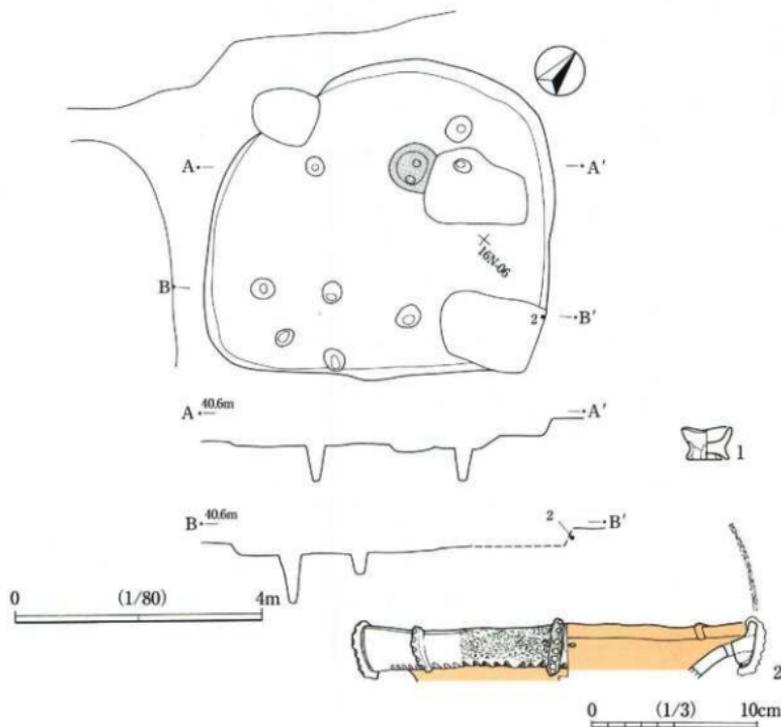
北西辺側でSI-034に切られている。削平されて南東側中央部を欠く。平面形は長径4.1m、短径3.8mの楕円形を呈し、北西辺寄りに炉を持つ。壁高は北東側で41cm、南西側で29cmを測る。ピットは南隅寄りの径10cm、深さ51cmのもの1カ所のみである。柱穴とするにはやや小さく、性格は不明である。覆土は上から褐色土、暗褐色土、ローム粒を含む暗褐色土に分層でき、レンズ状の堆積から自然埋没と思われる。遺物は炉の北側で検出された1点を除いて、あとは小片である。1は弥生土器の蓋で底部中央を穿孔し平坦に整形されている。内外面は丁寧に縦位の磨きが施される。特殊な瓶の可能性がある。



第47図 SI-033

16 N・05・15に位置する。SI-037が西側に隣接する。主軸は北西にとり、南東辺で5.6m、北東辺で5.2mをはかり、北東から南西にかけては円弧状を描き、四半円のような形状を呈する。壁高はもともと残りのよい北東側で約30cmである。遺構内に3カ所に攪乱を受けている。炬は北西辺寄りであり炬をはさんだ2カ所と、南東側に対する1カ所のピットが柱穴と思われる。炬の対面のピットは入り口施設であろう。このほか5カ所のピットがあるが性格は不明である。遺物はどちらも攪乱土層中からの出土で、必ずしも本遺構のものとはいきれない。

1はミニチュア土器である。高坏であろうか、手づくねの後、接合部をヘラ状の工具で整形する。2は壺の口縁部で、内外面ともによく磨かれ、赤彩されている。口唇部には1条、折り返し部には3条の二重結びの結節文を施し、下端は結節の押捺により刻み目をつけている。また、同じく結節の押捺による刻みのある棒状浮文一本を付す。確認できたのは2単位であるが、間隔から8単位になると思われる。このうち1カ所の棒状浮文の内側、口縁の折り返し部の直下に2個一組の穿孔がある。これ以外にも、小片で図示できないが、棒状浮文の付いた壺片や器台片が見られた。

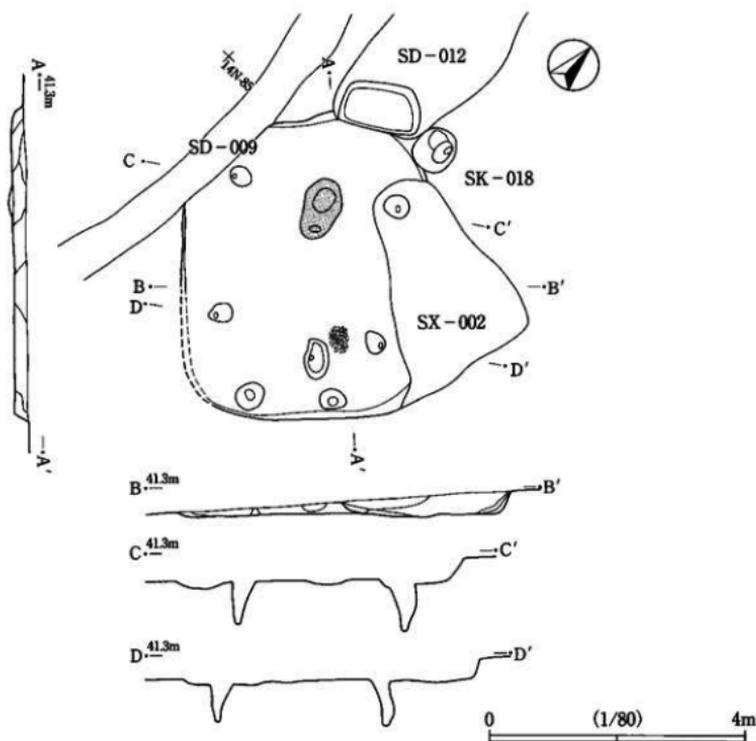


第48図 SI-035

SI-036 (第49図, 図版16)

14 N・15 Nグリッドにまたがって位置する。西側にSD-009が、中央北側にSD-012、北東部にSX-002が重複する。主軸を北西にとる楕円形の平面形で、対角線上に4カ所の支柱穴を設ける。北西側の柱穴の間に炉があり、炉の対面に1カ所ピットがあり、南東辺に接する2カ所とともに入り口施設と思われる。炉対面のピット北側には粘土塊がみられる。覆土は上から暗褐色土、ローム粒を含む暗褐色土、褐色土、明褐色土に分層でき、レンズ状の堆積から自然埋没と思われる。

遺物は小片のみで図示できるものはなかったが、壺に使用されていたと思われる円形浮文や棒状浮文、輪積み装飾のある甕の小片が出土している。



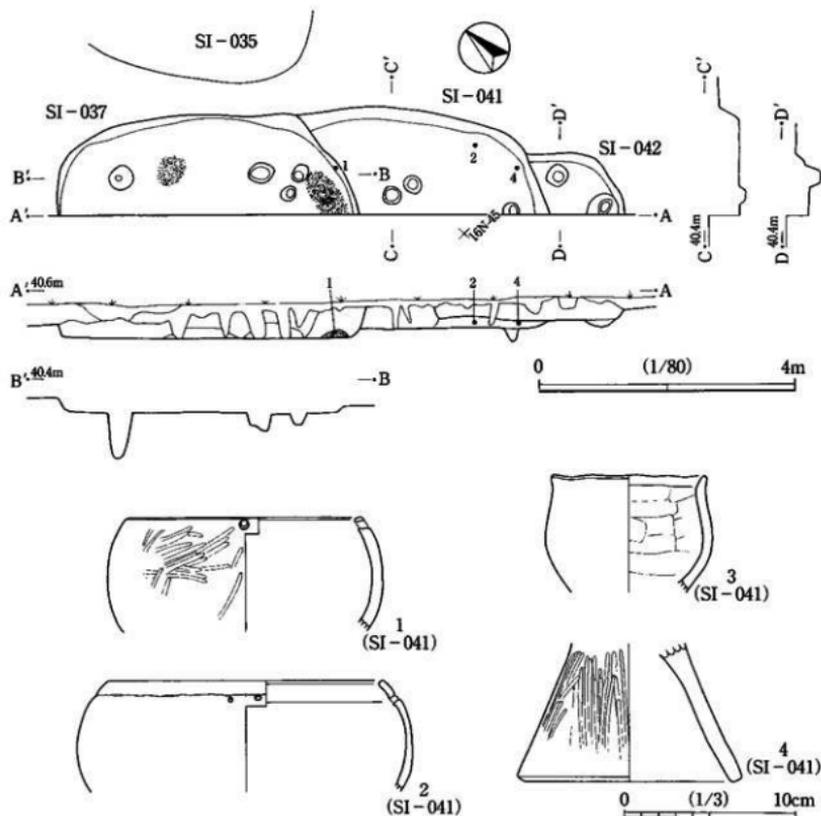
第49図 SI-036

SI-037, SI-041, SI-042 (第50図, 図版16・40)

16 Nグリッドのはほぼ中央に位置する。いずれも遺構の大半が調査区域外にあり, 1/4程度が調査できたのみである。土層断面の観察によると SI-041 埋没後に SI-037, SI-042 が構築されている。

SI-037 は柱穴 2 カ所を含むピット 4 カ所を検出した。主軸を北西にとる楕円形の平面形であろう。覆土は色調から明褐色土と暗褐色土のほぼ 2 層に分層できる。また, 柱穴の間と南東隅の床面に焼土と炭化材を検出した。いわゆる火災住居と考えるには量的に少なく, 人為的な埋め戻しの痕跡も見あたらない。

SI-041 も楕円形を呈すると考えられる。ピットは 3 カ所が確認されたが, 性格について判断する材料に乏しい。覆土は褐色土である。SI-042 との重複部分では強く締まった暗褐色土が観察できた。SI-042 構築時に踏み固められた床面と考えられる。



第50図 SI-037・041・042

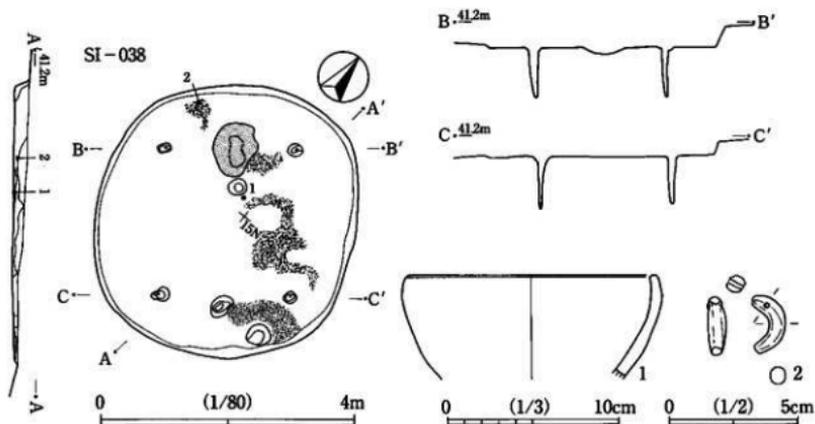
SI-042は幅0.85m、長さは重複部分を推計しても2.8mほどしか検出できず、主軸方向や平面形、柱穴等は推定しがたい。ピット2カ所を確認した。

図示した遺物はいずれもSI-041に属す小片のみである。1、2は無頸壺型の鉢の口縁の一部である。1は素口縁で口唇を水平に造る。口唇近くに穿孔1カ所を持つ。内外面ともよく磨かれている。2は口縁を折り返して、端部直下に2個一組の穿孔がつけられる。3は小型の甕である。口縁は短く外反する。外面はよく磨かれ、内面はヘラ状工具による横位のナアののちみがかれている。4は器台で上部を欠く。外面は丁寧に縦位のミガキが施される。上部は台形になり穿孔を有すると思われる。

SI-038 (第51図, 図版13・16・45)

15 N・150 グリッドにまたがり、SD-011の北側に位置する。長径4.4m、短径4.2mの楕円形の平面形を呈する。壁高は遺存度のよい北東側で30cmである。対角線上に4カ所の主柱穴を設ける。炉は北西側柱穴の間にあり、炉の反対側の壁際には入り口施設と思われるピットがある。北西の柱穴から南東の柱穴付近にかけて、床面上に焼土の堆積がみられる。また、南東端のピットは径30cm、深さ20cmで周辺に粘土の固まりが半円状にみられる。覆土は上層から褐色土、黒褐色土の2層に分層できる。検出された遺物はごく僅かである。

1は鉢の口縁の一部である。素口縁でやや内湾する。内外面ともよく磨かれている。2は土製勾玉である。北西辺よりの焼土中から出土した。



第51図 SI-038

SI-039 (第52図, 図版17・40・45)

150グリッドのほぼ中央, SD-011の北側に隣接して位置する。SI-045埋没後に造られる。主軸は北西にとる。壁高は最も遺存度のよい北西部で5cm程度である。平面形は楕円形で、対角線上に4カ所の主柱穴と南東端に入り口施設と思われるピットを持つ。炉は北西側柱穴の間、やや内側に位置する。覆土はローム小ブロックを少量含む暗褐色土で、分層はできなかった。遺物は炉の周辺でまとも検出された。

1, 2はいずれも胴上部に輪積みの段を持つ甕胴部破片である。1は輪積み下端を指頭状のもので軽く押さえ、各段の上はハケ調整される。2は口縁端部に結節を押し込んでいる。3は完形の無頸壺型の鉢である。口唇部は平らに造り口縁を折り返して端部に結節による刻みを施す。折り返しの直下に2個一組の穿孔が、相対する位置に2組あけられる。乾燥途中に生じたと思われるひび割れを丹念に補修して使用している。4は台形土器で、胴の一部を欠くが上部は平らに整形され中央に穿孔を持つ。下端は折り返して、折り返しの上端に角棒状工具により刻み目を施す。5は弥生土器の壺を再利用した器台である。下端を欠くが口径と底径がほぼ同じで中央がくびれるタイプである。丹念な磨きが施されている。6は土製品と思われる、つまみ状を呈している。下端に破断面があり、周囲に細かい縄文が施されている。

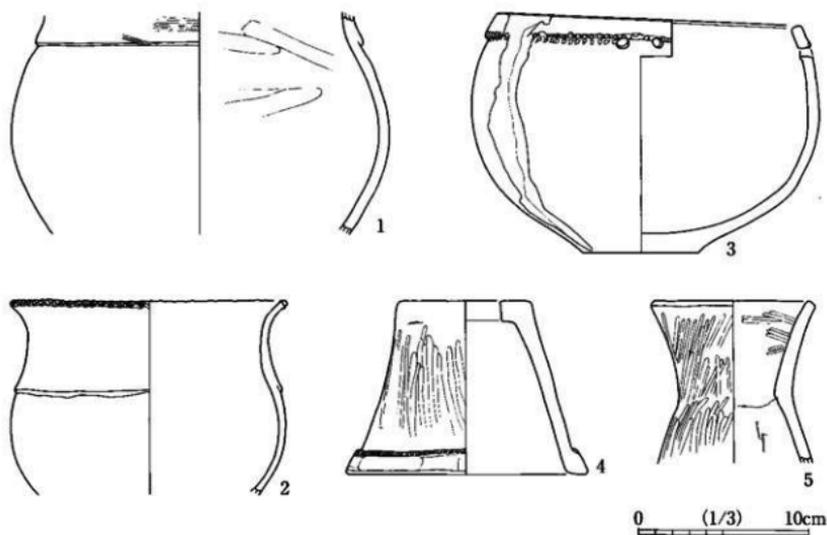
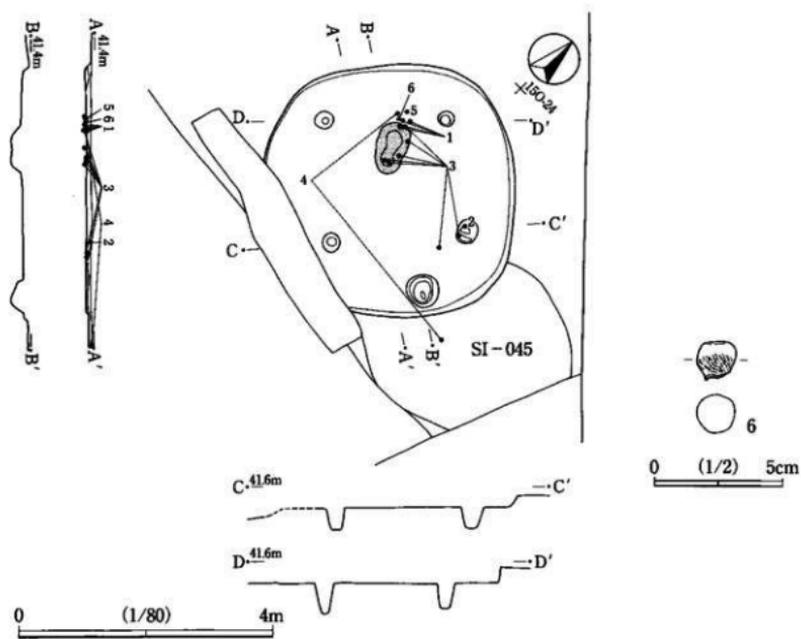
SI-040 (第53図, 図版17・40)

150グリッドのほぼ中央, SD-011の南側に接して位置する。SM-002と、SD-011, 016, SI-049により外周を損ない、壁が検出できたのは南側のみである。壁高5cm程度である。主軸を南北からやや西に振ると考えられる。炉は北西側にあり、SD-011が重複するため一部が残存するのみである。主柱穴4カ所と、副柱穴と思われる3カ所のピットを有する。柱穴に囲まれた遺構中央部には焼土と炭化材の出土をみた。遺物もこの焼土の下からの2個体のみで、遺構の焼失や廃棄儀礼が想定される。

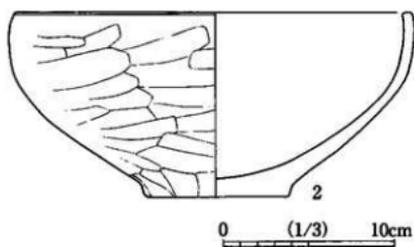
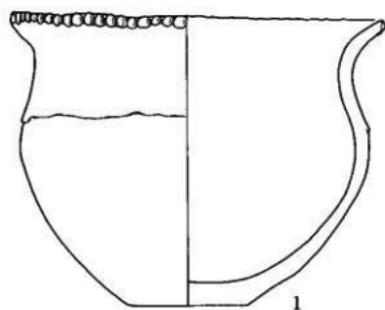
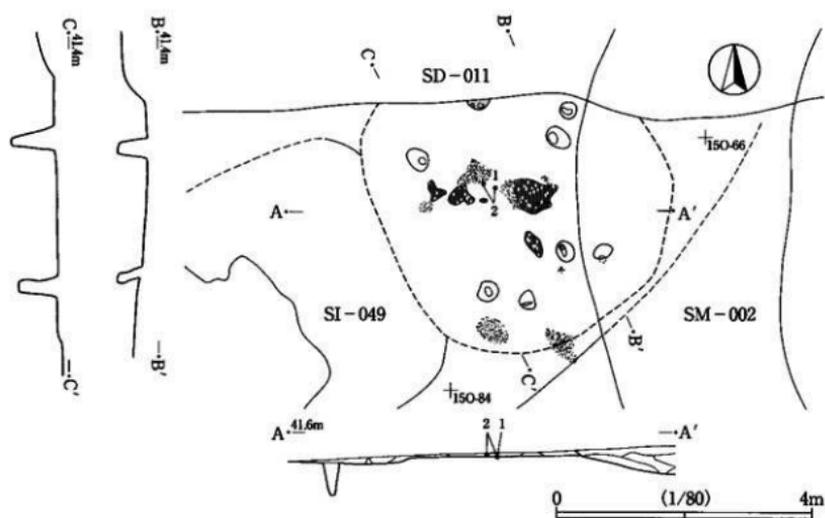
1は胴上部に輪積みの段を持つほぼ完形の甕である。口径が胴最大径より大きい。口縁端部が結節により波状に押し込められている。外面は赤褐色を呈する。2は鉢である。口唇は平らに調整しようと試みているが粗雑である。外面は丁寧なヘラケズリ、内面はミガキが施される。底部が小さく突出し、口縁がやや内湾する。

SI-043 (第54図, 図版17)

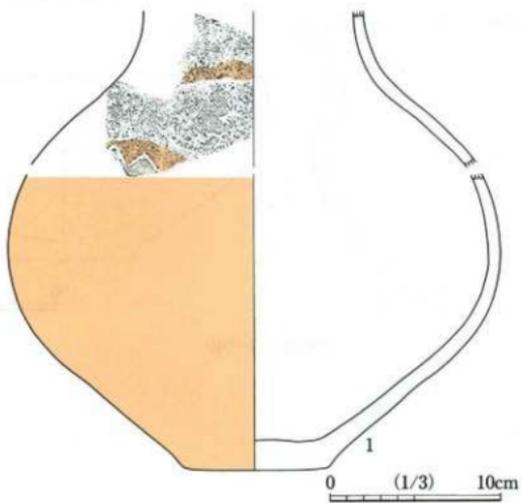
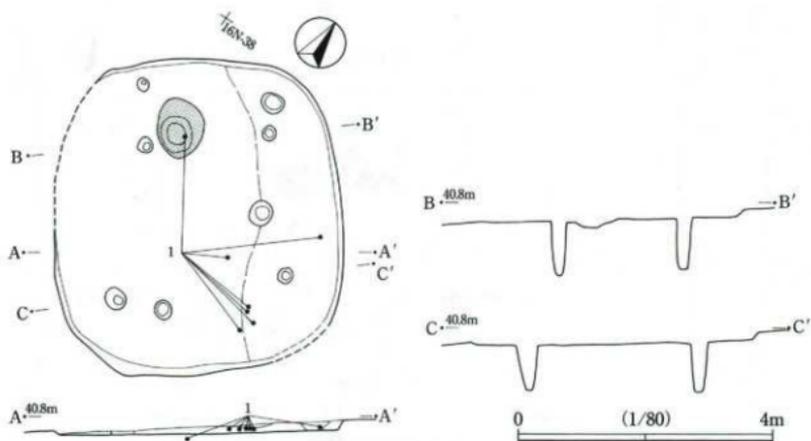
16N-59付近に位置する。平面形は楕円形で主軸は北西にとる。対角線上に主柱穴4カ所を設ける。北西側の柱穴の間、西寄りに炉が位置する。北東側柱穴のやや内側から北東辺までの間が、ごく僅かであるがテラス状に高く造られている。段差、規模などは明瞭ではないがいわゆる「ベット状遺構」と思われる。北東側中央のピットもこれに関係するものであろう。覆土は暗褐色土であるが、分層はできなかった。遺物は北西端と、南東端にまとも出土した。1は南東端で検出された。接合カ所はなかったが、図上で復元することができた。頸部から肩部にかけてS字結節文に上下を区画された羽状縄文が無文部をはさんで2段、その下は羽状縄文上に沈線で山形文が施されている。胴下半部は赤彩が良好に残るが、上部は器面の剥落が激しく赤彩は部分的に確認されたのみである。このほか、北西端で胴上部に輪積み段を持つ甕の破片が検出されたが図示に至らなかった。



第52图 SI-039



第53図 SI-049



第54图 SI-043

SI-044 (第55図, 図版18・40・41)

16N・16Oグリッドにまたがって位置する。北側がSI-051と重複する。平面形は楕円形と隅丸方形の中間型で、主軸は北西にとる。対角線上に主柱穴4カ所を設ける。北西側の柱穴の間に炉が位置する。また、炉の反対側に入り口施設と思われるピット1カ所を検出した。このほか、西辺、北辺、北西柱穴脇にそれぞれピットを検出したが用途は不明である。主柱穴の間は踏み固められて床面が硬化している。また、遺構全体の床面直上に焼土や炭化材の堆積がみられ、火災住居と思われる。覆土はこの焼土の上を暗褐色土が覆うが、人工的な埋め戻しであるかは判断できなかった。遺物は炉の周辺と、南東側の柱穴付近で検出された。

1は鉢の胴部1/2である。体部は直線的に開く。口縁を折り返し、下端に結節による刻み目を施している。内部はよく磨かれている。外面は明赤褐色を呈する。2は胴上部に輪積み痕を残した甕、底部と口縁を欠く。明赤褐色を呈する。3は壺の口縁の一部である。折り返し部に羽状縄文、下端に縄文による刻み目を施す。その上に各1本、縄文による刻み目のある棒状浮文を貼り付けている。四単位となろう。4は鉢であろう。口縁はやや内湾し、口唇は平らにつくる。5、6は器台である。5は中央よりやや上でくびれ、上部がやや小さい形状である。口縁部は折り返してある。6も同様の形であろうが、くびれより上を欠く。

SI-045 (第56図, 図版18・45)

15Oグリッドのほぼ中央、SD-011の北側に隣接して位置する。北西側をSI-039に、南半分をSM-002と、SD-011によって損なう。主軸は北東にとる。遺存部分のほぼ中央に炉と、柱穴2カ所、やや南東にピット1カ所を確認した。これは位置から主柱穴とは考えがたく、遺構の範囲自体も楕円形に南東方向に広がっていたと思われる。覆土は暗褐色土であるが、遺存する壁高が5cm～6cmと浅く、SI-039との新旧関係も土層断面では観察できなかった。

1は鉢、2は壺の底部と思われる。ミガキが施されている。3は土製勾玉である。遺構北辺から検出された。

SI-046 (第57図, 図版18・41)

15P-80付近に位置する。SD-014端部が南端にかかる。平面形は楕円形で、主軸を南北から僅かに西へ振る。主柱穴4カ所と、やや北寄りに炉、炉の対面に遺構の中心から外側へ傾く形状のピットを検出した。入り口施設と思われる。覆土は暗褐色土で、遺構縁辺部ではロームブロックを含む層が分層できる。自然堆積と思われる。遺物は覆土上部で散見するのみであった。

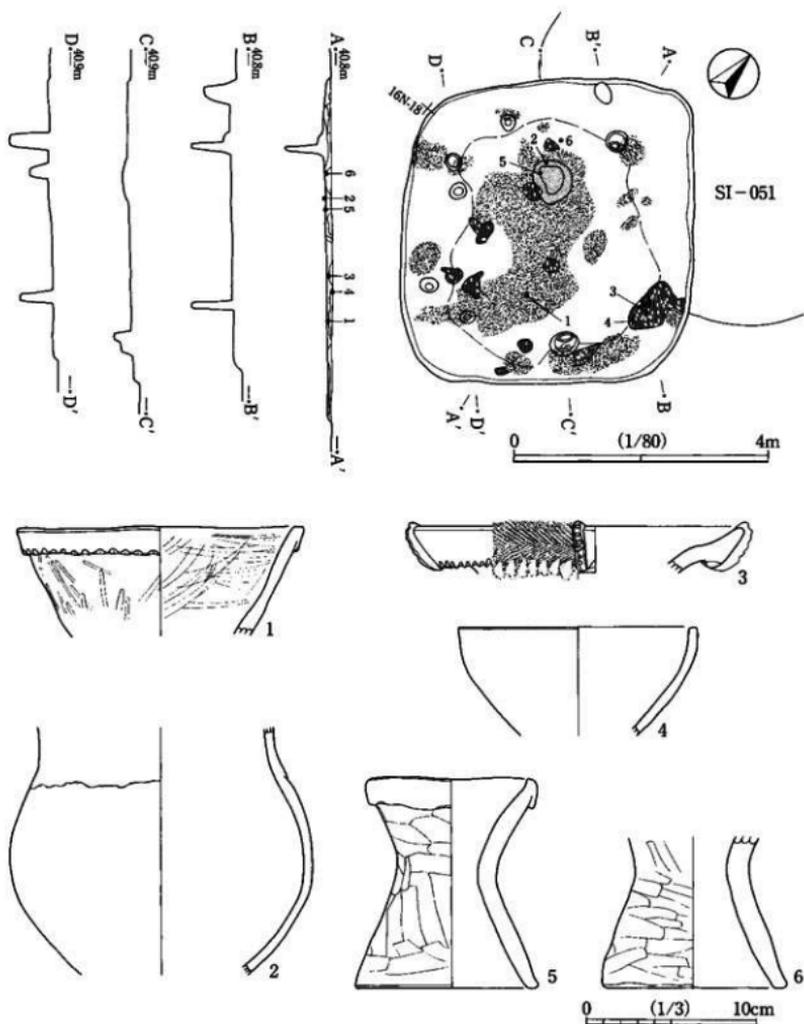
1は甕の胴部下半である。外面はヘラケズリされ、にぶい赤褐色を呈する。

SI-047 (第58図, 図版19・41)

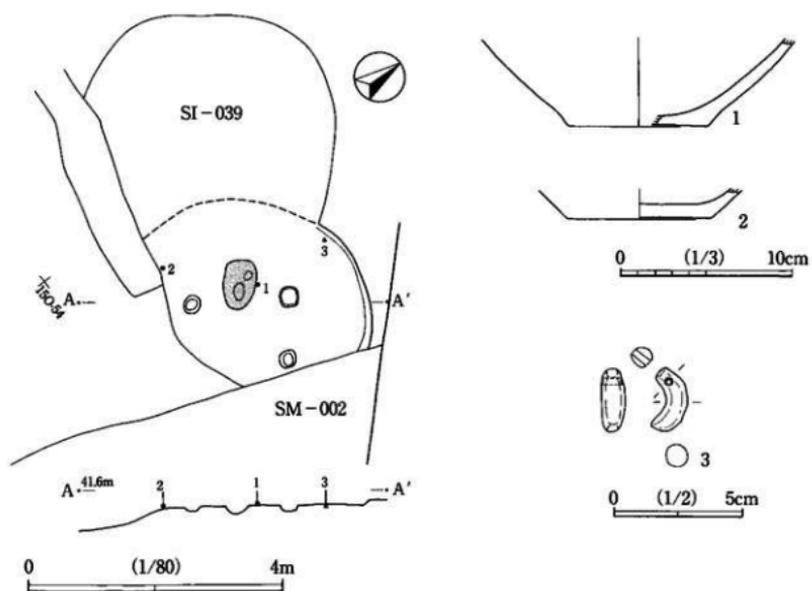
SI-046の西約2mに位置する。耕作と、SM-002構築の際の削平により南半分は壁を検出できなかった。平面形は東西に長い楕円形で、中央やや西寄りに炉を有し壁に沿って11カ所の柱穴がほぼ均等に並ぶ。覆土は上方が暗褐色土、下層がローム粒を大量に含む褐色土と2層に分層でき、自然堆積と考えられる。遺物は炉周辺を中心に検出された。

1は無頸の広口壺であろうか。壺頸部を切り落としたような形状で、口唇部の内外を横位のヘラケズリで調整し、内側はさらに丁寧に磨いている。2は壺の胴上部約2/3である。羽状縄文帯の上下を3条の

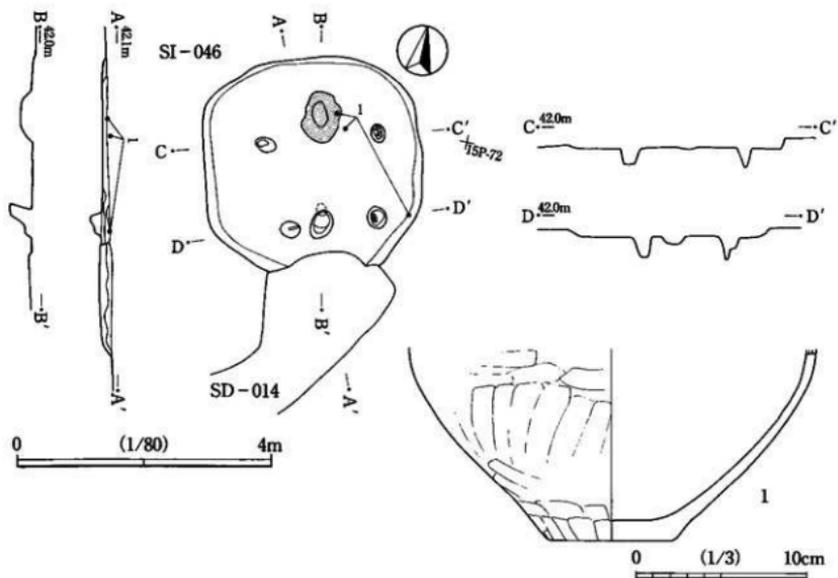
S字結節文で区画する。3は小型の広口壺の頸部1/2である。口縁は折り返すのみで無装飾。頸部は上下方向によく磨かれている。4は袋状の広口壺と思われ胴部約1/4が遺存する。底部を欠くが、ふくらんだ胴部が真つすぐに立ち上がり、口縁でやや外側に開く。5〜7は甕の底部である。5は底部が突出する形状である。



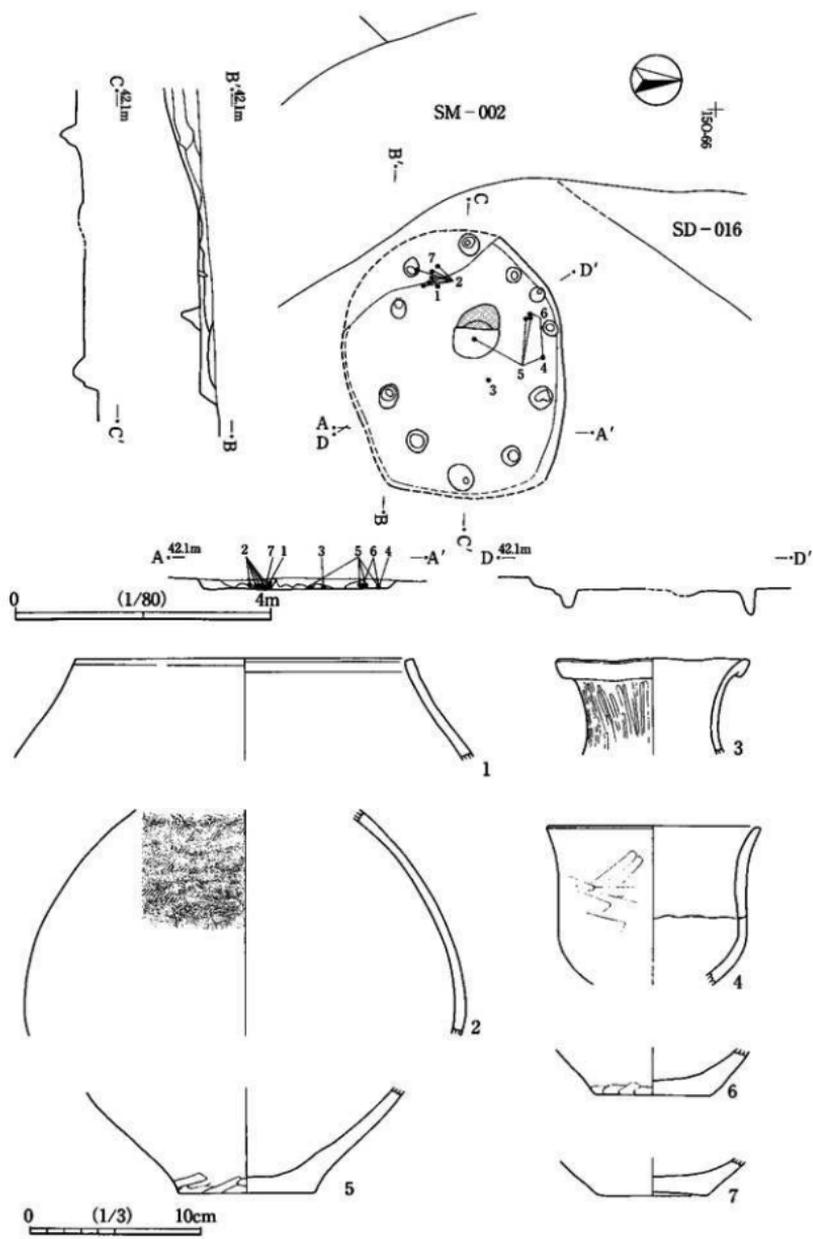
第55図 SI-044



第56图 SI-045



第57图 SI-046

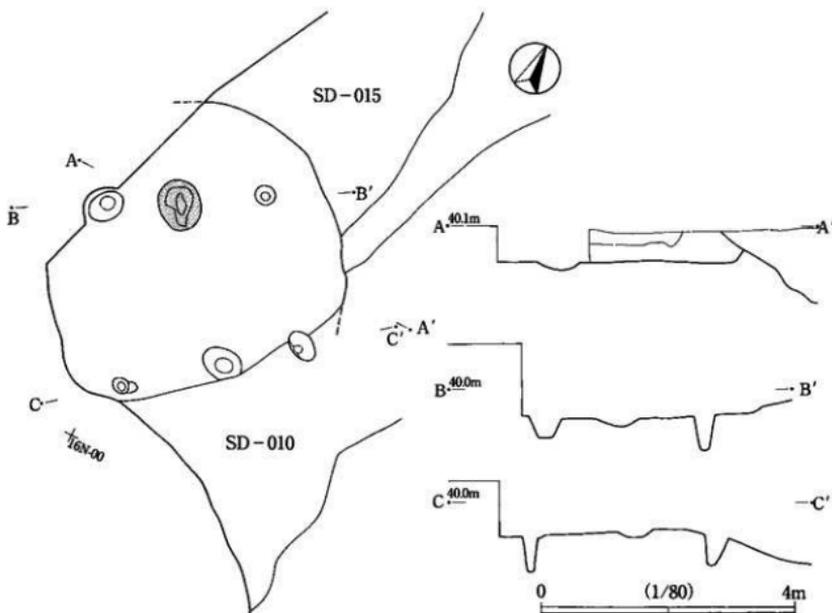


第58图 SI-047

SI-048 (第59図, 図版19)

16N-00 付近, SD-010 の両側に位置する。覆土上部を SD-015 が走る。主柱穴と思われるピット 4 カ所と炉, 炉の対面のピット 1 カ所を検出した。壁を検出できたのは北東側のみであるが, 平面形は不明である。主軸は北東にとる。本遺構のものと考えられる覆土は, 混入物の少ない暗褐色土層で, 分層はできなかった。比較的短時間に埋没したものと考えられる。

図示できるような遺物は検出されなかった。



第59図 SI-048

SI-049 (第60図, 図版19・41)

150-72 付近に位置する。SD-013 により西辺を損なう。東側は SI-040 と重複する。主軸は南北からやや西に振れる。平面形は楕円形で、対角線上に 4カ所の主柱穴を設ける。北側の柱穴の間に炉が位置し、炉の対面に遺構の中心から外側へ傾く形状のピットを検出した。入り口施設と思われる。覆土は暗褐色土からなるが、壁高が遺存のよい南側でも 10cm 未満のため分層や堆積状態は観察できなかった。遺物の出土は比較的遺存のよい南側に偏在する。1 以外は小片である。1 は甕の胴部 1/2 弱である。口縁部と底部を欠く。胴上部に輪積みによる段を有し、段部に押捺による刻み目を施す。施文具は明瞭ではないが無節縄文と思われる。2 は小型壺の頸部であろう。口縁は外反し、口唇をわずかに折り返し、円頭状につくる。外面はヘラ状工具でなでる。3 は小型の壺の底部、整形はやや雑で外面に磨きを施す。4 はやや小型の甕の底部であろう。丁寧に整形され内外面よく磨かれている。

SI-050 (第61図, 図版20)

160-15 付近に位置する。SD-013 により南西側を損なう。主軸を北西にとり、平面形は径約 5.4m の楕円形を呈すると考えられる。主柱穴 4カ所のほか、主軸の北西端と南東端にそれぞれピットを有する。壁溝は全周していたものと思われる。炉は北西側の主柱穴の間に位置する。覆土は、暗褐色土だが含まれるローム粒の大きさが 4層に分層でき、レンズ状に堆積する状況から自然堆積による埋没と考えられる。図示できるような遺物は検出されなかった。

SI-051 (第62図, 図版20)

160-00 付近に位置する。北辺を SD-013 により欠く。また、後に SI-044 が造られたことによって南側を損なう。壁はすべて失われており、床面の硬化部分と炉、主柱穴の存在によって遺構の範囲を推定した。主軸をやや北に振れた東西にとる。炉は西側の柱穴の間と、それよりやや中央よりの 2カ所に確認できた。図示できるような遺物は検出されなかった。

SI-052 (第63図, 図版20)

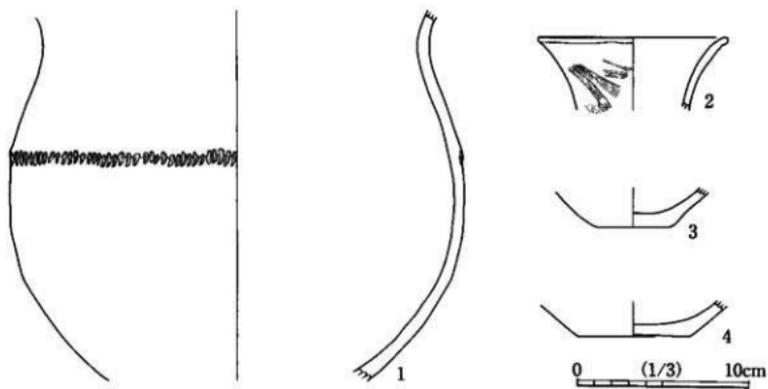
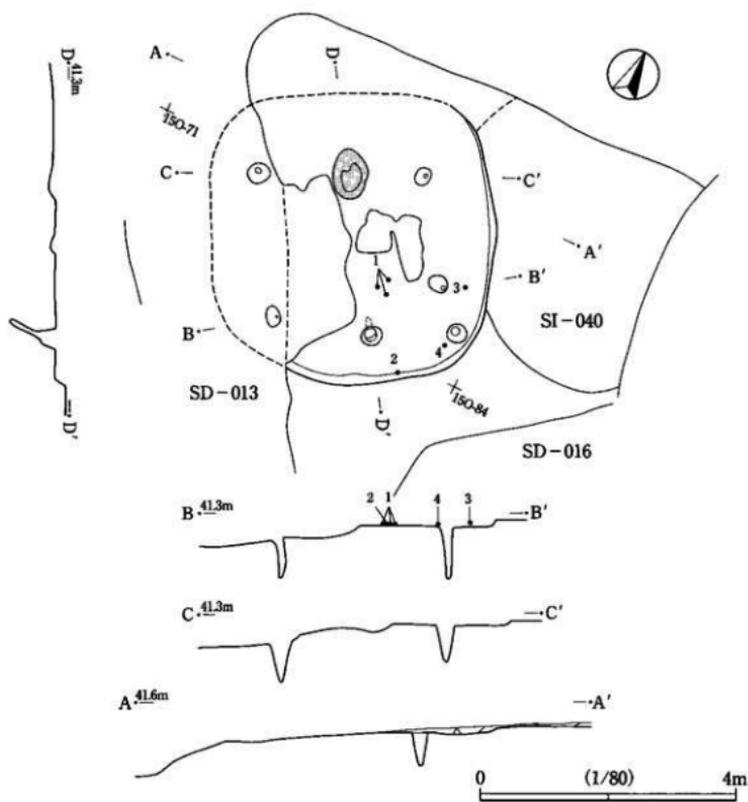
15N-55 付近に位置する。SD-009 に隣接し、SD-013 により北辺を欠く。SI-053 の埋没後に設けられ、本遺構の埋没後に SI-054 が造られている。平面形は楕円形で、径は約 5.3m。ピットはやや南東寄りに偏るが、エレベーション図 B、C 中の 4カ所のピットが主柱穴と思われる。いずれも深さは 40cm ~ 50cm を測る。これ以外にも数個のピットが検出されたが、性格は不明である。炉は西側の主柱穴の間に位置する。覆土は壁高の遺存が 10cm 程度と浅く、耕作の影響で判然としないが、褐色土の堆積がみられる。

図示できるような遺物は検出されなかった。

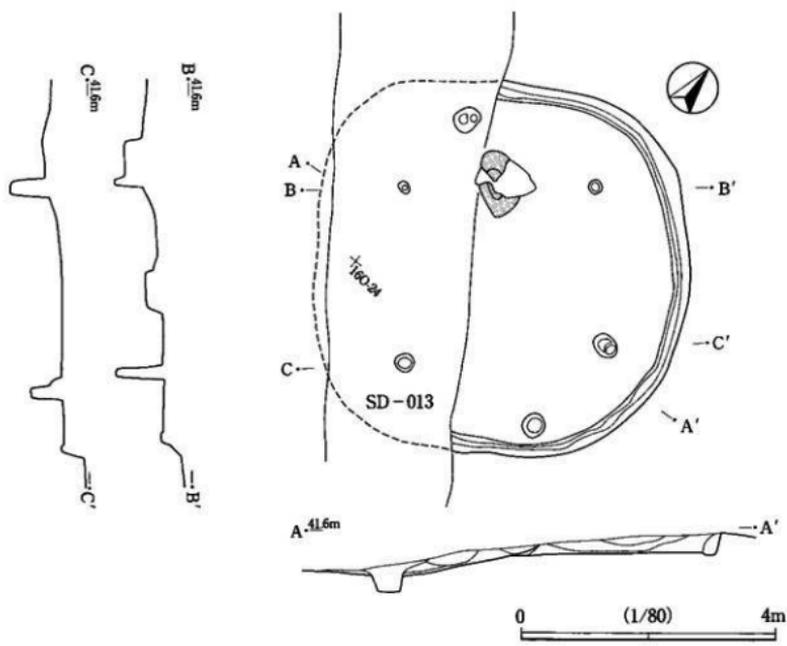
SI-053 (第64図, 図版21)

SI-052・054 によって北西隅を欠く。壁高は 10cm 前後が遺存する。規模は復元値で径 3.8m、平面形は楕円形である。主柱穴と思われるピット 4カ所を検出したが、炉は検出できなかった。遺構東側の床面からは焼土の堆積が認められた。

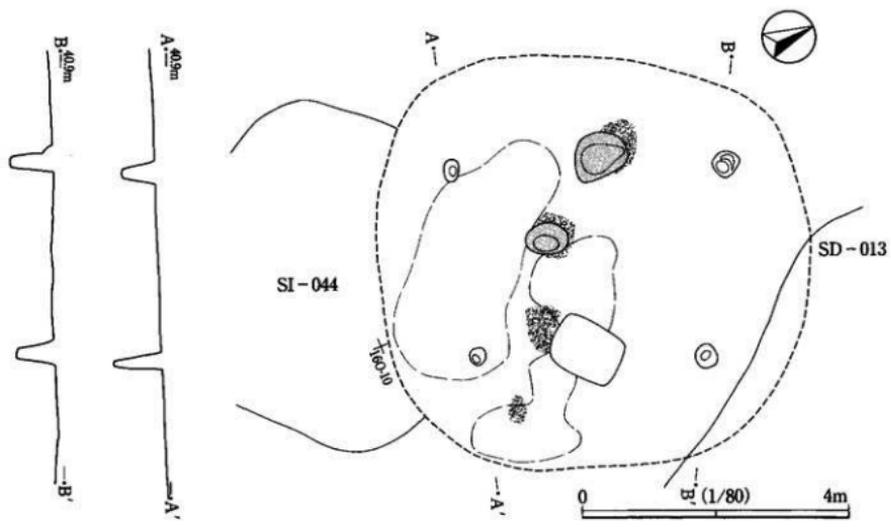
図示できるような遺物は検出されなかった。



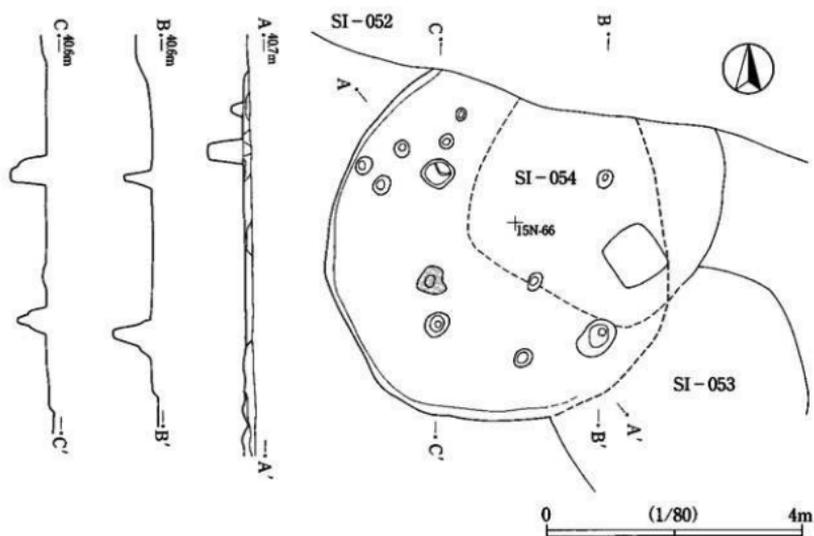
第60圖 SI-049



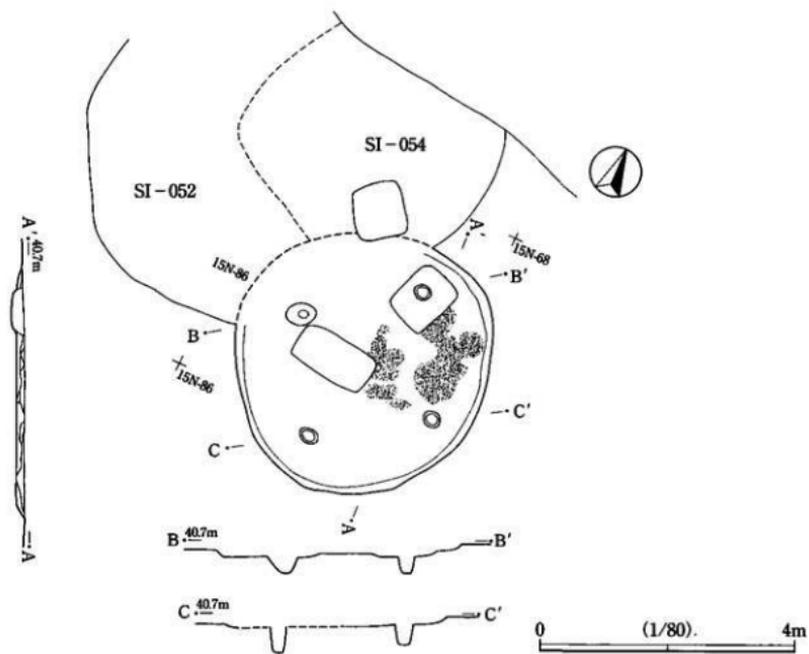
第61图 SI-050



第62图 SI-044



第63图 SI-052



第64图 SI-053

SI-054 (第65図, 図版21)

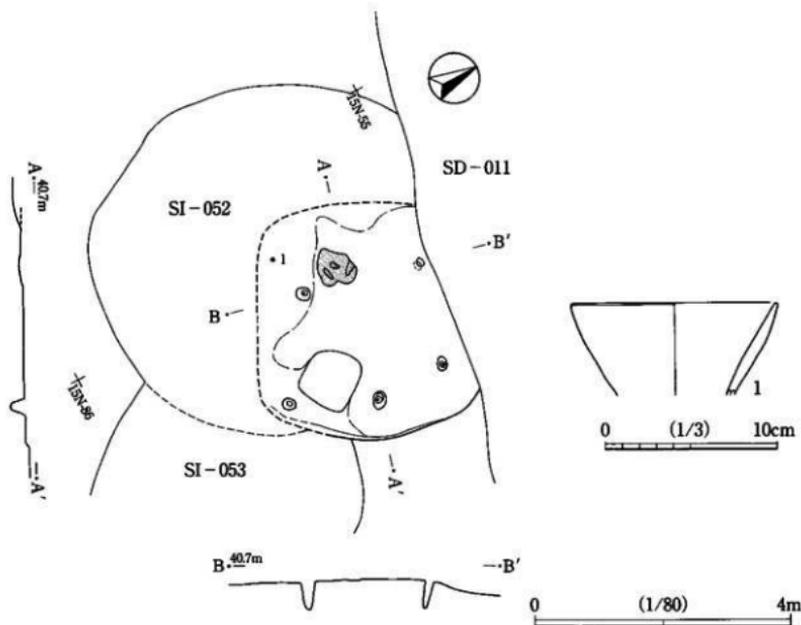
SI-052・053の埋没後に設けられている。遺構の規模、形状は明確ではないが、硬化面の範囲から長径3.7m、短径3.4m程度と思われる。主軸はやや北に振れた東西で、西辺やや南寄りに炉を検出した。ピットは全部で5カ所検出した。

遺物はほとんど検出されず、僅かに1点を図示するにとどまった。1は埴の頸部である。斜めに立ち上がり丁寧な磨きが施される。

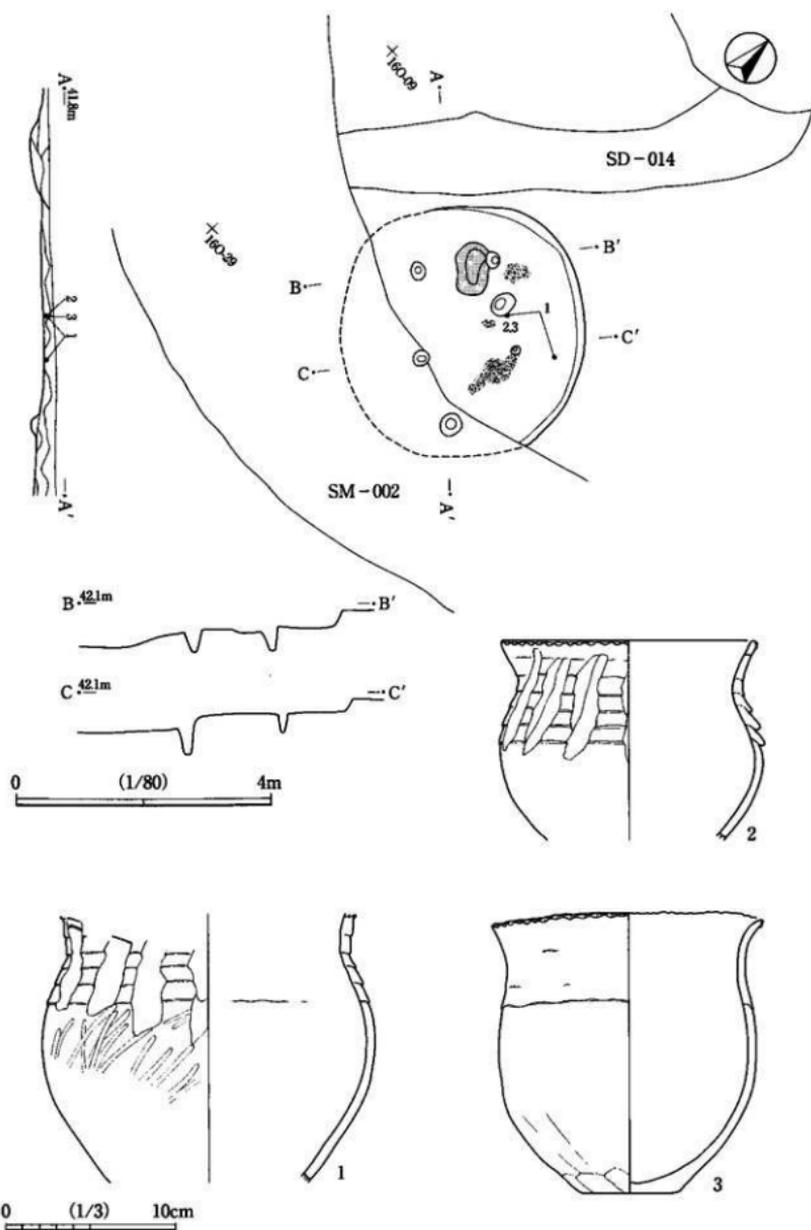
SI-055 (第66図, 図版21・41)

16P-00付近に位置する。SM-002によって南側約1/3を欠く。主軸を南西にとり平面形は楕円形と思われる。遺存度のよい北側で壁高は20cm程度であるが、SM-002の周溝に近くなるにつれ壁高の遺存度が減少する。SM-002構築の際に削平されたものと思われる。北西寄りに主柱穴と思われるピット4カ所と炉を検出した。このほか、炉の手前と南東側にピットそれぞれ1カ所を検出した。遺物はこのうち炉の手前側のピット周辺でまとまって検出された。

遺物は3点を図示した。1は胴部約1/3のみ遺存、2は胴の半分と底部を欠く。口縁端部はが波状に押捺されている。いずれも頸部に輪積み装飾を施す。1は6段、2も6段以上で、ともにへら状工具を用いて間隔をあけて装飾的にナデ消している。3は胴部の一部を欠く。輪積み裏を最下段を残してナデ消している。口縁端部は波状に押捺されている。底部近くを除き、外面には黒色の煤状物質が付着する。



第65図 SI-054



第66圖 SI-055

SI-056 (第67図, 図版22・41)

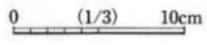
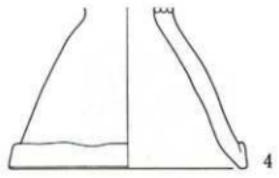
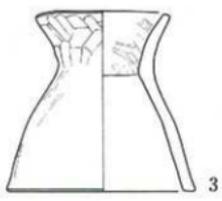
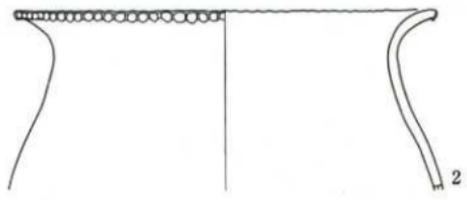
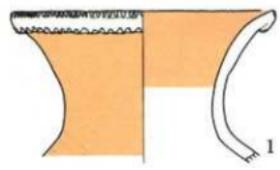
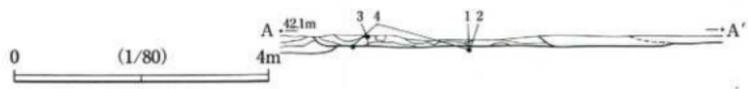
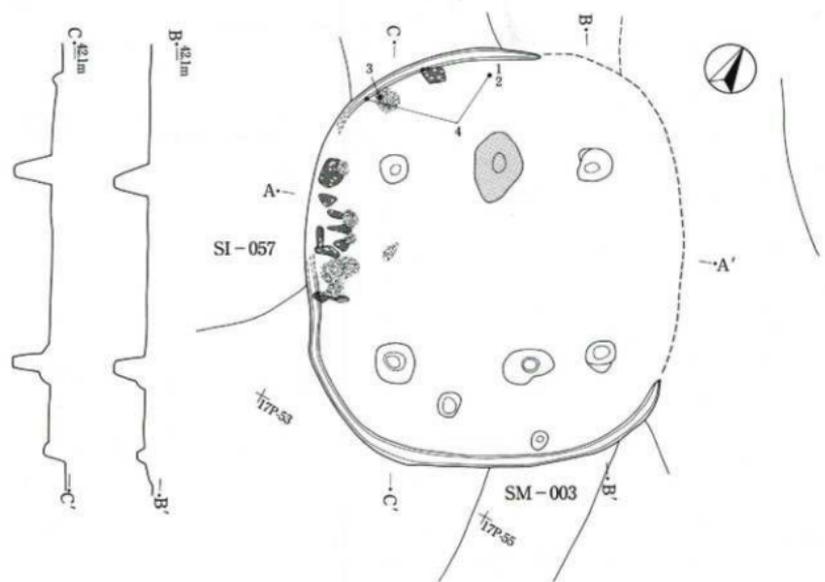
17P グリッドのほぼ中央に位置する。SM-003 と SD-019 により、東半分を失う。平面形は楕円形を呈し、長径は 6.7m を測る。主軸は南北からやや西へ振れる。支柱穴と思われる 4 か所のピットを有し、炉が北側の支柱穴の間に位置する。このほか炉の反対位置に 3 か所のピットを有する。また、SI-056 との重複カ所以外では壁溝が確認できた。覆土は褐色ないしは暗褐色であるが、西側壁際に焼土および炭化材がまぎって検出されている。住居の構造材が焼けたものであろう。

遺物の量は比較的少ないが、炉の北側でまぎって検出されている。1 は壺である。肩部以下を欠き、口縁は約 2/3 が遺存する。口縁は折り返し、上端と下端に刻み目を有す。外面と口縁部内側に赤彩を施す。2 は甕の口縁部片である。口縁は大きく外反し、端部が波状に押捺されている。外面は赤褐色を呈する。3、4 はいずれも小型器台である。3 は完形である。上から 1/3 の位置がくびれ、受け口は下端に比べ小さく、わずかに外反する。下部はややふくらみながら八字形に開く。4 はくびれ部より上を欠く。くびれ部の径は 3 より小さい。下部は八字形に開き、端部を折り返す。3、4 ともに赤彩様の痕跡があるが判然としない。

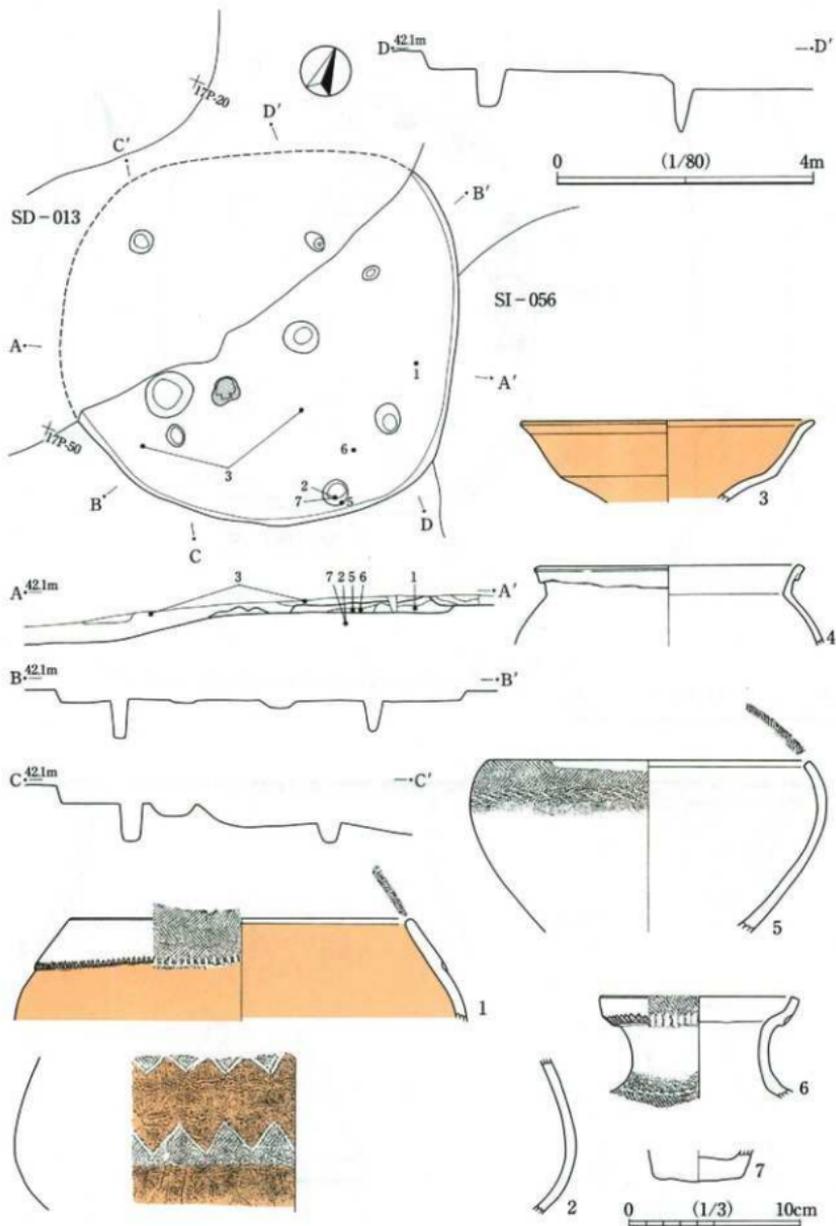
SI-057 (第68図, 図版22・41・42)

SI-056 の西側に接して位置する。SD-013 により北西側約 1/3 を失う。また、東辺の一部を SI-056 により損なう。平面形は径 6m 前後の楕円形と思われる。炉は南側に位置し、主軸は南側からやや東へ振れる。SD-013 との重複部分も含め、ピットを 8 か所検出した。炉西隣が深さ 22cm、住居中央部が 22cm、南東辺寄りが 26cm と浅いが、その他は床面からの深さがいずれも 60cm を越え、柱穴と考えられる。覆土は暗褐色土と褐色土が確認されたが、層序等の状況は不明である。

遺物は主に南側の床面近くから検出された。1 は甕の口縁部片である。口唇に斜縄文、折り返し部に羽状縄文を配し、折り返し部下端は結節文で刻み目を施す。内部及び外面の無文部はよく磨かれ、赤彩される。2 は甕の胴部である。無文部両端の S 字結節文 2 組の上下を沈線による山形文と斜縄文ではさみ、下端にはさらに S 字結節文 3 条による区画が観察できる。山形文部分を鋸歯状に残し赤彩する。3 は高坏の坏部である。体部に稜を持ち、口縁は内部に稜を持って外反する。内外面に赤彩を施している。覆土上層から検出されており、本遺構のものとは考えにくい。混入品であろう。4 は広口壺の頸部である。頸部がくの字に屈曲し口縁は短く立ち上がる。口唇は不揃いに折り返す。5 は鉢の口縁部である。約 1/4 が遺存する。口縁は内湾し、口唇に斜縄文、口縁部に羽状縄文を施し、下端を S 字結節文 3 段で区画する。6 は小型甕の頸部である。頸部は短く立ち上がり、口縁は受け口状に強く屈曲する。口縁部外側に斜縄文を配し、下端は角棒状工具の先端による刻み目を施す。また、頸部付け根に S 字結節文 3 条と斜縄文を施す。7 は底部のみである。ミニチュアの甕であろうか、底部からわずかに開いて立ち上がる。



第67圖 SI-056



第68圖 SI-057

SI-058 (第69図, 図版22・45)

17P-08 付近に位置する。遺構の北東側は調査区域外にあり、さらにSD-017とSD-018で削平され、西側約1/3のみ残存する。南西隅でSI-59と接する。平面形は長径約7mの楕円形と考えられる。覆土はローム粒を含む褐色土が観察されたのみで、堆積状態は不明である。遺存範囲からは柱穴2カ所が検出されたのみである。深さは北側が10.6cm、南側が推定で11.2cmである。

遺物は調査区域外とSD-017にはさまれた部分の床面でガラス玉1点を検出したのみである。やや緑がかった明るい青色を呈し、径4.1mmである。

SI-059 (第70図, 図版23)

SI-058の南に接して位置する。SD-018とSD-019の交差部分で削平され、北西側約1/2のみ残存する。平面形は楕円形と考えられる。主軸は南北からやや西へ振れ、北西辺寄りに炉を検出した。炉の周囲には硬化部分が広がる。壁高は最大8cm程度しか遺存せず、粘性の少ない褐色土を覆土として確認できたのみで堆積の状況は把握できなかった。北側隅に深さ10cmのピット1カ所を検出した。性格は不明である。遺物の大半が小片で、図示できるような遺物は検出しなかったが、無文の壺の肩部からやや下の比較的大きな破片が出土している。

SI-060 (第71図, 図版23)

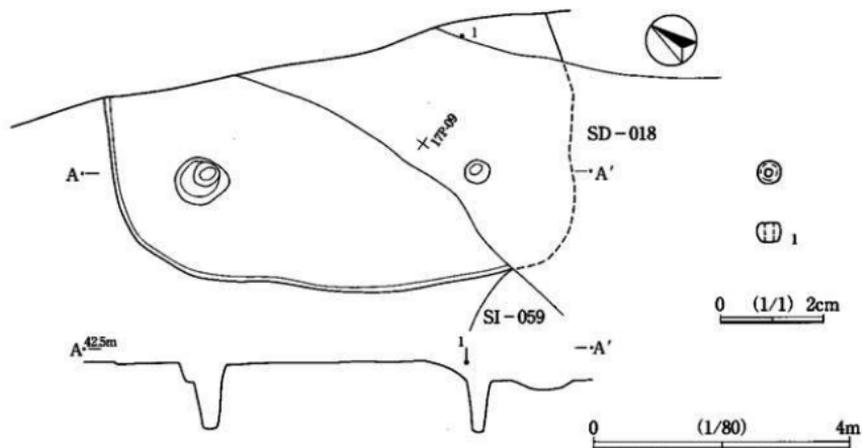
17O-79 付近に位置する。遺構の南西端は調査区域外にあり、さらにSD-013によって北西側を失うため、確認できたのは全体の1/3程度である。平面形は楕円形と考えられる。床面の存在する範囲では炉は確認できなかった。壁高は25cm程度が遺存している。ピットは5カ所が検出され、このうち西側の深さ67cmのもの、東側の深さ57cmのものが支柱穴と考えられる。そのほかは深さ11cm～32cmで用途は不明である。遺物は土器の細片が検出されたのみで、図示できるものはなかったが、折り返し口縁に刻み目だけを持つ広口壺や、無頸壺型の鉢の破片がみられる。

SI-061 (第72図, 図版23)

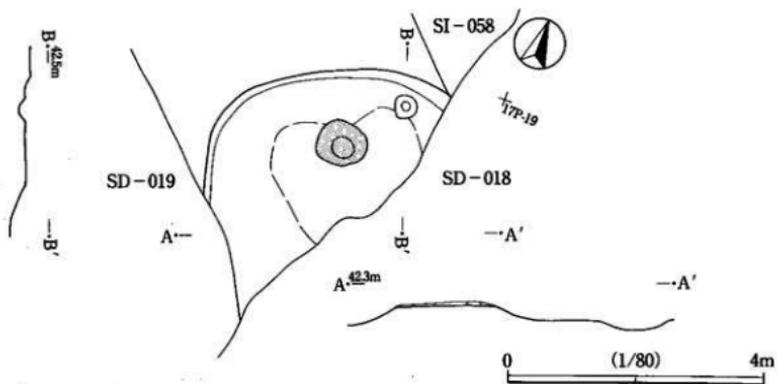
18P-33 付近に位置する。SD-018により遺構が損なわれている。覆土も本遺構のものと明言できる土層は確認できず、遺構の範囲も不明確だが、南西部分に認められた硬化部分と、炉上の焼土の痕跡とから住居として扱った。数多く確認されたピットの帰属関係も明確ではない。遺物も本遺構のものと分別できるものはなかった。

SI-062 (第73図, 図版24)

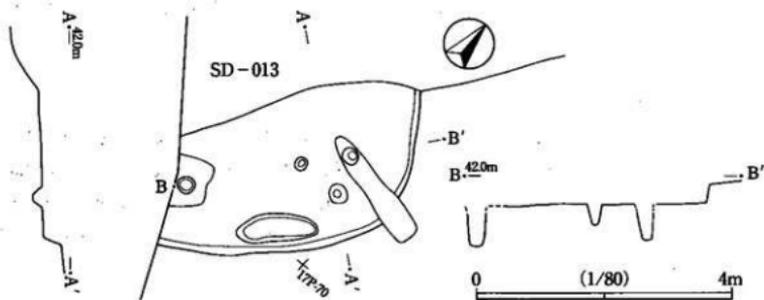
16P-21 付近に位置する。SM-002によって北側の大半を失っている。炉もこの部分にあったと思われる。主軸は南西に振れる。壁高は遺存状態のよい南側で7cm程度と低く、覆土は暗褐色土であるが堆積の状況は不明である。ピットは4カ所検出されている。深さは南西側が60cm、南東側が54cm、SM-002周溝内のものが43cmで支柱穴と思われる。南側中央の1カ所は深さが24cmとやや浅く、入り口施設であろう。遺物は検出されなかった。



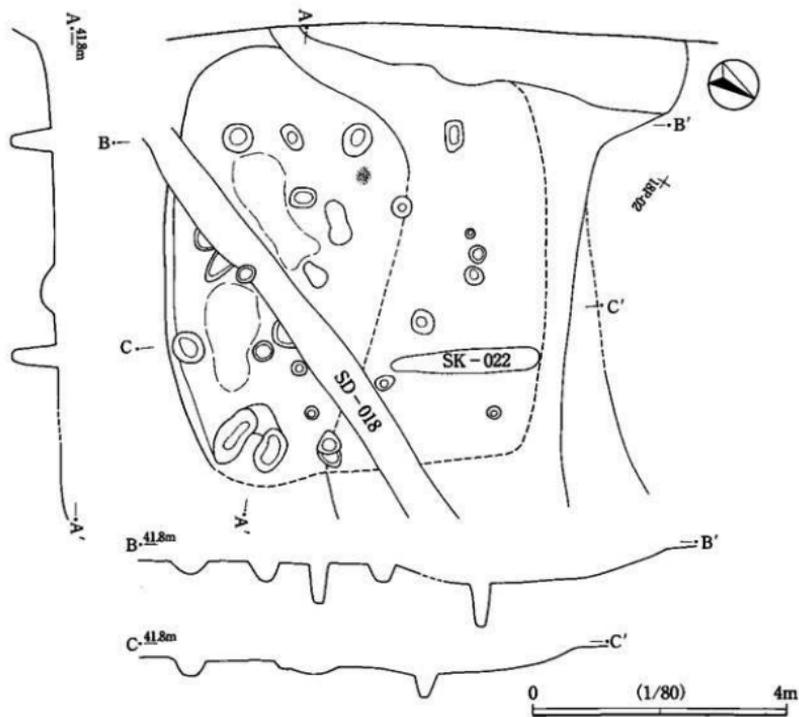
第69圖 SI-058



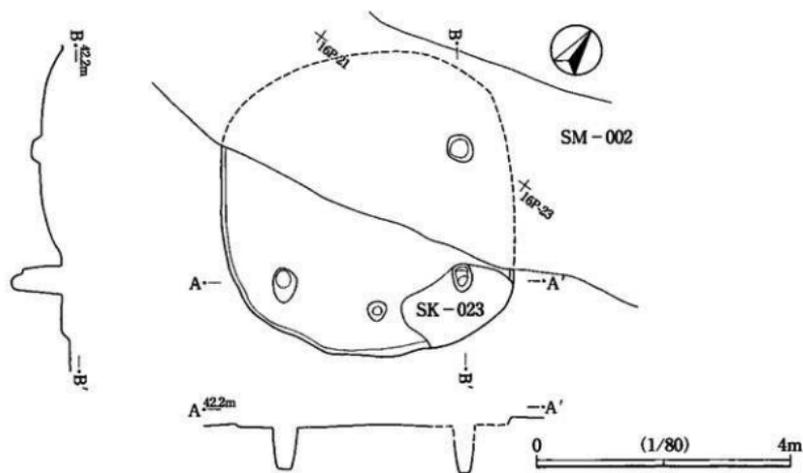
第70圖 SI-059



第71圖 SI-060



第72図 SI-061



第73図 SI-062

SI-063 (第74図, 図版24・42)

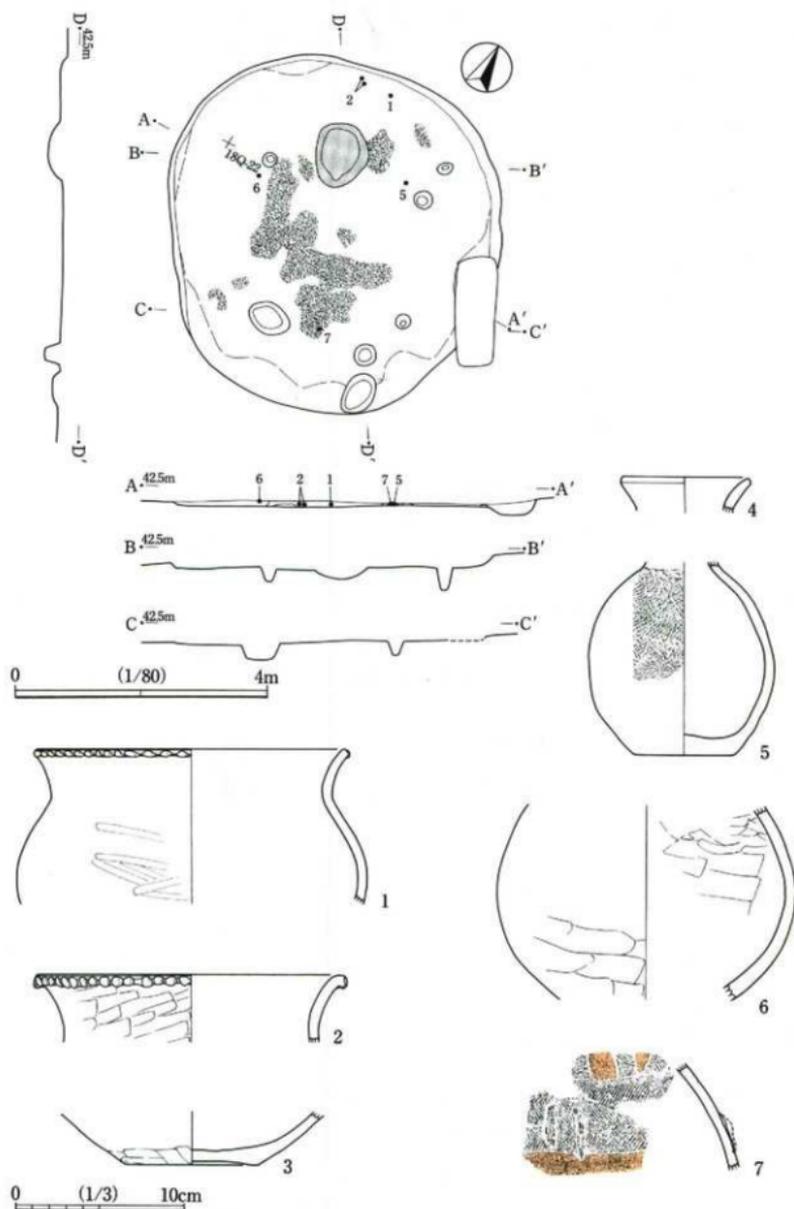
18Q-31 付近に位置する。主軸は南北からやや西に振れ、長径 5.4m、短径 4.9m の楕円形の平面形を呈する。壁高は遺存のよい北東側で 15cm 程度である。主柱穴と思われる 4 カ所のピットのほか、南東辺寄りに大小 2 カ所のピットを持つ。北側の主柱穴の間に炉を持つ。床面は壁際まで踏み固められて硬化している。また、主柱穴に囲まれた部分を中心に焼土が堆積している。堆積全体の状況は、覆土の遺存が悪く不明だが、細かな焼土粒を含む暗褐色土が主体である。遺物はこの覆土中から検出されたものである。いずれも小片であった。1, 2 は壺である。1 の頸部はく字形の屈曲がみられる。口唇端部は押捺により波状を呈する。口径は胴部最大径より小さい。2 は口唇部に燃糸を伴った押捺を施し、折り返し状を呈する。頸部はヘラケズリがなされる。3 は壺底部の 1/4 ほどが遺存する。内外面ともよく磨かれ明赤褐色を呈する。4 は小型壺と思われ、口縁部約 1/4 である。口縁は僅かに外反している。5 は小型壺で、口縁部を欠く。本遺構でもっとも遺存度のよい遺物である。頸部から胴部にかけて、斜縄文上に沈線で山形文を四段に施し、上下を S 字結節文で区画する。6 は壺胴部の 1/3 程度の破片である。球形をし外面はよく磨かれている。7 は壺の胴部破片である。上部は斜縄文を沈線で方形または山形に区画し、区画の間を磨り消している。下部は上下を沈線で区画し、間を三段の羽状縄文で充填し、2 本一組の棒状浮文を貼り付けている。赤彩が施される。

SI-064 (第75図, 図版24・42・45)

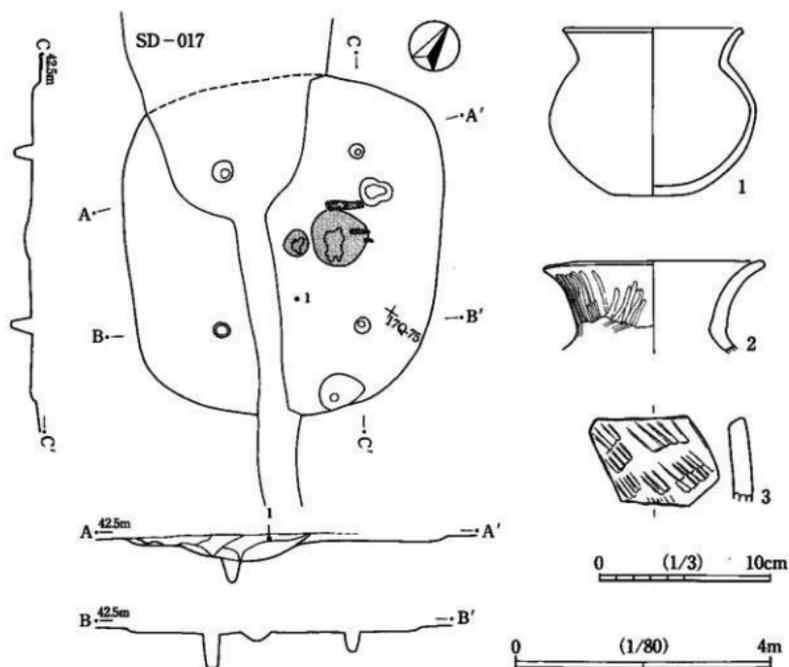
17Q-75 付近に位置し、遺構中央部を SD-018 に切られる。平面形はややゆがんだ楕円形を呈する。主軸は北西にとる。ほぼ対角線上に主柱穴を設け、炉は北東側柱穴の間に位置する。柱穴の深さは炉右から時計回りに 31cm、54cm、43cm、26cm である。このほかカマド右側に深さ 15cm の、南東壁際に深さ 35cm のピットを検出した。炉は主軸に沿って大小 2 カ所検出され、北東側が大きく焼成範囲も広い。また、覆土はローム粒やロームブロックを含む明褐色土だが、壁高が遺存のよいところでも 10cm と浅く、自然埋没か人工的な埋め戻しかは観察できなかった。遺物は少量で、3 点を図示するとどまった。1 は広口の壺で、口縁は一部であるが、胴部以下はほぼ遺存する。外面はよく磨かれている。全体に煤が付着している。内面は剥落が激しい。2 は壺の頸部である。頸部がく字に屈曲し、頸部は柱状に短く立ち上がり口径は外反する。3 は土製品である。刷毛目のある壺等の破片でつくられている。使用時は菱形であったと思われるが、一角を欠いている。残った辺はいずれもよく磨滅しており、砥石のような使われ方をしていたものと考えられる。

SI-065 (第76図, 図版25・42)

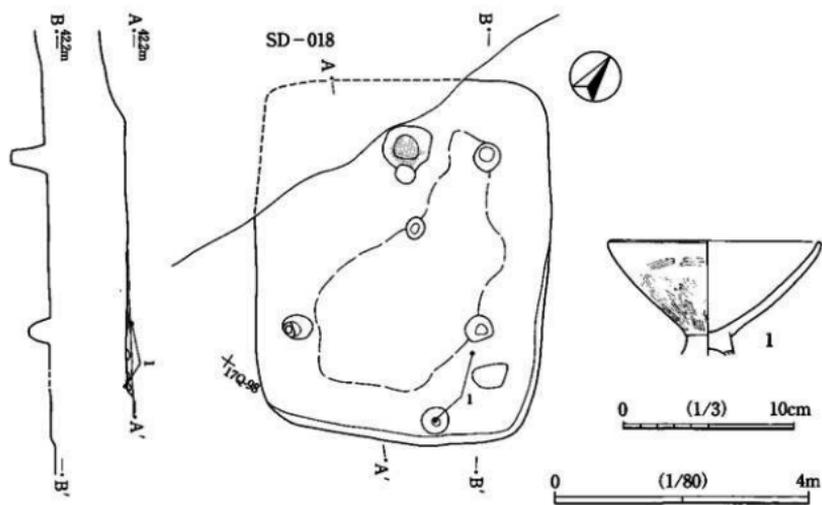
17P-88 付近に位置し SD-018 によって北西隅を欠く。遺存している壁高は最も深い東隅で 6cm である。主軸を北西にとり、平面形は南東辺が北東辺に比べてやや短い隅丸長方形を呈する。炉は北西側柱穴の間に位置する。主柱穴は、対角線上の位置に、溝と重複する東側を除いて 3 カ所が確認された。深さは 30cm ~ 55cm である。主柱穴に囲まれた部分は踏み固められて硬化している。また、遺構中央部の炉近くに深さ 30cm の、南東辺際に深さ 29cm のピット 1 カ所をそれぞれ検出した。覆土は暗褐色土で、層序は観察できなかった。



第74图 SI-063



第75圖 SI-064



第76圖 SI-065

遺物は少なく実測できたのは僅かに1点である。1は高坏である。坏部が直線的に大きく開く形態で、接合部の接合痕を段上に整えている。内外面とも丁寧な磨きが施されている。

#### SI-067 (第77図, 図版25・42)

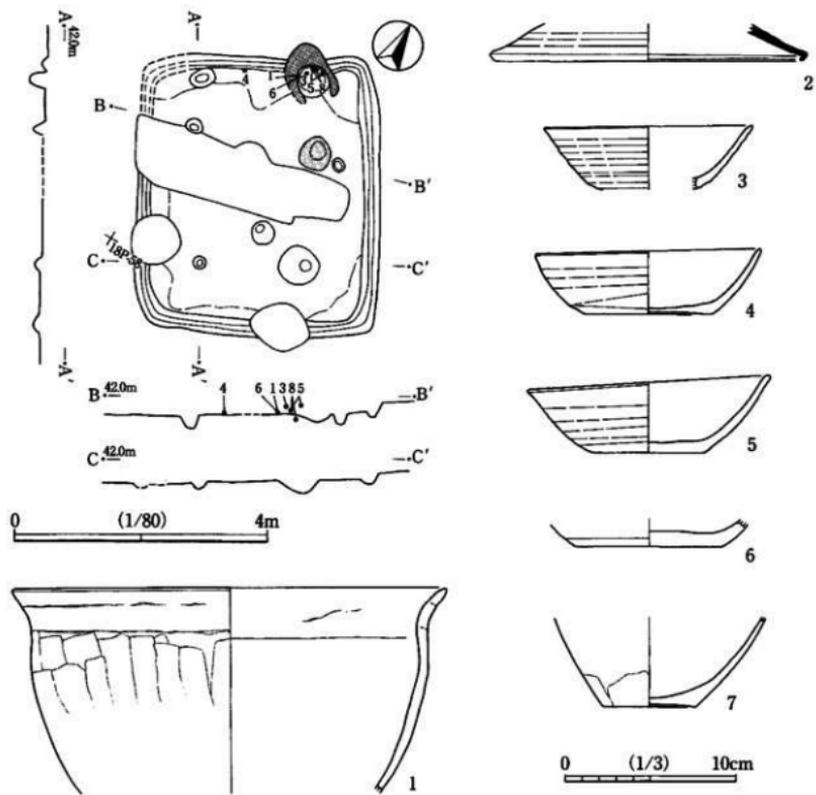
調査区の最南端に位置し、西から入る浅い谷に面した台地の先端に位置する。唯一の平安期の住居跡である。緩斜面に位置し、耕作等による攪乱のため遺存状態はよくない。主軸は南北からやや西に振れる。平面形は、北西辺が北東辺に比べてやや短い長方形を呈する。カマドは北西辺の北側隅寄りの位置に設けられている。壁溝は全周している。支柱穴は対角線上の位置に北側を除いて3カ所確認された。深さはいずれも20cm前後である。このほか、北西辺の主軸をはさんで、カマドと対称的な位置に長径40cm、短径30cm、深さ23cmのピットを検出した。また、東側柱穴の内側にも深さ20cmのピットを確認した。いずれも用途は不明である。カマドの手前60cm、4本目の支柱穴の位置に炉を検出した。床面は、壁溝際をのぞいて踏み固められて硬化している。覆土はローム粒を含む暗茶褐色土である。検出された壁高は遺存状態の比較的良好な北東側で14cm程度であるため、堆積状態は観察できなかった。台地の端部に単独で所在することや、カマドと炉の両方を設けるなど、通常の住居とは考えにくい。

遺物はカマド周辺からまとまって検出された。

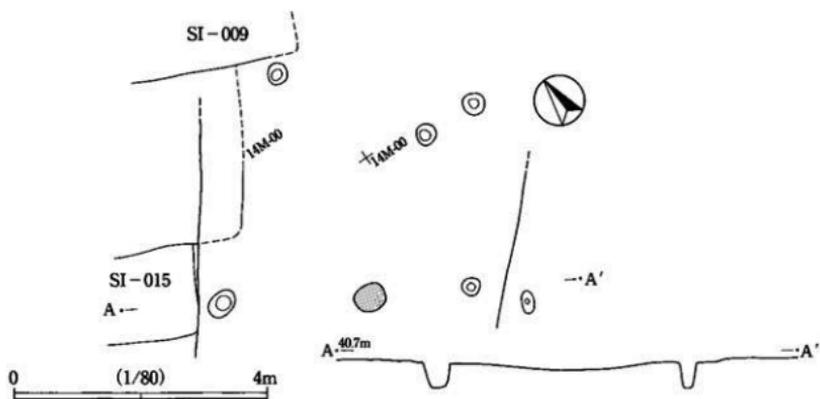
1は甕の胴部約1/3である。口縁部が強く外反する。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整である。2は須恵器坏蓋で灰色に還元焼成され、端部が強く屈曲している。覆土中から検出されており本遺構に直接伴うものではない。奈良時代の所産と考えられる。3～6は坏で、ロクロ製である。3はやや深めで直線的に開く形である。4はやや内湾気味に開く。5は口縁部がわずかに外反する。6は坏の底部で、3～5に比べ厚めで、内面が黒色処理されている。いずれも底部は切り離した後、回転ヘラケズリ調整を施す。7は小型の甕で底部のみを復元した。器壁は薄く、胴部下端は横位のヘラケズリが施されている。

#### SI-069 (第78図)

SD-008の底部より、焼土痕1箇所とピット数個が検出された。SD-008より古い。住居であるとの確証はないが焼土痕が炉の可能性もあるため、SI-069とした。



第77图 SI-067



第78图 SI-069

## 2 古墳

### 概要

古墳周溝は3基検出された。いずれも円墳である。SM-001は調査区北半部中央付近、SM-002、003は調査区南半部中央付近で検出された。調査区が狭長なためいずれも全掘されていない。SM-001とSM-002は直線距離で約40m、SM-002とSM-003は直線距離で約10mの間隔を持つ。北東方向約150mに愛宕古墳群が所在する。本遺跡は古墳群としては登録されていない。新発見の古墳ということになる。

#### SM-001 (第79・80図, 図版25・26・42・43・44)

14Mグリッドから検出された古墳周溝である。北東側は調査区外に続く。全体の形は円形になると思われる。周溝幅はほぼ一定である。断面形は逆台形に近い。盛り土は全く残存しなかった。周溝の内径は約14.7m、周溝の幅は約2.4m、周溝の深さは50cmを測る。周溝の外径は18.7mほどになると思われる。周溝内の3か所から遺物がまとめて検出された。覆土中層からの出土である

遺物1～13は土師器の坏である。1、10は完形である。調整はいずれも外面ヘラズリ後ナデ、内面はミガキ調整されている。2～11は口辺部下位に稜を持ち口辺部が短く、内傾している。12、13は口辺部が外傾する。4は内面、5、6、8、9、13は内外面赤彩されている。14～22は須恵器である。14～16は完形の坏で、切り離しは回転糸切り、内外面ともナデにより仕上げられており焼成は良好である。17は坏蓋、切り離しは回転糸切りで頂部に線刻が施されている。18は瓦泉である。19は埴で底部に線刻があり口縁から肩部にかけて自然軸の付着が観察された。20は甕の口縁部、肩部に「↑」様の線刻を施す。21は甕の頸部、22は瓦泉の口縁部と思われる。23～25は鉄製品である。23は鉄鎌の軸部、24は鉄製の針。接合しないが同一個体の可能性が高い。25は鉄製の刺突具と思われる。先端を欠損している。

#### SM-002 (第81図, 図版26・45)

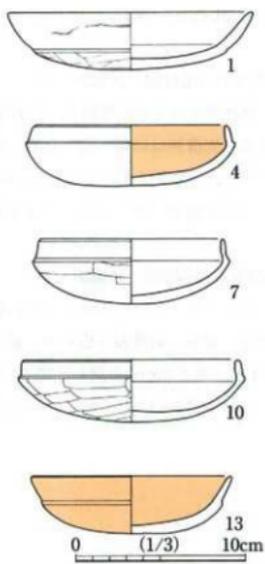
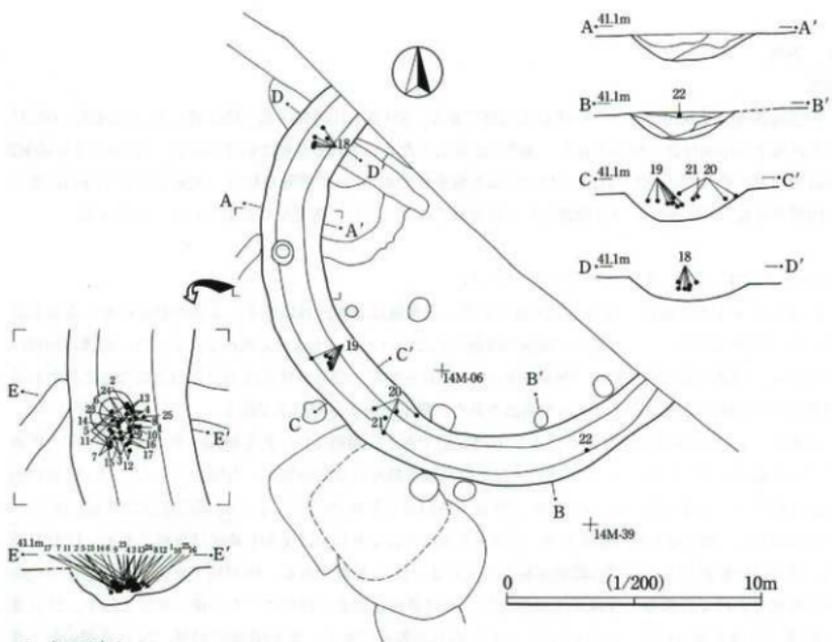
16Pグリッドから検出された古墳周溝である。北東側は調査区外に続く。全体の形は円形になると思われる。周溝幅はほぼ一定である。盛り土は全く残存しなかった。周溝の内径約18.1m、周溝の幅は2.9m～3.6m、深さは50cmを測る。周溝の外径は25.1mほどになると思われる。

1は土師器の坏である。2は土製勾玉である。下半部を欠損する。

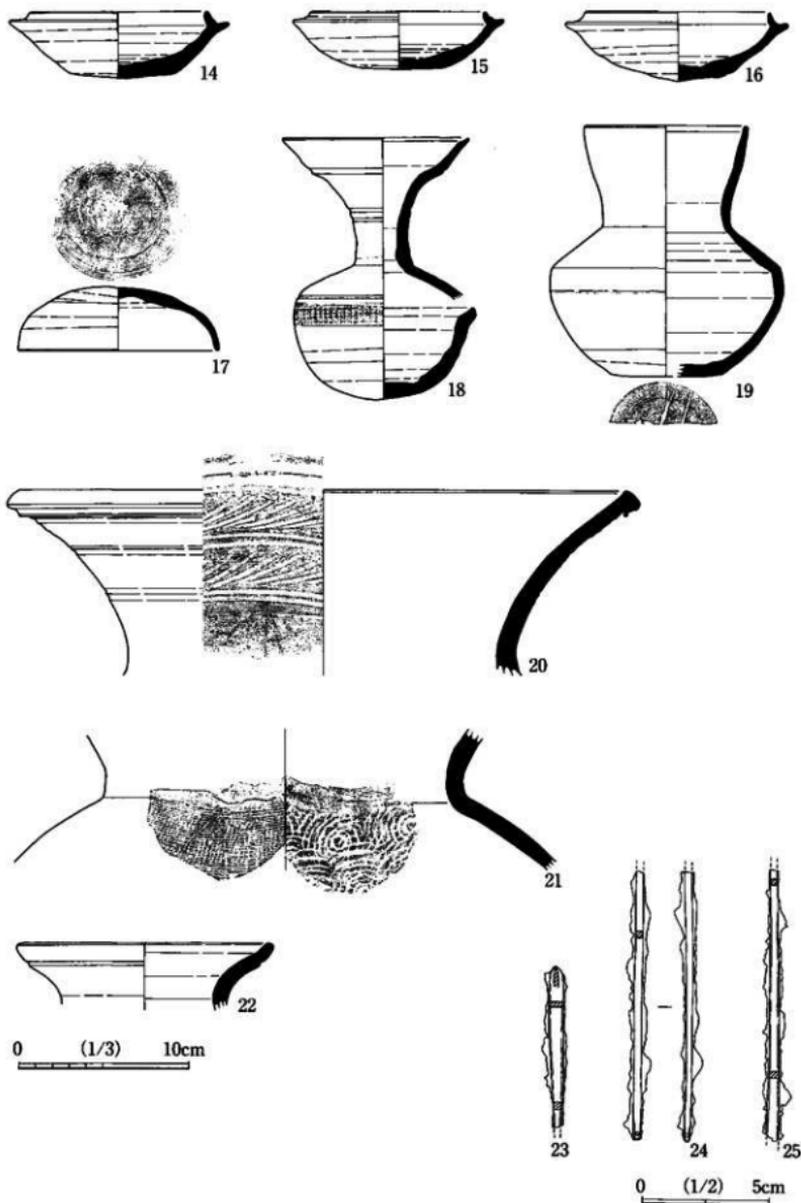
#### SM-003 (第82図, 図版26・43)

17Pグリッドから検出された古墳周溝である。南西側は調査区外に続く。全体の形は円形になると思われる。北側で周溝幅が広がる。盛り土は全く残存しなかった。周溝の内径約23.4m、周溝の幅は1.6m～2.6m、深さ20cmを測る。周溝の外径は約26.4mほどと思われる。

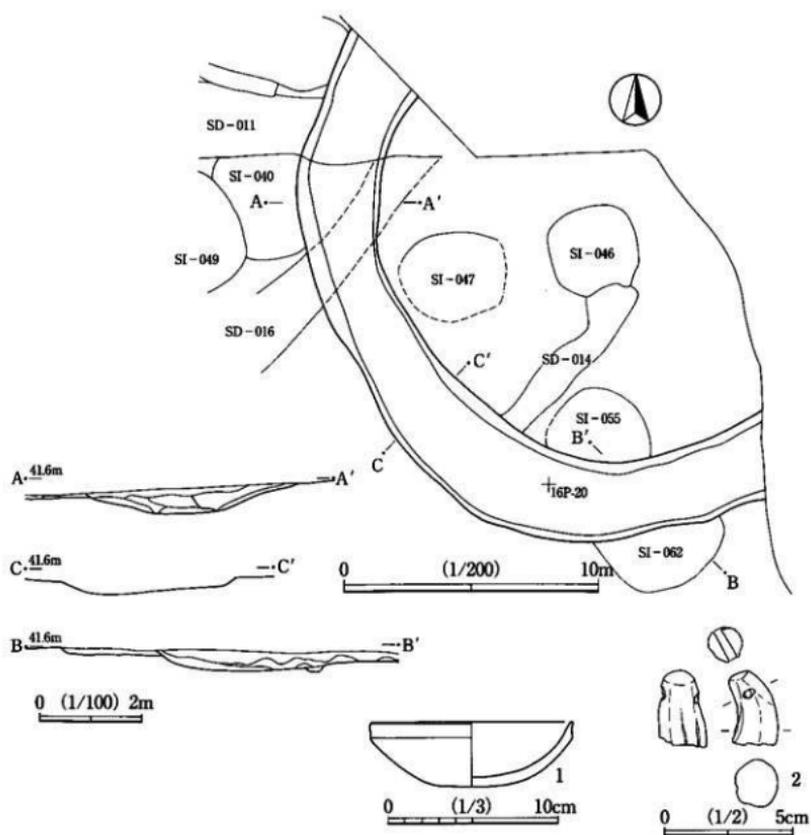
1は土師器の高坏の坏部、2も高坏である。いずれもミガキにより仕上げられており、焼成は良好である。



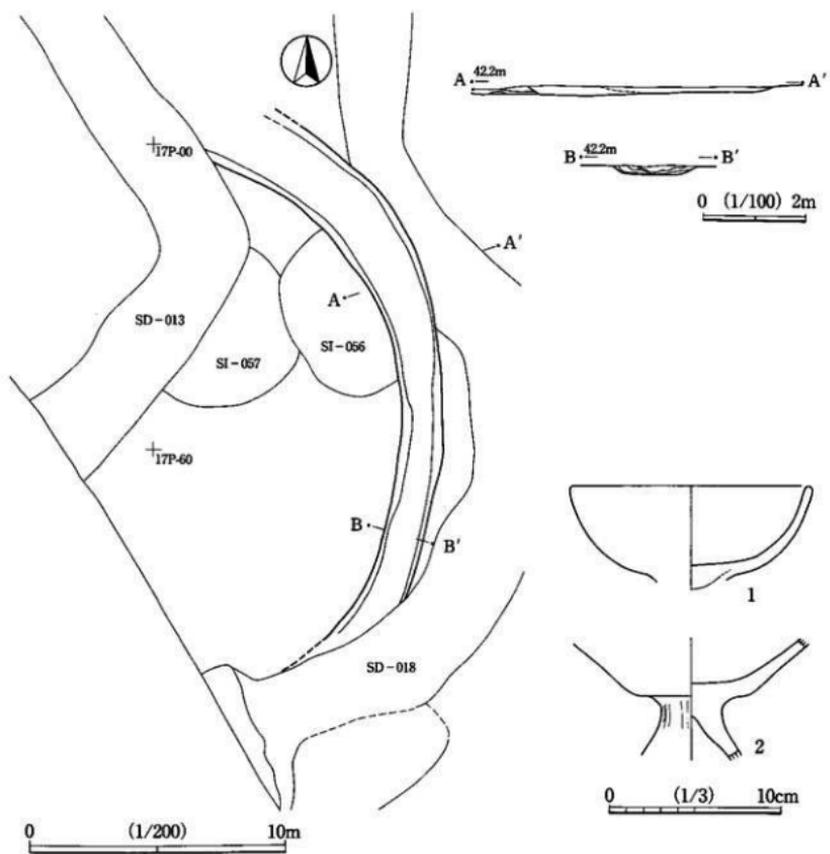
第79图 SM-001



第80图 SM-001 出土遗物



第81圖 SM-002



第82図 SM-003

### 3 溝・掘列

#### SD-001 (第83図, 図版27)

調査区北端で約 6.4 m 検出された。方向は北西-南東で、幅は 80cm、深さ 50cm、断面形は逆台形で直線状に掘られ両端が収束している。遺物の出土は少なく図示できる遺物は検出されなかった。

#### SD-002 (第83図, 図版27・44)

調査区北端で約 30m 検出された。方向は北西-南東で幅は約 2.4m、深さ約 20cm、断面形は皿形である。直線的で両端は調査区外に伸びる。遺物 1 は長さ 5.4cm を測り、鉄釘と思われる。

#### SD-003 (第83図)

調査区北端で約 3.8m 検出された。幅は約 1.2m、深さ約 20cm、断面形は逆台形だが壁は急角度に立ち上がっている。方向は東西で、検出された部分では直線的に掘られている。SD-002 に切られる。遺物の出土は少なく図示できる遺物は検出されなかった。

#### SD-004 (第83図)

調査区北端で約 8.1m 検出された。幅は約 2.8 m、深さ約 20cm、断面形は皿形である。両端は調査区外に伸びゆるやかな弧状を呈する。SD-002 に切られている。検出距離が短いので確証はないが、SM-001 との位置関係も考慮に入れると、円墳の周溝の一部の可能性があり、今後の調査により明らかになることを期待したい。

#### SD-005 (第87図, 図版27・44)

調査区北部で約 29m 検出された。幅は約 1.8m、深さ約 12cm、断面形は皿形である。方向はおおむね北東-南西で蛇行して掘られ底面に多数の土坑を有する。南西端は収束する。遺物 1 は長さ 18.5cm、鉄鏃と思われる。

#### SD-006 (第84図)

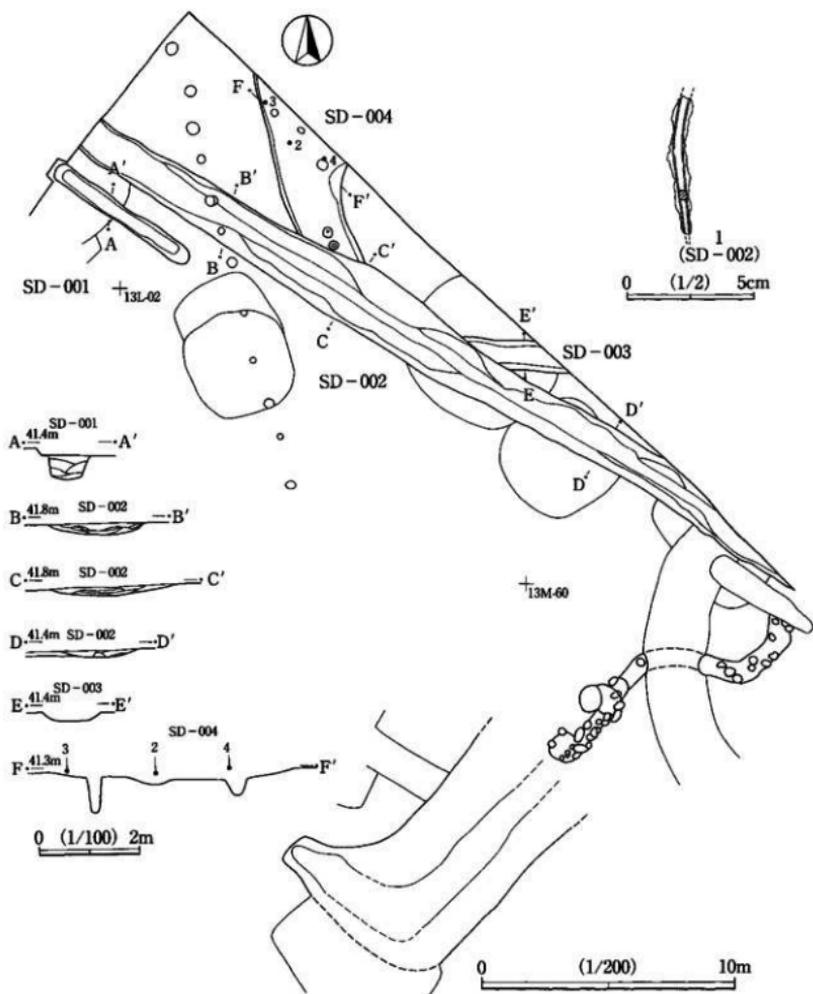
調査区中央付近で約 3m 検出された。幅は約 80cm、深さ約 20cm、断面形は皿形である。方向は北西-南東で、重複関係が複雑だが両端は調査区外に伸びている可能性が高い。遺物の出土は少なく図示できる遺物は検出されなかった。

#### SD-007 (第84図)

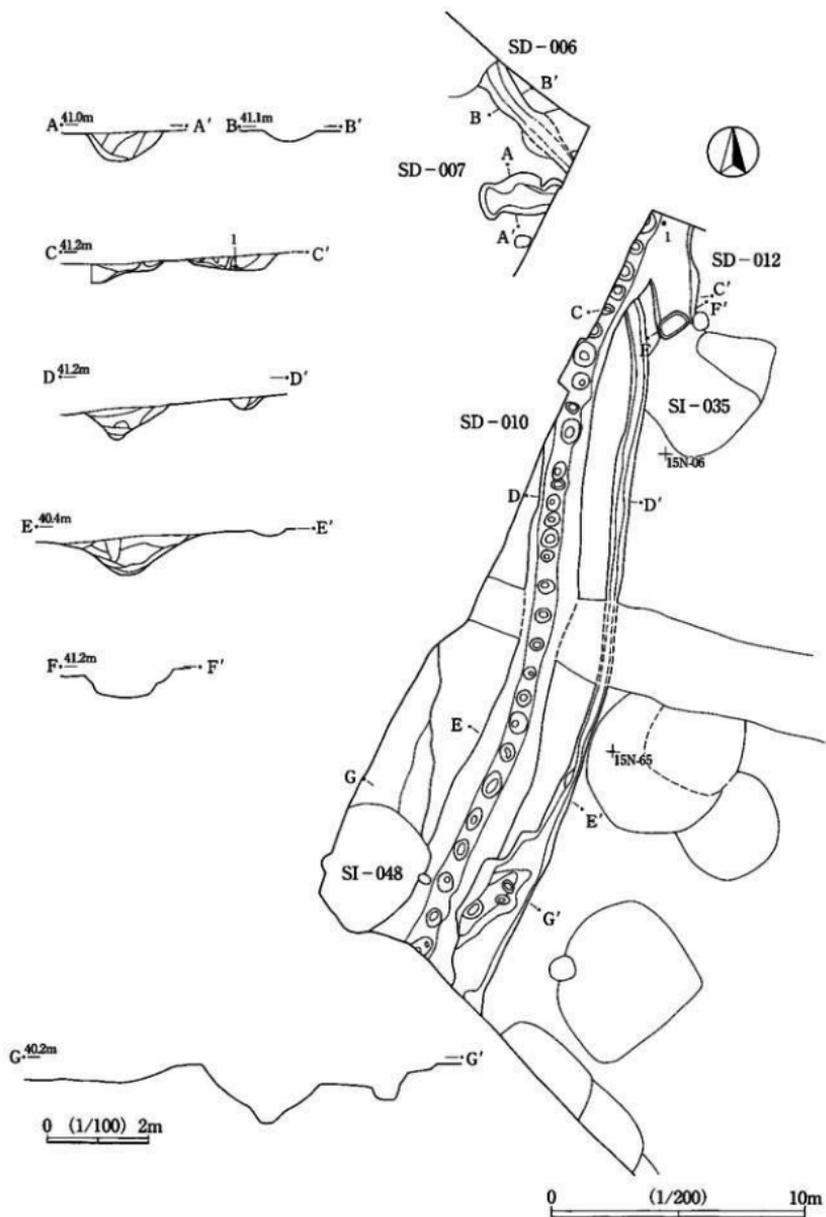
調査区中央付近で約 3.3m 検出された。幅は約 1.7m、深さは約 60cm、断面形は碗形である。検出された長さは短い。ほぼ東西方向と思われる。遺物の出土は少なく図示できる遺物は検出されなかった。

#### SD-010 (第84図, 図版28)

調査区中央付近で約 31m 検出された。幅は約 1.9m、深さは約 1.3m、断面形は碗形である。方向はほぼ



第83图 SD-001·002·003·004



第84圖 SD-006・007・010・012

南北で、底面に小土坑が規則的に掘られている。遺物の出土は少なく図示できる遺物は検出されなかった。

#### SD-011 (第85図, 図版28)

調査区中央付近で約36m検出された。幅は約3m、深さは約1m、断面形は皿形である。方向はほぼ東西でSD-013と合流する。ほぼ直線状に掘られている。東側は調査区外に伸びる。遺物の出土は少なく図示できる遺物は検出されなかった。

#### SD-012 (第84図)

調査区中央付近で約4.4m検出された。幅は約1.7m、深さは約30cm、断面形は逆台形に近い。検出された部分ではほぼ南北に掘られている。検出距離が短い。北側は調査区外に伸びる。遺物の出土は少なく図示できる遺物は検出されなかった。

#### SD-013 (第85図, 図版28)

調査区中央部～南部で約36m検出された。幅は約2.3m、深さ約15cmである。北側でSD-011と合流する。南側ではほぼ直角に曲がり調査区外に伸びる。遺物の出土は少なく図示できる遺物は検出されなかった。

#### SD-014 (第85図)

調査区中央付近で約15m検出された。方向は北東-南西でほぼ直線状に掘られる。幅は約1.6m、深さ約15cmである。遺物の出土は少なく図示できる遺物は検出されなかった。

#### SD-016 (第85図)

調査区中央付近で約11m検出された。方向は北東-南西でほぼ直線状に掘られている。幅は約2.1m、深さは約45cm、断面形は皿形である。遺物の出土は少なく図示できる遺物は検出されなかった。

#### SD-017 (第86図)

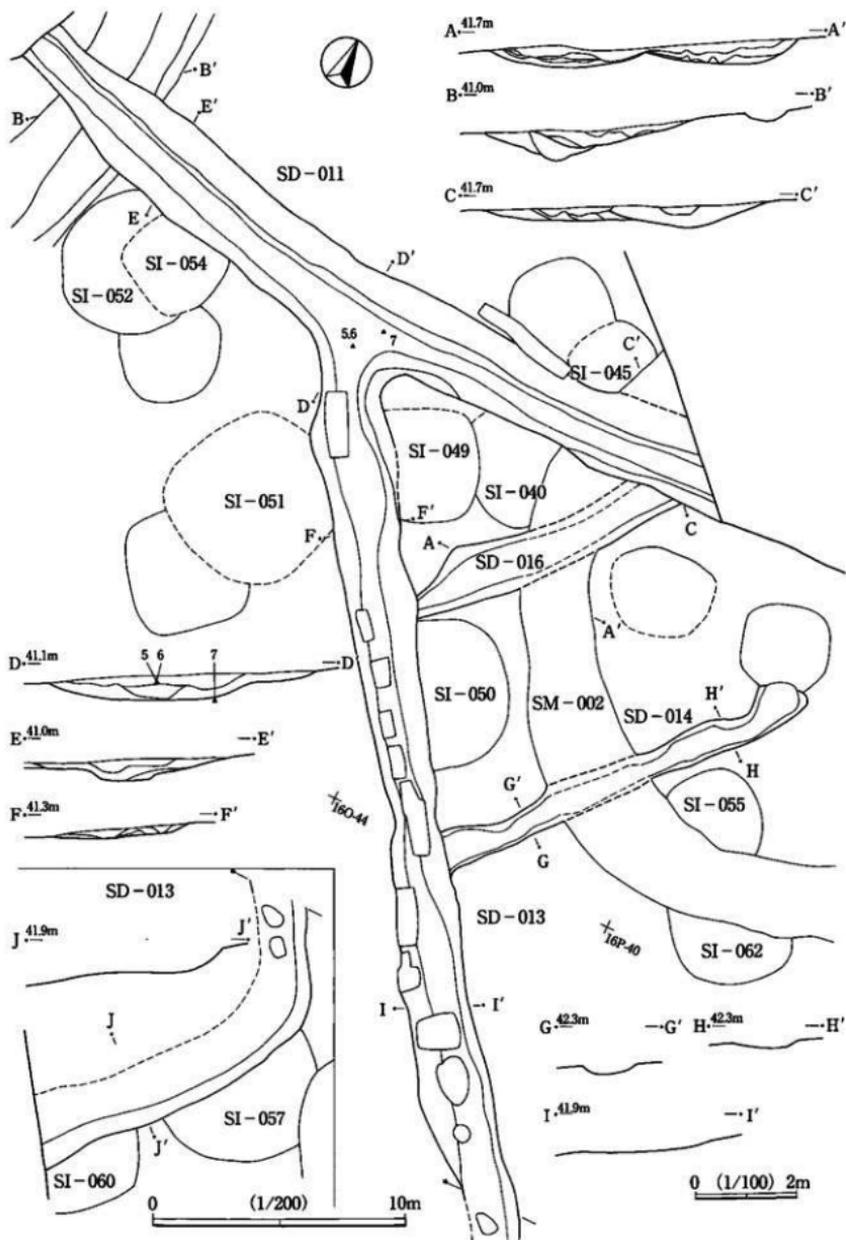
調査区南部で約34m検出された。方向は北西-南東にほぼ直線状に掘られている。幅は約0.6m～4m、深さ約40cm、断面形は逆台形である。遺物の出土は少なく図示できる遺物は検出されなかった。

#### SD-018 (第86図, 図版29)

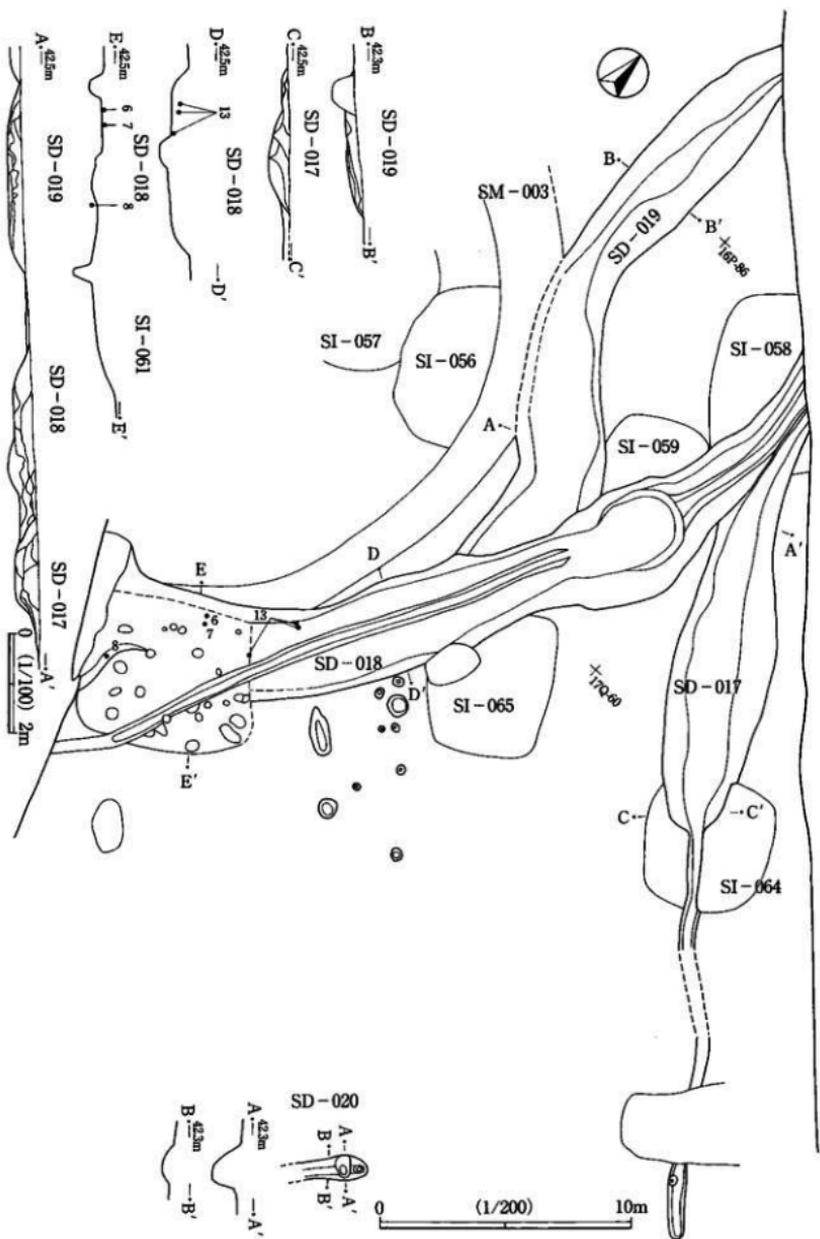
調査区南部で約35m検出された。方向は北東-南西に掘られている。両端は調査区外に延びる。幅は約1.4～3.7cm、深さ約60cm、断面形は逆台形である。伴出遺物は出土しなかった。

#### SD-019 (第86図, 図版29)

調査区南部で約23m検出された。緩い曲線状にはほぼ南北に掘られている。北端は調査区外に伸びる。幅は約3m、深さ約25cm、断面形は皿形である。遺物の出土は少なく図示できる遺物は検出されなかった。



第85圖 SD-011 · 013 · 014 · 016



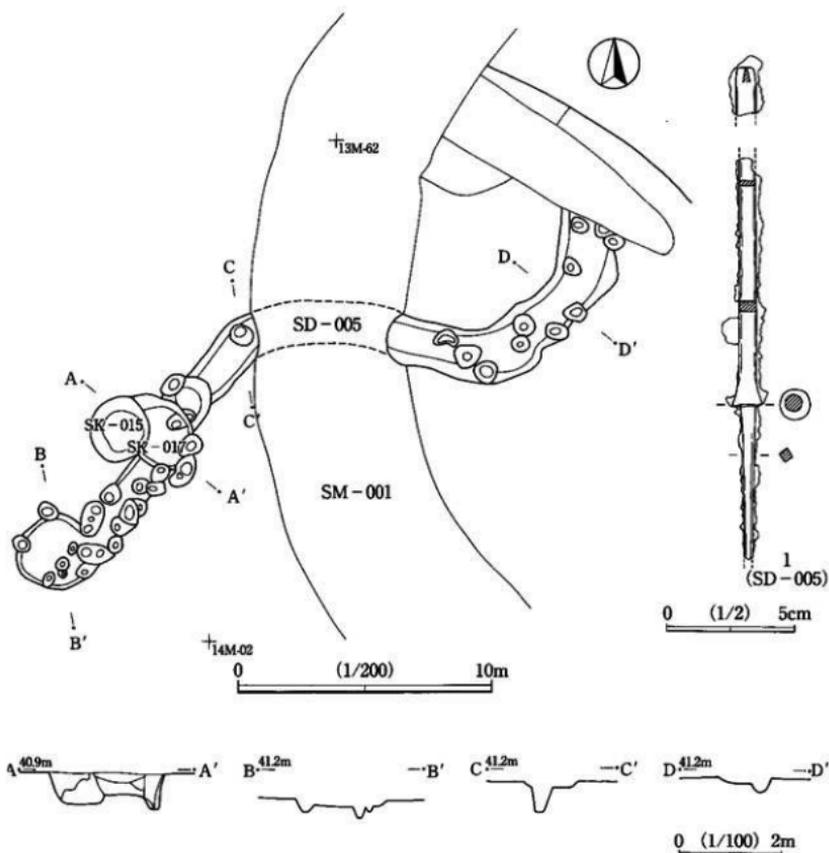
第86图 SD-017·018·019·020

SD-020 (第86図)

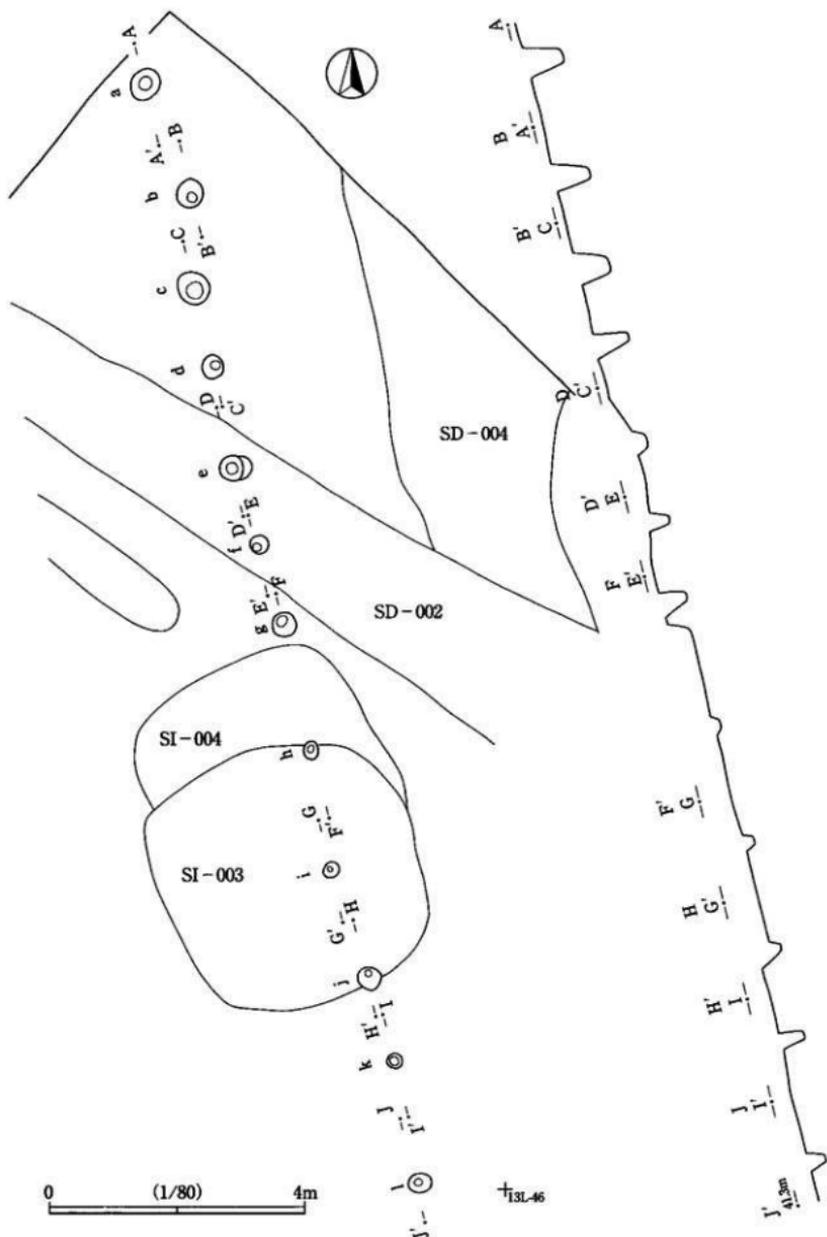
調査区南端部で約2.5m検出された。幅は約70cm、深さは約20cm、断面形は皿形である。北東端は収束している。遺物の出土は少なく図示できる遺物は検出されなかった。

横列-SK-010 a~1 (第88図)

13Lグリッドから検出された横列である。12基の土坑からなる。土坑の径は25cm~60cm、深さは30cm~60cmほどである。土坑間の距離はほぼ一定である。



第87図 SD-005・SK-015・017



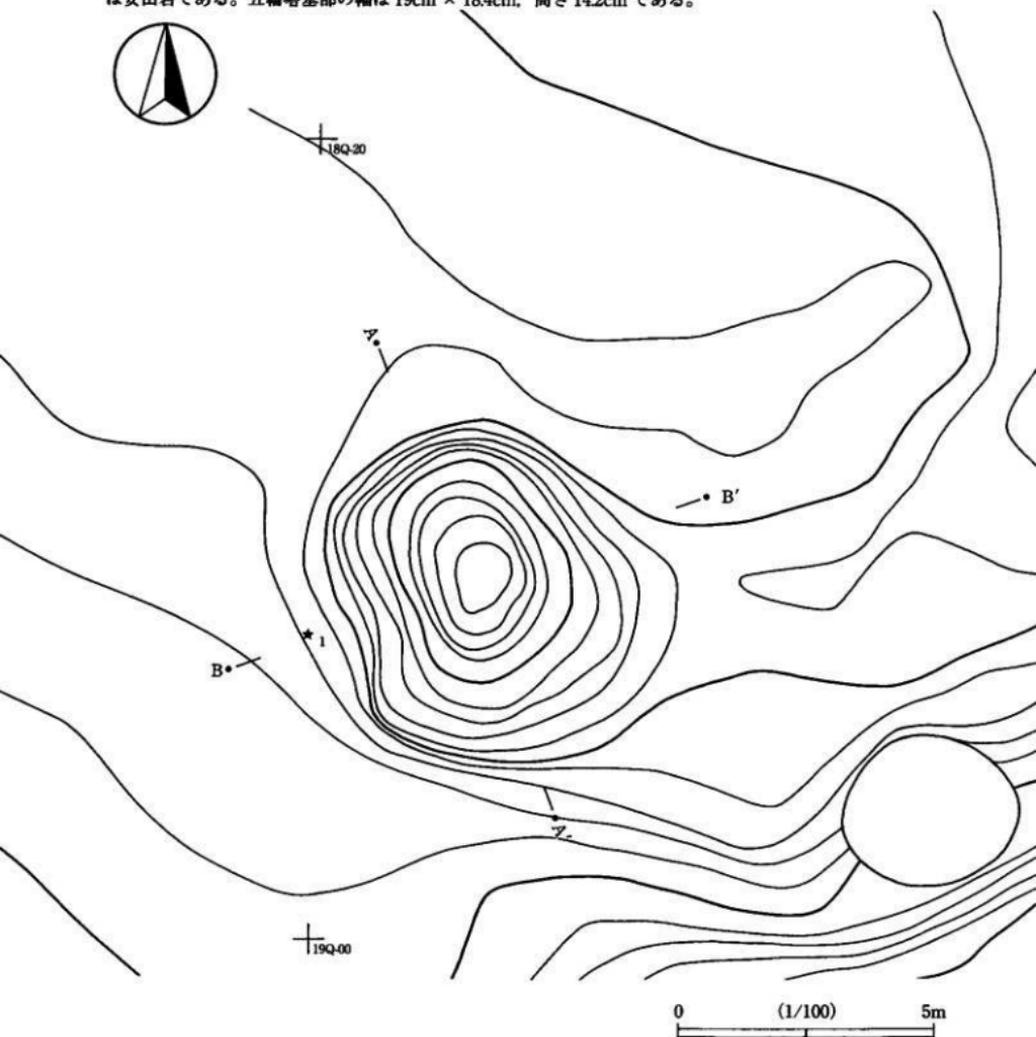
第88图 横列

#### 4 塚

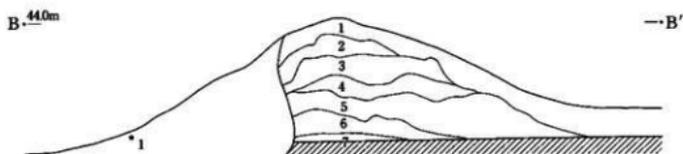
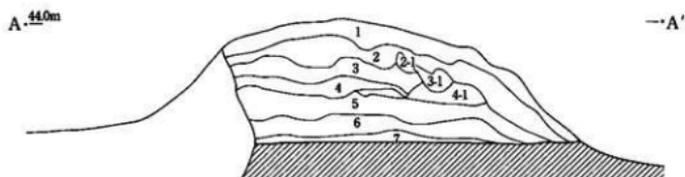
SM-004 (第89・90図, 図版31・43)

18Q グリッドから検出された塚である。南北7.2m, 東西5.8m, 高さ2.4m で平面形は長方形と思われる。

主軸は  $N - 30^\circ - W$  である。西側裾部 (図上★印) から石製五輪塔の火輪部のみが検出された。石材は安山岩である。五輪塔基部の幅は  $19\text{cm} \times 18.4\text{cm}$ , 高さ  $14.2\text{cm}$  である。



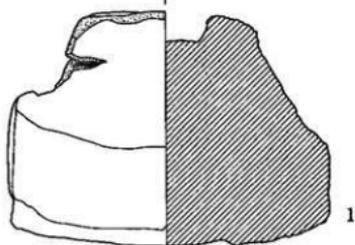
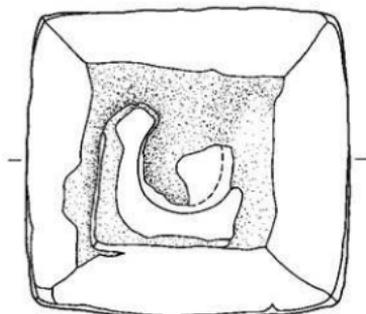
第89図 塚測量図



東上段 塚土層注記

- 1 暗褐色土 最の細かな土。粘性なし。
- 2 暗褐色土 径1mm~3mmのローム散在含む。
- 2-1 明褐色土 径10mm~40mmのロームブロックを多く含む。
- 3 明褐色土 径5mm~10mmのロームブロックを多く含む。
- 3-1 暗褐色土 ローム粒(径1mm)を多く含みさらさらしている。粘性なし。
- 4 黄褐色土 ロームを多量に含んだ層。
- 4-1 暗褐色土 径1mm~3mmのローム散在含む。
- 5 暗褐色土 径5mm~10mmのロームブロックが少し見られる。
- 6 明褐色土 細かなロームを含む。
- 7 黄褐色土 ローム層の中に少し暗褐色土が混じる。

0 (1/80) 4m



0 (1/3) 10cm

第90図 塚断面図、出土遺物

## 5 土坑

### SK-001 (第91図, 図版30)

13K-37 から検出された土坑である。形状は楕円形を呈する。長径は1.5 m, 短径は1.1 mである。深さは23cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形である。伴出遺物はなかった。

### SK-002 (第91図, 図版30)

13L-15 から検出された土坑である。形状は楕円形を呈する。中央に小ビットがある。長径は1.2 m, 短径は70cmである。深さは22cmを測る。断面形は皿形である。伴出遺物はなかった。

### SK-003 (第91図)

13M-54 から検出された土坑である。形状は隅丸長方形を呈する。長径は2.2 m, 短径は1.16 mである。深さは24cmを測る。断面形は逆台形で、底面は平坦である。伴出遺物はなかった。

### SK-004 (第91図)

13M-65 から検出された土坑である。形状は隅丸長方形を呈する。長径は1.7 m, 短径は70cmである。深さは30cmを測る。断面形は逆台形で、底面は平坦である。伴出遺物はなかった。

### SK-005 (第91図)

13K-27 から検出された土坑である。約半分は調査区外になり調査できなかった。形状は隅丸長方形を呈する。長径は残存長92cm, 短径は96cmである。深さは20cmを測る。断面形は逆台形で、底面は平坦である。伴出遺物はなかった。

### SK-007 (第91図)

14M-13 から検出された土坑である。形状はほぼ円形を呈する。長径は1 m, 短径は80cmである。最も深い位置は34cmを測る。伴出遺物はなかった。

### SK-008 (第91図)

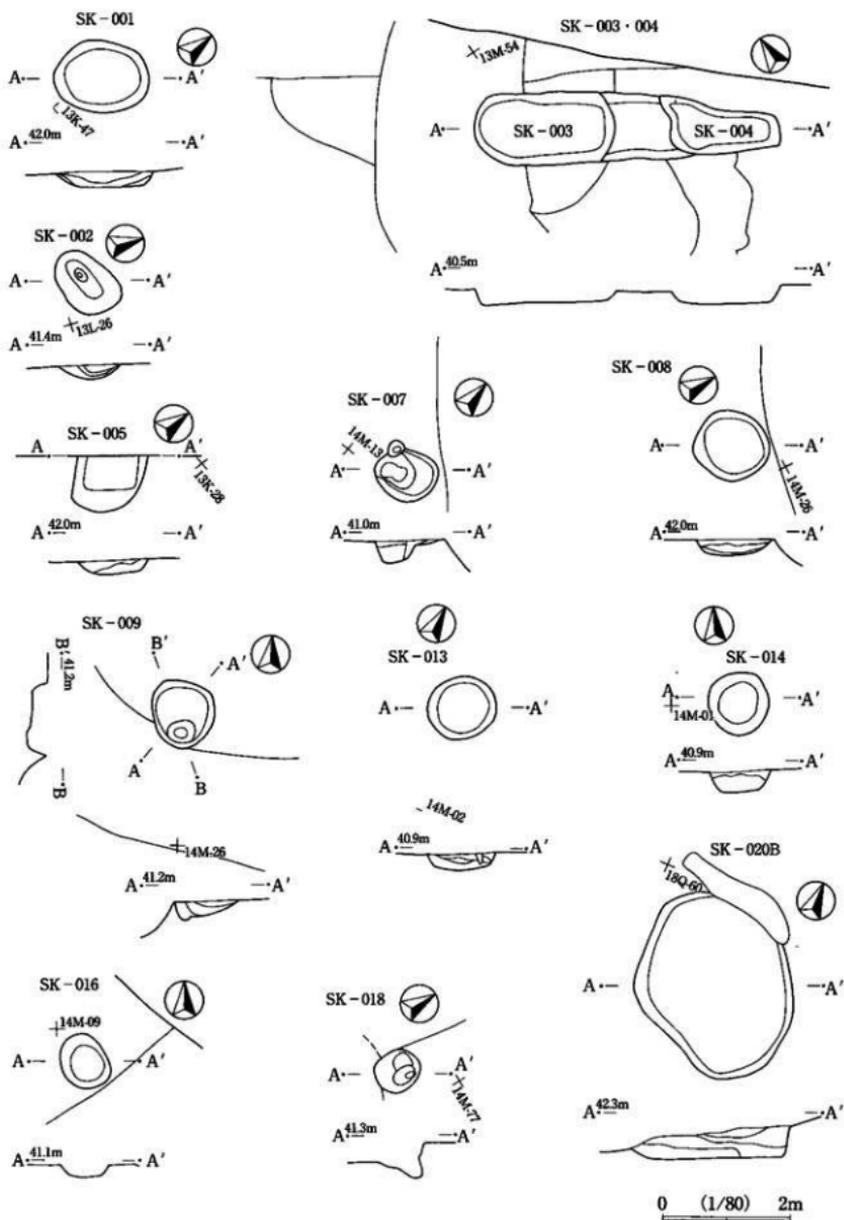
14M-25 から検出された土坑である。形状は円形を呈する。長径は1.2 m, 短径は1.12 mである。深さは26cmを測る。断面形は逆台形で、底面は平坦である。伴出遺物はなかった。

### SK-009 (第91図)

14M-16 から検出された土坑である。形状はほぼ円形を呈する。長径は1.05 m, 短径は1 mである。最も深い位置は32cmを測る。伴出遺物はなかった。

### SK-013 (第91図)

13M-92 から検出された土坑である。形状はほぼ円形を呈する。長径は1.08m, 短径97cmである。深さ



第91圖 土坑(1)

は25cm、断面形は逆台形を呈し底面は平坦である。伴出遺物はなかった。

SK-014 (第91図)

14M-01 から検出された土坑である。形状は円形を呈する。長径は97cm、短径は95cmである。深さは32cmを測る。断面形は逆台形で、底面は平坦である。伴出遺物はなかった。覆土は2層に分けられ、層境は水平だが凹凸がある。このことから人為的に埋め戻された可能性がある。

SK-016 (第91図)

14M-09 から検出された土坑である。形状は円形を呈する。長径は88cm、短径は75cmである。深さは20cmを測る。断面形は逆台形で、底面は平坦である。伴出遺物はなかった。

SK-018 (第91図)

14N-76 から検出された土坑である。形状はほぼ円形を呈する。長径は75cm、短径は60cmである。最も深い位置は58cmを測る。斜めに掘られている。伴出遺物はなかった。

SK-019 (第92図、図版30)

14O-70 から検出された土坑である。形状はほぼ円形を呈する。長径は2.8 m、短径は残存長1.8 mである。深さは48cmを測る。断面形は皿形で、底面は平坦である。土師器の壺片が検出された。

SK-020 B (第91図、図版30)

18Q-60 から検出された土坑である。形状は不整形円形を呈する。底部は平坦である。長径は3 m、短径は2.4 mである。深さは50cmを測る。伴出遺物はなかった。

SK-021 (第92図)

17P-78 から検出された土坑である。形状は不整形円形を呈する。長径は2.2 m、短径は1.4 mである。深さは45cmを測る。断面形は逆台形で、底面は平坦である。伴出遺物はなかった。

SK-024 B (第92図)

17Q-51 から検出された土坑である。形状は隅丸方状を呈する。長径は残存長1 m、短径は40cmである。最も深い位置は15cmを測る。伴出遺物はなかった。

SK-025 A (第92図)

17Q-80 から検出された土坑である。形状は隅丸長方形を呈する。中央部にピットがある。長径は1.5 m、短径は66cmである。深さは70cmを測る。断面形は逆台形で、底面は平坦である。伴出遺物はなかった。

SK-025 B (第92図)

17Q-70 から検出された3基の土坑である。ほぼ1直線に等間隔に並んで掘られている。長径は西から

56cm, 48cm, 41cm, 深さは25cm, 40cm, 60cmを測る。伴出遺物はなかった。

#### SK-027 (第92図)

18P-45から検出された土坑である。形状は楕円形を呈する。長径は2.06 m, 短径は1.2 mである。深さは36cmを測る。伴出遺物はなかった。

#### SK-031 (第92図)

14M-18から検出された土坑である。形状は楕円形を呈する。長径は0.7 m, 短径は0.5 mである。深さは0.28 mを測る。伴出遺物はなかった。

#### SK-032 (第92図)

14N-53から検出された土坑である。形状は隅丸方形を呈する。長径は0.64 m, 短径は0.42 mである。最も深い位置は0.26 mを測る。伴出遺物はなかった。

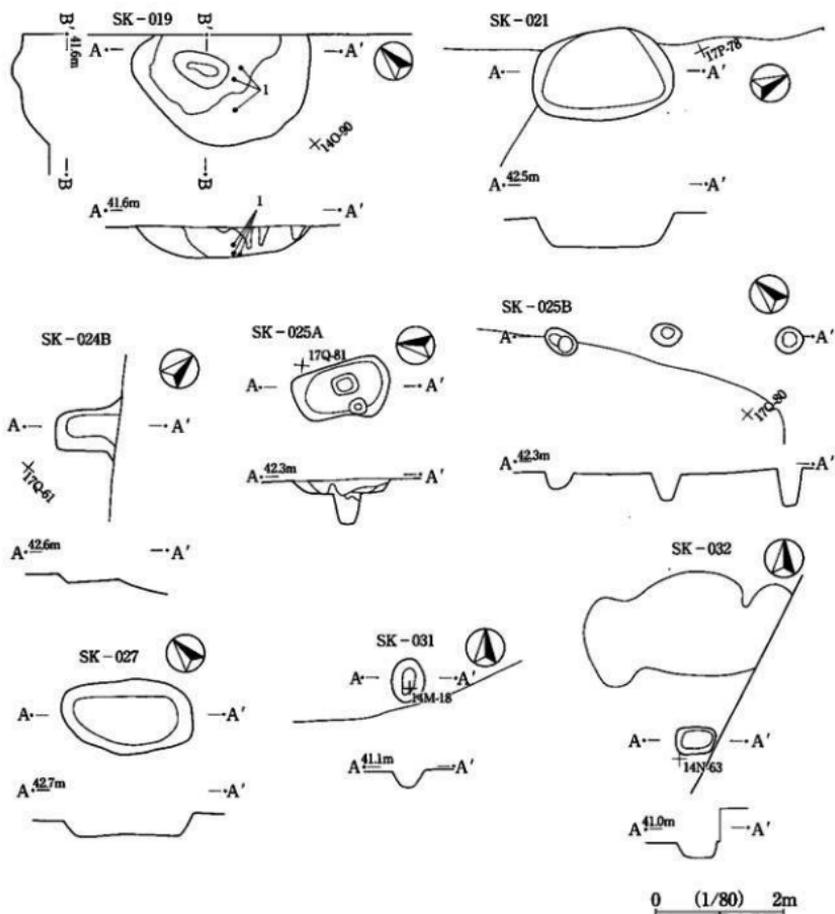
## 6 遺構外出土遺物

### 土器 (第93図, 図版43)

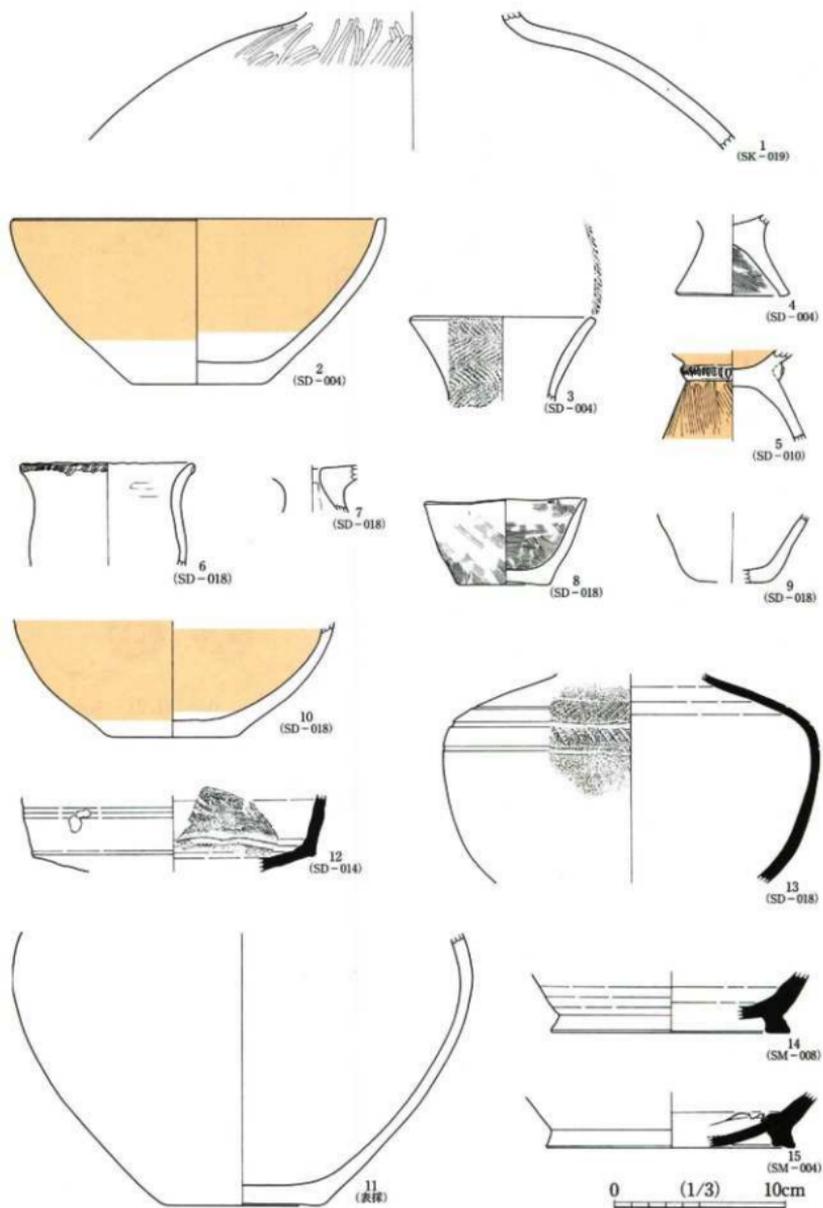
1はSK-019から出土した土師器の壺胴部である。復元器高は8.3cmである。内面ナデ, 外面ミガキ調整され, 色調は内面橙色, 外面明赤褐色, 胎土は密で焼成も良好である。2~4はSD-004から出土した。2は土師器の鉢である。口径22cmである。内外面ともヘラミガキ調整され, 内外面赤彩されている。胎土は密で焼成も良好である。3は土師器の器台と思われ口縁部に縄文が施されている。復元口径は11.0cmである。4は土師器の台付甕の台部である。底径6.7cm, 色調は内外面にぶい褐色を呈し外面ナデ内面はハケ調整し焼成も良好である。5はSD-010から出土した弥生土器の高坏である。残存器高5.4cm内外面ミガキ調整され, 坏部内面と外面が赤彩されている。胎土は密で焼成も良好である。6~9はSD-018から出土した。6は土師器の甕である。復元口径10cm, 内面ミガキ, 外面ナデ調整され色調は内外面とも明赤褐色を呈し胎土は密焼成も良好である。7は遺存状態はよくないが土師器の器台と思われる。8は土師器の鉢のミニチュアである。完形に近く口径は9.5cmである。9は土師器のミニチュア土器の鉢で復元底径4.5cmである。内外面とも細かいハケ調整されている。10はSD-018から出土した土師器の甕である。底径7.5cmを測る。内外面ミガキ調整され, 色調は内外面明赤褐色, 内外面に赤彩が観察された。胎土は密で焼成も良好である。11は表採された土師器の甕である。内面ナデ, 外面ミガキ調整され, 色調は内面橙色, 外面赤褐色からぶい黄橙色, 胎土は密で焼成も良好である。12~15は須恵器である。12はSD-014から出土した盤である。底部・口縁部を欠損する。13はSD-018から出土した短頸壺である。口縁部, 底部を欠損する。14はSD-008から出土した壺の底部である。底部の1/3が遺存する。15はSM-004から出土した壺の底部である。

### 出土金属製品・土製品 (第94図, 図版44・45)

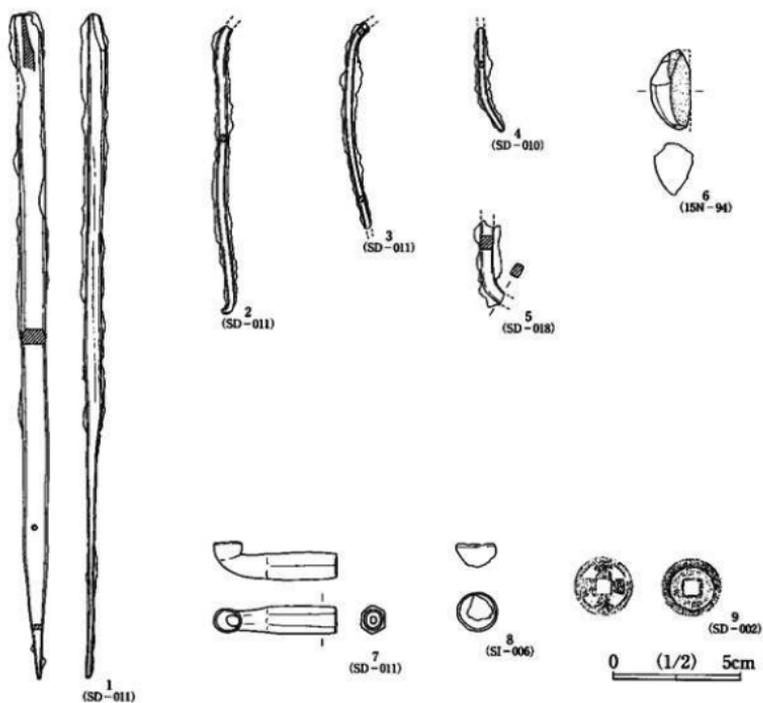
1~5は鉄製品である。1はSD-011から出土した。長さ26.7cmの棒状の鉄製品である。2はSD-011から出土した。残存長11.5cmの棒状の鉄製品である。3はSD-011から出土した。4はSD-010から出土



第92图 土坑(2)



第93図 遺構外出土遺物(1)

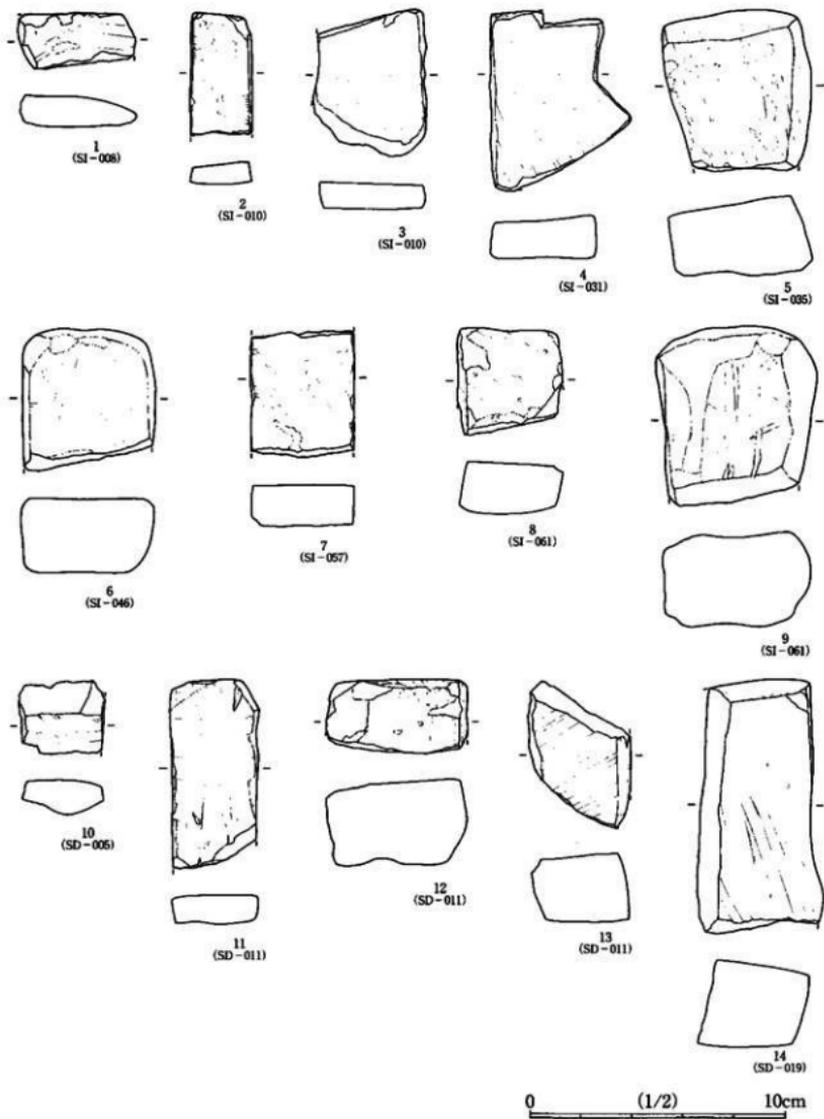


第94図 遺構外出土遺物(2)

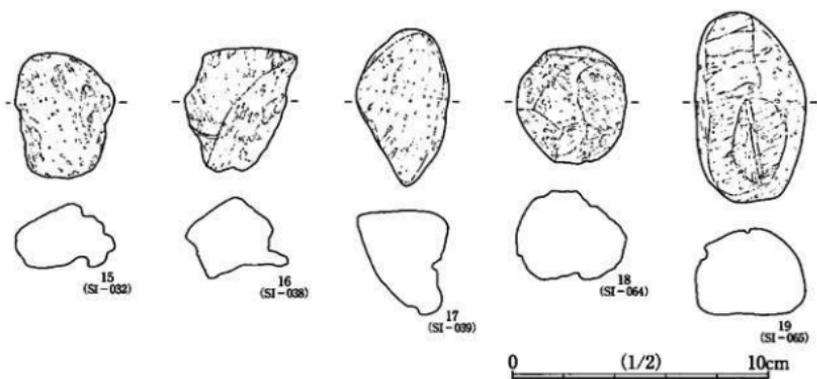
した棒状の鉄製品である。残存長 4.5cm である。5 は SD-018 から出土した鉄軸部と思われる。残存長 3.3cm である。6 は 15N-94 グリッドから出土した土玉である。割れてしまっており遺存度はよくないが中心部にひも通しの孔の一部が残る。7 は SD-011 から出土した煙管の雁首部である。8 は SI-006 から出土した煙管の火皿部と思われる。9 は SD-002 から出土した寛永通宝である。

#### 石製品 (第95・96図, 図版33)

1～14 は砥石である。1～9 は住居跡出土である。1 は SI-008 から出土した。溝状の擦痕が見られる。2, 3 は SI-010 出土で 2 に溝状の擦痕, 3 は全面に炭化物の付着が見られる。4 は SI-031 出土で幅 30mm ほどの浅い皿状の凹みを有す。5 は SI-035 出土で筋状の擦痕が見られる。6 は SI-046 出土で幅 30mm ほどの浅い凹みが見られる。7 は SI-057 出土, 全面火熱を受けている。8, 9 は SI-061 出土, 双方共溝状擦痕を有す。10 は SD-005 出土, 火熱痕が見られる。11～13 は SD-011 出土, 11 は鉄分の付着が, 12 は V 字溝状擦痕が, 13 は溝状擦痕が見られる。14 は SD-019 出土である。15～19 は軽石である。いずれも住居跡から出土している。砥石として使用された可能性がある。15, 16 には平坦面が見られる。15 は SI-032 から, 16 は SI-038 から, 17 は SI-039 から, 18 は SI-064 からそれぞれ出土した。円形状を呈するが平坦面を数面持つ。19 は SI-065 からの出土で, V 字溝状擦痕が見られる。



第95図 遺構外出土遺物(3)



第96図 遺構外出土遺物(4)

## 第5節 まとめ

今回の調査は、東上泉遺跡としては初の調査となる。調査前の本遺跡の現状は畑地や宅地の所在する台地上に立地し、畑地からは土師器が表面採集され、奈良・平安時代の包蔵地として遺跡台帳に登録されている。発掘調査の結果、各時代にわたる人々の生活の営みが確認できた。

### 旧石器時代

旧石器時代は、確認調査では出土遺物は認められなかった。掲載した石器は縄文時代以降の遺構精査の中で出土したものであり、原位置を保っている資料ではない。したがって石器製作地点があったかどうかは不明である。弥生時代から古墳時代にかけてのかなり密集した集落形成の中で攪乱を受けた結果と考えられる。

### 縄文時代

縄文時代の遺構は、炉穴3基と陥穴5基である。いずれも縄文時代早期に帰属する。

炉穴の検出は、遺跡内および周辺での縄文時代早期の集落の存在を想起させるものである。今後、周辺の調査において住居跡が検出される可能性があろう。

### 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代後期から古墳時代前期に帰属すると思われる住居跡は66軒検出されている。

全体的にかなり密集した状況であり、特に調査区北部において重複する住居が多い。今回の調査は広大な東上泉遺跡の一部に長大なトレンチを入れたことになり、周辺の未調査部分にはかなりの堅穴住居跡が存在することが想定される。君津地域における弥生時代後期から古墳時代前期の集落を考える上で重要な資料を提供することとなった。しかしながら住居跡間における出土遺物量の差は著しく、中には遺物の出土が皆無に近い住居跡もあり明確な時期を特定できないものも多い。

単独で検出された住居は66軒中21軒、約32%である。それ以外はなんらかの重複関係が認められる住居であり、66軒中45軒は重複している。重複の内容を見てみると、他の1軒との重複例14例、SI-009・013・018・023・052・053・054は他の2軒それぞれと重複している。SI-015・027・030・031は他の3軒との重複例、SI-026は他の4軒との重複例、SI-010のように他の5軒と重複する例も1例ある。

#### 1 検出された住居の規模について

主軸の長さが判明している住居の規模を分類してみると次のようになる。

3.0m未満	………1軒	5.0m～5.5m未満	……9軒
3.0m～3.5m未満	……1軒	5.5m～6.0m未満	……4軒
3.5m～4.0m未満	……8軒	6.0m～6.5m未満	……4軒
4.0m～4.5m未満	……7軒	6.5m以上	………4軒
4.5m～5.0m未満	……9軒		

規模が最も小さい住居は遺跡中央部に位置するSI-021、最大は遺跡南部に位置するSI-056である。4.5m

～5.5mの規模が33軒（50%）である。

## 2 住居の形態について

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡の形態は、小判形→隅丸方形→方形と変化することが知られている。しかし東上泉遺跡の竪穴住居跡の形態を見てみると必ずしも3分類では分けきれない中間型の住居が見られる。住居が全掘されているか、壁の遺存がよく住居形態が類推可能な30軒について分類を行ってみた。

弥生土器を主たる出土遺物とする住居跡では形態の基本形は楕円形と思われる。5軒が該当する。規模の違いから2種類に分けられる。（ ）内は主軸の長さで単位はm、アンダーラインのあるものは復元値である。なお太字は焼失住居である。

楕円形（大）	3軒	大SI-029 (6.0)・SI-012 (6.2)・SI-024 (6.4)
楕円形（小）	2軒	SI-055 (3.9)・SI-033 (4.1)

土師器を主たる出土遺物とする住居跡は5分類できる。円形と隅丸方形の中間形には規模に大小が見られる。規模の違いも考慮すると6分類になろうか。

楕円形	6軒	SI-038 (4.4)・SI-002 (4.7)・SI-043 (5.0)・SI-063 (5.4) SI-031 (5.6)・SI-056 (6.7)
隅丸長方形	3軒	SI-036 (4.6)・SI-044 (4.9)・SI-065 (5.8)
円形と隅丸方形の中間	7軒	大SI-004 (4.0)・SI-039 (4.0)・SI-003 (4.2)・SI-008 (4.5) SI-025 (5.2) 小SI-028 (3.4)・SI-046 (3.5)・SI-011 (3.7)
隅丸方形	3軒	SI-026 (4.5)・SI-018 (4.8)・SI-001 (5.6)
方形	5軒	SI-034 (3.9)・SI-030 (5.0)・SI-020 (5.4)・SI-019 (5.5) SI-032 (6.5)

各形態の住居群の中に他の住居と比べ規模の大きい住居が存在する群がある。

土師器を出土する住居群中楕円形グループのSI-056、隅丸長方形グループのSI-065である。これらがある時期の集落の中心的な住居であった可能性がある。円形と隅丸方形の中間形ではSI-025、隅丸方形ではSI-001、方形グループではSI-032が他に比し規模が大きい。これら形態の変遷が時期差を表している可能性は考えられる。形態の変遷とは別次元になるが、各形態ごとに焼失住居が1～2軒存在する。集落全体が火災にあうような状況は見られなかったようである。

## 3 住居内の炉の位置について

66軒中47軒から炉が検出されている。炉の位置を整理すると次のようになる。

- ①北壁寄り中央……40軒、②南壁寄り……2軒、③西側壁際……2軒、  
④東壁寄り……1軒、⑤住居中央……1軒、不明……1軒である。

住居北壁寄り中央に炉を設ける住居が圧倒的に多いが、南壁寄りや西側壁際、東壁寄りに炉を設けている住居が計5軒ある。

・南壁寄り中央に炉を設けている住居はSI-026とSI-057の2軒である。

SI-026は遺跡中央部に位置する住居跡で、平面形は隅丸方形、完形1点を含む土師器の甕4点とミニチュア土器1点が出土している。主軸は北に対し20°東に傾く。本遺跡で主軸が東にふれる住居はSI-026を含め3軒検出された。

SI-057は遺跡南部に位置する住居跡で、北西側1/3を溝により失っているが平面形は楕円形と思われる。弥生土器の甕・壺・鉢等が出土している。炉は他の住居に比べやや小さい。主軸方位は不明。

・西側に炉を持つ住居はSI-032とSI-052の2軒である。

SI-032は遺跡中央部に位置しSI-034を拡張した住居とされている。平面形は方形で土師器の鉢と高坏が出土している。焼失住居である。SI-034は北辺寄りに炉を設けている。拡張後何らかの理由で炉を南西壁寄りに設けたのであろう。炉の位置が壁に非常に近い。主軸方位は130°西に振れ、振れ幅が大きい。

SI-052は遺跡中央部に位置しSI-054と重複する。平面形は楕円形で炉はやや小さい。主軸方位は不明である。

・住居中央に炉を設けているのはSI-019であり、遺跡中央部から検出され全体の2/3は未検出である。平面形は隅丸方形か。土師器の甕・壺など6点の遺物が出土している。主軸は41°西に振れる。

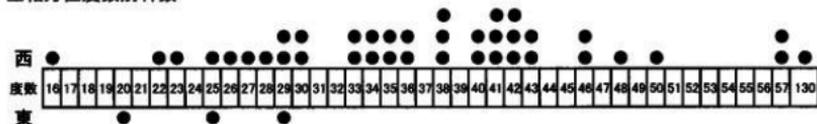
・住居東壁寄りに炉を設けるのはSI-064であり遺跡南端に位置する。平面形は楕円形と思われ土師器が出土している。主軸は北に対し55°東に振れる。

集落内の住居配置、地形の制約等が考えられる。

#### 4 主軸方位について

炉と壁の遺存する住居の主軸方位を分類するとグラフのようになる。概ね北に対し22°～50°西の範囲であり38°～43°付近に集中が見られる。東に振れる住居は3軒ありSI-010, SI-026, SI-064である。他はすべて西に振れる。振れ幅は、最小N 16° W, 最大はS 50° Eである。N 57° Wも2軒存在するが大方の住居と比べると振れ幅が大きい。N 16° Wは遺跡中央部に位置するSI-046 (楕円形), N 57° Wは中央部に位置するSI-022 (楕円形)とSI-031 (楕円形), S 50° Eは中央部に位置するSI-032 (方形)でありSI-034の拡張である。034はN 40° Wだが拡張後南西壁寄りに炉を設けた関係で主軸が大きく振れることとなった。

主軸方位度数別軒数



#### 古墳時代後期

東上泉の集落も古墳時代前期をもって終わりを迎える。

古墳時代後期になると調査区一帯は墓域化され、古墳が築造されることになる。調査区内からは3基の古墳周溝が検出された。いずれも円墳である。墳丘が畑地で削平されていたため古墳の存在は知られていなかった。調査区外からさらに古墳が検出される可能性が高い。古墳中ではSM-003が最も大きく周溝内側での直径は、復元値で23mほどである。いずれの古墳からも埋葬施設は検出されなかった。

#### 平安時代

平安時代の住居跡が1軒検出されている。台地の端部に単独で存在しており通常の住居とは考えにくい。今後周辺の発掘調査により正しく単独であるか否か明らかになることを期待したい。

第1表 選構一覧表

番号	選構番号	グリッド	種別	電・炉	形	遺物	主軸・方向	単位価 (億円)			遺構状況		
								長径・長さ	幅・幅	深さ			
1	12	SI-001	13K-58	住居跡	伊	圓丸方形	竪2・ヤリガシナ	N-33°-W	5.6	5.3	0.10	SI-014	
2	13	SI-002	13L-21	住居跡	伊	楕円形	竪・鉢2	N-30°-W	4.7	4.4	0.25	SI-004	
3	14	SI-003	13L-13	住居跡	伊	楕円形	竪4・竪6・鉢・竪台2	N-22°-W	4.2	4.0	0.30	SI-004	
4	14	SI-004	13L-03	住居跡	伊	楕円形	竪遺物なし	N-26°-W	(4.0)	3.7	0.30	SI-003	
5	16	SI-005	14L-03	住居跡	伊	不明	竪4	不明	—	—	—	SI-026	
6	17	SI-006	12L-80	住居跡	—	方形	竪・高坏・竪台	煙管	不明	—	5.5	0.11	SI-007
7	18	SI-007	12L-71	住居跡	—	楕円形	竪遺物なし	不明	—	5.3	0.56	SI-006	
8	19	SI-008	13M-20	住居跡	伊	楕円形	刀子・鉄鏝・磁石	N-36°-W	4.5	4.3	0.10	SI-012	
9	20	SI-009	13L-79	住居跡	—	長方形	竪遺物なし	不明	3.9	2.9	0.06	SI-10-13	
10	21	SI-010	13L-88	住居跡	—	長方形	磁石	N-25°-E	(4.4)	4.1	0.05	SI-9,13,15,27	
11	23	SI-011	14N-30	住居跡	伊	楕円形	竪・竪2・鉢2・竪台	N-23°-W	3.7	3.5	0.11/0.18	SI-030	
12	24	SI-012	13L-18	住居跡	伊	楕円形	竪・鉢	N-50°-W	6.2	(5.4)	—	SI-008	
13	25	SI-013	13L-79	住居跡	伊	楕円形	竪	N-38°-W	5.0	(5.0)	0.29	SI-9,10	
14	26	SI-014	13K-39	住居跡	—	不明	竪2・竪	不明	—	3.8	0.05	SI-001	
15	22	SI-015	13L-97	住居跡	—	長方形	竪遺物なし	N-29°-E	3.6	3.0	0.07	SI-10,26,27	
16	27	SI-016	13M-42	住居跡	—	楕円形	竪遺物なし	不明	5.4	—	0.08	—	
17	28	SI-017	12L-65	住居跡	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	
18	29	SI-018	14M-23	住居跡	伊	圓丸方形	高坏・竪2	N-38°-W	4.8	4.7	0.23	SI-23,31	
19	30	SI-019	14L-59	住居跡	伊	方形	竪・竪・高坏・竪台2	N-41°-W	—	5.5	0.25	SI-020	
20	31	SI-020	14M-51	住居跡	伊	方形	高坏・竪台	N-46°-W	—	5.4	0.11	SI-19,21	
21	32	SI-021	14M-42	住居跡	伊	楕円形	竪遺物なし	N-51°-W	2.9	(2.8)	0.14	SI-020	
22	33	SI-022	14N-10	住居跡	伊	楕円形	竪・竪	N-57°-W	4.5	—	0.24	—	
23	34	SI-023	14M-24	住居跡	伊	楕円形	竪遺物なし	N-42°-W	4.7	4.7	0.08	SI-18,31	
24	35	SI-024	14N-70	住居跡	伊	楕円形	竪7・竪4・鉢2・竪台	N-38°-W	6.4	6.0	0.42	—	
25	38	SI-025	14M-57	住居跡	伊	楕円形	竪2・竪・鉢	N-42°-W	5.2	5.0	0.19	SI-030	
26	39	SI-026	13L-85	住居跡	伊	圓丸方形	竪4・ミニチュア	N-20°-E	4.5	(4.4)	—	SI-10,15,27	
27	40	SI-027	13L-76	住居跡	伊	楕円形	竪遺物なし	N-46°-W	(3.7)	3.5	0.28	SI-10,15,26	
28	41	SI-028	14M-55	住居跡	—	楕円形	竪	不明	(3.4)	3.4	0.30	SI-031	
29	42	SI-029	14L-36	住居跡	伊	楕円形	竪2・高坏	N-35°-W	6.0	(5.2)	0.44	—	
30	43	SI-030	14M-37	住居跡	伊	方形	竪台	N-30°-W	5.0	(5.0)	0.20	SI-11,25,31	
31	44	SI-031	14M-34	住居跡	伊	楕円形	竪3・磁石	N-57°-W	5.6	5.0	0.63	SI-28,30	
32	45	SI-032	14M-73	住居跡	伊	方形	鉢・高坏	S-50°-W	6.5	6.0	—	SI-033	
33	47	SI-033	14M-76	住居跡	伊	楕円形	竪台	N-40°-W	4.1	3.8	0.41	SI-032	
34	46	SI-034	14M-83	住居跡	伊	方形	高坏	N-40°-W	3.9	3.7	—	—	
35	48	SI-035	16N-04	住居跡	伊	不整形楕円形	竪・ミニチュア・磁石	N-35°-W	5.6	5.2	0.30	—	
36	49	SI-036	1 4 N-86	住居跡	伊	楕円形	竪遺物なし	N-43°-W	4.6	(3.9)	0.20	—	
37	50	SI-037	16N-15	住居跡	—	楕円形	竪遺物なし	不明	(4.8)	—	0.24	SI-041	
38	51	SI-038	15N-18	住居跡	伊	楕円形	鉢	N-33°-W	4.4	4.2	0.30	—	
39	52	SI-039	15O-23	住居跡	伊	圓丸長方形	竪3・竪台・台形土器	N-48°-W	4.0	4.0	0.05	SI-045	
40	53	SI-040	15O-64	住居跡	—	不明	竪・鉢	不明	—	—	0.05	SI-049	
41	50	SI-041	16N-35	住居跡	—	楕円形	竪・鉢2・竪台	不明	—	—	—	SI-37,42	
42	50	SI-042	16N-45	住居跡	—	楕円形	竪遺物なし	不明	—	—	—	SI-041	
43	54	SI-043	16N-38	住居跡	伊	楕円形	竪	N-36°-W	5.0	4.5	0.14	—	
44	55	SI-044	16N-08	住居跡	伊	圓丸長方形	竪・竪・鉢2・竪台2	N-41°-W	4.9	4.6	0.12	SI-051	
45	56	SI-045	15O-35	住居跡	伊	楕円形	竪・鉢	不明	—	—	0.06	SI-039	
46	57	SI-046	15O-70	住居跡	伊	楕円形	竪・磁石	N-16°-W	(3.5)	3.4	0.08	—	
47	58	SI-047	15O-77	住居跡	伊	楕円形	竪3・竪4	不明	—	—	0.24	—	
48	59	SI-048	15N-80	住居跡	伊	不明	竪遺物なし	不明	—	—	—	—	
49	60	SI-049	15O-72	住居跡	伊	楕円形	竪・竪3	N-29°-W	—	—	0.10	SI-040	
50	61	SI-050	16O-04	住居跡	伊	楕円形	竪遺物なし	N-34°-W	5.4	(5.4)	0.32	—	
51	62	SI-051	15N-89	住居跡	伊	不明	竪遺物なし	不明	—	—	—	SI-044	
52	63	SI-052	15N-65	住居跡	伊	楕円形	竪遺物なし	不明	5.3	(5.3)	0.16	SI-53,54	
53	64	SI-053	15N-77	住居跡	—	楕円形	竪遺物なし	不明	(3.8)	3.8	0.10	SI-52,54	
54	65	SI-054	15N-56	住居跡	伊	不明	竪	不明	—	—	—	SI-53	
55	66	SI-055	16P-00	住居跡	伊	楕円形	竪3	N-42°-W	(3.9)	(3.9)	0.20	—	
56	67	SI-056	17P-33	住居跡	伊	楕円形	竪・竪・竪台2	N-28°-W	6.7	(6.9)	0.28	SI-057	
57	68	SI-057	17P-22	住居跡	伊	楕円形	竪3・竪・高坏・ミニチュア・磁石	不明	(6.0)	(6.0)	0.12	SI-056	
58	69	SI-058	16P-87	住居跡	—	楕円形	竪遺物なし	不明	(7.0)	—	0.10	—	
59	70	SI-059	17D-17	住居跡	伊	楕円形	竪遺物なし	N-25°-W	—	—	0.08	—	
60	71	SI-060	17O-69	住居跡	—	楕円形	竪遺物なし	不明	(6.9)	—	0.25	—	
61	72	SI-061	18P-12	住居跡	—	楕円形	磁石	不明	—	—	—	—	
62	73	SI-062	16P-31	住居跡	伊	楕円形	竪遺物なし	N-43°-W	—	—	0.07	—	
63	74	SI-063	17O-92	住居跡	伊	楕円形	竪5・竪2	N-29°-W	5.4	4.9	0.15	—	
64	75	SI-064	17O-64	住居跡	伊	楕円形	竪・竪	N-55°-E	5.3	5.0	0.10	—	
65	76	SI-065	17P-77	住居跡	伊	圓丸長方形	高坏	N-34°-W	5.8	4.7	0.06	—	
66	77	SI-067	18P-48	住居跡	電・伊	長方形	竪2・竪4・竪1	N-27°-W	4.4	3.8	0.14	—	
67	78	SI-069	14L-09	住居跡	伊	不明	竪遺物なし	不明	—	—	—	—	
68	83	SD-001	12L	溝	—	直線状	竪遺物なし	北西—南東	6.4	0.8	0.5	—	
69	83	SD-002	12L	溝	—	直線状	鉄釘・結實	北西—南東	30.0	2.4	0.2	—	
70	83	SD-003	13LM	溝	—	直線状	竪遺物なし	東西	3.8	1.2	0.2	—	
71	83	SD-004	12L	溝	—	弧状状	台付竪・鉢・竪台	南北	8.1	2.6	0.2	—	
72	87	SD-005	12K-13M	溝	—	蛇行	鉄鏝・磁石	—	29.0	1.8	0.1	—	
73	84	SD-006	14N	溝	—	—	竪遺物なし	北西—南東	3.0	0.8	0.2	—	
74	84	SD-007	14N	溝	—	—	竪遺物なし	東西	3.3	1.7	0.6	—	
75	84	SD-010	14 15N	溝	—	ほぼ直線状	高坏・棒状鉄鏝	南北	31.0	1.9	1.3	—	
76	85	SD-011	15NO	溝	—	ほぼ直線状	棒状鉄鏝・煙管・磁石	東西	36.0	3.0	1.0	—	

番号	構図番号	道幅番号	グリッド	種別	電・伊	形	遺物	主軸・方向	単位m			遺復状況
									長軸	短軸	深さ	
77	84	SD-012	14N	溝		—	実測遺物なし	南北	4.4	1.7	0.3	
78	85	SD-013	150-170	溝		ほぼ直線状	実測遺物なし	北西-南東	36.0	2.3	0.2	
79	85	SD-014	15P-160	溝		直線状	鉄	北東-南西	15.0	1.6	0.2	
80	85	SD-016	150	溝		直線状	実測遺物なし	北東-南西	11.0	2.1	0.5	
81	86	SD-017	170	溝		ほぼ直線状	実測遺物なし	北西-南東	34.0	0.6-4	0.4	
82	86	SD-018	17P	溝		ほぼ直線状	灰・砂・器台・鉄鏝	北東-南西	35.0	1.4-3.1	0.6	
83	86	SD-019	16-17P	溝		—	礎石	—	23.0	3.0	0.3	
84	86	SD-020	180	溝		—	礎石	南北+カーブ	—	2.5	0.7	0.2
85	8	SK-023	16P-23	伊穴	伊	楕円形	実測遺物なし	N-24°-E	3.5	2.0	0.8	
86	8	SK-024A	170-42	伊穴	伊	楕円形	実測遺物なし	N-25°-W	2.0	(0.8)	0.2	
87	8	SK-029	160-94	伊穴	伊	伊のみ	実測遺物なし	不明	1.06	0.4	0.1	
88	8	SK-020A	180-60	竈穴		長楕円形	実測遺物なし	N-75°-W	2.1	0.4	0.9	
89	8	SK-022	18P-04	竈穴		長楕円形	実測遺物なし	N-25°-W	2.4	0.4	0.6	
90	8	SK-026	17P-61	竈穴		長楕円形	実測遺物なし	N-78°-W	2.1	0.7	0.9	
91	8	SK-028	17P-82	竈穴		長楕円形	実測遺物なし	N-37°-W	2.4	0.8	1.2	
92	8	SK-030	17P-82	竈穴		長楕円形	実測遺物なし	S-38°-W	3.2	0.8	0.2	
93	91	SK-001	13K-37	土坑		楕円形	実測遺物なし	—	1.52	1.12	0.24	
94	91	SK-002	13L-15	土坑		楕円形	実測遺物なし	—	1.18	0.7	0.22	
95	91	SK-003	13M-54	土坑		隅丸長方形	実測遺物なし	—	2.2	1.16	0.24	
96	91	SK-004	13M-65	土坑		隅丸長方形	実測遺物なし	—	1.7	0.7	0.3	
97	91	SK-005	13K-27	土坑		隅丸長方形	実測遺物なし	—	0.92	0.96	0.2	
98	91	SK-007	14M-03	土坑		円形	実測遺物なし	—	1	0.8	0.34	
99	91	SK-006	14M-25	土坑		円形	実測遺物なし	—	1.2	1.12	0.26	
100	91	SK-009	14M-16	土坑		円形	実測遺物なし	—	1.05	1	0.32	
101	91	SK-013	13M-92	土坑		円形	実測遺物なし	—	1.08	0.97	0.25	
102	91	SK-014	14M-01	土坑		円形	実測遺物なし	—	0.97	0.95	0.32	
103	91	SK-016	14M-09	土坑		円形	実測遺物なし	—	0.88	0.75	0.2	
104	91	SK-018	14N-76	土坑		円形	実測遺物なし	—	0.75	0.6	0.58	
105	92	SK-019	140-70	土坑		円形	礎	—	2.8	1.80	0.48	
106	91	SK-020B	180-60	土坑		隅丸長方形	実測遺物なし	—	3	2.4	0.5	
107	92	SK-021	17P-78	土坑		不整形円形	実測遺物なし	—	2.2	1.4	0.45	
108	92	SK-024B	170-51	土坑		隅丸長方形	実測遺物なし	—	1.00	0.4	0.15	
109	92	SK-025A	170-80	土坑		隅丸長方形	実測遺物なし	—	1.5	0.66	0.7	
110	92	SK-027	18P-45	土坑		楕円形	実測遺物なし	—	2.06	1.2	0.36	
111	92	SK-031	14M-18	土坑		楕円形	実測遺物なし	—	0.7	0.5	0.28	
112	92	SK-032	14N-53	土坑		隅丸長方形	実測遺物なし	—	0.64	0.42	0.26	
番号	構図番号	道幅番号	グリッド	種別		形	遺物	主体部	内径m	間隔m	周溝深m	備考
1	78	SM-001	14M	古壇	-	円壇	環13・伊原路環2・瓦葺2・増・伊原3・葺	—	14.7	2.4	0.5	
2	80	SM-002	16P	古壇	-	円壇	環	—	18.1	2.9-3.6	0.5	
3	81	SM-003	17P	古壇	-	円壇	高環2	—	23.4	1.6-2.6	0.2	
番号	構図番号	道幅番号	グリッド	種別		形	遺物	埋葬	長軸m	短軸m	高さm	備考
1	88	SM-004	18Q	塚	-	長方形	五輪塔	—	7.2m	5.8m	2.4m	

第2表 掲載土器観察表

番号	発掘番号	遺構番号	種類	器種	遺存状況	単位cm ( )は復元値			色調		胎土	焼成	整形・調整		備考		
						口径	底径	器高	内筒	外筒			外筒	内筒			
1	12	S-001	1	土師器	甕	90	16.4	7.0	17.9	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ハケナデ	ハナミガキ		
2	12	S-001	2	土師器	甕	100	14.0	5.1	11.7	明赤褐色	褐色	密	良好	ヘラナデ	ヘラナデ		
3	13	S-002	1	土師器	鉢	75	19.3	7.6	10.9	明赤褐色	明赤褐色	粗	良好	ミガキナデ	ハナミガキ		
4	13	S-002	2	土師器	甕	70	12.2	14.0	9.4	赤褐色	赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ	弥生末再利用	
5	13	S-002	3	土師器	甕	70	9.6	10.8	12.9	赤褐色	明赤褐色	密	良好	ハナミガキ	ヘラナデ		
6	14	S-003	1	土師器	甕	95	11.3	24.4	7.8	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ミガキ	ナデミガキ		
7	14	S-003	2	弥生土器	甕	100	6.4	5.4	12.2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ハナミガキ	ナデミガキ		
8	14	S-003	3	土師器	甕	100	7.8	4.1	13.6	褐色	赤褐色	密	良好	ミガキ	ナデミガキ		
9	14	S-003	4	土師器	甕	90	9.0	6.8	16.7	褐色	褐色	密	良好	ミガキ	ハナミガキ		
10	14	S-003	5	土師器	甕	100	7.9	5.4	16.0	赤褐色	赤褐色	密	良好	ミガキ	ナデミガキ		
11	14	S-003	6	土師器	鉢	100	16.4	6.9	7.4	褐色	赤褐色	密	良好	ミガキ	ナデ		
12	15	S-003	7	土師器	甕	90	21.8	8.2	21.5	褐色	褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
13	15	S-003	8	土師器	甕	90	20.7	7.2	19.4	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデミガキ		
14	15	S-003	9	土師器	甕	95	23.4	8.5	21.9	にぶい褐色	褐色	密	良好	ヘラナデ	ヘラナデ		
15	15	S-003	10	土師器	甕	90	—	—	17.8	明褐色	明褐色	密	良好	ナデミガキ	ナデ		
16	15	S-003	11	土師器	甕	90	11.7	—	10.2	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ	弥生末再利用	
17	15	S-003	12	土師器	甕	90	10.8	12.6	9.6	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ		
18	15	S-003	13	弥生土器	甕	60	10.1	—	10.8	赤褐色	赤褐色	密	良好	ミガキ	ナデミガキ		
19	16	S-005	1	弥生土器	甕	80	22.5	—	21.9	褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
20	16	S-005	2	弥生土器	甕	80	23.6	—	13.5	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	粗	良好	ナデ	ナデ		
21	16	S-005	3	弥生土器	甕	80	15.6	5.6	15.0	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ		
22	16	S-005	4	弥生土器	甕	60	—	—	21.4	褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ		
23	17	S-006	1	土師器	甕	125	—	—	(2.8)	にぶい褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
24	17	S-006	2	土師器	甕	50	—	—	(3.0)	褐色	褐色	密	良好	ハナミガキ	ナデ		
25	17	S-006	3	土師器	高坏	100	—	—	(5.9)	褐色	褐色	密	良好	ミガキ	ナデ		
26	23	S-011	1	土師器	甕	90	18.8	6.4	17.3	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ヘラナデ		
27	23	S-011	2	弥生土器	甕	90	—	—	—	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ハナミガキ	ナデ		
28	23	S-011	3	土師器	甕	100	9.2	—	(8.0)	赤褐色	赤褐色	密	良好	ハナミガキ	ヘラナデ		
29	23	S-011	4	土師器	甕	100	16.4	—	(3.2)	明赤褐色	褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
30	23	S-011	5	土師器	鉢	10	22.1	—	(5.0)	にぶい赤褐色	褐色	密	良好	ミガキ	ナデ		
31	23	S-011	6	土師器	鉢	60	20.0	7.8	9.3	赤褐色	赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデミガキ		
32	24	S-012	1	弥生土器	鉢	20	25.7	—	(11.4)	赤褐色	赤褐色	密	良好	ナデミガキ	ミガキ		
33	24	S-012	2	弥生土器	甕	120	14.1	—	(7.5)	にぶい褐色	褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
34	25	S-013	1	弥生土器	甕	25	24.4	—	(10.0)	にぶい赤褐色	褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ		
35	26	S-014	1	弥生土器	甕	70	22.4	—	(20.3)	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ		
36	26	S-014	2	弥生土器	甕	70	—	—	(20.2)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ミガキ		
37	26	S-014	3	弥生土器	甕	100	18.4	—	(4.9)	赤褐色	赤褐色	密	良好	ナデミガキ	ミガキ		
38	29	S-018	1	土師器	甕	20	10.0	—	(4.9)	褐色	褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ		
39	29	S-018	2	土師器	甕	70	9.1	4.0	4.5	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	粗	良好	ハナミガキ	ヘラナデ		
40	29	S-018	3	土師器	高坏	30	—	—	(8.3)	明赤褐色	褐色	密	良好	ハナミガキ	ミガキ		
41	30	S-019	1	土師器	甕	100	8.1	4.2	10.8	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ハナミガキ	ハナミガキ		
42	30	S-019	2	土師器	甕	60	14.2	4.0	9.6	赤褐色	赤褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
43	30	S-019	3	土師器	高坏	100	14.4	—	(10.0)	褐色	明赤褐色	密	良好	ナデミガキ	ナデミガキ		
44	30	S-019	4	土師器	高坏	25	10.2	—	(3.8)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
45	30	S-019	5	土師器	甕	100	7.1	—	(2.2)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ		
46	30	S-019	6	土師器	甕	70	15.6	7.6	32.1	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	密	良好	ナデミガキ	ナデ		
47	31	S-020	1	土師器	高坏	100	8.4	—	(6.7)	暗赤褐色	赤褐色	密	良好	ナデミガキ	ミガキ		
48	31	S-020	2	土師器	甕	100	—	—	(7.8)	褐色	黄褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
49	33	S-022	1	弥生土器	甕	70	24.2	—	(21.1)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデミガキ		
50	33	S-022	2	弥生土器	甕	100	8.2	—	(3.7)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ハナミガキ		
51	36	S-024	1	弥生土器	甕	80	21.2	—	(16.6)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ミガキ		
52	36	S-024	2	弥生土器	甕	100	20.5	—	(15.4)	赤褐色	赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ		
53	36	S-024	3	弥生土器	甕	70	—	—	(13.8)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ハナミガキ	ミガキ		
54	36	S-024	4	弥生土器	甕	100	14.4	5.8	14.4	褐色	褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
55	36	S-024	5	弥生土器	甕	50	—	—	(11.8)	褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
56	36	S-024	6	弥生土器	甕	100	—	—	(11.4)	褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
57	36	S-024	7	弥生土器	甕	80	10.1	5.8	7.7	にぶい黄褐色	褐色	密	良好	ハナミガキ	ミガキ		
58	36	S-024	8	弥生土器	鉢	90	11.1	5.6	4.8	明赤褐色	褐色	密	良好	ミガキ	ナデ		
59	36	S-024	9	弥生土器	甕	100	7.0	4.0	4.8	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ヘラナデ		
60	36	S-024	10	弥生土器	甕	100	5.9	11.6	6.6	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ヘラナデ		
61	37	S-024	11	弥生土器	甕	200	—	—	(9.1)	赤色	赤色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
62	37	S-024	12	弥生土器	甕	100	—	—	(10.5)	褐色	にぶい褐色	密	良好	ミガキ	ヘラナデ		
63	37	S-024	13	弥生土器	甕	70	—	—	9.2	34.7	暗褐色	赤褐色	粗	良好	ハナミガキ	ナデ	
64	38	S-025	1	土師器	甕	90	—	—	17.8	赤褐色	赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ミガキ		
65	38	S-025	2	土師器	甕	80	—	—	(17.8)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ミガキ		
66	38	S-025	3	土師器	甕	20	10.0	17.2	13.2	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
67	38	S-025	4	土師器	甕	100	—	—	6.1	5.6	赤褐色	赤褐色	密	良好	ハナミガキ	ハナミガキ	
68	38	S-025	5	土師器	鉢	90	17.8	6.6	8.7	赤褐色	赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
69	39	S-026	1	土師器	甕	100	13.5	5.2	13.7	褐色	褐色	密	良好	ナデミガキ	ハナミガキ		
70	39	S-026	2	土師器	甕	25	19.8	—	(5.5)	明褐色	明褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
71	39	S-026	3	土師器	甕	30	—	—	6.4	(3.9)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ	
72	39	S-026	4	土師器	甕	100	—	—	6.6	(2.3)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ナデ	ナデ	
73	39	S-026	5	土師器	甕	40	—	—	3.3	(3.2)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ヘラナデ	ヘラナデ	
74	41	S-028	1	土師器	甕	80	—	—	3.0	(3.3)	明赤褐色	褐色	密	良好	ナデ	ナデ	
75	42	S-029	1	土師器	高坏	15	16.0	—	(4.5)	黄褐色	褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
76	42	S-029	2	弥生土器	甕	100	—	—	—	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
77	42	S-029	3	土師器	甕	100	5.0	—	(1.9)	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ナデ	ナデ		

番号	種別	道標	番号	種別	設置	寸法		単位cm( )は復元値		色調		胎土	焼成	整形・調整		備考	
						底径	口径	内径	外径	内側	外側			外側	内側		
78	43	SI-030	1	土師鉢	器台	50	—	13.6	(7.3)	赤褐色	赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ヘラナデ		
79	44	SI-031	1	土師鉢	底	50	—	5.2	3.4	にぶい赤褐色	黒褐色	密	良好	ナデ	ナデ	ミガキ	
80	44	SI-031	2	土師鉢	底	40	—	(7.4)	(3.8)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ	ミガキ	
81	44	SI-031	3	土師鉢	底	90	—	6.8	4.9	赤褐色	赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
82	45	SI-032	1	土師鉢	高坪	口縁20	(18.8)	—	(6.3)	赤褐色	赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
83	45	SI-032	2	土師鉢	鉢	底50	—	2.4	(5.5)	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ		
84	47	SI-033	1	養生土師	鉢	底20	6.2	—	(5.0)	明赤褐色	暗赤褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
85	46	SI-034	1	土師鉢	高坪	底30	—	—	(4.0)	褐色	褐色	密	良好	ミガキ	ナデ		
86	49	SI-035	1	土師鉢	鉢	口縁70	3.0	2.6	2.0	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ナデ	ナデ	ミガキ	
87	49	SI-035	2	養生土師	鉢	口縁20	(23.6)	—	(3.7)	赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ	ミガキ	
88	51	SI-038	1	土師鉢	鉢	口縁20	(14.4)	—	(6.2)	褐色	褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ		
89	52	SI-039	1	土師鉢	器台	底20	—	(13.2)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ	ナデ	ミガキ	
90	52	SI-039	2	土師鉢	器台	口縁20	(16.0)	—	(11.7)	にぶい赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ミガキ		
91	52	SI-039	3	土師鉢	器台	90	17.5	6.8	14.4	褐色	褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
92	52	SI-039	4	土師鉢	器台	60	7.7	14.2	10.4	明赤褐色	にぶい褐色	密	良好	ミガキ	ナデ	ミガキ	
93	52	SI-039	5	養生土師	鉢	口縁100	8.9	—	(9.9)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ	養生堂利用	
94	53	SI-040	1	土師鉢	鉢	80	21.5	7.0	17.5	赤褐色	赤褐色	密	良好	ミガキ	ナデ		
95	53	SI-040	2	土師鉢	鉢	55	(23.2)	8.5	11.0	赤褐色	赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ		
96	50	SI-041	1	土師鉢	鉢	口縁20	(13.6)	—	(6.8)	にぶい赤褐色	明赤褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
97	50	SI-041	2	土師鉢	鉢	口縁40	(16.0)	—	(6.6)	褐色	赤褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ		
98	50	SI-041	3	土師鉢	鉢	底10	—	(8.8)	(7.0)	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ		
99	50	SI-041	4	土師鉢	器台	底10	—	(13.1)	(8.2)	赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ミガキ		
100	55	SI-043	1	土師鉢	鉢	口縁100	—	8.5	(2.0)	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ミガキ	ナデ		
101	55	SI-044	2	土師鉢	鉢	口縁50	16.8	—	(6.5)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ミガキ		
102	55	SI-044	2	土師鉢	鉢	底80	—	(14.8)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ			
103	55	SI-044	3	土師鉢	鉢	口縁25	(19.0)	—	(2.8)	赤褐色	赤褐色	密	良好	ミガキ	ナデ		
104	55	SI-044	4	土師鉢	鉢	底35	(13.9)	—	(6.5)	赤褐色	赤褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
105	55	SI-044	5	土師鉢	器台	95	9.5	10.8	12.9	明赤褐色	にぶい褐色	密	良好	ヘラナデ	ヘラナデ		
106	55	SI-044	6	土師鉢	器台	60	—	10.8	(9.2)	明赤褐色	褐色	密	良好	ヘラナデ	ヘラナデ		
107	56	SI-045	1	土師鉢	鉢	底20	—	(8.2)	(5.3)	褐色	にぶい赤褐色	密	良好	ミガキ	ナデ		
108	56	SI-045	2	土師鉢	器台	底100	—	8.4	(1.8)	赤褐色	赤褐色	密	良好	ミガキ	ナデ	ミガキ	
109	57	SI-046	1	土師鉢	器台	底100	—	7.3	(11.6)	にぶい褐色	にぶい赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ		
110	58	SI-047	1	土師鉢	鉢	口縁10	(19.7)	—	(6.0)	明褐色	明褐色	密	良好	ナデ	ナデ	ミガキ	
111	58	SI-047	2	養生土師	鉢	底40	—	(13.4)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ミガキ	ヘラナデ			
112	58	SI-047	3	土師鉢	鉢	底30	(11.0)	—	(5.7)	明褐色	明褐色	密	良好	ナデ	ミガキ		
113	58	SI-047	4	土師鉢	鉢	底30	(12.2)	—	(9.4)	褐色	褐色	密	良好	ヘラナデ	ヘラナデ		
114	58	SI-047	5	土師鉢	鉢	底25	—	8.1	(6.4)	にぶい褐色	暗赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ	ミガキ	
115	58	SI-047	6	土師鉢	鉢	底15	—	6.8	(2.9)	明赤褐色	赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ヘラナデ		
116	58	SI-047	7	土師鉢	鉢	底30	—	8.4	(2.3)	褐色	褐色	密	良好	ヘラナデ	ヘラナデ		
117	60	SI-049	1	土師鉢	器台	底40	—	(22.0)	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ナデ	ナデ	ミガキ		
118	60	SI-049	2	土師鉢	器台	口縁25	(11.0)	—	(4.3)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ		
119	60	SI-049	3	土師鉢	器台	底100	—	4.2	(2.4)	黒褐色	黒褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ		
120	60	SI-049	4	土師鉢	器台	底100	—	6.6	(2.2)	赤褐色	赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
121	65	SI-054	1	土師鉢	器台	口縁20	(11.9)	—	(5.5)	暗赤褐色	明赤褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
122	66	SI-055	1	養生土師	鉢	底30	—	(16.4)	明赤褐色	褐色	密	良好	ミガキ	ヘラナデ			
123	66	SI-055	2	養生土師	鉢	底50	14.7	—	(12.8)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ		
124	66	SI-055	3	養生土師	鉢	底70	16.0	5.6	16.9	暗赤褐色	暗赤褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ		
125	67	SI-056	1	土師鉢	器台	口縁30	15.4	—	(9.0)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ミガキ	ナデ	ミガキ	
126	67	SI-056	2	土師鉢	器台	底15	(24.6)	—	(10.7)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ヘラナデ		
127	67	SI-056	3	土師鉢	器台	100	7.8	11.2	10.7	赤褐色	赤褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ		
128	67	SI-056	4	土師鉢	器台	台80	—	13.8	(9.6)	明赤褐色	褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ		
129	68	SI-057	1	養生土師	鉢	口縁一底	(20.0)	—	(6.1)	明赤褐色	暗赤褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
130	68	SI-057	2	土師鉢	器台	底一底	—	(9.2)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ミガキ	ナデ			
131	68	SI-057	3	土師鉢	高坪	口縁20	(17.0)	—	(4.9)	赤褐色	赤褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
132	68	SI-057	4	土師鉢	鉢	底20	(15.0)	—	(4.7)	褐色	褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
133	68	SI-057	5	養生土師	鉢	底35	(18.7)	—	(10.2)	赤褐色	赤褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
134	68	SI-057	6	養生土師	鉢	口縁100	11.6	—	(6.2)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ミガキ	ナデ	ミガキ
135	68	SI-057	7	土師鉢	鉢	口縁30	—	5.3	(1.9)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
136	74	SI-063	1	土師鉢	鉢	口縁20	(18.2)	—	(9.3)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
137	74	SI-063	2	土師鉢	鉢	口縁20	(18.2)	—	(4.2)	明褐色	明褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ		
138	74	SI-063	3	土師鉢	鉢	底20	—	(7.8)	(3.2)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ミガキ		
139	74	SI-063	4	土師鉢	器台	口縁30	(7.4)	—	(2.1)	にぶい赤褐色	赤褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
140	74	SI-063	5	土師鉢	器台	70	—	6.0	(11.5)	褐色	褐色	粗	良好	ヘラナデ	ナデ		
141	74	SI-063	6	土師鉢	器台	底25	—	(11.6)	明赤褐色	褐色	密	良好	ナデ	ヘラナデ			
142	74	SI-063	7	養生土師	鉢	底	—	—	—	赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
143	75	SI-064	1	土師鉢	鉢	底80	10.2	4.6	10.0	明赤褐色	褐色	密	良好	ミガキ	ナデ		
144	75	SI-064	2	土師鉢	器台	口縁100	12.8	—	(5.5)	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
145	76	SI-065	1	土師鉢	高坪	口縁40	(12.4)	—	(6.9)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
146	77	SI-067	1	土師鉢	鉢	底30	(25.6)	—	(1.2)	褐色	褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ		
147	77	SI-067	2	養生土師	鉢	口縁20	(18.0)	—	(2.2)	灰色	灰色	密	良好	ナデ	ナデ		
148	77	SI-067	3	土師鉢	坪	底20	12.2	—	(3.7)	灰青褐色	灰青褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ	口白	
149	77	SI-067	4	土師鉢	坪	75	13.1	7.5	3.9	褐色	褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ	口白	
150	77	SI-067	5	土師鉢	坪	60	14.3	6.6	5.2	褐色	褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ	口白	
151	77	SI-067	6	土師鉢	坪	20	—	(8.6)	(1.6)	黒色	明褐色	密	良好	ヘラナデ	ミガキ		
152	77	SI-067	7	土師鉢	坪	20	—	5.5	(5.3)	褐色	灰褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ		
153	79	SM-001	1	土師鉢	坪	100	14.4	—	—	褐色	褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ		
154	79	SM-001	2	土師鉢	坪	70	11.6	—	3.3	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ヘラナデ	ミガキ		

番号	検出番号	油槽	番号	種別	器種	遺存度			単位cm( )は復元値		色調		胎土	焼成	彫形・調整		備考
						%	口径	底径	鉢高	内側	外側	外側			内側		
155	79	SM-001	3	土師器	杯	80	10.4	-	3.6	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ハナズリナデ	ミガキ		
156	79	SM-001	4	土師器	杯	60	11.2	-	3.6	褐色	褐色	密	良好	ハナズリナデ	ミガキ		
157	79	SM-001	5	土師器	杯	70	11.2	-	4.0	褐色	褐色	密	良好	ハナズリナデ	ミガキ		
158	79	SM-001	6	土師器	杯	90	11.0	-	3.7	褐色	褐色	密	良好	ハナズリナデ	ミガキ		
159	79	SM-001	7	土師器	杯	100	10.8	-	3.8	褐色	褐色	密	良好	ハナズリナデ	ミガキ		
160	79	SM-001	8	土師器	杯	90	11.4	-	3.9	褐色	にぶい褐色	密	良好	ハナズリナデ	ミガキ		
161	79	SM-001	9	土師器	杯	70	11.5	-	3.7	褐色	褐色	密	良好	ハナズリナデ	ミガキ		
162	79	SM-001	10	土師器	杯	100	12.6	-	3.7	褐色	明赤褐色	密	良好	ハナズリナデ	ミガキ		
163	79	SM-001	11	土師器	杯	60	10.6	-	3.7	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ハナズリナデ	ミガキ		
164	79	SM-001	12	土師器	杯	70	11.8	-	3.5	黄褐色	褐色	密	良好	ハナズリナデ	ミガキ		
165	79	SM-001	13	土師器	杯	70	11.7	-	3.5	褐色	褐色	密	良好	ハナズリナデ	ミガキ		
166	80	SM-001	14	須影器	坏身	100	10.5	-	4.0	灰色	灰色	密	良好	ナデ	ナデ		
167	80	SM-001	15	須影器	坏身	100	10.2	-	3.5	灰色	灰色	密	良好	ハナズリナデ	ナデ		
168	80	SM-001	16	須影器	坏身	100	10.8	-	4.1	灰色	灰黄色	密	良好	ナデ	ナデ		
169	80	SM-001	17	須影器	坏身	95	11.7	-	3.8	灰色	灰色	密	良好	ハナズリナデ	ナデ		
170	80	SM-001	18	須影器	瓦果	60	11.0	-	15.7	灰色	灰色	密	良好	ハナズリナデ	ナデ		
171	80	SM-001	19	須影器	埴	40	(9.5)	(6.6)	14.9	黄灰色	黄灰色	密	良好	ハナズリナデ	ナデ		
172	80	SM-001	20	須影器	壺	口径30	(35.6)	-	(11.1)	灰色	灰色	密	良好	ナデ	ナデ		
173	80	SM-001	21	須影器	壺	口径一帯	-	-	(8.4)	灰色	灰色	密	良好	ナデ	ナデ		
174	80	SM-001	22	須影器	瓦果	口径20	(14.5)	-	(4.0)	黄灰色	黄褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
175	81	SM-002	1	土師器	杯	60	12.0	-	3.7	黄褐色	黄褐色	密	良好	ナデ	ナデ		
176	82	SM-003	1	土師器	高杯	口径80	14.1	-	(6.1)	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
177	82	SM-003	2	土師器	高杯	40	-	-	(7.2)	褐色	褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
178	93	SM-019	1	土師器	甕	口径一帯	-	-	(8.3)	褐色	明赤褐色	密	良好	ミガキ	ナデ		
179	93	SD-004	2	土師器	鉢	40	22.0	7.8	9.9	赤褐色	赤褐色	密	良好	ハラミガキ	ハラミガキ		
180	93	SD-004	3	土師器	器台	口径20	(11.0)	-	(5.0)	にぶい赤褐色	褐色	密	良好	ナデ	ミガキ		
181	93	SD-004	4	土師器	台座	口径100	-	6.7	(4.8)	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ナデ	ケズリハケ		
182	93	SD-010	5	弥生土器	高杯	口径20	-	-	(5.4)	赤褐色	赤褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ		
183	93	SD-018	6	土師器	甕	20	(10.0)	-	(6.1)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ミガキ		
184	93	SD-018	7	土師器	器台	口径一帯	-	-	(2.9)	明褐色	明褐色	粗	良好	ミガキ	ハラナデ		
185	93	SD-018	8	土師器	鉢	70	9.5	5.4	5.2	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ハケ	ハケ		
186	93	SD-018	9	土師器	鉢	20	-	(4.5)	(4.2)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ハラナデ	ハラナデ		
187	93	SD-018	10	土師器	鉢	30	-	7.5	(6.9)	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ハナズリミガキ	ハナズリナデ		
188	93	素探	11	土師器	甕	-	-	(9.2)	(16.2)	褐色	褐色	密	良好	ミガキ	ナデ		
189	93	SD-014	12	須影器	壺	-	-	16.6	3.2	暗オリーブ色	オリーブ色	密	良好	ナデ	ナデ		
190	93	SD-018	13	須影器	壺	口径30	-	-	(12.5)	灰オリーブ色	灰オリーブ色	密	良好	ナデ	ナデ		
191	93	SD-008	14	須影器	壺	口径30	-	(14.0)	(3.6)	明灰黄色	暗灰黄色	密	良好	ハナズリミガキ	ハラナズリ	ロクロ	
192	93	SM-004	15	須影器	壺	口径25	-	(14.4)	(3.3)	灰黄色	灰黄色	密	良好	ハナズリミガキ	ハラナズリ	ロクロ	

第3表 金属製品一覧表

番号	検出番号	番号	遺構	番号	遺物番号	材質	製品	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
1	12	3	SI	001	003	鉄	ヤリガシナ	58.0	8.0	2.5	6.0	
2	94	8	SI	006	003	鋼	煙管	直径15	-	-	1.6	
3	19	1	SI	008	003	鉄	刀子	50.0	19.0	1.0	3.3	
4	19	2	SI	008	006	鉄	鉄線	38.0	3.5	1.0	0.8	
5	19	3	SI	008	004	鉄	鉄線	30.0	3.2	1.0	0.8	
6	19	4	SI	008	007-1	鉄	鉄線	24.0	3.5	1.0	0.5	接合
					007-2	鉄	鉄線	11.0	2.8	1.0	0.1	
					005-1	鉄	鉄線	24.0	3.0	1.2	0.8	
7	19	5	SI	008	005-3	鉄	鉄線	15.0	3.0	1.2		接合
					005-2	鉄	鉄線	19.0	3.0	1.2	0.3	
8	80	23	SM	001	070	鉄	鉄線	65.0	3.1~5.7	2.0~3.2	5.3	
9	80	24	SM	001	066	鉄	刺突具	109.0	4.0	2.9	5.2	
10	80	25	SM	001	022	鉄	鉄線	108.0	3.0	3.0	5.9	
11	83	1	SD	002	005	鉄	鉄釘	54.0	4.0	3.9	3.3	
12	87	1	SD	005	002	鉄	鉄線	185.0	6.7	4.0	25.9	
13	94	4	SD	010	003	鉄	棒状製品	45.0	2.7	2.9	1.1	断面円形
14	94	1	SD	011	016	鉄	棒状製品	267.0	9.5	5.7	66.1	
15	94	2	SD	011	002	鉄	棒状製品	115.0	3.2	3.0	7.8	断面円形
16	94	3	SD	011	003	鉄	棒状製品	83.0	2.9	2.9	5.1	
17	94	7	SD	011	006	鋼	煙管	50.0	10.8	-	14.0	
18	94	5	SD	018	040	鉄	鉄線	33.0	4.4	5.0	4.8	断面長方形

第4表 石器・石製品一覧表

番号	採回番号	番号	遺構	番号	遺物番号	種別	単位:mm			単位:g	石材	備考
							長さ	幅	厚さ	重さ		
1	7	1	SD-	O18	O39	石核	50.7	34.0	19.0	39.28	性質頁岩	
2	7	2	SD-	O18	O17	削片	45.0	16.4	14.0	6.92	性質頁岩	
3	7	3	SI-	O35	O10	ナイフ形石器	46.1	12.6	4.7	2.58	頁岩	
4	7	4	表採	—	—	削片	52.4	17.0	10.5	7.42	メノウ	
5	11	1	SD-	O10	O20	石鏃	14.5	16.6	2.4	0.53	チャート	
6	11	2	SD-	O02	O12	石鏃	28.1	29.4	6.5	2.45	黒曜石	
7	11	3	SD-	O04	O06	石鏃	24.3	13.8	3.4	1.00	黒曜石	
8	11	4	SD-	O17	O09	石鏃	22.7	13.6	3.8	0.94	安山岩	
9	11	5	SI-	O35	O11	石鏃	23.5	15.3	4.2	0.96	黒曜石	
10	11	6	SI-	O39	O12	石鏃	25.6	14.5	4.1	1.20	チャート	
11	11	7	SM-	O10	O09	削片	17.0	11.7	2.9	0.55	黒曜石	
12	11	8	SI-	O64	O09	楕形石器	21.2	11.8	8.7	2.23	黒曜石	
13	11	9	SD-	O18	O10	楕形石器	35.1	21.7	6.9	3.91	黒曜石	
14	11	10	SI-	O64	O01	石鏃(木製品)	19.0	18.5	11.5	2.88	黒曜石	
15	95	1	SI-	O08	O01	礫石	22.3	46.4	13.4	18.91	凝灰岩	溝状磨痕有り
16	95	2	SI-	O10	O01-1	礫石	49.0	24.0	10.3	18.62	粘板岩	溝状磨痕有り
17	95	3	SI-	O10	O01-2	礫石	58.1	45.3	11.3	42.99	炭化物付着	
18	95	4	SI-	O31	O01	礫石	71.4	55.0	19.9	92.10	砂岩	幅30mm浅い凹み
19	95	5	SI-	O35	O05	礫石	64.5	58.5	31.4	170.60	砂岩	溝状磨痕有り
20	95	6	SI-	O46	O12	礫石	56.5	52.5	31.4	150.03	砂岩	幅30mm浅い凹み
21	95	7	SI-	O57	O11	礫石	50.4	41.8	16.5	69.18	凝灰岩	全面火熱を受ける
22	95	8	SI-	O61	O02-1	礫石	42.8	41.5	22.8	55.01	凝灰岩	溝状磨痕有り
23	95	9	SI-	O61	O02-2	礫石	71.5	63.0	38.3	223.81	砂岩	溝状磨痕有り
24	95	10	SD-	O05	O01	礫石	29.1	34.3	19.2	18.25	凝灰岩	火熱を受ける
25	95	11	SD-	O11	O43	礫石	75.1	34.9	12.5	55.20	凝灰岩	縁分付着
26	95	12	SD-	O11	O66-1	礫石	29.1	55.9	34.6	87.10	凝灰岩	V字状磨痕有り
27	95	13	SD-	O11	O66-2	礫石	58.5	40.0	27.9	74.60	凝灰岩	溝状磨痕有り
28	95	14	SD-	O19	O01	礫石	101.5	49.5	39.5	273.43	凝灰岩	磨痕有り
29	96	15	SI-	O32	O03	礫石	49.8	39.2	25.7	12.71	凝灰岩	
30	96	16	SI-	O38	O05	礫石	49.0	43.5	33.5	16.20	凝灰岩	平坦面2面
31	96	17	SI-	O39	O02	礫石	62.5	36.6	41.6	11.60	凝灰岩	平坦面1面
32	96	18	SI-	O64	O02	礫石	46.4	42.3	35.0	14.04	凝灰岩	平坦面微面
33	96	19	SI-	O65	O04	礫石	76.0	43.0	38.3	24.37	凝灰岩	V字状磨痕有り

第5表 掲載土製品一覧表

番号	採回番号	番号	出土位置	遺物名	遺存度	長さ・長さcm	幅・短径cm	最大厚cm	孔径cm	重量g	色調
1	11	11	SI-067	土偶	一部	(3.6)	(2.95)	1.40	—	950	明黄褐色
2	51	2	SI-038	勾玉形土製品	完形	2.35	0.6	0.86	0.25	1.6	にぶい赤褐色
3	52	6	SI-039	不明	一部	(1.5)	1.5	1.5	—	3.2	黒褐色
4	57	3	SI-045	勾玉形土製品	完形	2.5	0.85	0.85	0.25	2.3	にぶい黄褐色
5	75	3	SI-064	土製やすり	4/5	3.6	5.1	—	—	17.4	にぶい褐色
6	81	2	SM-002	勾玉形土製品	1/2	(2.9)	1.7	1.8	0.3	8.4	にぶい褐色
7	94	6	15N-94	土玉	1/2	3.2	—	—	—	9.6	

第6表 銭貨計測表

番号	採回番号	番号	銭種	遺構	番号	材質	縁外径	縁内径	郭外長	郭内長	縁厚	肌厚	重量
1	94	9	寛永通宝	SD-002	9	銅	23.00	18.50	7.50	6.25	1.11	0.80	3.60

## 第3章 神野台遺跡

### 第1節 調査の概要

#### 1 発掘調査の方法

国土地理院の国家座標を基準に、調査対象範囲を包含するようにグリッド設定を行った。設定に当たっては20m×20mの方眼を大グリッドとして、北から南へ1, 2, 3…の番号を付し、西から東へA, B, C…と付し、更に大グリッド内を2m×2mの小グリッドに分割し北から南へ十の位で00, ~90, 西から東へ1の位で0~9の数字で表した。これにより、小グリッドの位置は3K-25, 5H-72等と4桁の数字及びアルファベットで呼称した。

調査は、上層（縄文時代から中世）の確認調査から実施した。対象となった調査面積は1,100㎡であった。調査区が台地先端部に立地しており、調査範囲外に隣接して排土用地が確保できず、遺跡内でスイッチバック方式をとらざるを得ない状況であったため、排土の処理などを考慮し、全体の表土を除去し遺構の分布状況を把握して、遺構の検出されなかった場所を排土場とすることが有効と判断した。調査の結果、陥穴、土坑、溝跡が検出された。

上層調査終了後、旧石器時代の遺構、遺物の分布状況を把握するため2m×2mのグリッドを11か所設定し下層確認調査を実施した。遺構、遺物が検出されなかったため確認調査のみで終了した。

#### 2 調査の経過

発掘調査は、平成14年度に行われた。整理作業は、平成15年度と平成19年度に東上泉遺跡と併せて行い、平成19年度に報告書を刊行した。

各年度の作業期間、調査担当者、調査内容は以下のとおりである。

##### 発掘調査

###### 平成14年度

期間 平成15年1月7日～平成15年1月31日

組織 調査部長 斎木 勝

南部調査事務所長 鈴木定明 調査担当者 上席研究員 稲生一夫

内容	確認調査	上層	1,100㎡
		下層	44㎡

##### 整理作業

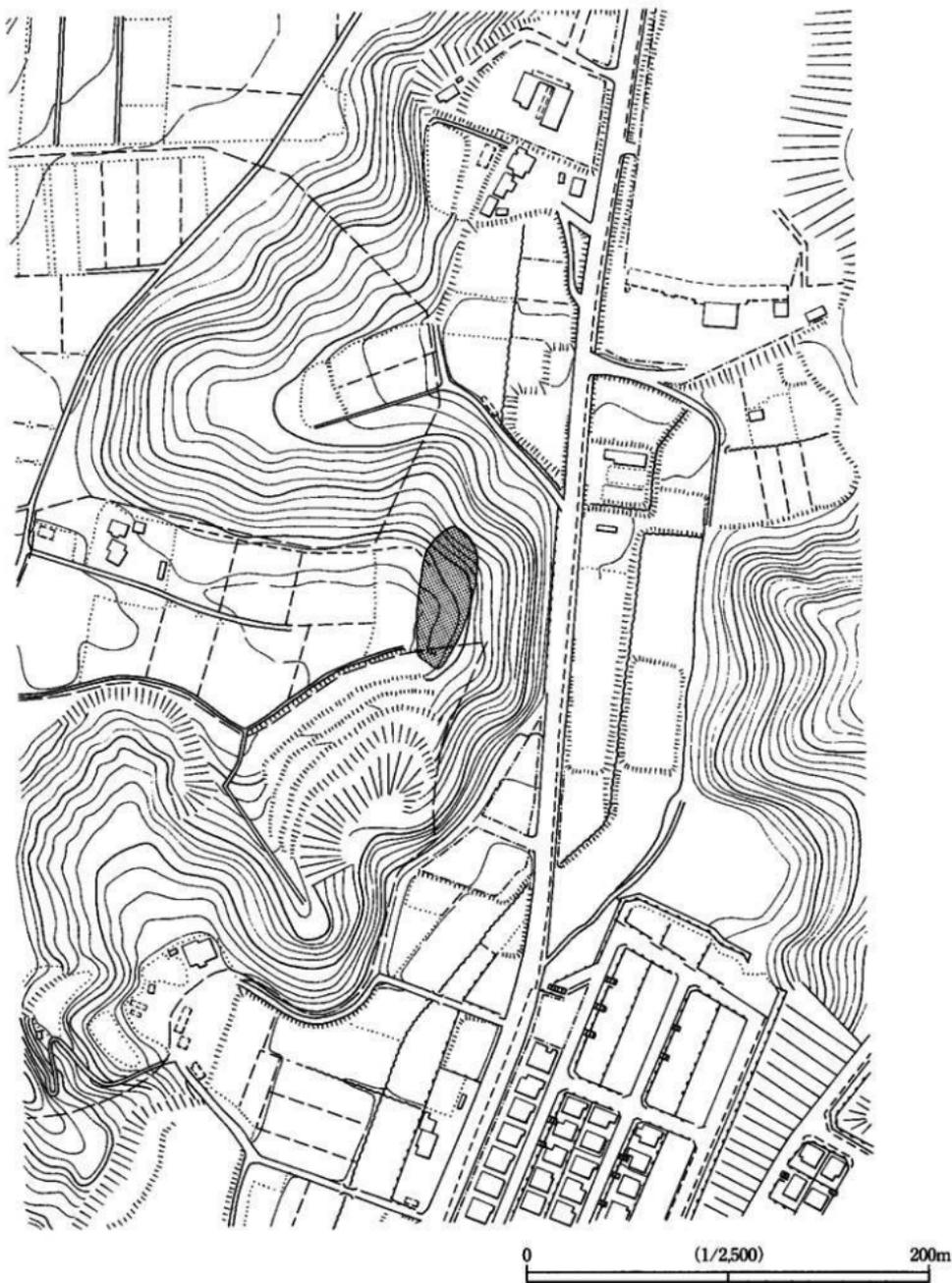
###### 平成15年度

期間 平成15年6月1日～平成15年7月31日

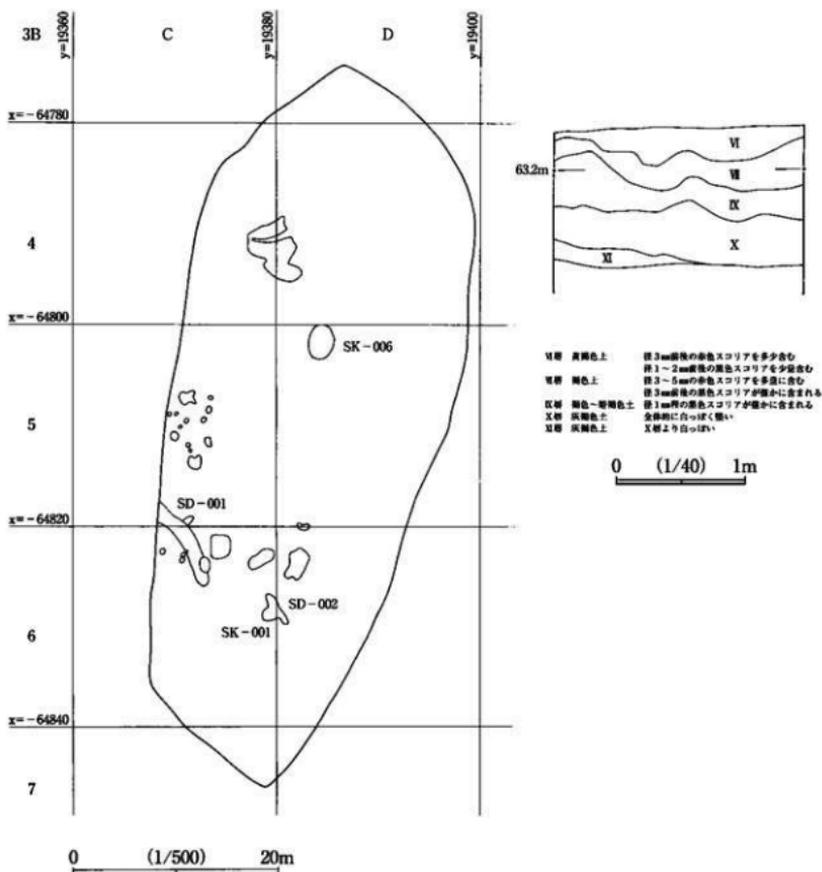
組織 調査部長 斎木 勝

南部調査事務所長 鈴木定明 整理担当者 主席研究員 相京邦彦

内容 水洗・注記から復元・実測の一部まで



第97圖 遺跡周辺地形図



第98図 遺構位置図・標準土層図

平成 19 年度

期間 平成 19 年 5 月 1 日～平成 19 年 7 月 31 日

組織 調査研究部長 矢戸三男

南部調査事務所長 西川博孝 整理担当者 主席研究員 土屋治雄

内容 復元・実測の一部から報告書刊行まで

### 3 成果の概要

基本層としては、耕作土と耕作基盤層のいわゆる表土層と、ローム層であった。ローム層は第Ⅴ層からⅠⅩ層が確認された。掲載した基本層序は 5C-96 の層序で第Ⅲ層及びⅣ層は削平されている。

検出された遺構は、陥穴 1 基、土坑 1 基、溝 2 条である。

## 第 2 節 遺構と遺物

### 概要

神野台遺跡から検出された遺構は、陥穴、土坑、溝等で、性格不明なものが多くあった。整理作業の過程で、形状および覆土などを検証した結果、陥穴 1 基、土坑 1 基、溝状遺構 2 条を掲載することにした。

#### 1 遺構

##### SK-001 (第102図, 図版46)

6C-49 から検出された土坑である。SD-002 と重複する。長軸の残存長は 1.1 m、短軸の残存長は 1 m、深さ 0.4 m を計る。底面は下方に向かってやや傾斜するが、ほぼ平らである。立ち上がりは緩やかな傾斜をしている。出土遺物はなかった。

##### SK-006 (第99図, 図版47)

5D-02 から検出された大型の陥穴である。単独で所在しており周辺に他の遺構はない。長軸 3.35 m、短軸 2.6 m、深さ 2.55 m を計る。斜面に直行して長軸をもつ。谷側では掘り込み面から 0.6 m 程で若干平らになり、その後ほぼ垂直近くで底面に達する。山側は同じく掘り込み面から 0.5 m 程で段をもち、底面へ続く。覆土は、ローム粒、ロームブロックを多く含む。出土遺物はなかった。

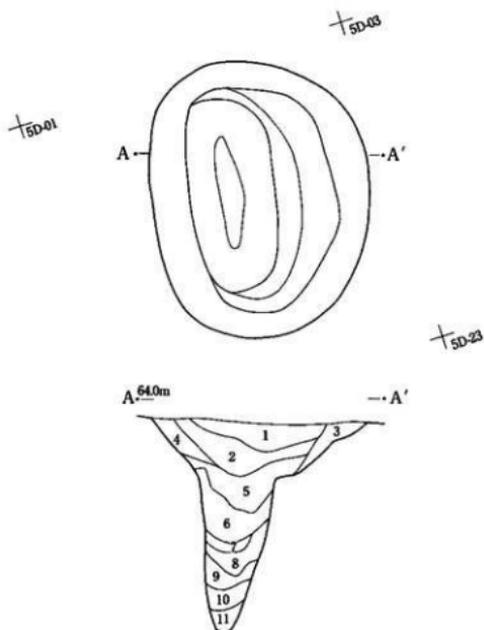
##### SD-001 (第101図, 図版46)

5C-84 から検出された溝状遺構である。台地上の調査区外から遺跡内へ続き、台地下へ向かい調査区内で立ち上がる。調査区内の長さ 9.25m、幅 0.75 ～ 0.9 m、深さ 0.25 m を計る。台地上方に面する壁は緩やかな立ち上がりを呈する。出土遺物はなかった。

##### SD-002 (第102図, 図版46)

6D-50 から検出された溝状遺構である。SK-001 と重複する。新旧関係は不明である。長軸 4 m、幅 1.1 m、深さ 0.4 m を計る。

底面は平らで、壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物はなかった。

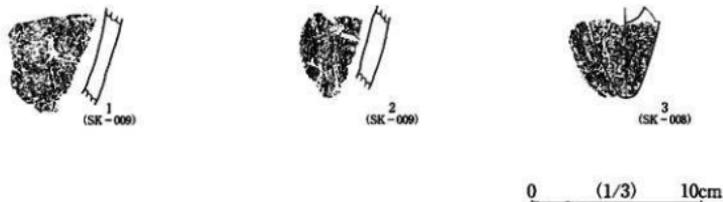


SK006 64m00cm

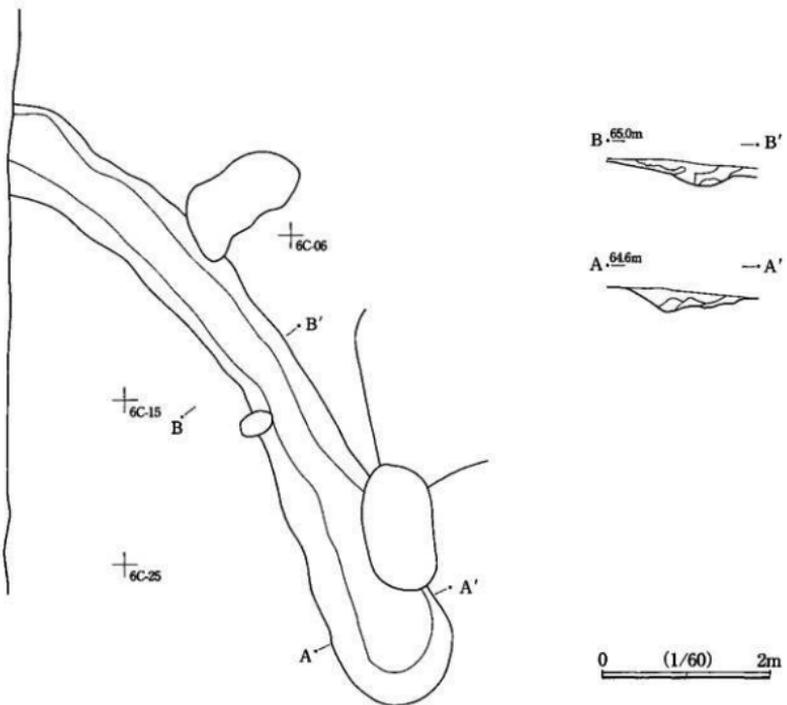
- 1層 暗褐色土層 ローム殻 (1-3mm) を少量含む
- 2層 暗褐色土層 ローム殻 (1-3mm) をまばらに含む
- 3層 暗褐色土層 ロームブロック (厚5-10mm) を含む
- 4層 暗褐色土層 1層に類似したロームブロックを多く含む
- 5層 暗褐色土層 褐色土に近く、まだら状にロームを含む
- 6層 褐色土層 10-20mmのロームブロックを多く含む
- 7層 褐色土層 10-20mmのロームブロックを多く含む
- 8層 暗褐色土層 ローム殻の混入が少ない
- 9層 暗褐色土層 50-100mmのロームブロックを含む
- 10層 暗褐色土層 ローム殻は少なく明るく若干粘性がある
- 11層 暗褐色土層 ローム殻の混入が少ない

0 (1/60) 2m

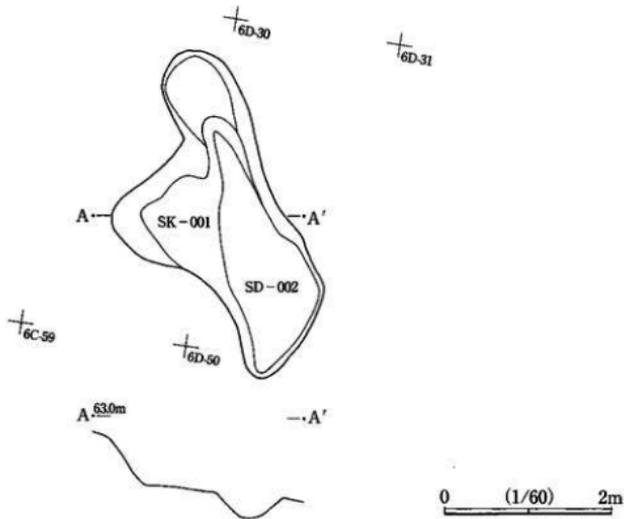
第99図 SK-006



第100図 出土遺物



第101圖 SD-001



第102圖 SD-001 · SD-002

## 2 遺構外出土遺物（第100図，図版47）

遺構からの出土遺物はなかったが、尖底土器の尖底部と同時期の土器片が数点出土した。

1は縄文土器で早期の尖底土器の尖底部である。残存器高5.5cm。無文であり内面にコゲの付着がみられる。4C区に所在した風倒木跡からの出土である。

2, 3は縄文土器の破片で、無文である。縄文時代早期の土器片である。他に3点の無文小破片が検出された。いずれも胎土の特徴が1と同じであることから田戸下層式であろう。

## 第3節 まとめ

本遺跡は埋蔵文化財分布地図では、台地上の畑などから縄文土器や土師器が採集されており縄文時代および古墳時代前期・中期の包蔵地とされている。

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代早期の陥穴1基のほか土坑1基、溝2条であった。縄文時代には動物捕獲用の地区としての役割を果たしていたのであろう。集落が形成された形跡は確認できなかった。調査区西側の台地上が遺跡の中心部分と思われ、遺構が検出される可能性がある。

# 写真図版



神野台遺跡

東生泉遺跡

遺跡周辺航空写真 (1:10,000)



北側調査区全景



南側調査区全景



北側調査前全景



南側調査前全景



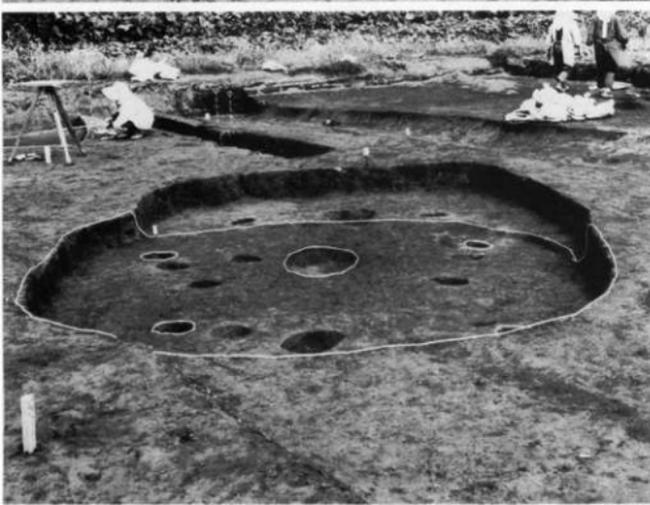
SI-001(北より)



SI-002(南より)



SI-003・004  
遺物出土状況(南より)



SI-003・004(南より)



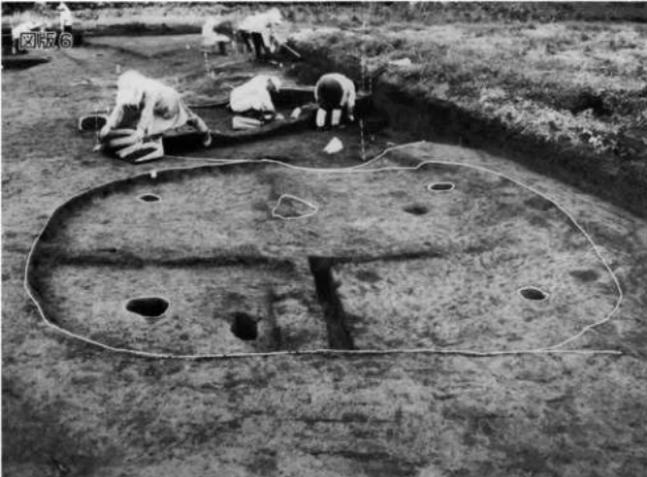
SI-005(北より)



SI-006(南より)



SI-007(北東より)



SI-008(南東より)



SI-005・009・010・013  
015・026・027・029



SI-009(北より)

SI-010・SK-006(南東より)



SI-011(南より)



SI-012(南東より)





SI-013(南より)



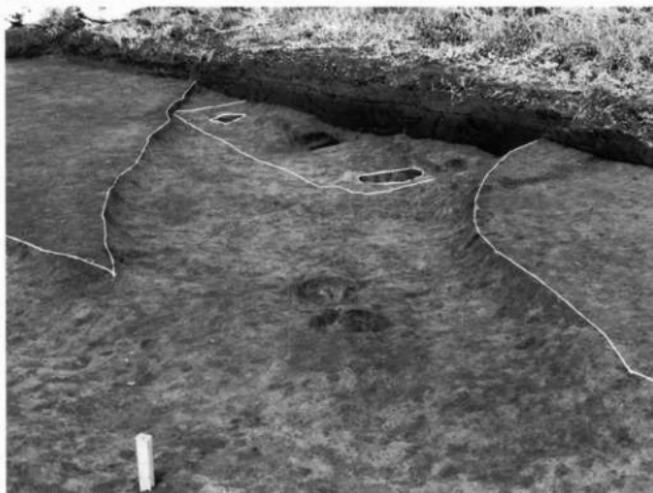
SI-014(南東より)



SI-014 遺物出土状況



SI-015(南東より)



SI-017・SD-004(南より)



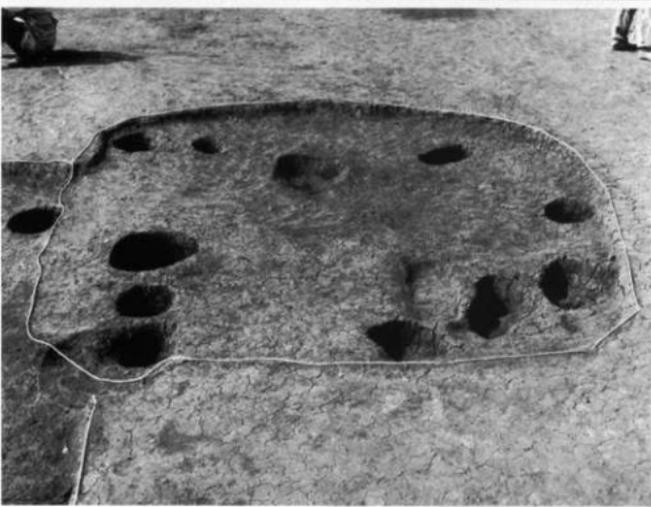
SI-018(南東より)



SI-019(南東より)



SI-020(南東より)



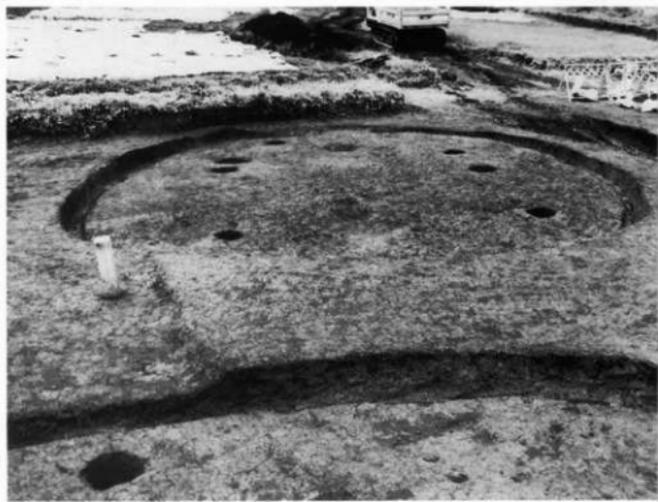
SI-021(南東より)



SI-022(南東より)



SI-023(南東より)



SI-024(北より)



SI-025(南東より)



SI-026(南東より)



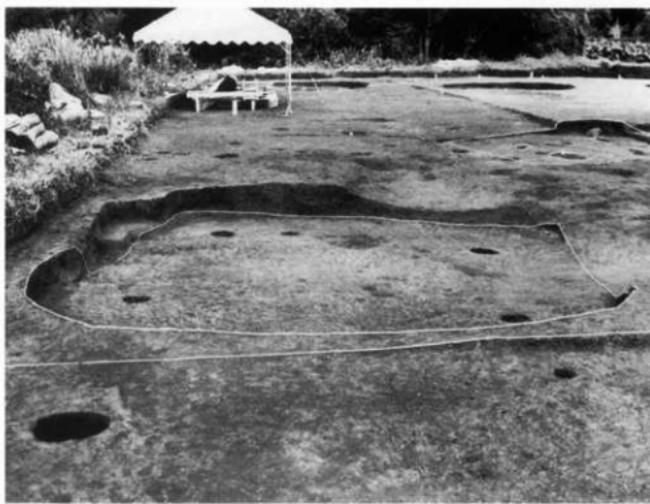
SI-027(南東より)



SI-018・023・028  
032・034・038



SI-028(北より)



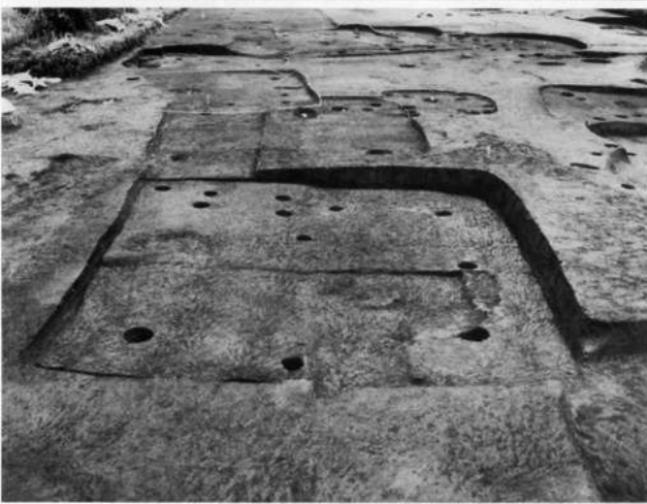
SI-029(南東より)



SI-030(南東より)



SI-031(南より)



SI-032(南東より)



SI-033(南東より)



SI-034(南東より)



SI-035(南西より)



SI-036(北より)



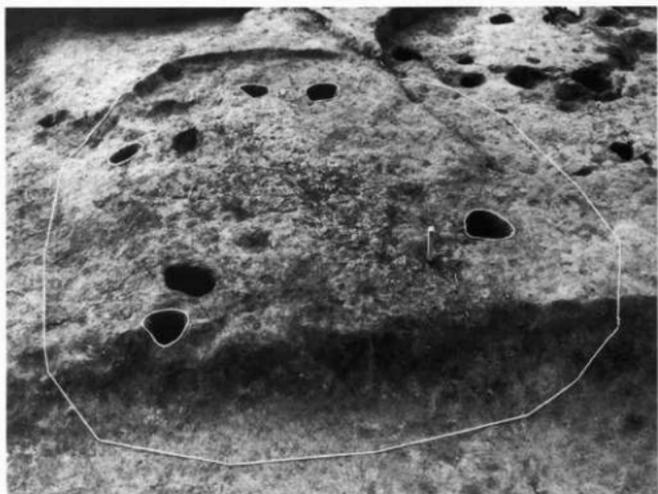
SI-037・041・042(南東より)



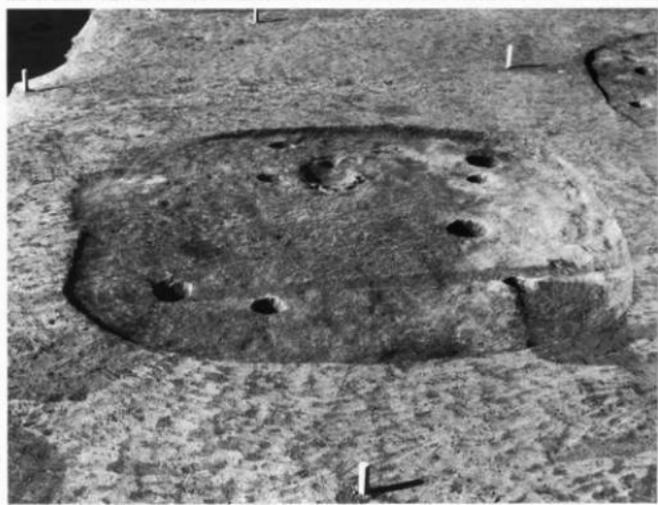
SI-038(南東より)



SI-039(北西より)



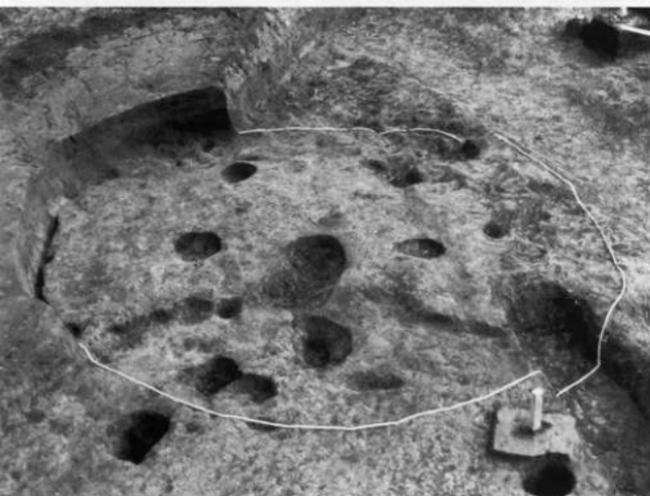
SI-040(北より)



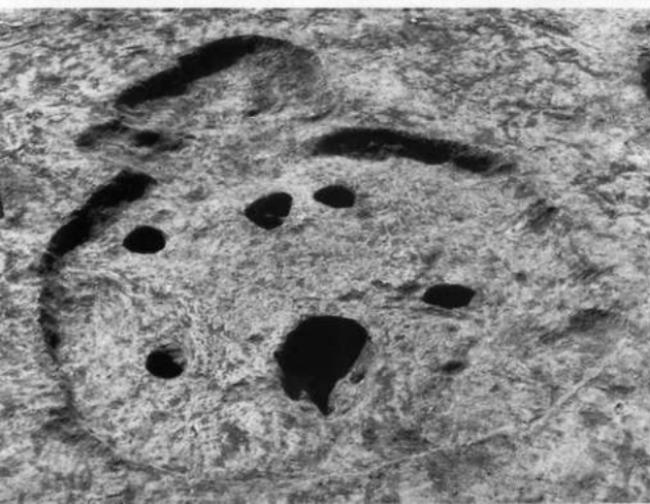
SI-043(南東より)



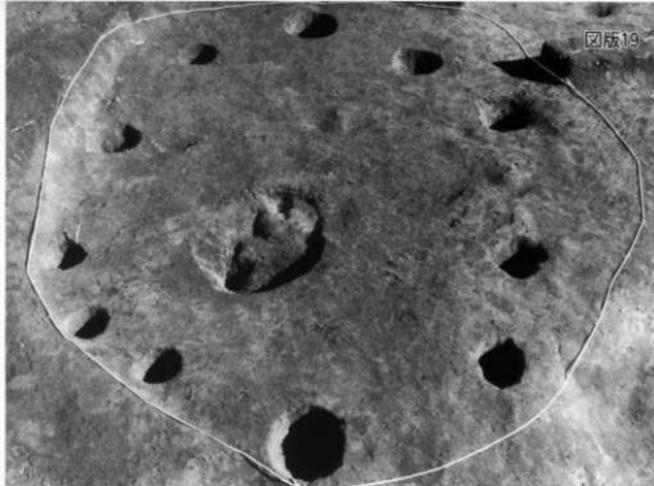
SI-044(南東より)



SI-045(北西より)



SI-046(北西より)



SI-047(西より)



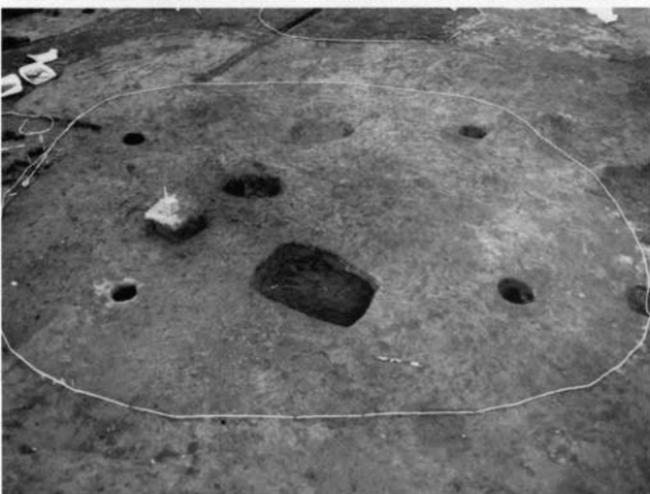
SI-048(南東より)



SI-049(南西より)



SI-050(南西より)



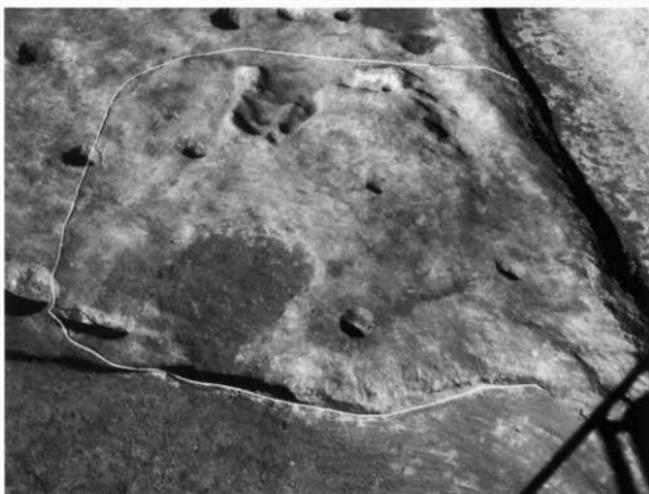
SI-051(東より)



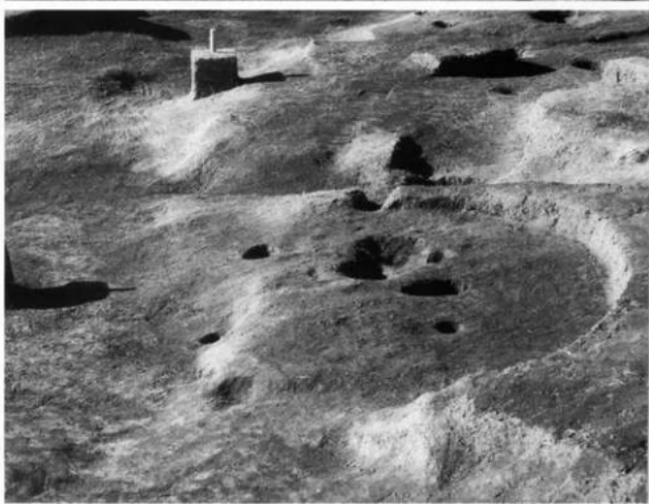
SI-052(東より)



SI-053(東より)



SI-054(東より)



SI-055(東より)



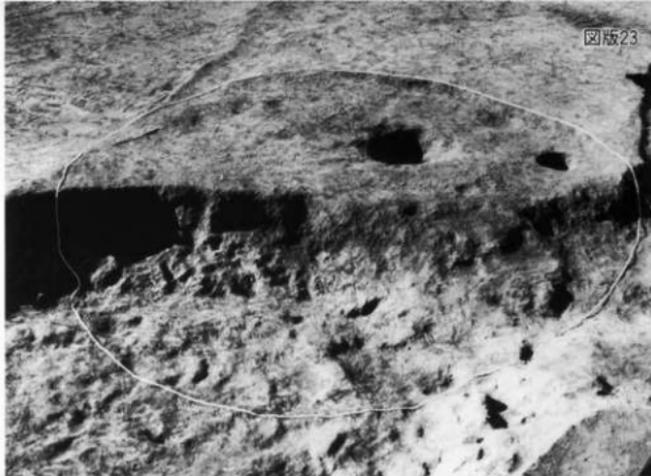
SI-056(南より)



SI-057(北西より)



SI-058(南東より)



SI-059(東より)



SI-060(北西より)



SI-061(南東より)



SI-062(南西より)



SI-063(南東より)



SI-064(南東より)

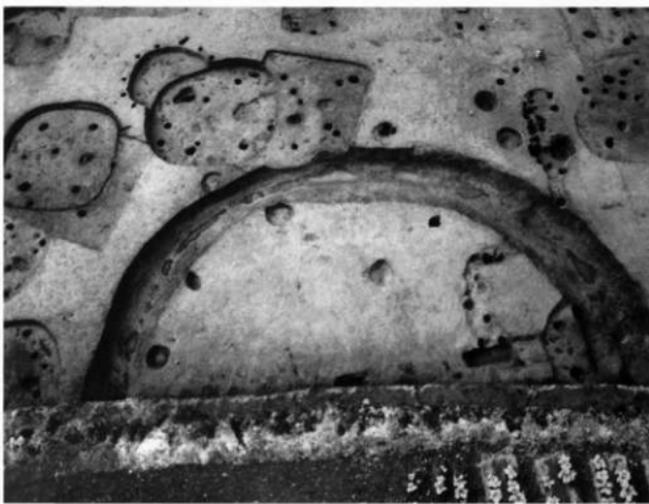
SI-065(北西より)



SI-067(南西より)



SM-001





SM-001 遺物出土状況(西より)



SM-002



SM-003(北より)

右 SD-001  
左 SD-002  
(北西より)



SD-002(北西より)



SD-005・SK-013・014  
015・017(西より)





SD-009・010(南より)



SD-011(東より)



SD-011・013



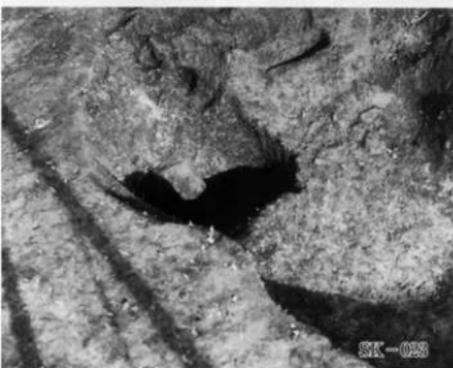
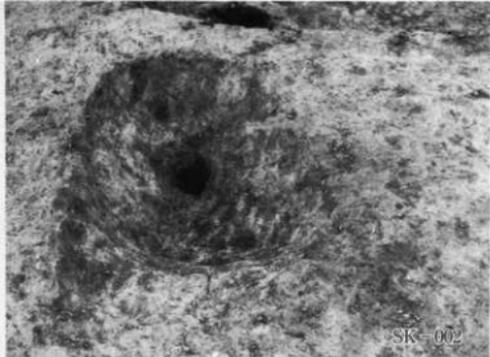
SD-014(南西より)



SD-018(南より)

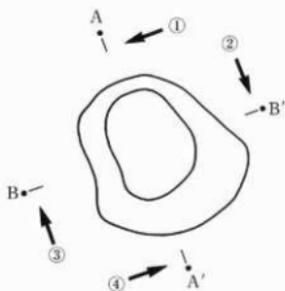


SD-019(南より)





塚 (SM - 004) 全景 (南より)



土層断面①



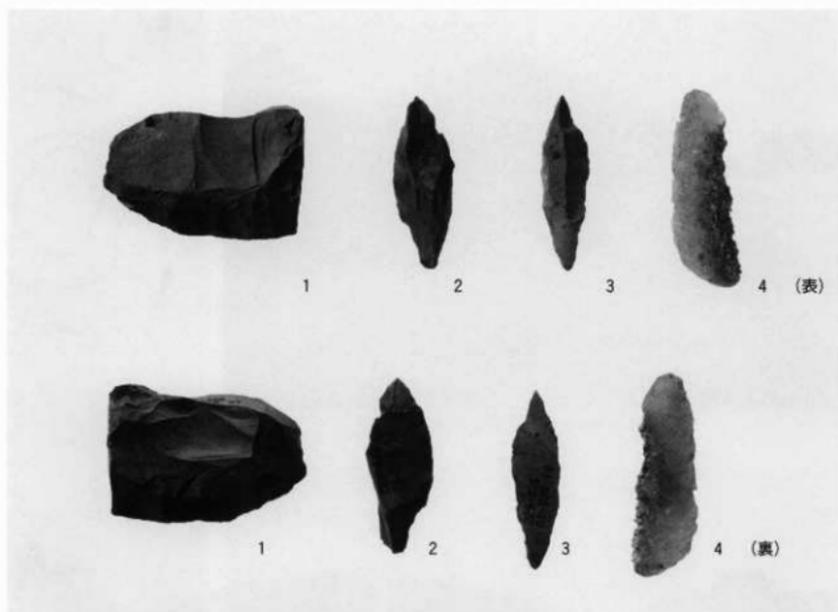
土層断面②



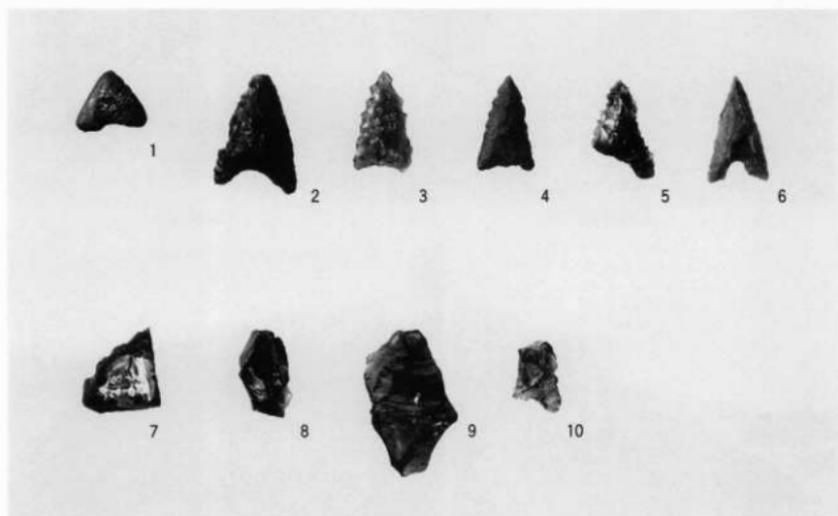
土層断面③



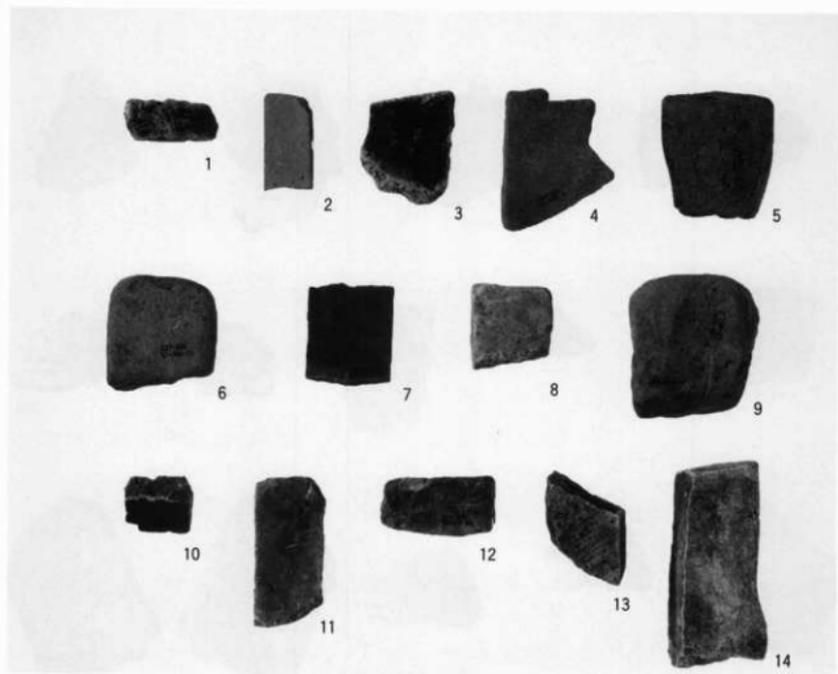
土層断面④



旧石器



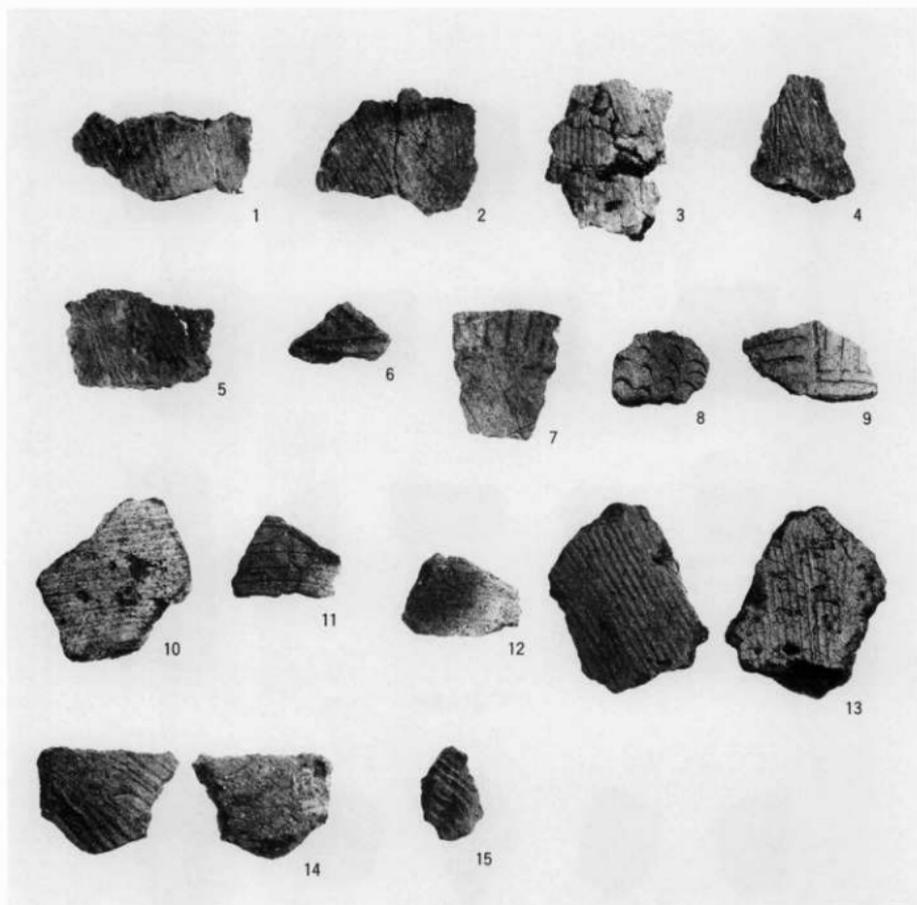
縄文時代石器



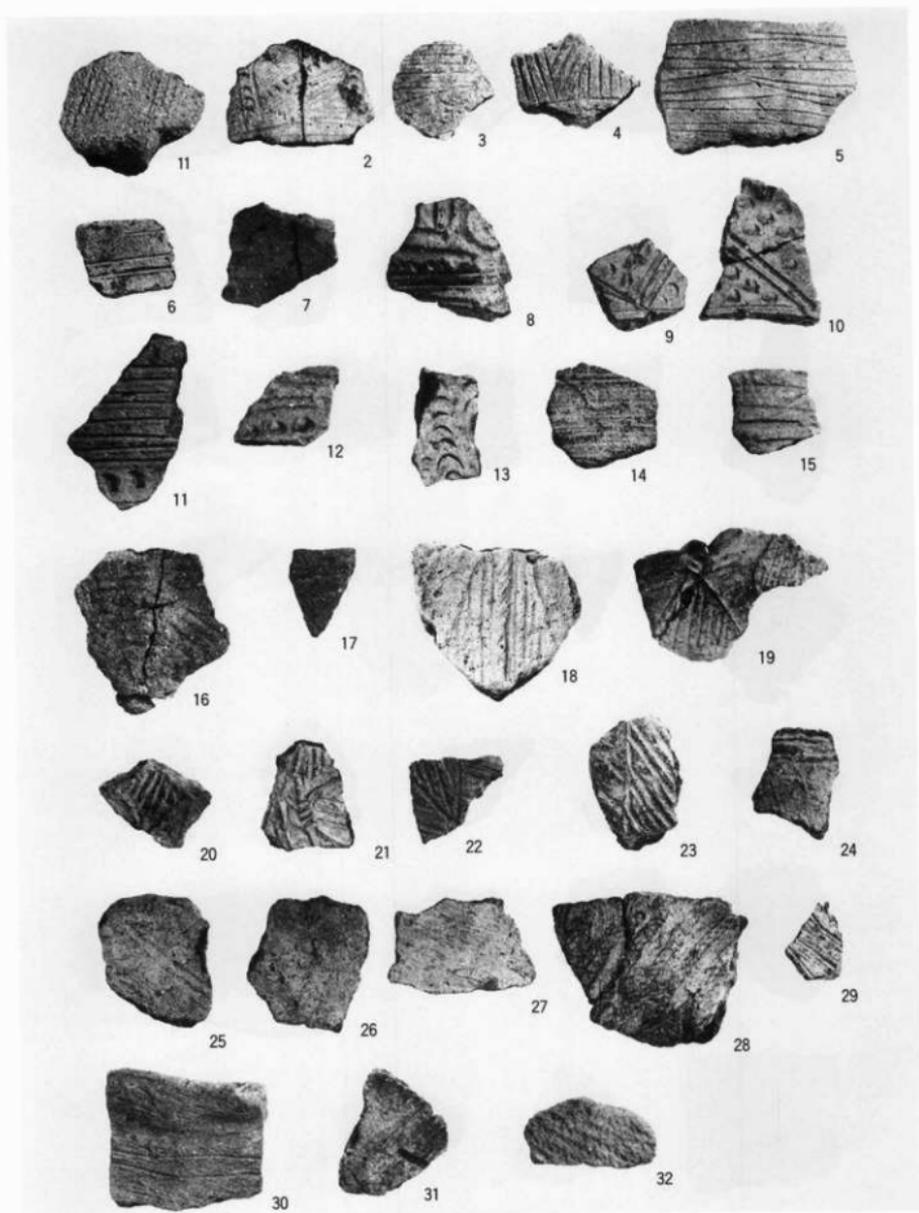
遺構外出土遺物(3)



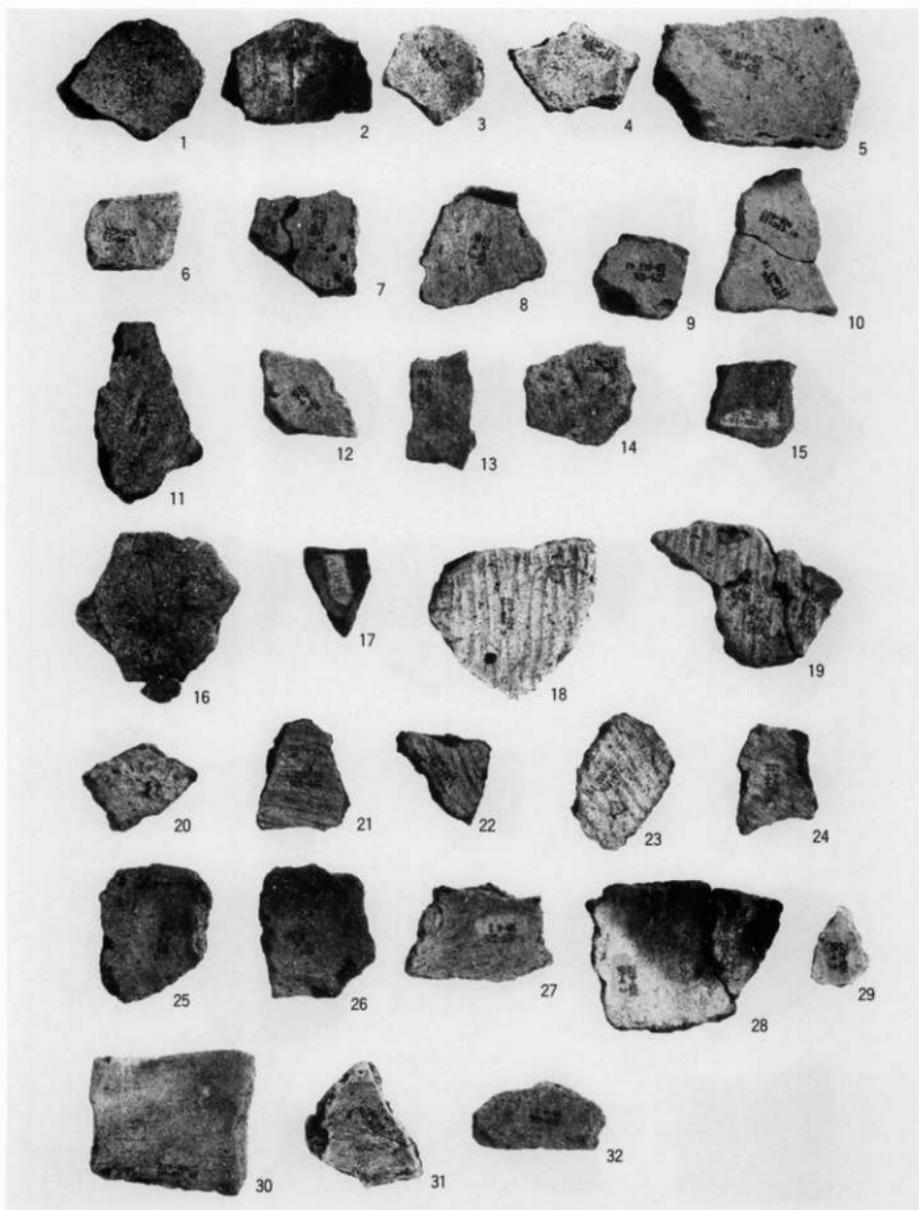
遺構外出土遺物(4)



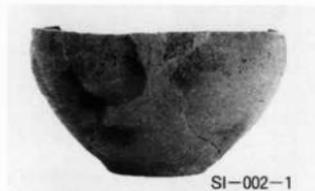
遺構内出土縄文土器



遺構外出土縄文土器(表)



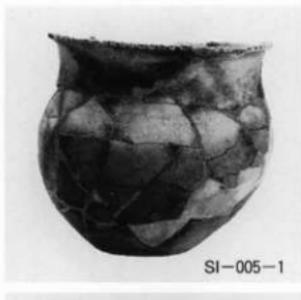
遺構外出土縄文土器(裏)



住居跡出土土器(1)



SI-003-9



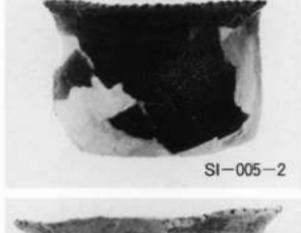
SI-005-1



SI-011-1



SI-003-10



SI-005-2



SI-011-3



SI-003-11



SI-005-3



SI-011-6



SI-003-12



SI-005-4



SI-014-1



SI-003-13

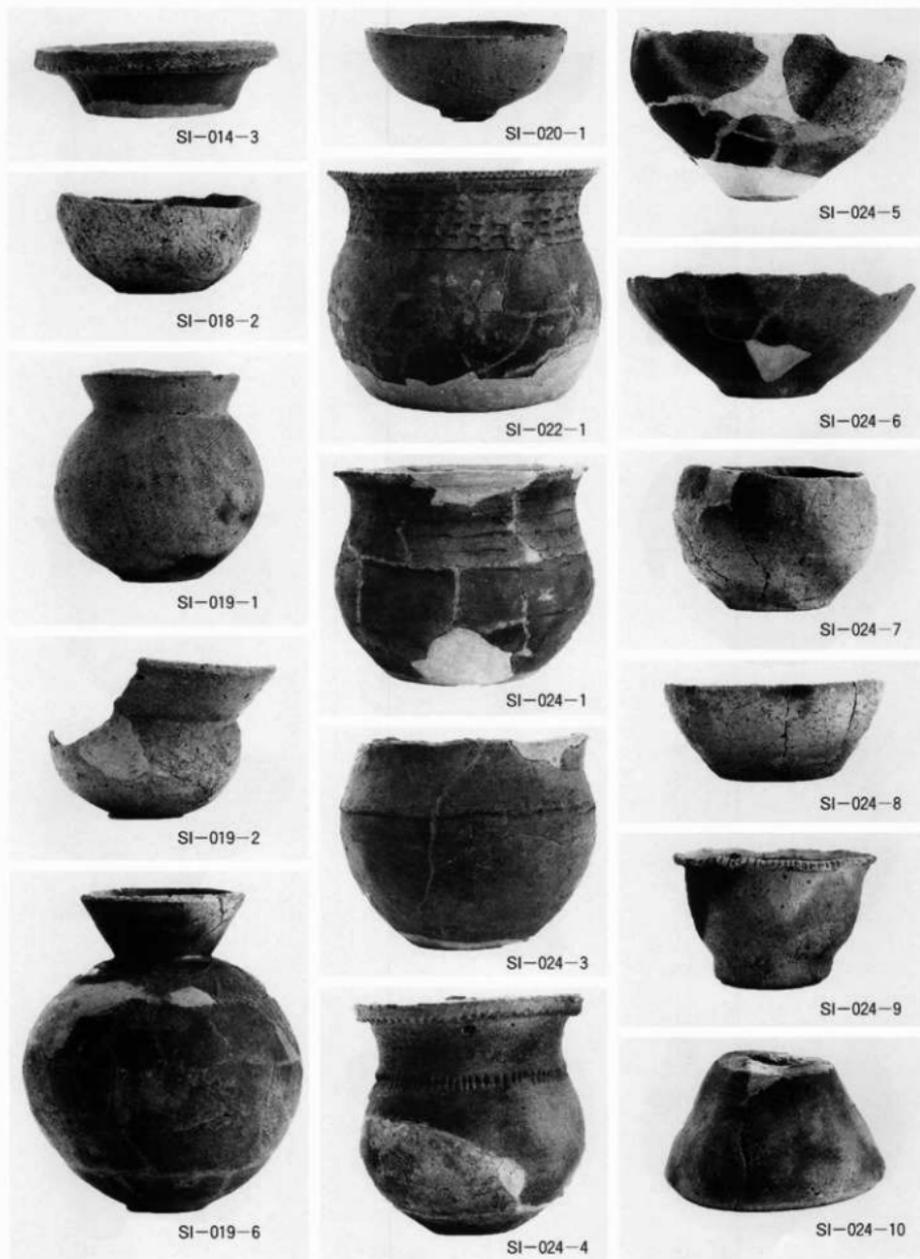


SI-006-3

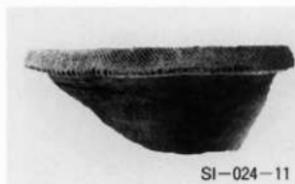


SI-014-2

住居跡出土土器(2)



住居跡出土土器(3)



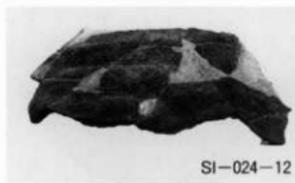
SI-024-11



SI-025-5



SI-039-4



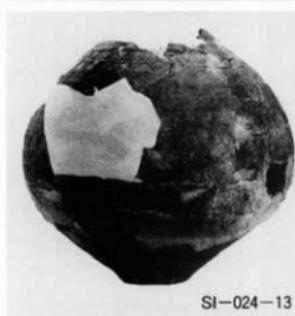
SI-024-12



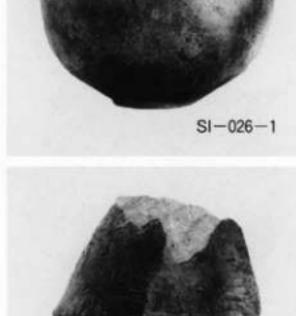
SI-026-1



SI-039-5



SI-024-13



SI-030-1



SI-040-1



SI-025-1



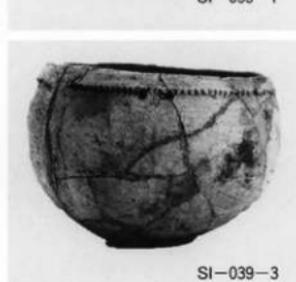
SI-035-1



SI-040-2



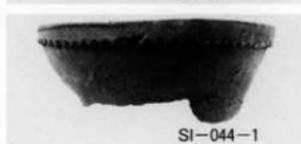
SI-025-2



SI-039-3



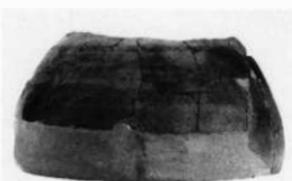
SI-041-4



SI-044-1



SI-044-2



SI-047-2



SI-056-1



SI-044-4



SI-049-1



SI-056-3



SI-044-5



SI-055-1



SI-056-4



SI-044-6



SI-055-2



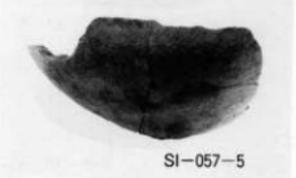
SI-057-2



SI-046-1



SI-055-3



SI-057-5

住居跡出土土器(5)



SI-057-6



SI-064-1



SI-065-1



SI-063-5



SI-064-2



SI-067-4

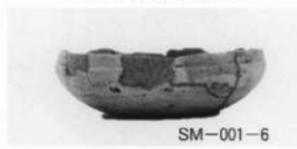


SI-067-5

住居跡出土土器(6)



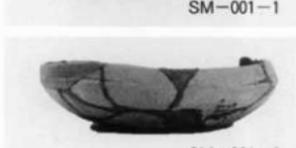
SM-001-1



SM-001-6



SM-001-12



SM-001-2



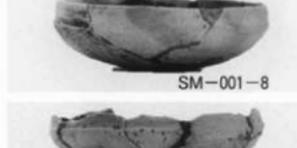
SM-001-7



SM-001-13



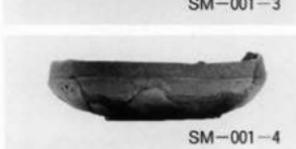
SM-001-3



SM-001-8



SM-001-14



SM-001-4



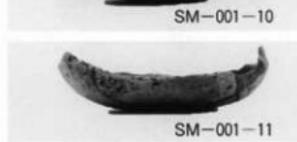
SM-001-9



SM-001-15



SM-001-5



SM-001-11



SM-001-16

古墳出土土器



SM-001-17



SM-001-18



SM-001-19



SM-003-1



古墳・塚出土遺物



SM-004-1



SK-019-1



SD-004-4



SD-018-10



SD-004-2

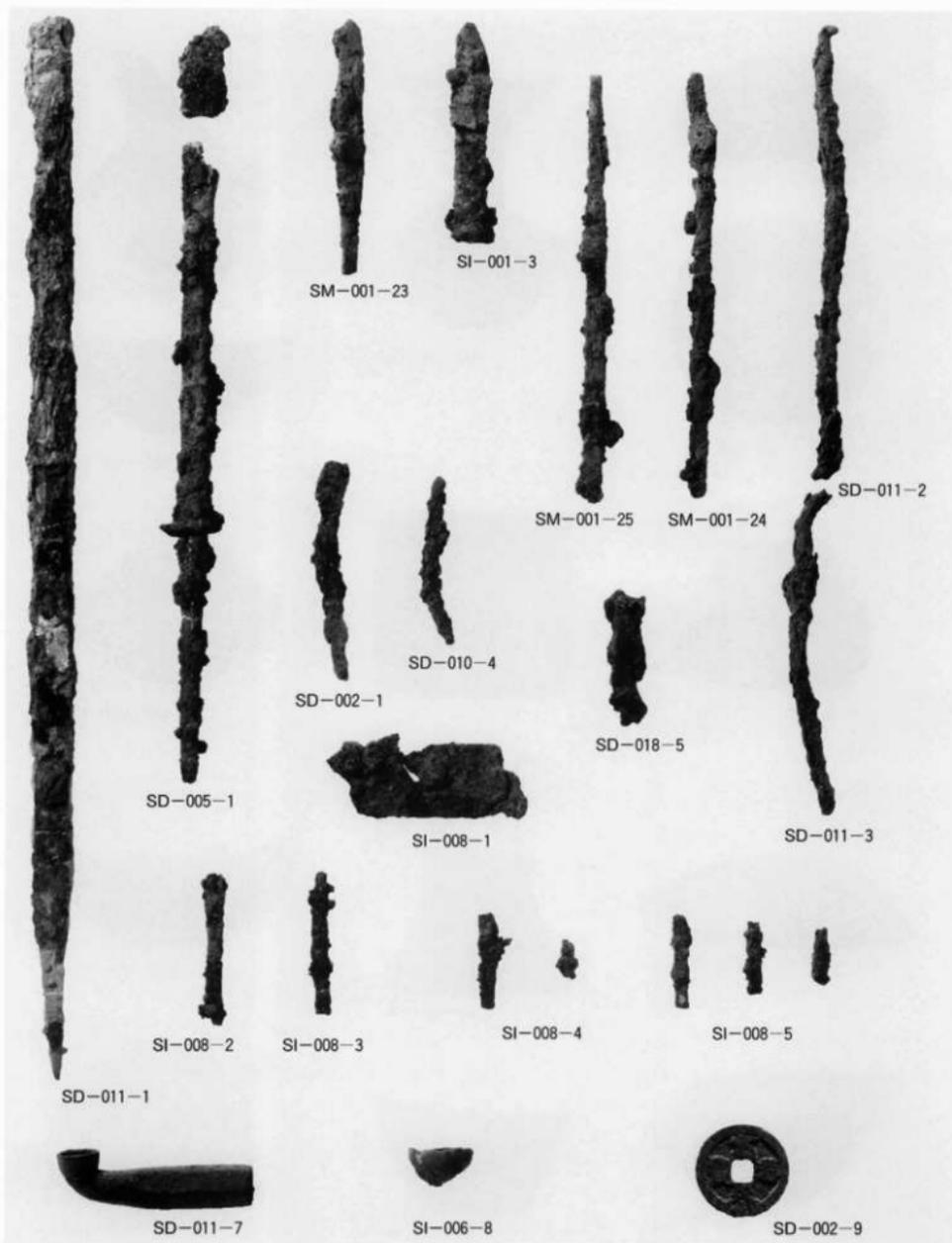


SD-018-8

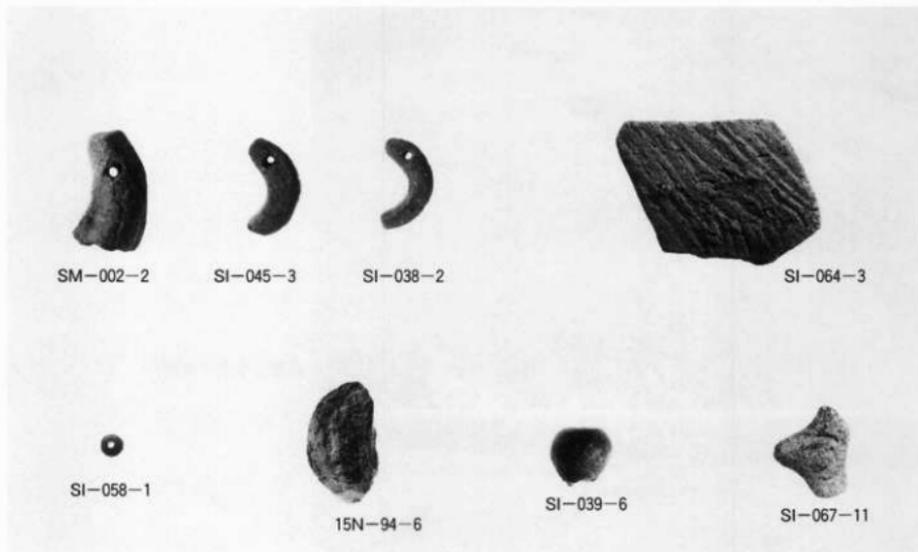


SD-018-13

溝・土坑出土土器



金属製品



ガラス玉・土製品



SI - 003 出土土器



調査区全景（南側）



SD-001全景



SD-002・SK-001全景



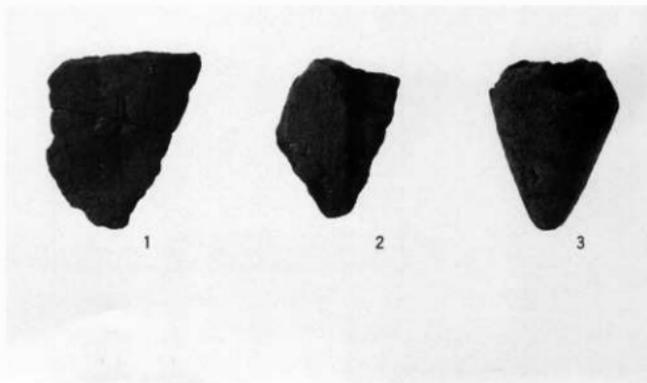
SK-006全景



SK-006土層断面



下層土層断面



出土繩文土器

## 報告書抄録

ふりがな	しゅううちほうどうちばかもがわせんまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしよ							
書名	主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書							
副書名	袖ヶ浦市東上泉遺跡・神野台遺跡							
巻次	5							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第584集							
編著者名	土屋治雄 相京邦彦 倉内郁子							
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡 809-2 Tel. 043-424-4848							
発行年月日	西暦 2007年 10月 31日							
ふりがな	ふりがな	コード		経緯度		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
東上泉遺跡	千葉県袖ヶ浦市大字 野里字東並塚1405他	12229	026	35度 23分 50秒	140度 3分 8秒	20010702～ 20020322	7,800㎡	主要地方道 千葉鴨川線 建設に伴う 調査
神野台遺跡	千葉県袖ヶ浦市大字下泉 字三百澤1195-7他	12229	031	35度 24分 55秒	140度 02分 47秒	20030107～ 20030131	1,100㎡	主要地方道 千葉鴨川線 建設に伴う 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
東上泉遺跡	包蔵地	旧石器時代		ナイフ形石器、石核、剥片			弥生時代後期から古墳時代 初頭の密集した集落	
	集落跡	縄文時代	炉穴 3基 陥穴 5基	縄文土器、石鏃、楔形石器、土偶				
	集落跡	弥生時代～	竪穴住居跡66軒	弥生土器、土師器、須恵器				
	古墳	古墳時代	円墳 3基	土製勾玉 土玉 軽石 砥石 鉄製品、ガラス玉				
集落跡	平安時代 中世以降	竪穴住居跡1軒 塚 1基 土坑 23基 溝 17条	土師器、須恵器 五輪塔 銭貨、煙管、砥石					
神野台遺跡	包蔵地	縄文時代	陥穴 1基 土坑 1基 溝跡 2条	縄文土器				

千葉県教育振興財団調査報告第584集

主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書 5

——袖ヶ浦市東上泉遺跡・神野台遺跡——

---

平成19年10月31日発行

編 集	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター
発 行	千葉県 県土整備部 千葉県中央区市場町1-1 財団法人 千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809番地の2
印 刷	株式会社 豊 文 堂 茂原市早野1143

---